軍省に轉じ技師に任ぜられ、大正三年歐米に出張を命ぜられ歸朝後も依然陸軍省に勤務し、新知識を傾注して活躍したが後官界を退いて建築設計監督業を創始し以て今日に及んでゐる。多年の研究と深き經驗と相俟つて技倆夙に圓熟し、名聲斯界に嘖々たるものがある。

妻晴（明治二一年生、陸軍少將杉山直天二女、實踐高女卒）長女富士子（大正三年生）

大飛躍を期待されてゐる氏は、新潟縣刈羽郡高柳村大字岡野に、伊藤文藏二男として呱々の聲を揚げ、大正十一年添田家の養子となり昭和三年その家督を相續した。養父故添田增男氏は辯護士として敏腕を揮ふこと多年、斯界の耆宿として嘖々たる名聲を貽し昭和三年物故した。其の跡を襲ぎたる氏は夙に慶應義塾大學に法律を修め、卒業後更に同大學院に於て主として民事訴訟を研究すると共に、養父の下に在つて研鑽に勵むこと數年、養父の他界後直ちに辯護士となり、遺業を繼いで活躍以て今日に及んでゐる。頭腦明晰にして辯論に長じ進取の意氣に富み滿々たる覇氣を藏し、經驗日尚ほ淺きに拘らず早くも斯界の信望を博し、將來を囑望されてゐる。趣味として武道、スポーツ等勇壯なるものを好み、就中劍道に達し、又本邦スキー界の先覺者にして斯技の發達に盡瘁したる功勞者として知られてゐる。

妻松子（明治三四年生、京華高等女學校卒業）

土田蟻九郎氏　澁谷區代々木初臺三一　電話四谷五二一九

正七位、勳七等、本所郵便局長

明治一四年二月生、岐阜縣

明治三五年郵便電信學校卒業

氏は岐阜縣人土田幸三郎氏の四男に生れ後分れて一家を創めた。郵便電信學校を卒業するや直ちに豐橋郵便局に轉じ、更にその後仙臺遞信管理局に移つた。性來犧牲奉公の精神燃ゆるが如く前記に奉職中はその重大なる使命に鑑み、精勤謹直以て職に當り、機敏の才を發揮して次第に認められ、大垣郵便局長に拔擢された。爾來益々誠心誠意を披瀝して職務に臨み、後淀橋郵便局に轉じ、昭和三年芝郵便局長となり、更に同七年四月本所郵便局長に轉じた此の間多年の功勞に依つて正七位、勳七等に叙せられ、現時本所郵便局長として敏腕を揮ひ、聲望を馳せてゐる。

妻カヅエ（明治二八年生、岐阜縣人三宅重松長女）長男紀（昭和三年生）長女靜子（大正三年生）

津村　岩吉氏　豐島區池袋一ノ七三　電話大塚七一一

津村敬天堂主、東亞公司（株）取締役、東京計量器製作所（株）監査役

明治九年一二月生、奈良縣

ヘルプ本舗主として賣藥業界に令名嘖々たる氏は、奈良縣人山田安次郎氏の三男、山田安民氏及津村重舍氏の實弟として呱々の聲を揚げ、長じて津村重舍氏の養子となり、後分れて一家を創めた。夙に津村敬天堂を起し、胃腸藥ヘルプを創製發賣以來、絶えず品質の改善を圖ると共に獨特の宣傳に依つて販路の擴張に努め十年一日の如く健鬪したる効果空しからず、該藥の名聲は內地津々浦々は勿論遠く海外にまで普く知られ、無二の靈藥として廣く服用されるに至り、大いに產を興した。此間氏は更に淸水商業銀行取締役として金融界に敏腕を揮ひ、或は前揭の職を兼ねて財界に濶步し、その高潔なる人格と相俟つて信望隆々たるものがある。宗旨は眞宗、趣味は旅行、園藝等

長男義男（明治三四年生）二男愼（大正七年生）女操（同二年生）同綾（同五年生）

塚本福治郎氏　瀧野川區田端三三四

宮田製作所（資）庶務課長

明治二四年四月生、茨城縣

慶應義塾大學理財科卒業

自轉車製造業界の覇王宮田製作所に在つて敏腕の聞え高き氏は、茨城縣人塚本太郎氏の三男に生れ、明治三十年分家した。夙に慶應義塾に入りて、孜々として勉學に勵み、優秀の成績を以て同校を卒業するや直ちに實業界に進出し、久原鑛業株式會社に活躍の第一步を踏み、その

し、新知識を齎して歸朝するや直ちに教授に昇進し、爾來後進の教導に當ると共に益々研讃に勵んで昭和二年學士院賞を受け、現時前揭の任に在つて學界に貢獻しつゝある。

妻晴（明治二五年生、東京府士族宮本恒平妹、跡見女學校卒）長男穰二（大正七年生）長女美穗子（明治四五年生）二女芳枝（大正五年生）三女美奈子（同一〇年生）

活躍し、社內は勿論關係各方面に信望隆々たるものがある。

妻眞佐子（明治二二年生）長女勝子（大正二年生）二女隆子（同八年生）三女美惠子（同一一年生）

添田　博夫氏　京橋區木挽町二ノ一一　電話京橋七、五八〇

辯護士

明治三一年五月生、新潟縣

大正一二年慶應義塾大學法科卒業

在野法曹界の新進氣鋭として前途の一

後久原商事會社に轉じ、更に日立製作所に移り、敏腕を認められるに至つたが、大正十年宮田製作所に轉じた。以來同社庶務課長として今日に及んでゐるが、その高潔なる人格と手腕と相俟つて社内の信望篤く對外的にも亦好評を博してゐる。神道を信仰し、趣味はスポーツである。

妻イク(明治一二年生)長男太郎(大正一二年生)長女日出子(昭和四年生)

中内　松次氏　赤坂區青山南町五ノ六　電話青山六七六九

日本紙業(株)常務

明治一〇年四月生、高知縣

製紙業界に敏腕を揮ふこと多年現時斯界に確乎たる地歩を占めて名聲嘖々たる氏は、古來製紙の本場たる高知縣の人中内重吉氏の三男として呱々の聲を揚げ、明治四十四年分れて一家を創めた。夙に土佐製紙株式會社に入社して紙業界雄飛の第一歩を踏み、只管職務に黽勉して次第に認められ、同社京城支店長に擧げられ、朝鮮各地の販路開拓に健闘し、後大阪支店長に榮轉し、同社の發展に貢献顯著なるものがあつた。大正十五年日本紙業株式會社に移り、重役として專ら經營の衝に當り多年の經驗と性來の敏腕機智を以てその業績の向上に盡瘁以て今日に及んでゐる。信教は眞宗、趣味は圍碁、謠曲、書畫、骨董等である。

妻駒(明治一六年生、高知縣人横川常太郎長女)長男一雄(大正七年生)長女久子(明治三七年生、高知縣人上田藤十郎に嫁す)二女頼子(同四〇生)三女當子(同四一年生)四女君子(大正元年生)

永井　省三氏　荏原區中延洗足田園都市南臺四二三、電話荏原二三七九

藤倉電線(株)技師

明治一二年一月生、山形縣

氏は山形縣人遠藤助次郎氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治四十五年永井家の家督を相續した。之より先き上京して修學に怡しみ、明治三十三年遞信省に奉職し技師として活躍すること多年に亘り、その優秀なる技術と溫厚篤實なる人格と相俟つて省内に名聲を博した大正十二年官を辭して藤倉電線株式會社に入社し、技師として技術方面に敏腕を揮ふと共に業務課長として經營の衝に當り、會社の發展に貢献すること尠なからず、後第二製作課長に擧げられた。爾來益々健闘努力以て今日に及んでゐる。宗旨は日蓮宗趣味は謠曲等である。

妻春子(明治一九年生)長男健(同四一年生)長女輝子(同四四年生)

中里　重次氏　赤坂區青山南町三ノ五　電話青山一二一六

正四位、勳二等、功四級、在郷海軍中將

北樺太石油(株)社長

明治四年八月生、山形縣

明治二六年海軍兵學校卒業

氏は中里重威氏の二男として山形縣下に生れ、大正二年分家した。夙に盡忠報國を志し海軍兵學校卒業後海軍少尉に任ぜられて以來累進して橋立、常盤兩艦砲術長、軍令部附參謀、大本營附參謀、海軍省軍務局勤務兼海軍大學校教官等を經て春日艦長となり、更に磐手艦長、軍需局長、舞鶴要港部司令官等を經て大正十一年海軍中將に陞進し、同十四年豫備役に編入されたが、此の間日清、日露の兩役に出征して赫々たる武勳を樹て勇名を轟かせた。退役後露國政府と利權契約締結に際し本邦石油利權代表として露都に出張し、契約調印の大任を果して歸朝するや、勅令に依つて北樺太石油會社の創立と同時にその社長となり、爾來會社の發展に努力以て今日に及んでゐる。

妻三八重(明治一二年生、齋藤德兵衛二女)長男重夫(同三四年生)同妻京(明治四一年生、中村竹藏三女)孫昭子(昭和四年生)

中島好太郎氏　麻布區廣尾町七五　電話高輪六五六二

豐國火災保險(株)取締役兼支配人東京支店長

明治九年一〇月生、山口縣

保險界に敏腕の聞え高き氏は、山口縣人中島音藏氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治四十二年家督を相續した。夙に實業界に投じ着實眞摯主義を以て業務に臨み、十年一日の如き精勵を續級師範學校等を設けて教育家の養成に努力すること多年に亘り、誠心誠意凡ゆる犧牲を辭せずして同地方の教育振興に健闘した。その教へを受けたる者一千名を超え、現時各地に教鞭を執り、新國家の初等教育界に活躍し、氏の絶大なる功績は夙に普く認められ、滿洲國教育界の大恩人として仰がれてゐる。又此の間滿鐵交通部囑託として鐵道の普及發達その他交通運輸上に貢献する所甚大であつた。

して歸朝するや直ちに大阪商業學校長に任命されたが、その後教育界を去つて財界に轉じ、大阪商業會議所議員、上海紡績株式會社支配人、三井同族會事務局教育課長、同主事、三井重役會書記長、三井合名參與等に歴任し、又商業教育に多年盡瘁せる功に依つて從六位に叙せられ、德望を表彰せられた。

妻さと(慶應二年生)長男達(明治一八年生、前貴族院書記官長として令名あ

明治四十四年分れて一家を創めた。所に土佐製紙株式會社に入社して紙業界雄飛の第一歩を踏み、只管職務に黽勉して次第に認められ、同社京城支店長に擧げられ、朝鮮各地の販路開拓に健闘し、後大阪支店長に榮轉し、同社の發展に貢献顯著なるものがあつた。大正十五年日本紙業株式會社に移り、重役として專ら經營の衝に當り多年の經驗と性來の敏腕機智を以てその業績の向上に盡瘁以て今日に及んでゐる。信教は眞宗、趣味は圍碁、その優秀なる技術と淳厚篤實なる人格と相俟つて省内に名聲を博した大正十二年官を辭して藤倉電線株式會社に入社し、技師として技術方面に敏腕を揮ふと共に業務課長として經營の衝に當り、會社の發展に貢献すること尠なからず、後第二製作課長に擧げられた。爾來益々健闘努力以て今日に及んでゐる。宗旨は日蓮宗趣味は謠曲等である。

妻春子(明治一九年生)長男健(同四一年生)長女輝子(同四四年生)

役に出征して赫々たる武勲を樹て勇名を轟かせた。退役後露國政府と利權契約締結に際し本邦石油利權代表として露都に出張し、契約調印の大任を果して歸朝するや、勅令に依つて北樺太石油會社の創立と同時にその社長となり、爾來會社の發展に努力以て今日に及んでゐる。

妻三八重(明治一二年生、齋藤德兵衛二女)長男重夫(同三四年生)同妻京(明治四一年生、中村竹藏三女)孫昭子(昭和四年生)

中島好太郎氏　麻布區廣尾町七五　電話高輪六五六二

豐國火災保險(株)取締役兼支配人東京支店長

明治九年一〇月生、山口縣

保險界に敏腕の聞え高き氏は、山口縣人中島音藏氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治四十二年家督を相續した。夙に實業界に投じ着實眞摯主義を以て業務に臨み、十年一日の如き精勵を續けたる効果空しからず、次第に確乎たる地歩を占めて名聲を認められるに至つた現時豐國火災保險株式會社取締役兼支配人の要職に在り、且つ東京支店長たる難役に就いて敏腕を揮つてゐるが、その職務に對する熱誠と業界稀に見る崇高なる人格とは相俟つて斯界に好評を博し、信望隆々たるものがある。

妻ハナ(明治二一年生)長男芳郎(同四五年生)二男信郎(大正六年生)三男秀郎(同九年生)四男支郎(同一二年生)長女富士子(同四年生)

峰旗　良充氏　滿洲國吉林省吉林城内

滿洲實業團副團長、滿洲セメント(株)取締役

氏は京都の出身にして、明治四十二年滿洲に渡り、吉林省に優級師範學校、初級師範學校等を設けて教育家の養成に努力すること多年に亘り、誠心誠意凡ゆる犧牲を辭せずして同地方の教育振興に健闘した。その教へを受けたる者一千名を超え、現時各地に教鞭を執り、新國家の初等教育界に活躍し、氏の絶大なる功績は夙に普く認められ、滿洲國教育界の大恩人として仰がれてゐる。又此の間滿鐵交通部囑託として鐵道の普及發達その他交通運輸上に貢献する所甚大であつた。現時滿洲實業團副團長として、或は滿洲セメント會社重役として新國家實業界の進展に寄與し、滿洲國民の間に信望を博してゐる。

成瀨　隆藏氏　牛込區市谷仲之町五一　電話牛込七七一

從六位、那須溫泉土地(株)取締役

安政三年一二月生、靜岡縣

明治一〇年東京商法講習所卒業

氏は靜岡縣士族川村順次郎氏の二男に生れ、後先代成瀨鐵五郎氏の養子となり慶應三年家督を相續し、明治二十年前名正忠を現名に改めた。夙に上京して商科大學の前身たる商法講習所に學び、卒業後直ちに同所教諭に任ぜられ、その後同所が東京高等商業學校に昇格するや教授となり、更に教頭に擧げられた。明治二十二年歐米に派遣され、商業教育を調査して歸朝するや直ちに大阪商業學校長に任命されたが、その後教育界を去つて財界に轉じ、大阪商業會議所議員、上海紡績株式會社支配人、三井同族會事務局教育課長、同主事、三井重役會書記長、三井合名參與等に歷任し、又商業教育に多年盡瘁せる功に依つて從六位に叙せられ、德望を表彰せられた。

妻さと(慶應二年生)長男達(明治一八年生、前貴族院書記官長として令名あり)二男雄(同二九年生)四男四世(同三一年生、分家す)五男大兒(同三五年生、醍醐忠直養子)六男現(同三七年生)きめ(同二一年生、子爵海江田幸吉妻)二女最世(同三三年生)三女和佐子(同四〇年生)

長松　篤棐氏　赤坂區青山南町五ノ八〇　電話青山一〇五〇

從三位、勳三等、男爵、貴族院議員、帝國海上火災保險(株)社長、東京火災保險(株)副社長、東京報知機(株)取締役會長、險大平火災海上保險・東洋火災保險・第一火災海上保險各(株)取締役、安田信託(株)監査役

元治元年四月生、山口縣

當家は代々山口藩に仕へたる名門にして、先代長松幹氏は維新の際國事に奔走して功を樹て、明治元年議定官史官試補

に任ぜられて以來史局長、修史局幹事、元老院議官、高等法院豫備裁判官、錦鷄間祗候、貴族院議員等として活躍し、明治二十九年男爵に列せられた。氏はその二男に生れ、明治三十六年家督を相續し襲爵仰付けられた。學習院卒業後東京帝國大學法科に學び、更に獨乙に留學し、明治二〇年歸朝後直ちに學習院教授に任ぜられたが、後辭任して財界に入り、安田系諸會社を始め各方面に敏腕を揮ふこと既に多年、現時前掲諸社重役を兼ねて財界の長老として信望を博してゐる。趣味として撞球を好み亦頗る妙手である。

妻すが（明治二年生、東京府人米倉一平三女）男太郎（大正三年生）

中島雅樂之都氏　牛込區左門町三　電話牛込二七〇六

生田流箏曲家

明治二九年三月生、京都市

箏曲界の異彩たる氏は、幼少の頃より藝術的天分に惠まれ、五歳の時河津圓江及岡本雪枝兩女子に就いて伊藤四郎、奥田繁之市兩氏等に師事し、更に大阪に轉じて中平福之都氏の嚴格なる指導を受けた。一方三絃は熊本市の長谷幸輝氏に師事してその蘊奥を窮め、二十四歳の時皆傳を許され雅樂之都の名を與へられた藝道精進の傍ら幼時より學問に勵み、奈良市に於て中等教育を修め、更に上京して英語、獨乙語等をも學んだ。箏及三絃の教授を開始するや、從來の口傳的教授法の時代に適せざることを看破し、自ら正派邦樂會を創立して模範箏曲音譜を發行し、以て樂譜に依る教授の普及に努力し、或は邦樂譜の統一に關して文部省に建議する等、斯界の發展に臻したる功績は頗る甚大にして、獨り生田流箏曲のみならず、邦樂全體の功勞者として賞揚されてゐる。因みに氏は本名を中島利之と呼び、太田雅擴、植木雅芳、齋藤雅利其他著名の門弟が頗る多い。

内田　英雄氏　足立區千住本二ノ四〇　電話足立二〇一三

醫學博士、市立廣尾病院副院長、東京市技師

明治二一年三月生、大分縣

大正四年東京帝國大學醫科卒業

帝都刀圭界に名聲ある氏は、大分縣人野中小九郎氏の四男として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正二年先代内田々鶴子の養子となり内田家を襲いだ。夙に上京して東京帝國大學に學び、螢雪の功を積んで優秀の成績を以て同校を卒業後も依然研究を怠らず、後東京市に聘せられ勤務の餘暇を以て益々研究を重ねたる効果空しからず、曩に醫學博士の學位を授與された。現時廣尾病院に勤務し、副院長の要職に在つて克く院長を輔佐し、高潔なる人格と診療の獨特の技術と相俟つて患者の絶大なる信望を博してゐる。

妻田鶴子（明治二二年生、愛知縣士族竹内森之助長女）

哥澤芝勢以女子　牛込區矢來町三中丸　電話牛込六七三八

哥澤芝勢以派家元

明治一六年四月生、東京市

哥澤三絃に於て當代隨一の名手として聲望隆々たる女史は、本名を柴田清子と謂ひ、三代芝金の實弟柴田保氏の長女として日本橋區高砂町に呱々の聲を揚げた。幼時より叔母に就いて哥澤を學び、技倆の上達殊の外著しく叔母の愛撫一方ならず、悉く斯技の蘊奥を授けられた。十五歳頃より既に叔母に代つて門弟の教授に當り、大正四年三代芝金の前名たる芝勢以を襲名し、同十二年實妹の四代芝金女史と共に帝國劇場に於て累代芝派家元追福會を開催して芝派の基礎を固め、以來四代芝金女史と相携へて同派の勢力扶植に努力し來つた。然るに昭和二年四代芝金女史との間に不和を生じ、紛爭の末門弟に推されて別に芝勢以

明治三十五年先代の懇請に應じて梅屋家の養子となり、梅屋勝次郎を襲名し、大正二年研精會に入り、同七年市村座に出勤したが、同九年三代目梅屋勘兵衛を襲名した。爾來各座に出勤してその卓拔なる技倆を認められ、大正十二年には五代目六合新三郎氏の後任として大阪市西區北堀江演舞場、及び京都市宮川町歌舞練

より電氣機械製造業を始め、電氣時計を考案して本邦最初の電氣機械專賣特許を得後屋井乾電池を製出して世界的に名聲を博した先覺者であつた。氏はその長男に生れ、昭和二年家督を相續後前名三郎を改め先藏を襲名した。夙に曉星中學校卒業後家業たる乾電池の製造に携はり、一般電氣事業視察の爲め米國に航し研鑽

中島安樂（本名を中島利之と
生田流箏曲家　電話牛込二七〇六
明治二九年三月生、京都市

箏曲界の異彩たる氏は、幼少の頃より藝術的天分に惠まれ、五歳の時河津圓江及岡本雪枝兩女子に就いて伊藤四郎、

後奈良に赴いて伊藤四郎、呼び、太田雅擴、植木雅芳、齋藤雅利其他著名の門弟が頗る多い。

内田　英雄氏　足立區千住本町二ノ四〇
電話足立二〇一三
醫學博士、市立廣尾病院副院長、東京市
技師　大分縣
明治二一年三月生、大學醫科卒業
大正四年東京帝國大學醫科卒業
帝都刀圭界に名聲ある氏は、大分縣人野中小九郎氏の四男として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正二年先代内田々鶴子の

澤三絃に於て當代隨一の名手として聲望隆々たる女史は、本名を柴田清子と謂ひ、三代芝金の實弟柴田保氏の長女として日本橋區高砂町に呱々の聲を揚げた。幼時より叔母に就いて哥澤を學び、技倆の上達殊の外著しく叔母の愛撫一方ならず、悉く斯技の蘊奥を授

けられた。十五歳頃より既に叔母に代つて門弟の教授に當り、大正四年三代芝金の前名たる芝勢以を襲名し、同十二年實妹の四代芝金女史と共に帝國劇場に於て累代芝派家元追福會を開催して芝派の基礎を固め、以來四代芝金女史と相携へて同派の勢力扶植に努力し來つた。然るに昭和二年四代芝金女史との間に不和を生じ、紛爭の末門弟に推されて別に芝勢以派を創めてその家元となり、芝派の名取門弟大多數の參加を得て勢望隆々以て今日に及んでゐる。謙讓淑德の譽れ高く、三絃の技倆に於ては當代に比肩すべき者なき名手として斯界の信望を聚め、現時二百餘名の門弟を擁して哥澤界に雄飛してゐる。

梅屋勘兵衛氏　牛込區通寺町二六
電話牛込四九〇七
長唄鳴物師、長唄協會評議員
明治一五年一一月生、神奈川縣
長唄鳴物界屈指の名門たる梅屋家の當主たる氏は、横濱劇界の重鎮として令名を馳せたる興津清五郎氏の二男にして、本名を興津清三郎と呼び、横濱市羽衣町に呱々の聲を揚げた。先代梅屋勝次郎氏に師事して八歳の幼時より長唄鳴物を學び、明治二十九年梅屋勝次の名を以て帝都に初出演し天才の閃きを認められた。

明治三十五年先代の懇請に應じて梅屋家の養子となり、梅屋勝次郎を襲名し、大正二年研精會に入り、同七年市村座に出勤したが、同九年三代目梅屋勘兵衛を襲名した。爾來各座に出勤してその卓拔なる技倆を認められ、大正十二年には五代目六合新三郎氏の後任として大阪市西區北堀江演舞場、及び京都市宮川町歌舞練習場の顧問に聘せられ、關西方面に名聲を博し、更に大正十五年長唄協會設立されるや其の評議員に選ばれ

斯界の重鎮として普く認められるに至つた。其の後研究精會、正調會、長唄協會等の演奏會には毎時出演して益々技倆の冴えを顯はし、今や小鼓界屈指の名手として許れてゐる。趣味は古代器具の蒐集刀劍の鑑定等である。

屋井　先藏氏　本郷區駒込千駄木町四八
電話小石川六、五〇七
屋井乾電池（資）無限責任社員
明治二八年六月生、東京市
當家の祖は代々越後長岡藩に仕へたる名門にして、先代先藏氏は明治十六年頃より電氣機械製造業を始め、電氣時計を考案して本邦最初の電氣機械專賣特許を得後屋井乾電池を製出して世界的に名聲を博した先覺者であつた。氏はその長男に生れ、昭和二年家督を相續後前名三郎を改め先藏を襲名した。夙に曉星中學校卒業後家業たる乾電池の製造に携はり、一般電氣事業視察の爲め米國に航し研鑽を積んで歸朝後は專ら新知識を傾注して家業の向上に資し、父の逝去後は無限責任社員たる重任を帶びて父が畢生の心血を濺いで築上げたる遺業を守り、製品の改良と販路の擴張に努力し、以て今日に及んでゐる。父に似て發明創造の才に富み、滿々たる覇氣を藏して大いに前途の活躍を期待されてゐる。
母イサ（元治元年生、青森縣士族石山眞朝長女）妻ツネ（明治三〇年生、同上工藤增三郎三女）長男修（大正八年生）

馬島　勝藏氏　芝區琴平町一
電話芝二五三
醫學士、貴族院・司法省・健康保險局各囑託、東京市及芝區醫師會々員
明治一一年六月生、東京市
大正元年九州帝國大學醫科卒業
帝都醫界に名聲ある氏は、宮中顧問官として令名を馳せたる故伊藤方成氏の息

にして東京市内に生れ、明治二十二年先代馬島將平氏の養子となり、その家督を相續した。夙に刀圭界に志し、九州帝國大學卒業後更に同大學小兒科教室に於て諸大家の指導を受けて研鑽を積み、後歸京して開業した。懇切叮嚀なる診療と優秀なる技倆と相俟つて患者の信頼篤く、現時前揭の職を兼ねて斯界に活躍し信望隆々たるものがある。宗旨は淨土宗、趣味は讀書等である。

妻マツ（明治二八年生、松崎謙二郎妹山脇高女卒）長男孝雄（大正七年生）二男益雄（同一一年生）長女節子（同四年生）二女美津子（同五年生）三女タヅ子（同一五年生）

町田　敏藏氏　京橋區三十間堀三ノ一　電話銀座二、〇七五

勳八等、ドクトル・メヂチーネ、町田醫院々長

明治一六年三月生、東京府

明治四二年東京慈惠會醫專卒業

内科醫界に聲望高き氏は、東京府人石黑達年氏の二男に生れ、長じて町田鋏之助氏の養子となり、更に分れて一家を創めた。慈惠會醫專卒業後東京帝國大學醫科内科衞生學教室に於て研究を積み、明治四十四年獨逸に留學しミュンヘン大學を卒業してドクトル・メヂチーネの學位を得たる後、更にハルレ大學に入つて研鑽を重ね大正三年新知識を齎らして歸朝した。歸朝後直ちに開業して一般内科の診療に從事し、獨特の技倆と懇切なる診療を以て好評を博し遂に今日の隆況を呈するに至つた。信教は神道、趣味は讀書等である。

妻悌子（明治二三年生、養父長女、府立第一高女卒）二男仁（大正一一年生）長女愛子（同七年生）二女量子（同一五年生）

松平　胖氏　澁谷區松濤四〇　電話青山一六三七

正五位、勳三等、功五級、在鄉海軍大佐

明治一二年一二月生、東京市

氏は伯爵故松平頼聰氏の第十子として市内本鄉區に呱々の聲を揚げ、明治四十四年分家した。伯爵松平頼壽氏は氏の長兄である。夙に軍界に志し、學習院を經て海軍兵學校に學び、卒業後海軍少尉に任ぜられて以來斯界に活躍すること多年日露、日獨兩戰役に參加して赫々たる武勳を樹て、累進して海軍大佐に任ぜられ正五位、勳三等、功五級に叙せられて大いに武名を顯はした。後豫備に編入され大正十五年東京少年審判所に入り、少年保護事業に貢献する所尠なからず、現時益々社會公共的に盡瘁し信望を博してゐる。日蓮宗を信仰し、謠曲に趣味を有し高潔なる人格者として尊敬されてゐる。

妻俊子（明治二三年生、侯爵鍋島直大女）長男頼明（同四二年生、松平頼壽養子）二男守弘（大正六年生）三男任弘（同一一年生）長女誠子（明治四四年生實踐高女卒）三女明子（大正一四年生）

松永安左衞門氏　淀橋區下落合一ノ三七　電話大塚二九一

東邦電力（株）社長、東邦證券・大井川電力・福松商會各（株）代表取締役、日本電氣證券・大同電力・須川電力・東京灣電氣・東邦蓄積・唐津築港・王子電軌・大井川鐵道・東北電氣・時事新報各（株）取締役、東邦瓦斯・九州鐵道・九州送電・東邦瓦斯證券・名古屋棧橋倉庫・太宰府軌道・北天草電氣・揖斐川電氣・長良川電化各（株）監査役、永樂殖産・北九州瓦斯・三河水力・東邦電機工作所各（株）相談役

明治八年一二月生、長崎縣

明治三一年慶應義塾高等科卒業

本邦財界の重鎭として令名嘖々たる氏は、長崎縣人先代松永安左衞門氏の長男に生れ、明治二十六年家督を相續すると同時に前名龜之助を改め父名を襲いだ。學業を終へるや直ちに實業界に入り、夙に九州財界に覇を稱へ、更に關西より關東に進出して敏腕至らざるなく、電氣事業を中心として各方面に驥足を伸べ今日の聲望を博するに至つた。又此の間代議士に選ばれて政界に氣焰を擧げ、或は社會公共的に貢献せる所も亦甚大である。

妻カヅ（明治一七年生、大分縣人竹岡吉太郎妹）弟憲道（同二四年生）同妻ソノ（同三三年生）同英太郎（同一一年生）

て敏腕を揮ひ、或は再度英國に派遣される等偉功を貽して軍界を去り、後實業界に轉じ現時前揭の要職に在つて信望隆々たるものがある。

妻タケ（明治一九年生、佐賀縣士族久米富助長女）養子祝（大正三年生、同縣人彌富寛一三女）

藤間蔦枝女史　四谷區番衆町一二七　電話四谷六、四五九

許された。その後も更に師の指導裡に修練を重ねると共に各流各派の長所を研究し、或は西洋舞踊を參考として技を磨き昭和二年獨立して舞踊家として起つた。以來各所にその妙技を顯はして次第斯界に認められるに至り、本邦固有の舞踊に獨特の考案を加へたる女史一流の舞踊はその端麗なる容姿と相俟つて好評湧くが如く、今や女流舞踊界の明星として名聲

勳八等、ドクトル・メヂチーネ、町田醫院々長
明治一六年三月生、東京府
明治四二年東京慈惠會醫專卒業
内科醫界に聲望高き氏は、東京府人石黒達年氏の二男に生れ、長じて町田鋏之助氏の養子となり、更に分れて一家を創めた。慈惠會醫專卒業後東京帝國大學醫科内科衞生學教室に於て研究を積み、明治四十四年獨逸に留學しミュンヘン大學を卒業してドクトル・メヂチーネの學位

四年分家した。伯爵松平賴壽氏は氏の長兄である。夙に軍界に志し、學習院を經て海軍兵學校に學び、卒業後海軍少尉に任ぜられて以來斯界に活躍すること多年日露、日獨兩戰役に參加して赫々たる武勳を樹て、累進して海軍大佐に任ぜられ正五位、勳三等、功五級に叙せられて大いに武名を顯はした。後豫備に編入され大正十五年東京少年審判所に入り、少年保護事業に貢献する所尠なからず、現時益々社會公共的に盡瘁し信望を博してゐ

軌道・北天草電氣・揖斐川電氣・長良川電化各(株)監査役、永樂殖産・北九州瓦斯・三河水力・東邦電機工作所各(株)相談役
明治八年一二月生、長崎縣
明治三一年慶應義塾高等科卒業
本邦財界の重鎭として令名嘖々たる氏は、長崎縣人先代松永安左衞門氏の長男に生れ、明治二十六年家督を相續すると同時に前名龜之助を改め父名を襲いだ。學業を終へるや直ちに實業界に入り、夙

に九州財界に覇を稱へ、更に關西より關東に進出して敏腕至らざるなく、電氣事業を中心として各方面に驥足を伸べ今日の聲望を博するに至つた。又此の間代議士に選ばれて政界に氣焰を擧げ、或は社會公共的に貢献せる所も亦甚大である。
妻カヅ（明治一七年生、大分縣人竹岡吉太郎妹）弟憲道（同二四年生）同妻ソノ（同三三年生）同英太郎（同一一年生分家す）同妻ウラ（同二三年生）妹クン（同一六年生、長崎縣人熊本利平妻）

藤原英三郎氏　芝區白金今里町二三　電話高輪一、五六二
從四位、勳二等、功五級、在鄉海軍中將
八洲商會(株)代表取締役、相模運輸(株)取締役、浦賀船渠(株)顧問
明治五年一〇月生、佐賀縣
明治二七年海軍兵學校卒業
往年赫々たる武勳を顯はし現時實業界に敏腕の譽れ高き氏は、佐賀縣士族藤原榮藏氏の三男に生れ後分家した。海軍兵學校卒業の際偶々日清戰役勃發し、士官候補生として從軍し、後日露戰爭には水雷艇長及驅逐艦長として活躍し功五級金鵄勳章を賜つた。爾來累進して海軍中將に任ぜられ、又此の間海軍省艦政局課長海軍將官會議々員、艦政本部總務部長、横須賀海軍工廠長、海軍々需局長等とし

て敏腕を揮ひ、或は再度英國に派遣される等偉功を貽して軍界を去り、後實業界に轉じ現時前掲の要職に在つて信望隆々たるものがある。
妻タケ（明治一九年生、佐賀縣士族久米富助長女）養子祝（大正三年生、同縣人彌富寛一三女）

藤間蔦枝女史　四谷區番衆町一二七　電話四谷六、四五九
舞踊家
明治三六年生、新潟市

新舞踊界の花形として前途の活躍を期待されてゐる女史は、本名高橋イチと謂ひ、新潟市に呱々の聲を揚げた。幼少の頃より藝術的素質に惠まれ九歳の時同市の舞踊家市川登根女史に師事してその手解きを受けて以來舞踊に深き興味を持ち、遂に舞踊家として起つ決心を以て上京し、新舞踊の名手藤間靜枝女史の門下となつた。爾來心血を濺いで只管修業に勵みたる効果空しからず、豐富なる天分は名手の薫陶に依つて遺憾なく發揮され、大正十五年藤間蔦枝の名を

許された。その後も更に師の指導裡に修練を重ねると共に各流各派の長所を研究し、或は西洋舞踊を參考として技を磨き昭和二年獨立して舞踊家として起つた。以來各所にその妙技を顯はして次第斯界に認められるに至り、本邦固有の舞踊に獨特の考案を加へたる女史一流の舞踊はその端麗なる容姿と相俟つて好評湧くが如く、今や女流舞踊界の明星として名聲嘖々たるものがある。

藤間勘兵衞氏　澁谷區中通一ノ三四　電話青山五五
舞踊藤間流家元、日本舞踊協會專務理事
明治三年五月生、三重縣

舞踊界の大宗藤間流の家元として、將た歌舞伎劇界の第一人者として令名夙に嘖々たる氏は三重縣人建築請負業者泰專治氏の四男にして、同縣四日市市に生れ、幼名を豐吉と呼んだ。三歳の時藤間流先代家元勘右衞門氏の養子となり、後その家督を相續すると共に勘右衞門を襲名した。夙に演藝界に志し家庭に在つては父の薫陶を受けて舞踊に勵

み、出でゝは近代の名人九代目團十郎に師事して歌舞伎劇を學び、明治十三年本郷春木座の「近江源氏先陣館」の子役小四郎を勤めて初舞臺を踏み、以來市川金太郎を名乘つて各座に出勤し、明治十九年市川染五郎と改名して名題に昇進し、同三十六年八代目市川高麗藏を襲名し、同四十四年帝劇專屬となり同年十一月七代目松本幸四郎を襲名した。「辨慶」「光秀」「大森彦七」「名和長年」等を始め團十郎の衣鉢を襲ぐ名人として「高麗屋」の家號は劇界に異彩を放つてゐる。一方舞踊に於ては、大正十四年先代の死後を享けて勘右衞門派家元となり、更に昭和六年九月六代目宗家藤間勘兵衞を襲名し、全藤間流の統帥者として舞踊界に覇を稱へてゐる。又氏の趣味は繪畫、寫眞等にして、長男金太郎、二男順次郎、三男豐の三子は何れも劇界に名を爲してゐる。

天野　廣氏　大阪市住吉區住吉町壹六、電話天下茶屋四一七一
三井物產(株)大阪埠頭事務所長
明治四四年山口高等商業學校卒業

氏は山口縣天野濟氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後その家督を相續した。夙に實業界に志し、山口高等商業學校に入つて孜々として學業に勵み、卒業後直ちに三井物產會社に入社した。當初同社門司支店に勤務し、受渡係として實地經驗を重ね、後横濱支店に轉じ、更に名古屋支店を經て若松支店に移ると同時に受渡係主任に拔擢された。後大阪支店に轉勤し、受渡係主任を經て昭和七年十月大阪埠頭事務所々長に榮轉し、以て今日に及んでゐる。資性勤勉廉直加ふるに敏腕達識にして夙に社內外の信望を博してゐる。

妻ふき(明治三二年生)長女あつ子(大正六年生、明淨高女在)

池川大次郎氏　大阪府北河內郡友呂岐村字郡一六一八
電話　寢屋川一〇九
大阪市助役
明治四年一二月生、愛知縣

氏は愛知縣池川藤一郎氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治二十四年分れて一家を創立した。夙に大阪に移つて市役所に奉職し、精勵恪勤すること多年、その着實眞摯なる執務と溫厚篤實なる人格は相俟つて廳內の信望を高め、累進して庶務部長の要職に就いた。爾來益々市政の刷新向上に努力したる効果空しからず、後助役として市政の樞機に與るに至り、克く關市長を翼けて活躍以て今日に及んでゐる。多年に亘る氏の功績は市民の夙に認むる所にして、各方面に信望を博してゐる。

養子清(明治四三年生、愛知縣池川龜太郎女)

佐々木勇太郎氏　大阪市住吉區阿部野筋三ノ四三
電話天王寺六一〇
南海鐵道、大成火災保險各(株)取締役
明治元年四月生、大分縣

氏は大分縣士族佐々木吉十郎氏の長男として同縣下に生れ、明治十六年その家督を嗣いだ。夙に上京して慶應義塾に學び、明治二十三年山陽鐵道會社に入社し後日本紡織會社に轉じ、その支配人として敏腕を揮つた。同三十年南海鐵道會社に移り、副支配人に擧げられて以來、只管同社の發展に努力したる効果空しからず、社內の信望を博して專務取締役に選ばれた。大正九年以來同社取締役として今日に及び、同社の功勞者として普く認められ、傍ら大成火災保險會社の重役をも兼ねてゐる。

妻ヨシ(明治一〇年生、廣島縣內田政雄妹)男時雄(大正二年生)

大橋　退治氏　大阪府豐能郡麻田村三八、電話岡町五六七
工學士、合同油脂(株)理事兼但工場長兼大阪營業所長、東京レコード石鹼、日東石鹼、東京硬化脂販賣各(株)取締役
明治二二年一月生、岡山縣

氏は岡山縣大橋良平氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に東京帝國大學工科大學に入り應用化學の研究を積み、卒業後油脂工業界に投じて敏腕を揮ふこと多年、漸次その地歩を開拓し、現時前揭各社の重役を兼ねてゐる。學識豐富、加ふるに經驗深く、經營の才、技術的を以て設けられたる別府大分電鐵會社取締役等として敏腕至らざるなく、聲望隆々たるものがある。

妻ウタ(明治一〇年生、大分縣加來芳太郎長女)男昭(同三二年生)同妻綾子(同三八年生、兵庫縣廣瀨常行二女)男敦(同三五年生)

山田　三郎氏　大阪市東區今橋五ノ一〇、電話　本局八七一
法學士、川崎第百銀行麴町支店長
明治一五年七月生、千葉縣

堅實なる銀行家として定評ある氏は、明治四〇年東京帝大法科政治科卒業千葉縣人小高謙吉氏の長男に生れ、明治二十八年家督を相續した。大學卒業後直ちに第百銀行に入り、故々として行務を

小高　卓爾氏　本郷區駒込東片町九四
電話小石川五、九五六

して、長男金太郎、二男順次郎、三男豐の三子は何れも劇界に名を爲してゐる。

天野　廣氏　大阪市住吉區住吉町壹六、電話天下茶屋四二七一
三井物産(株)大阪埠頭事務所長
明治四四年山口高等商業學校卒業
氏は山口縣天野濟氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後その家督を相續した。夙に實業界に志し、山口高等商業學校に入つて孜々として學業に勵み、卒業後直ちに三井物産會社に入社した。當

同縣下に呱々の聲を揚げ、明治二十四年分れて一家を創立した。夙に大阪に移つて市役所に奉職し、精勵恪勤すること多年、その着實眞摯なる執務と溫厚篤實なる人格は相俟つて廳内の信望を高め、累進して庶務部長の要職に就いた。爾來益々市政の刷新向上に努力したる効果空しからず、後助役として市政の樞機に與るに至り、克く關市長を翼けて活躍以て今日に及んでゐる。多年に亘る氏の功績は市民の夙に認むる所にして、各方面に信

ばれた。大正九年以來同社取締役として今日に及び、同社の功勞者として普く認められ、傍ら大成火災保險會社の重役をも兼ねてゐる。
妻ヨシ（明治一〇年生、廣島縣内田政雄妹）男時雄（大正二年生）

大橋　退治氏　大阪府豐能郡麻田村三八、電話岡町五六七
工學士、合同油脂(株)理事兼佃工場長兼大阪營業所長、東京レコード石鹸、日東石鹸、東京硬化脂販賣各(株)取締役

明治二二年一月生、岡山縣
明治四五年東京帝大工科應用化學科卒業
氏は岡山縣大橋良平氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に東京帝國大學工科大學に入り應用化學の研究を積み、卒業後油脂工業界に投じて敏腕を揮ふこと多年、漸次その地歩を開拓し、現時前掲各社の重役を兼ねてゐる。學識豐富、加ふるに經驗深く、經營の才、技術的手腕等相俟つて夙に斯業界に嘖々たる名聲を博してゐる。
妻幸（明治三三年生、東京府大森房吉長女）長男良房（大正一三年生）二男平吉（同一五年生）三男祐造（昭和四年生）

上田　寧氏　兵庫縣川邊郡長尾村中山寺、電話寶塚四四五
浪速瓦斯(株)社長、阪神急行電鐵(株)副社長、別府大分電鐵、阪神國道自動車、神戸土地興業各(株)取締役
明治六年二月生、大分縣
氏は大分縣上田洋氏の實弟にして、同縣下に呱々の聲を揚げ、大正十一年分れて一家を創立した。夙に實業界に投じ、堅實なる進展の一路を辿つて關西實業界に確乎たる地歩を占むるに至つた。現時浪速瓦斯會社々長たる外阪神急行電鐵その他各社の重役を兼ね、又鄕里開發の目的を以て設けられたる別府大分電鐵會社取締役等として敏腕至らざるなく、聲望隆々たるものがある。
妻ウタ（明治一〇年生、大分縣加來芳太郎長女）男昭（同三二年生）同妻綾子（同三八年生、兵庫縣廣瀨常行二女）男敦（同三五年生）

山田　三郎氏　大阪市東區今橋五ノ一〇、電話　本局八七一
天滿紡織(株)常務取締役、日本シール、日高紡織、北泉紡績所、安住大藥房各(株)取締役
明治一五年一〇月生、鳥取縣
明治三八年東京高等工業染色科卒業
氏は鳥取縣石尾啓次郎氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後先代山田法山氏の養子となり、明治二十九年その家督を相續した。夙に東京高等工業學校に於て染色の學理及び技術を究め、卒業後直ちに纖維工業界に投じ、その着實眞摯なる性格と練達の技術と相俟つて着々斯業界に擡頭し、名聲を認められるに至つた。現時天滿紡織會社常務取締役たる外前掲各社の重役を兼ねて、益々業界に進出しつゝある。
妻みさの（明治一九年生）女二三子（大正八年生）

小高　卓爾氏　本鄕區駒込東片町九四、電話小石川五、九五六
法學士、川崎第百銀行麴町支店長
明治一五年七月生、千葉縣
明治四〇年東京帝大法科政治科卒業
堅實なる銀行家として定評ある氏は、千葉縣人小高謙吉氏の長男に生れ、明治二十八年家督を相續した。大學卒業後直ちに第百銀行に入り、孜々として行務を見習ひ、行務に通ずるや性來の敏腕を發揮して大いに認められ、後同行が川崎銀行と合併後も引續き川崎第百銀行に在つて精勵恪勤以て今日に及んでゐる。此の間年と共に地位進み、現時同行麴町支店長の要職に在つて業績の向上に敏腕を揮ひ、各支店長中に於て屈指の材として普く認められてゐる。
母ツル（元治元年生、千葉縣人平賀平三郎姉）妻靜子（明治二五年生、醫學博士額田豐姉）姉菊（同一三年生、千葉縣人岩瀨庄助妻）妹靜（同一七年生同上宮城惠信妻）同卷（同二〇年生、東京府人村井恒太郎妻）

杵屋　和吉氏　日本橋區箱崎町四ノ一、電話茅場町三、五〇四
長唄東紫會主宰者、大阪南地演舞場專屬教師、長唄協會幹部技藝員
明治二一年三月生、東京市

京華中學校卒業

長唄三絃界屈指の名手として聲望隆々たる氏は、本名を竹中金吾と謂ひ、日本橋區新和泉町に呱々の聲を揚げた。下谷區根岸小學校を經て京華中學校に學び、同校卒業後直ちに八十四銀行に奉職したが、入營の爲め同行を退いた。十九歳の頃より長唄三絃を學んで憧憬措く能はず除隊後は斯技を以て起つ決心の下に初代杵屋伊勢に師事し、更に杵勝派家元杵屋勝三郎の門弟となり、技熟達して杵屋勝之助の名を許されたが、明治四十四年二十三歳の時五代目和吉を襲名した。爾來明治座、歌舞伎座等に出勤し、大正八年歌舞伎座の立三味線に昇進した。一方鶴命會、正調會、東柴會、和合會おさな子會等を主宰又は出勤して門弟の教導に勵み、大正十五年長唄協會設立に際して幹部技藝員に擧げられ、斯界の發展に努力以て今日に及んでゐる。此の間高貴の御前演奏の光榮に浴したること一再ならず、又「百千鳥」「二人靜」「醉鐘馗」「桃太郎」等を作曲して名を擧げ、今や長唄界の重鎭として普く認められてゐる。

杵屋勘次女史　麻布區笄町一五五　市外田園調布一〇六

長唄唄方、長唄二葉會主宰者

明治二四年四月生、東京市

長唄女流中屈指の名手として謳はれてゐる女史は、本名手島淳と呼び、京橋區木挽町二丁目に生れた。十五歳の時五代目杵屋勘五郎氏の門弟となり、上達著しく翌年杵屋廣次の名を許された。爾來長唄師匠として起ち、門弟を養成すると共に尙ほ研鑽怠らず、二十歳の時杵屋勘次と改名した。有樂座に於ける東西名人大會第一回演奏會の際「五條橋」に出演したのを初舞臺として、以來各所にその妙諦を發揮し、ラヂオ放送開始以來數十回放送して名聲を博すると共に、多數の門弟を取立てゝ斯界に隱然たる一勢力を有するに至つた。得意の曲目は新曲の「玉川」「浦島」「楠公」等にして何れも夙に斯界に定評がある。練達の藝に加ふるに門弟の教授に頗る懇切にして、其の名聲を慕つて教へを乞ふ者年と共に激增しつゝある。趣味として演劇、舞踊、箏曲等を嗜み、舞踊は花柳流に長じ、箏曲は山田流に堪能である。門弟中の逸足には勘久、勘登勢、廣次、正次、勘喜知、福次千嘉次等の名手が頗る多い。

杵屋六一郎氏　麹町區三番町六九　電話九段一五九一

長唄松風會主宰者、長唄協會幹部技藝員

明治二九年四月生、京都府

長唄三絃界の新進として名聲嘖々たる氏は、京都府伏見町に呱々の聲を揚げた十五歳の時上京して斯界の名人十三代杵屋六左衞門氏の內弟子となり、嚴格なる薰陶を受けて修業に勵み、翌年杵屋喜太郎の名を許されると同時に歌舞伎座に出演し、明治四十四年師匠と共に帝劇に出勤し、爾來益々研鑽して大いに技倆を磨き、大正三年二枚目に進み同五年十月杵屋六一郎と改名し、同八年立三味線となつた。その後引續いて帝劇に出勤すると共に、風聲會々員として技を磨き、自ら松風會を組織しその主宰者となつて子弟の教導に當る等、只管斯界へ精進し以て今日に及んでゐる。此の間大正博覽會に於て大正天皇並びに今上陛下の御前に演奏の光榮に浴したるを始めとし、隨所に光榮を博し、今や技益々圓

塾に入り大いに前途を囑望されてゐる。趣味は讀書、書畫の觀賞蒐集等である。

杵屋六三郎氏　深川區門前東仲町一四　電話本所六、五八〇

長唄六三郎家十一世家元、長唄六寶會、同成子會・同桔梗會・同仲好會各主宰

明治二三年九月生、東京市

長唄界に於ける當家は杵屋六左衞門家に續く名門として、奧州津經の藩士茨城に最も意を注ぎ、只管斯界に精進しつゝある。

湯澤　龍岳氏　本鄕區元町二

三念寺住職、佛教聯合會幹事、新義眞言宗豐山派管長

明治二九年眞言新義派大學林卒業

氏は山形縣西置郡東根村の出身である夙に宗教界に志し、大學林卒業後直ちに明治一七年七月生、福島縣

氏は福島縣下に呱々の聲を揚げ、明治四十一年分れて一家を創めた。夙に上京して土木建築業界に投じ、奮鬪努力以て斯業に關する凡ゆる體驗を積みたる後、明治四十一年獨立して金井組を創設し斯界進出の第一歩を踏んだ。當時年齡僅かに二十四歳の青年にして、而も殆んど何等の地盤もなく、後援者もなかつたが、

名した。爾來明治座、歌舞伎座等に出勤し、大正八年歌舞伎座の立三味線に昇進した。一方鶴命會、正調會、東柴會、和合會おさな子會等を主宰又は出勤して門弟の教導に勵み、大正十五年長唄協會設立に際して幹部技藝員に擧げられ、斯界の發展に努力以て今日に及んでゐる。此の間高貴の御前演奏の光榮に浴したること一再ならず、又「百千鳥」「二人靜」「醉鐘馗」「桃太郎」等を作曲して名を擧げ、

放逸して名聲を博すると共に多數の門弟を取立て、斯界に隱然たる一勢力を有するに至つた。得意の曲目は新曲の「玉川」「浦島」「楠公」等にして何れも夙に斯界に定評がある。練達の藝に加ふるに門弟の教授に頗る懇切にして、其の名聲を慕つて教へを乞ふ者年と共に激增しつゝある。趣味として演劇、舞踊、箏曲等を嗜み、舞踊は花柳流に長じ、箏曲は山田流に堪能である。門弟中の逸足には勘久、勘登勢、廣次、正次、勘喜知、福次

共に帝劇に出勤し、爾來益々研鑽して大いに技倆を磨き、大正三年二枚目に進み同五年十月杵屋六一郎と改名し、同八年立三味線となつた。その後引續いて帝劇に出勤すると共に、風聲會々員として技を磨き、自ら松風會を組織しその主宰者となつて子弟の教導に當る等、只管斯界へ精進し以て今日に及んでゐる。此の間大正博覽會に於て大正天皇並びに今上陛下の御前に演奏の光榮に浴したるを始めとし、隨所に光榮を博し、今や技益々圓

塾に入り大いに前途を囑望されてゐる。趣味は讀書、書畫の觀賞蒐集等である。

杵屋六三郎氏　深川區門前東仲町一四　電話本所六、五八〇

長唄六三郎家十一世家元、長唄六寶會、同成子會・同桔梗會・同仲好會各主宰

明治二三年九月生、東京市

長唄界に於ける當家は杵屋六左衞門家に續く名門にして、奧州津輕の藩士荻江六三郎が初代六左衞門より分れて初代六三郎を創始以來連綿として今日に傳はる由緒深き家柄である。その第十一世家元たる氏は先代六三郎氏の甥に當り深川區門前東仲町に呱々の聲を揚げた。幼少の頃より先代に師事して長唄を學び十八歳の時杵屋六二郎の名を許されて明治座に初出勤し、爾來益々技倆の上達に努め、大正六年六太郎と改名し更に同十二年叔父及び六三郎家一門に推されて十二代家元となり六三郎を襲名し以て今日に及んでゐる。此の間六寶會、成子會、桔梗會等を組織して子弟の教導に當ると共に、杵屋佐吉氏等と共に松竹系各劇場に出演して大いに名聲を揚げ大正十五年長唄協會の設立されるや直ちにその評議員に擧げられ、今や長唄界一方の重鎭として名望隆々たるものがある。得意の曲は「勸進帳」「老松」「東八景」等にして、古曲の研究に最も意を注ぎ、只管斯界に精進しつゝある。

湯澤　龍岳氏　本郷區元町二

三念寺住職、佛教聯合會幹事、新義眞言宗豐山派管長

明治二九年眞言新義派大學林卒業

氏は山形縣西置郡東根村の出身である夙に宗教界に志し、大學林卒業後直ちに斯界に進出して布教に努め、明治四十四年總本山が祝融の厄に遭ふや率先その再建を叫んで奮起し、大正五年總本山再建局長に推され、復興建築に顯著なる功績を現はして頓に信望を博し、大正十三年新義眞言宗豐山派宗務局長に擧げられた續いて翌十四年豐山派宗會議長に推され同派の擴張に努力すること多年現時前掲の職に在つて益々活躍し、大乘佛教の思想を世界的に鼓吹することを抱負としてその實現に努めつゝある。性來新取の氣象に富み高遠なる理想を有し、博學多才人格高邁の名知識として同派中は勿論、全宗教界に信望を博してゐる。

金井宇良吉氏　瀧野川區田端一〇六　（營業所）麴町區內幸町　電話　銀座五〇二九

東京土木建築業組合員、土木建築請負業金井組々長

明治一七年七月生、福島縣

氏は福島縣下に呱々の聲を揚げ、明治四十一年分れて一家を創めた。夙に上京して土木建築業界に投じ、奮鬪努力以て斯業に關する凡ゆる體驗を積みたる後、明治四十一年獨立して金井組を創設し斯界進出の第一歩を踏んだ。當時年齡僅かに二十四歳の青年にして、而も殆んど何等の地盤もなく、後援者もなかつたが、氏は獨立獨行その所信に向つて邁進し、不撓不屈の奮鬪を以て著々その地歩を開拓し、漸く斯界に認められるに至つた。業礎鞏固となるや、合資組織に改めて更に躍進し、今や東京本社の外福島縣若松市に出張所を設け、鐵道其他各種工事を請負ひ、斯業界に雄飛しつゝある。宗旨は淨土宗、趣味は撞球、書畫、骨董の蒐集等である。

妻あき子（明治二五年生、山脇高女卒）
長男達（大正八年生、開成中學在）

望月太左衞門氏　牛込區本村町一〇　電話牛込一七七九

長唄囃子望月流家元

明治三五年二月生、東京市

氏は本名安部光之助。長唄囃子界近世の名手たる望月朴清氏の三男として日本橋區横山町に呱々の聲を揚げた。八代目家元太左衞門氏及堅田喜惣次氏は共に氏

の實兄、望月初子女史は實姉に當り、兄弟何れも斯界の名手として知られてゐる兄姉及び實父の教へを受けて夙に長唄鳴物の技に長じ、大正三年十三歳の時歌舞伎座に初出演して天禀の才を認められ、爾來益々研鑽に努めて技倆年を逐ふて上達し、大正十二年以來市村座附となり、同十四年新橋演舞場に於て尾上菊五郎一座の「保名」に出演を機とし望月長左久を名乘ると同時に立鼓に昇進した。大正十五年市村座鳴物主任に擧げられて頓に名聲を博し、以來「うさぎ會」「芳町長唄界」等を主宰して斯技の普及に努力し、昭和三年九世太左衛門を襲名した。その老練の技と圓滿なる人格は相俟つて斯界に好評を博し、名實共に長唄鳴物界の重鎭として尊敬されてゐる。

波多　海藏氏　下谷區二長町五一　電話下谷二三〇五
丸見屋商店理事、歌舞伎座(株)常務、日本舞踊協會々長
明治一二年三月生、福井縣

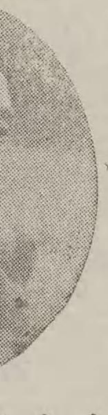
實業界に雄飛して名聲を馳せ又演藝界の功勞者として信望高き氏は、福井縣人廣瀨舟夫氏の實弟に生れ、長じて先代海藏氏の養子となり、明治三十二年家督を相續すると同時に前名千海を改め海藏を襲名した。夙に上京して實業界に投じ、敏腕を揮つて著々斯界に擡頭し、現時丸見屋商店理事として活躍する傍ら、歌舞伎座重役日本舞踊協會々長として斯界の諸ゆる貢献しつゝある。資性溫厚にして公共奉仕の念に富み、公共事業或は慈善事業に關與して顯著なる功績を樹てたること尠なからず、江湖に信望を博してゐる。

尾上　幸藏氏　牛込區西五軒町三四　電話牛込五、四四二
俳優、俳優協會幹部
安政二年三月生、東京市

歌舞伎劇界の長老として名聲ある氏は本名を大橋幸藏と呼び、江戸猿若町に呱々の聲を揚げた。安政六年市村座の盆興行に坂東市之助を名乘つて「小幡小平次」の子役を勤めて初舞臺を踏んで以來、劇界に活躍すること實に七十年に垂んとし舞臺生活の長きことに於て斯界隨一である。夙に明治四年九月中村座に於て二世尾上幸藏を襲名し、同二十三年桐座の三月興行に名題に昇進し、爾來各座に出演して經驗を重ね凡ゆる名優に學んで研鑽を加へたる氏の藝は、圓熟の境に入り、その當り藝たる「切られ與三」の番頭藤八を始め、既に好劇家間に定評がある。世話物、時代物共に巧みにして、老いて益々矍鑠壯者を凌ぎ、帝劇その他の各大劇場に出演して老練の技を揮ひつゝある。屋號は大橋屋、俳名を幸喬と號し、演劇そのものを無上の趣味として斯界に精進しつゝあるが、その藝熱心と溫厚篤實なる人格と相俟つて斯界の信望隆々たるものがある。

片岡仁左衛門氏　芝區西久保明舟町二一　電話芝一三二九
俳優、俳優協會幹部
安政四年一〇月生、東京市

歌舞伎劇界の名門松島屋の當主として斯界の元勳に推され聲望隆々たる氏は、本名を片岡秀太郎と謂ひ、江戸猿若町に呱々の聲を揚げた。安政五年春片岡秀太郎を名乘り中村座の「傾城稚兒淵」に先代中村芝翫に抱かれて出演したのを初舞臺とし、爾來各座に子役として妙技を揮ひ、技漸く熟するや片岡我當を襲名して次第に歌舞伎劇界に認められるに至つた。明治三十九年十一月大阪浪花座に於て十一世仁左衛門を襲名以來松島屋の總宰として歌舞伎劇界の巨擘たる氏は、年竹柴金作氏の門人となり、坂東三津五郎座附狂言作者として市村座に入座し、研鑽努力漸次その才腕を認められるに至つた。大正十二年七月淺草松竹座に上演されたる「くらやみ丑松」及び昭和四年明治座に三津五郎氏の「連獅子」上演の際の合狂言「蟹山伏」等はその代表作として知られてゐる。其後昭和五年藤間勘兵衛、坂東三津五郎、若柳吉藏の諸氏が發



劇界の花形として名聲嘖々たる氏は本名を村井道一と呼び、帝都講釋界に令名を馳せたる邑一氏の息として淺草區に生れた。幼少の頃より演藝に趣味を有し、遂に斯界に投じた。明治二十五年十二歳の時本鄕春木座に出演し、「田舍源氏」の小坊主を勤めたのを初舞臺とし、爾來各

及に努力し、昭和三年九世太左衛門を襲名した。その老練の技と圓滿なる人格は相俟つて斯界に好評を博し、名實共に長唄鳴物界の重鎭として尊敬されてゐる。

波多　海藏氏　下谷區二長町五一　電話下谷二三〇五
丸見屋商店理事、歌舞伎座(株)常務、日本舞踊協會々長
明治一二年三月生、福井縣
實業界に雄飛して名聲を馳せ又演藝界を博してゐる。

尾上　幸藏氏　牛込區西五軒町三四　電話牛込五、四四二
俳優、俳優協會幹部
安政二年三月生、東京市
歌舞伎劇界の長老として名聲ある氏は本名を大橋幸藏と呼び、江戸猿若町に呱々の聲を揚げた。安政六年市村座の盆興行に坂東市之助を名乘つて「小幡小平次」の子役を勤めて初舞臺を踏んで以來、劇界に活躍すること實に七十年に垂んとして演藝その他の趣味と號し、演藝界に精進しつゝあるが、その藝熱心と溫厚篤實なる人格と相俟つて斯界の信望隆々たるものがある。

片岡仁左衛門氏　芝區西久保明舟町二一　電話芝一三二九
俳優、俳優協會幹部
安政四年一〇月生、東京市
歌舞伎劇界の名門松島屋の當主として斯界の元勳に推され聲望隆々たる氏は、本名を片岡秀太郎と謂ひ、江戸猿若町に呱々の聲を揚げた。安政五年春片岡秀太郎を名乘り中村座の「傾城稚兒淵」に先代中村芝翫に抱かれて出演したのを初舞臺とし、爾來各座に子役として妙技を揮ひ、技漸く熟するや片岡我當を襲名して次第に歌舞伎劇界に認められるに至つた明治三十九年十一月大阪浪花座に於て十一世仁左衛門を襲名以來松島屋の總宰として老練の技を揮ふと共に歌舞伎劇の隆興に努力すること多年、現時一等俳優として斯界に重きをなし、其の枯淡圓熟の技は當世無雙の名手として好評嘖々たるものがある。當り藝は「名工柿右衛門」の柿右衛門、「櫻時雨」の紹由、「咨手孤城落月」の片桐且元等にして、老役の澁味は天下一品の稱がある。俳名を萬磨と號し、趣味として骨董、義太夫等を好し義太夫は頗る堪能である。

竹柴　二朔氏　日本橋區濱町三ノ一　電話浪花四、五六八
日本舞踊協會主事
明治三四年一月生、東京市
舞踊界の親睦とその圓滿なる發展に貢献しつゝある日本舞踊協會の要職に在つて信望隆々たる氏は、本名を小島勝太郎と謂ひ、小島金太郎氏の二男として現住所に呱々の聲を揚げた。先天的に藝術の才能に秀で、夙に斯道に親しみ、大正九年竹柴金作氏の門人となり、坂東三津五郎座附狂言作者として市村座に入座し、研鑽努力漸次その才腕を認められるに至つた。大正十二年七月淺草松竹座に上演されたる「くらやみ丑松」及び昭和四年明治座に三津五郎氏の「連獅子」上演の際の合狂言「蟹山伏」等はその代表作として知られてゐる。其後昭和五年藤間勘兵衛、坂東三津五郎、若柳吉藏の諸氏が發起人となり日本舞踊協會設立が企畫されるや、氏も亦陰に陽にその創立に盡瘁し、昭和六年一月創立と同時に劇界を去つて協會主事に就任し、以

て今日に及んでゐる。此の間氏は克く協會長を翼けて協會の基礎確立に貢献する所尠なからず、現時益々斯界の爲め心血を濺いで活躍しつゝある。趣味として俳句を好み。夙に高濱虛子氏に師事し、秀句も尠くない。

中村竹三郎氏　四谷區内藤町一　電話四谷五四三八
俳優
明治一三年生、東京市
劇界の花形として名聲嘖々たる氏は本名を村井道一と呼び、帝都講釋界に令名を馳せたる邑一氏の息として淺草區に生れた。幼少の頃より演藝に趣味を有し、遂に斯界に投じた。明治二十五年十二歳の時本鄕春木座に出演し、「田舍源氏」の小坊主を勤めたのを初舞臺とし、爾來各座に出演して妙技を揮ふと共に斯界に於ける諸大家の指導を受けて藝を磨き、毫も他を顧みずして只管研鑽に勵みたる効果空しからず、漸次上達して好劇家に認められ、人氣を博するに至つた。當り藝は「在原系圖」の蘭平、「御所櫻の藤彌太、「隅田川續悌」の法界坊等にして、古今諸名優の型に通じ、獨特の考案を加味したる氏特有の藝風は、夙に普く好評を博してゐる。趣味は演藝の研究、圍碁、菊の栽培等である。

富士田伊之吉氏　京橋區銀座西八ノ八ノ四　電話銀座四三五九
長唄師匠
明治二六年六月生、富山縣
高潔なる人格と卓拔の技倆と相俟つて

長唄界に聲望隆々たる氏は、本名を杉林豐次郎と謂ひ、杉林太吉氏の長男として富山縣高岡市に生れ、後一家と共に上京して大井町に移住した。幼少の頃より演藝に趣味深く、夙に女流の代表的名手として令名を馳せたる故杵屋六登志に師事して長唄を學ぶ事多年、後大正五年頃師の推輓に依つて名人故富士田音藏氏の一門となり、富士田豐藏と名乘つて市村座に出勤し好評を博した。

爾來約三ケ年同座に出勤したが、その後杵屋宗家に加はり中村六七郎と改名して帝劇に出演すること約二ケ年、一時三味線方を勤めて杵屋六八を名乘つたが、大正十一年帝劇を辭し再び豐藏に復して富士田音藏一派に加はり、昭和六年十二月伊之吉と改名した。現時依然菊五郎座付として歌舞伎座、東京劇場、明治座等に出勤しつゝあるが、その老練の藝風は普く斯界に認められ名聲を博してゐる。得意の曲目は「四季山姥」「秋色種」等である。氏は亦田村派の小唄を研鑽すること多年に及び一家を成す名手として知られてゐる。趣味は野球。競馬、書道等にして、能筆の聞え高く常に菊五郎氏の代筆を勤め、特に草書に巧みである。

阿部喜藤治氏　淺草區左衞門町一　電話淺草六五

辯護士

明治九年三月生、福島縣

明治三五年日本大學法科卒業

在野法曹界に敏腕の聞え高き氏は、福島縣人阿部寅松氏の實弟として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に靑雲の志を抱いて上京し、日本大學に於て法律を研究し卒業後直ちに辯護士試驗に合格し直ちに辯護士を開業した。爾來帝都法曹界に在つて活躍すること多年、大小幾多の事件を引受け、事毎に周到なる研究と熱心懇切なる態度を以て辯護に當り、漸次斯界に名聲を博し、年と共に依賴者激增して今日の隆況を呈するに至つた。性來義俠心に富み、營利觀念に超然たる態度を以て弱者に與し正義人道を高唱し、義俠的に辯護する場合も尠なからず、普く信望を博してゐる。

妻コト（明治一九年生、東京府士族靑田綱三三女）長男武夫（同四四年生）二男定夫（大正四年生）三男榮夫（同六年生）四男達夫（同一二年生）長女はる（同二年生）

佐藤三吾氏　四谷區內藤町一　電話四谷三〇七八

正七位、山手劇場（株）社長、東京劇場協會理事

文久三年一月生、大分縣

明治二三年東京法學院卒業

氏は大分縣大分都西庄內村に佐藤亦三郎氏の三男として呱々の聲を揚げ、後分れて一家を樹てた。大分縣立師範學校卒業後上京して東京法學院に學び、同校卒業後直ちに官界に入り、明治二十四年群馬縣警部に任ぜられた。後同縣館林警察署、同桐生警察署長等を經て同縣保安課長に進み、多年同縣下の警察行政に貢獻した。その後警視廳に轉じ、警部、第一部第二課長等に歷任し、更に北海道廳に轉じて典獄或は警察署長となり、後樺太民政署に移つて政治事務囑託、ウラジミロスカ支署長、司法委員等に就任し敏腕を揮つた。後東京市役所に奉職して衞生課長、水道課長兼經理課長等を經て大正三年四谷區長に榮進し、勤續十三ケ年に亘つて區政の刷新向上に貢獻する所甚大であつた。大正十五年任を辭し、昭和四年山手劇場の創立と同時にその社長に擧げられ、現時その職に在つて活躍しつゝある。宗旨は曹洞宗、趣味は角力、柔道詩作等にして特に漢詩に長じ、瓦全の雅號がある。

妻逸子（明治一〇年生、靜岡縣人中島積善長女）嗣子敏幸（大正三年生）四男丈夫（同七年生、中島積善養子）養女日出子（明治二七年生、東京女子大附屬高女卒、判事下山晋大郎に嫁す）

木村錦之助氏　淺草區千束町二ノ四三　電話淺草四四〇三

母カツ（天保一二年生）妻トミ子（明治二五年生、赤倉鐵之助長女）長男宮之助（同四〇年生）二男雄之助（大正九年生）

新甫寛實氏　本所區太平町一ノ九一　電話墨田六四

勳八等、權僧正、法恩寺住職、東京府第一教區布教監、第四方面委員長、南葛・東京市會議員に選ばれて以來市政の刷新に努力し、現時前揭の職を兼ねて益々社會公共的に貢獻しつゝある。宗派は日蓮宗趣味は兒童教化等である。

妻ため（明治八年生、千葉縣人竹中文之助叔母）長男忠雄（同四一年生）二男武（大正三年生）三女澄子（明治四四年生）

線方を勤めて杵屋六八を名乘つたが、大正十一年帝劇を辭し再び豐藏に復して富士田音藏一派に加はり、昭和六年十二月伊之吉と改名した。現時依然菊五郎座付として歌舞伎座、東京劇場、明治座等に出勤しつゝあるが、その老練の藝風は普く斯界に認められ名聲を博してゐる。得意の曲目は「四季山姥」「秋色種」等である。氏は亦田村派の小唄を研鑽すること多年に及び一家を成す名手として知られ

今日の隆況を呈するに至つた。性來義俠心に富み、營利觀念に超然たる態度を以て弱者に與し正義人道を高唱し、義俠的に辯護する場合も尠なからず、普く信望を博してゐる。

妻コト（明治一九年生、東京府士族青田綱三三女）長男武夫（同四四年生）二男定夫（大正四年生）三男榮夫（同六年生）四男達夫（同一二年生）長女はる（同二年生）

民政署に移つて政治事務囑託、ウラジミロスカ支署長、司法委員等に就任し敏腕を揮つた。後東京市役所に奉職して衞生課長、水道課長兼經理課長等を經て大正三年四谷區長に榮進し、勤續十三ケ年に亘つて區政の刷新向上に貢献する所甚大であつた。大正十五年任を辭し、昭和四年山手劇場の創立と同時にその社長に擧げられ、現時その職に在つて活躍しつゝある。宗旨は曹洞宗、趣味は角力、柔道

詩作等にして特に漢詩に長じ、瓦全の雅號がある。

妻逸子（明治一〇年生、靜岡縣人中島積善長女）嗣子敏幸（大正三年生）四男丈夫（同七年生、中島積善養子）養女日出子（明治二七年生、東京女子大附屬高女卒、判事下山晋大郎に嫁す）

木村錦之助氏　淺草區千束町二ノ四三　電話淺草四四〇三

劇作家、松竹（名）理事、歌舞伎座（株）幕内部長

明治一一年生、東京府

劇作家として又劇界の功勞者として梨園に雄飛しつゝある氏は、東京府人木村才助氏の四男として都下に呱々の聲を揚げ、後家督を相續した。幼少の頃より藝術に趣味深く、夙に劇界に投じて歌舞伎脚本の創作に靈妙の筆を揮ふこと多年、錦花のペンネームを以て夙に斯界に嘖々たる名聲を博し、戯曲「心中二駕籠」「研辰の討れ」等江湖の稱賛を博したる名作が尠くない。一方新聞雜誌等に筆を執つて常に演劇特に歌舞伎劇の發展普及に盡瘁し、又明治四十五年以來松竹合名に關係し同社の發達に努力し、現時前掲の職に在つて活躍しつゝある。宗旨は禪宗、趣味は讀書、旅行、演藝の研究等。因みに富子夫人も亦閨秀作家として知られてゐる。

母カツ（天保一二年生）妻トミ子（明治二五年生、赤倉鐵之助長女）長男宮之助（同四〇年生）二男雄之助（大正九年生）

新甫　寛實氏　本所區太平町一ノ九一　電話墨田六四

勳八等、權僧正、法恩寺住職、東京府第一教區布教監、第四方面委員長、南葛・本所・深川・淺草・京橋・下谷各宗務所々長、免囚保護慈濟會理事太平小學校奬勵會々長、本横小學校奬勵會副會長、東京市會議員

明治一〇年七月生、山梨縣

明治二九年靜岡縣貞松中學校卒業

靈界の人格者として德望高き氏は、山梨縣人深澤源兵衞氏の息に生れ、明治二十七年宮崎縣人新甫俊光氏の養子となつた。同二十九年貞松中學校卒業後僧籍に入り大正十三年法恩寺住職に就任し權僧正に擧げられた。資性博愛慈善心に富み夙に慈善事業、救濟事業或は教化運動等に心血を濺いで功績頗る多く、昭和四年東京市會議員に選ばれて以來市政の刷新に努力し、現時前掲の職を兼ねて益々社會公共的に貢献しつゝある。宗派は日蓮宗趣味は兒童教化等である。

妻ため（明治八年生、千葉縣人竹中文之助叔母）長男忠雄（同四一年生）二男武（大正三年生）三女澄子（明治四四年生）

葉梨新五郎氏　牛込區市ヶ谷臺町一〇　電話四谷二一九〇

衆議院議員

明治三四年二月生、茨城縣

最年少の代議士として議政壇上に異彩を放ち、洋々たる前途を期待されてゐる氏は、茨城縣の名門葉梨伴之助氏の四男として同縣下に呱々の聲を揚げた。性來俊敏の譽れ高く學生時代は秀才として名聲を博し、學業を卒へるや直ちに操觚界に投じ、日本電報通信社に入社し敏腕を揮ふこと五ケ年に及び、その烱眼と機敏の才、加ふるに熱烈燃ゆるが如き意氣を以て縱横無碍の飛躍をなし斯界に漸次頭角を顯はすに至つた。昭和

六年九月同社を辭し、山岡萬之助氏が關東長官となるやその秘書官に拔擢されたが、幾何もなく總選擧に際し鄕里茨城縣第一區より內田信也、宮古啓三郎其他政界の古强者の間に伍して敢然出馬し、悠々當選の榮を擔ひ、現時政友會に屬して政治の實際的修業に勵みつゝあるが、早くも將來の大政治家として囑望されてゐる。宗旨は禪宗、趣味は政治、スポーツ等である。

妻鈴子(明治三九年生)長男信之(昭和三年生)二男之義(同六年生)

早矢仕四郎氏　中野區小淀二六　電話四谷一〇二

明治二年二月生、東京府

當家は先代以來町內屈指の大地主として知られてゐる。先代早矢仕有的氏は岐阜縣武儀郡笹賀村に代々庄屋を勤めたる名門の息として天保八年生を享け、夙に上京して福澤諭吉翁の私塾に入つて親しく翁の薫陶を受け、塾生中學德共に群を拔き福澤門下の四天王の一人に數へられ恩師と共に西洋文化の輸入に貢獻する所多く、書肆界の覇者丸善の創立者として赫々たる功績を貽してゐる。氏はその長男として現住地に呱々の聲を揚げ、第一高等學校に學んで秀才の譽れを博し、同校卒業後實業界に投じて活躍したが、後斯界を去り、現時地家主として巨萬の富を擁し、名望家として普く知られてゐる趣味は音樂、讀書、謠曲等である。

新田　邦達氏　(自)牛込區市谷谷町六一　(宅)電話四谷五一九五　本鄕區駒込西片町三　電話小石川五三二一

(教務局)

神道修成派管長

明治三六年七月生、東京府

大正一五年日本大學文學部卒業

神道修成派は天御中主神高皇產靈神、神皇產靈神の三神を主體とし、之に淵源する道に依り人身至善の心魂を愛養保存するために教義を樹て、修理固成の趣旨に則り心魂を練磨することを主眼とする教へにして、祭神は前記主體の外に伊邪那岐神、伊邪那美神、天照皇太神、天神地祇の諸神を祀つてゐる。教祖新田邦光先生は文化十二年阿波國美馬郡江原村に生れ、幼名を竹澤寛三郎と呼び、維新の際勤王派として活躍したが王政の復古成るや神道と儒教を折衷して當派を創始し教化に畢生を獻げた。氏は二世管長邦貞氏の長男に生れ、日本大學卒業後更に同大學院に於て研究を重ねたが、之より先大正九年前管長の歸幽に遭ひ直ちに其後を繼ぎ三代管長の職に就いた。大學院を卒へるや專ら布教に意を注ぎ、教務一切を處理して活躍至らざるなく、その熱心と崇高なる人格は相俟つて教徒の信望を聚め、今や祠宇十堂、教會所三百八十五ケ所、教師二千名を算し全國各地に信徒を有して隆盛を極めてゐる。(上は教祖新田邦光先生)

堀江正三郎氏　京橋區明石町三一　電話京橋四七一八

衆議院議員、茨城鐵道、原安商會各社長多摩水電(株)專務、氣仙水電・高國塗料各(株)取締役、東京灣汽船・西加世田水電各(株)監査役

明治二年一月生、茨城縣

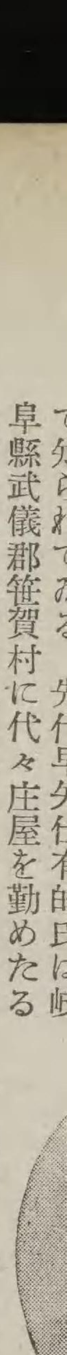
明治二二年東京高等工業學校卒業

實業界及び政界に名聲高き氏は、茨城縣人堀江又之助氏の實弟にして、明治四十二年分家した。學門を去るや直ちに實業界に入り、東京製絨會社等に技師として活躍し、漸次その手腕を認められて東京灣汽船會社の技師長に進み、爾來各方面に驥足を伸べて着々地歩を高め、現時前揭諸社重役を兼ねて雄飛しつゝある。

一方夙に政界に進出し東京府會議員を始めとして同參事會員、同市部會議長等に選ばれ、或は東京都市計畫委員會委員、大都市制度調査會委員帝都復興院評議員と共に移り東京日々新聞紙上に挿畫及びスケッチ等を執筆して一躍名聲を博した大正五年同社を去つて專ら研究に沒頭し後中外商業新報社客員、大阪朝日新聞社囑託等に聘せられて益々盛名を馳せ、現時各新聞雜誌に執筆して人氣を呼んでゐる。その筆致輕妙にしてユーモアに富み漫畫的挿畫に於ては斯界隨一の稱がある望を博した。昭和四年本社外事部長に榮進し現時その職に在つて益々活躍しつゝあるが、その卓拔なる外交的手腕と進取の氣象は絕好の適役として、同社の業績向上に顯著なる功績を示してゐる。

妻とみ子(明治二五年生)長男哲男(大正八年生)二男幹之助、長女芳子(同四年生)二女太嘉子

て知られてゐる。先代は先代有的氏は岐阜縣武儀郡笹賀村に代々庄屋を勤めたる名門の息として天保八年生を享け、夙に上京して福澤諭吉翁の私塾に入つて親しく翁の薫陶を受け、塾生中學德共に群を抜き福澤門下の四天王の一人に數へられ恩師と共に西洋文化の輸入に貢献する所多く、書肆界の覇者丸善の創立者として赫々たる功績を貽してゐる。氏はその長男として現住地に呱々の聲を揚げ、第一高等學校に學んで秀才の譽れを博し、同校卒業後實業界に投じて活躍したが、後



魂を愛養保存するために教義を樹て、修理固成の趣旨に則り心魂を練磨することを主眼とする教へにして、祭神は前記主體の外に伊邪那岐神、伊邪那美神、天照皇太神、天神地祇の諸神を祀つてゐる。教祖新田邦光先生は文化十二年阿波國美馬郡江原村に生れ、幼名を竹澤寛三郎と呼び、維新の際勤王派として活躍したが王政の復古成るや神道と儒教を折衷して當派を創始し教化に畢生を献げた。氏は人身至善の心

堀江正三郎氏　京橋區明石町三一　電話京橋四七一八

衆議院議員、茨城鐵道、原安商會各社長多摩水電(株)專務、氣仙水電・高國塗料各(株)取締役、東京灣汽船・西加世田水電各(株)監査役

明治二年一月生、茨城縣

明治二二年東京高等工業學校卒業

實業界及び政界に名聲高き氏は、茨城縣人堀江又之助氏の實弟にして、明治四十二年分家した。學門を去るや直ちに實業界に入り、東京製絨會社等に技師として活躍し、漸次その手腕を認められて東京灣汽船會社の技師長に進み、爾來各方面に驥足を伸べて着々地歩を高め、現時前掲諸社重役を兼ねて雄飛しつゝある。一方夙に政界に進出し東京府會議員を始めとして同參事會員、同市部會議長等に選ばれ、或は東京都市計畫委員會委員、大都市制度調査會委員帝都復興院評議員等として大東京の建設に貢献する所甚大であつた。昭和七年二月の總選擧に際しては鄕里茨城縣第三區より出馬して當選の榮を得、今や財界政界に跨つて信望隆々たるものがある。

妻すゞ(明治九年生、東京府人石原直道姉)嗣子實(同四一年生)

細木原青起氏　牛込區市谷砂土原町三ノ八　電話牛込三五六一

畫家

明治一八年五月生、岡山縣

氏は本名を辰江と謂ひ、新聞雜誌挿畫界の重鎭として普く江湖に知られてゐる幼少の頃より繪畫に趣味を有し、十七歳の頃より日本畫を專門的に研究し明治三十九年二十一歳の時京城日報社の創立と同時に入社して同紙の挿畫を擔當した。同四十二年同社を辭して上京し毎日電報社に入社したが、幾何もなく同社は東京日々新聞社に合併されたるため氏も亦社と共に移り東京日々新聞紙上に挿畫及びスケツチ等を執筆して一躍名聲を博した大正五年同社を去つて專ら研究に沒頭し後中外商業新報社客員、大阪朝日新聞社囑託等に聘せられて益々盛名を馳せ、現時各新聞雜誌に執筆して人氣を呼んでゐる。その筆致輕妙にしてユーモアに富み漫畫的挿畫に於ては斯界隨一の稱がある又その作品にはユーモア全集中の「晴後曇」、漫畫六家選中の「節穴から」、「娘盛り」等著名なるものが頗る多い。趣味として謠曲を好み觀世流に巧みである。

岡田　公善氏　豐島區高田本一ノ三四　電話　牛込二一七六

富國徴兵保險(相互)外事課長

明治一七年一一月生、山梨縣

保險界に敏腕を揮ひつゝある氏は、山梨縣人岡田長次郎氏の長男として同縣甲府に呱々の聲を揚げた。夙に上京して實業界に投じ、明治四十四年第一徴兵保險會社に入社するや只管職務に勵精して漸次社内に信望を得、同社東京支店地方部長の要職に在つて活躍し、好成績を擧げて都下同業界に認められるに至つた。その後富國徴兵保險會社の創立されるや直ちに同社に轉じ、大正十二年山梨縣地方部長に擧げられ、鄕里に在つて同社の勢力扶殖に努力し異數の好成績を擧げて信望を博した。昭和四年本社外事部長に榮進し現時その職に在つて益々活躍しつゝあるが、その卓拔なる外交的手腕と進取の氣象は絶好の適役として、同社の業績向上に顯著なる功績を示してゐる。

妻とみ子(明治二五年生)長男哲男(大正八年生)二男幹之助、長女芳子(同四年生)二女太嘉子

大槻　信治氏　大阪市東區小橋西之町一ノ三五　電話南三六三

法學士

明治二七年一二月生、宮城縣

大正九年東京帝國大學英法科卒業

氏は宮城縣士族大槻龍治氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げた。幼少の頃より頭腦明晰にして秀才の譽れ高く、大學を卒へるまで終始優秀の成績を以て一貫し、夙に將來の飛躍を期待されてゐた校門を出ると同時に横濱正金銀行に入社し、精勵恪勤して次第に行内の信任を得東京支店、カルカツタ支店等に轉勤最後に大阪支店に勤務し、大いにその敏腕を認められるに至つたが、昭和六年十二月同行を辭して閑地に就き、現時滿蒙開發事業及び畜産改良事業等に關與し、活躍しつゝある。資性溫厚謹直にして公共奉仕の念に富み、高潔なる人格者として信望を博してゐる。宗旨は基督教、趣味と

して音樂を好み、特に西洋音樂通である
妻はる（明治三六年生、荒木寅三郎長女、京都府立第一高女卒）嗣子健治（大正一二年生）

加藤　傳七氏　〔大森區北千束四九一〕
玉川水道工務部長、高田市水道課囑託
明治一五年一二月生、山形縣
明治四三年攻玉社土木科卒業
練達の技術家として名聲嘖々たる氏は山形縣人加藤傳次郎氏の長男として同縣酒田町に生れ。夙に勃々たる雄志を抱いて帝都に上り、法制經濟等を研究し明治三十五年東京市役所に奉職し、水道部に勤務して實地經驗を積むと共に攻玉社に通學して土木工學を修めた。其の後玉川水道の建設工事に從事し、更に大正十三年には高田市水道、同十五年には鶴岡水道、昭和二年には愛知縣半田水道等の各水道工事に從事して敏腕を揮ひ、昭和四年四月玉川水道に入社した。當初は技術監督として活躍したが、次第に信任を得て工務部長に擧げられ、現時その任に在る傍ら高田市水道課囑託を兼ねてゐる。多年の經驗と不斷の努力相俟つて卓拔なる技倆を有し、加ふるに溫厚なる人格者として各方面に信望が頗る高い。宗旨は眞宗、趣味は圍碁、將棋、繪畫等。

妻あさ（四九歳）嗣子操（二一歳、横濱高等工業學校在學）

矢田　日亮氏　大阪市北區末廣町　電話堀川二〇六一
蓮興寺住職、僧正、本門宗第十教區宗務取締、同宗々會議員、常置委員、大本山要法寺教學財團理事長、大阪佛教和哀會理事、反宗教思想折伏聯盟關西本部幹事慶應元年生、島根縣
氏は石見國大森町銀山に呱々の聲を揚げた。夙に僧門に入り、明治十九年本門宗大本山要法寺專門學校を卒業後、本山內眞如院住職として迎へられ、後布教師として渡鮮し、布教に從事中日清戰役勃發の爲め一旦歸山の上直ちに北海道に赴き、屯田兵の教化に從事し名聲を博した後歸山して本山執事及び顧問に歷任し、明治四十一年大阪府北河內郡庭窪村字佐太の本性寺住職となり、大正五年蓮興寺住職に轉じ以て今日に及んでゐる。此の間本門宗の普及發展に貢献し、又大阪府市に於ける教界の刷新向上に盡瘁する所尠なからず、現時前揭の要職を兼ねて益々活躍し、本門宗派の重鎭たるのみならず、本邦教界屈指の名知識として尊崇されてゐる。天亮と號し和歌に秀で、讀書が唯一の趣味である。

鍋島　直高氏　澁谷區神山四五　電話青山一七四
正五位、法學士、臺灣銀行勤務
明治三一年三月生、佐賀縣
大正一一年京都帝國大學法科卒業
華冑界の新進として聲望隆々たる氏は名門鍋島家の分家たる男爵鍋島直明氏の長男として呱々の聲を揚げた。父は軍界に飛躍して赫々たる武勳を樹て、正三位勳一等功四級に叙せられ陸軍少將に累進し、又貴族院議員として聲名を馳せてゐる。その御曹子たる氏は夙に學習院を經て京都帝國大學に學び、政治科を專攻して孜々學業に勵み、卒業後直ちに臺灣銀行に奉職し、本店詰、上海支店詰等を經て東京支店勤務に轉じ、現に東京支店に在つて活躍してゐる。その高潔なる人格は夙に普く認められ、業務に對する熱心と相俟つて行內に重んぜられ、前途有爲の材として信望がある。
妻敬子（明治三三年生、公爵二條弼基妹鎌倉高女卒）

鍋島　直明氏　澁谷區神山四五　電話青山一七四
正三位、勳一等、功四級、男爵
在鄕陸軍少將、貴族院議員、共同信託（株）監査役
明治二年一二月生、佐賀縣
明治二六年陸軍士官學校卒業
當家は鍋島勝茂の四男直弘の後裔にして、代々佐賀藩の國老を勤めたる名門である。先代直嵩氏は維新の際藩主と共に國事に奔走して偉功を樹てた。氏は同藩の國老鍋島孫太郎氏の二男に生れ、長じて先代の養子となり明治二十八年家督を相續し、同三十年男爵に列せられた。初め長崎外國語學校に學び、後陸軍士官學校に學び、後英國陸軍少將、貴族院議員の榮位に在つて令名嘖々たる鍋島直明の二男として名門に生を亨けた。正五位法學士鍋島直高氏はその長兄である。學習院卒業後更に進んで京都帝國大學に學び史學科に於て專ら國史を研究し、卒業後更に同大學院に入り諸大家の指導を受けて孜々研鑽に勵み學界の新人として前途の雄飛を囑望されてゐる氏は正三位、勳一等功四級、男爵

貢献すべく東京女子高等師範學校に學び卒業後直ちに母校に教鞭を執り、後英國に留學を命ぜられて親しく女子教育の實情を視察研究し、歸朝後新知識を傾注して本邦に於ける教育の發達に貢献し名聲を博した。その後暹羅國政府の招聘に應じ、盤谷府皇后女學校教育主任となり、同校の創立及び創立後實際教授に當つて功績を樹てた。歸朝後東京女子大學の創

年には高田市水道、同十五年には鶴岡水道、昭和二年には愛知縣半田水道等の各水道工事に從事して敏腕を揮ひ、昭和四年四月玉川水道に入社した。當初は技術監督として活躍したが、次第に信任を得て工務部長に擧げられ、現時その任に在る傍ら高田市水道課囑託を兼ねてゐる。多年の經驗と不斷の努力相俟つて卓拔なる技倆を有し、加ふるに溫厚なる人格者として各方面に信望が頗る高い。宗旨は眞宗、趣味は圍碁、將棋、繪畫等。

後藤山城　明治四十一年大阪府北河內郡庭窪村字佐太の本性寺住職となり、大正五年蓮興寺住職に轉じ以て今日に及んでゐる。此の間本門宗の普及發展に貢獻し、又大阪府市に於ける敎界の刷新向上に盡瘁する所尠なからず、現時前揭の要職を兼ねて益々活躍し、本門宗派の重鎭たるのみならず、本邦敎界屈指の名知識として尊崇されてゐる。天亮と號し和歌に秀で、讀書が唯一の趣味である。

は夙に普く認められ、業務に對する熱心と相俟つて行內に重んぜられ、前途有爲の材として信望がある。

妻敬子(明治三三年生、公爵二條弼基妹鎌倉高女卒)

鍋島　直明氏　澁谷區神山四五　電話青山一七四

正三位、勳一等、功四級、男爵
在鄕陸軍少將、貴族院議員、共同信託(株)監査役
明治二年一二月生、佐賀縣

明治二六年陸軍士官學校卒業

當家は鍋島勝茂の四男直弘の後裔にして、代々佐賀藩の國老を勤めたる名門である。先代直嵩氏は維新の際藩主と共に國事に奔走して偉功を樹てた。氏は同藩の國老鍋島孫太郎氏の二男に生れ、長じて先代の養子となり明治二十八年家督を相續し、同三十年男爵に列せられた。初め長崎外國語學校に學び、後陸軍士官學校に進み、卒業後陸軍騎兵少尉に任ぜられ、皇族附武官として閑院宮家、竹田宮家等に仕へ、後軍事參議官、軍務局員等に歷任し、又此の間日淸、日露の兩大役に出征して武功を顯はし、大正八年陸軍少將に任ぜられ豫備役に編入された。軍界を去つて後は貴族院議員として活躍すると共に、共同信託株式會社の監査役として實業界にも地歩を占め、以て今日に及んでゐる。

妻渭子(明治八年生、養父直嵩長女)長男直高(同三一年生)、二男直康(同三九年生)長女純子(同三三年生、女子學習院卒、伯爵牧野伸顯長男伸通妻)

鍋島　直康氏　澁谷區神山四五　電話青山一七四

文學士、女子學習院講師
明治三九年一月生、佐賀縣
昭和五年京都帝國大學文科卒業

學界の新人として前途の雄飛を囑望されてゐる氏は正三位、勳一等功四級、男爵陸軍少將、貴族院議員の榮位に在つて令名嘖々たる鍋島直明の二男として名門に生を亨けた。正五位法學士鍋島直高氏はその長兄である。學習院卒業後更に進んで京都帝國大學に學び史學科に於て專ら國史を研究し、卒業後更に同大學院に入り諸大家の指導を受けて孜々研鑽に勵みたる後、昭和六年九月女子學習院講師に聘せられた。現時その職に在つて熱心に敎授しつゝある傍ら、或は專門大家に學び或は新古文獻を漁り、國史の各般に亘つて研究に沒頭し、深く史實に通曉する篤學者として學生間に尊敬されてゐる。趣味は文學の研究、演劇、スポーツ等である

妻升子(明治四五年生、侯爵西鄕從德四女、女子學習院卒)

安井　哲女史　杉並區上井草一、三九三

正五位、東京女子大學々長
明治三年二月生、東京府
東京女子高等師範學校卒業

女流敎育界の重鎭として令名嘖々たる女史は、東京府士族安井津守氏の長女に生れた。夙に本邦女子敎育の普及發達に貢獻すべく東京女子高等師範學校に學び卒業後直ちに母校に敎鞭を執り、後英國に留學を命ぜられて親しく女子敎育の實情を視察研究し、歸朝後新知識を傾注して本邦に於ける敎育の發達に貢獻し名聲を博した。その後暹羅國政府の招聘に應じ、盤谷府皇后女學校敎育主任となり、同校の創立及び創立後實際敎授に當つて功績を樹てた。歸朝後東京女子大學の創立に奔走し、創立以來同大學の核心となつてその發展に健鬪以て今日に及び、現時學長として名實共に同大學を統率する傍ら、廣く女子敎育に關係し講演に、著述に、その他凡ゆる方法、凡ゆる機會に於て全女子敎育界の發達向上に貢獻し、斯界の恩人として尊崇されてゐる。

母千代(嘉永五年生)亡弟信一郎妻せつ(明治一六年生)甥哲夫(同三五年生、信一郎長男、現戸主)弟寬(同一六年生)同妻靜(同二七年生)弟勉(同二〇年生)同妻花枝(同三一年生)

富士川　滋氏　世田ヶ谷區下町一ノ三

東京府立第一商業學校敎諭兼府立商業實務學校主事
明治二六年一〇月生、長野縣
日本大學卒業

當家の祖は代々信州飯田に住み長姫城

内に在る長姫神社の神官であつたが、祖父の代に木曾に移住して山林業に從事し父の富士川欣吾氏も亦之を繼承した。氏はその長男として同地に呱々の聲を揚げたが父祖の業を繼がず、松本中學校卒業後青雲の志を抱いて上京し、日本大學に學び卒業後文部省中等教員檢定試驗に應じて地理、鑛物、法制經濟各科の中等教員資格を獲得した。後大山柏公爵に就いて考古學の研究を積んだが、大正十年東京府立第一商業學校に奉職し、爾來誠心誠意を以て生徒の指導に當り、今日に及んでゐる。崇高なる人格者にして佛教を信仰し「人の爲め世の爲めに奉仕すること」を以て處世の根本方針とし、かゝる人物の養成を教育の眼目としてゐる。趣味として登山、石器時代の石器蒐集等を好み、蒐集のため内地は勿論支那、南洋等の各地に足跡を印し、各種珍奇なる石器を藏してゐる。又著書には「地誌研究採集便覽」「内外商業地理教科書」等がある。

富士　良吉氏　澁谷區金王五九　電話青山六二七八

加賀豐三郎商店勤務
明治二一年生、大坂府
明治四二年大阪高等商業學校卒業

氏は大阪府人富士四郎兵衞氏の息として大阪市内に呱々の聲を揚げ、後その家督を相續した。天王寺中學校を經て大阪高等商業學校に學び、卒業後直ちに日露實業株式會社に入社し、精勵恪勤して次第に重用せられ、哈爾賓支店長に擧げられた。その後本社に還り通商課長の要職に在つて、同社の爲めに貢獻する所尠なからず、社内外に信望を博するに至つたが、大正十二年同社を辭し、義兄加賀豐三郎氏經營の株式店に入り爾來業務の擴張發展に努力以て今日に及んでゐる。資性溫厚篤實にして業界稀に見る人格者として尊敬され、各方面に名聲隆々として將來の一大飛躍を期待されてゐる。金光教を信仰し、趣味は日本音樂、物理學等である。

母とく、妻壽美子（明治三〇年一月生）

後藤　進二氏　京橋區寶町一ノ四　電話京橋三六五五

辯護士、辨理士、京橋區會議員
明治一七年一月生、東京市
明治三八年日本大學法科卒業

在野法曹界に敏腕の聞え高き氏は、故後藤元治郎氏の長男に生れ、後家督を相續した。當家は舊幕時代より江戶に住し連綿として今日に傳はれる舊家にして、氏はその十四代當主である。父は辯護士として明治大正の斯界に令名を馳せたが氏も亦斯界に志し日本大學卒業後辯護士試驗及辨理士試驗に合格して大正元年開業し、父と共に各種事件の辯護に當り、次第に名聲を博するに至つた。性來俊敏濶達にして俠氣に富み公共心篤く、或は日本大學評議員として母校の爲めに盡瘁し、或は東京辯護士會及び東京辨理士會各常議員に選ばれて同業者間の親睦に努め、或は曩に帝都復興事業に際しては區劃整理委員兼議長として復興の大業に貢獻する等、その功績頗る顯著なるものがある。昭和四年區會議員に選ばれて以來區政の刷進に努力して貢獻少なからず、現時前揭の職に在る傍ら東京辯護士會常議員議長等をも兼ねて、普く信望を博してゐる。

鮎川　義介氏　牛込區市ケ谷佐内町三六　電話牛込二八七六

工學士、日立製作所・日本鑛業各(株)會長、戶畑鑄物・日本產業・戶畑冷藏・共立企業各(株)社長、東洋製鐵・日立電力・大阪鐵工所・不二塗料・中央火災傷害保險・安來製鋼所各(株)取締役、東亞電機(株)相談役、井上育英會理事
明治一三年一一月生、山口縣
明治三六年東京帝大工科機械科卒業

氏は山口縣士族鮎川彌八氏の長男に生れ、大正十三年家督を相續した。當家は

縣下屈指の名門にして、財界の大立者木村久壽彌太氏、久原房之助氏、貝島太市氏は共に姻戚である。夙に東京帝國大學に學び、卒業後直ちに芝浦製作所に入社したが、後渡米して鑄物製造を研究し、歸朝後戶畑鑄物株式會社を創立して財界活躍の第一歩を踏み、奮鬪努力以て同社を斯界隨一の大會社として發展せしめ、

樹て天正十八年武藏國鳩ケ谷五千石に封ぜられた。是れ當家中興の祖である。正勝の息正次は、大阪役に大功を顯はし八萬六千石に增封されて上總國大多喜に移り、後小田原に移封され、元和九年老中に擧げられた。其子對馬守重次も亦老中となり九萬九千石に增封され、其の孫對馬守正邦は寶永七年備後福山の城主とな

明治二一年四月生、熊本縣
明治四三年早稻田大學政治經濟科卒業

溫厚なる性格と卓拔の手腕と相俟つて名望高き氏は、熊本縣人荒木德次郎氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正六年分れて一家を樹立した。夙に青雲の志を抱いて帝都に笈を負ひ自由の學園早稻田大學に學び、孜々として研學の劾

好み、蒐集のため內地は勿論支那、南洋等の各地に足跡を印し、各種珍奇なる石器を藏してゐる。又著書には「地誌研究採集便覽」「內外商業地理教科書」等がある。

富士　良吉氏　澁谷區金王五九　電話靑山六二七八

加賀豐三郎商店勤務
明治二一年生、大坂府
明治四二年大阪高等商業學校卒業

氏は大阪府人富士四郎兵衞氏の息として明治二一年四月生、熊本縣

明治四三年早稻田大學政治經濟科卒業

溫厚なる性格と卓拔の手腕と相俟つて名望高き氏は、熊本縣人荒木德次郎氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正六年分れて一家を樹立した。夙に靑雲の志を抱いて帝都に笈を負ひ自由の學園早稻田大學に學び、孜々として研學の効空しからず優秀の成績を以て學業を了へ實社會に起つやその謹直にして私利私慾に超然たる態度を以て公に奉ぜんとする意氣は次第に認められ、着々地歩を開拓して東京市助役に擧げられ、克く市長を翼けて市政の刷新に敏腕を揮ひ大東京の建設に貢獻する所尠なからず、嘖々たる名聲を博した。後ち任を辭して現時閑地に悠々自適してゐるが、前途尙ほ春秋に富み一大飛躍を期待せられてゐる。

妻マサ（明治二四年生、東京府人佐原吉之助二女）嗣子功（大正七年生）長女彰（同六年生）二女露（同一〇年生）三女明（同一三年生）

佐久間藤吉氏　京橋區南小田原町三ノ一　電話京橋四五七

魚類商高根屋店主、日本橋魚市場組合監事
明治五年生、東京府

都下魚商界に活躍すること多年、嘖々

縣下屈指の名門にして、財界の大立者木村久壽彌太氏、久原房之助氏、貝島太市氏は共に姻戚である。夙に東京帝國大學に學び、卒業後直ちに芝浦製作所に入社したが、後渡米して鑄物製造を研究し、歸朝後戸畑鑄物株式會社を創立して財界活躍の第一歩を踏み、奮鬪努力以て同社を斯界隨一の大會社として發展せしめ、更に義弟久原氏の經營する諸事業に參劃して敏腕を揮ひ、現時前掲諸社重役を兼ねて財界に雄飛しつゝある。

妻美代（明治二六年生、飯田藤二郎長女）長男彌一（大正一二年生）二男金次郎（昭和四年生）長女春子（大正九年生）二女奈那子（昭和五年生）姉スミ（明治一一年生、木村久壽彌太妻）妹キヨ（同一六年生、久原房之助妻）同フジ（同一八年生、貝島太市妻）同ヨシ子（同三〇年生、近藤眞一妻）弟政輔（同二二年生、藤田家養子）

阿部　正直氏　本鄕區西片町一〇　電話小石川一六六〇

正四位、理學士、伯爵
東京府多額納稅者
明治二四年一月生、東京府
大正一一年東京帝國大學理科卒業

大彥命六代の孫安倍雉子臣の末裔伊豫守阿部正勝は、德川家康に仕へて武功を樹て天正十八年武藏國鳩ケ谷五千石に封ぜられた。是れ當家中興の祖である。正勝の息正次は、大阪役に大功を顯はし八萬六千石に增封されて上總國大多喜に移り、後小田原に移封され、元和九年老中に擧げられた。其子對馬守重次も亦老中となり九萬九千石に增封され、其の孫對馬守正邦は寶永七年備後福山の城主となり十萬石を領したが、其の六代の孫伊勢守正弘に至つて十一萬石の太守となり、正弘は維新直前十數年間閣老として外國との折衝に當り功勞があつた。先代正桓氏は侯爵淺野長勳氏の實弟にして、入つて當家を繼ぎ明治十七年伯爵を授けられた。氏はその長男に生れ、大正三年襲爵仰付けられた。夙に東京帝國大學に學び篤學の人格者として華冑界に尊敬されてゐる。

母篤子（慶應三年生、鍋島直映養姉）妻直子（明治三〇年生、阿部正一叔母）長男正道（大正六年生）二男正庸（同九年生）長女和子（同八年生）二女興子（同一五年生）妹貞子（明治二〇年生、小笠原長幹妻）弟元彥（同二六年生、酒井伯爵家養子）

荒木　孟氏　世田ケ谷區野澤一ノ九二

元東京市助役

後藤　進二氏　京橋區寶町一ノ四　電話京橋三六五五

辯護士、辨理士、京橋區會議員
明治一七年一月生、東京市
明治三八年日本大學法科卒業

在野法曹界に敏腕の聞え高き氏は、故後藤元治郎氏の長男に生れ、後家督を相續した。當家は舊幕時代より江戸に住し連綿として今日に傳はれる舊家にして、氏はその十四代當主である。父は辯護士として明治大正の斯界に令名を馳せたが辯護士、辨理士、日立製作所・日本鑛業各(株)會長、戸畑鑄物・日本產業・戸畑冷藏・共立企業各(株)社長、東洋製鐵・日立電力大阪鐵工所・不二塗料・中央火災傷害保險・安來製鋼所各(株)取締役、東亞電機(株)相談役、井上育英會理事
明治一三年一一月生、山口縣
明治三六年東京帝大工科機械科卒業

氏は山口縣士族鮎川彌八氏の長男に生れ、大正十三年家督を相續した。當家は

鮎川　義介氏　牛込區市ケ谷佐內町二六　電話牛込二八七六

たる名聲を馳せ確乎たる信用を有する氏は、先々代佐久間藤吉氏の孫に當り、明治二六年家督を相續した。夙に家業に携はり、斯業界に信望ある高根屋の名聲を失墜せざるのみならず、年と共に益々信用を增し、新販路を開拓して業績向上し以て今日の隆況を呈するに至つた。性來頗る義俠心に富み、或は魚市場組合監事として同業界の親睦及び圓滿なる發展に盡瘁し、或は町内の顔役として貢献する等、その公共的に盡したる功績多く、普く信望を博してゐる。

妻マサ(明治八年生、中島平兵衞妹)二男長(同三三年生)同妻スヾ(同三五年生、石原修吉養妹、京華高女卒)孫正吉(大正一三年生、亡長男藤之助長男)養子始(明治三四年生、長女春子の夫)長女春子(同三八年生、日本橋高女卒)二女富美子(同四〇年生)孫淑子(大正一五年生、二男長長女)同清(養子始長男)

木下　龍夫氏　豐島區西巢鴨三ノ一九〇三

工學士、探偵小說家
明治二九年一一月生、長野縣
大正一〇年九州帝國大學工科卒業

大下宇陀兒のペンネームを以て文壇に名聲嘖々たる氏は、長野縣上伊那郡に生れ長じて九州帝國大學に於て應用化學科を專攻し、卒業後商工省臨時窒素研究所に勤務し傍ら工學院講師を兼ねて活躍し漸次斯界に認められるに至つた。然るに昭和二年官を辭して閑地に就くや、趣味として探偵小說に筆を染めたのが動機となり、遂に斯道に精進するに至り、續々名作を發表して一躍斯界の寵兒となつた代表的作品には「蛭川博士」「恐怖の齒型」「魔人」「闇の中の顔」「星史郎懺悔錄」等江湖の稱讃を博したるもの多く、科學的探偵小說には他の追隨を許さざる長所を有し斯界に異彩を放つてゐる。趣味として旅行を好み、又有名な愛犬家である。

妻よし子(明治三三年生)

水町　竹三氏　赤坂區青山南町五ノ三五
電話青山三、一一六

正四位、勳二等、功五級、在鄕陸軍中將
明治八年一二月生、佐賀縣
明治四三年陸軍大學校卒業

氏は佐賀縣士族水町高朝氏の三男に生れ、大正九年分家した。夙に軍界に志し陸軍士官學校卒業後明治三二年歩兵少尉に任ぜられ、日露戰役には歩兵第四十七聯隊に屬し中隊長として出征し赫々たる武勳を樹てゝ功五級の金鵄勳章を下賜された。陸軍大學卒業後は直ちに參謀本部附となり、次いで印度駐劄武官として派遣され、歸朝後歩兵第六十一聯隊大隊長、陸軍大學校教官、米國大使館附武官、教育總監部員、第十二師團參謀長、歩兵第五旅團長等に歷任して獨立守備隊司令官に進み、陸軍中將に陞任し資性豪邁濶達にして古武士的の人格者として知られてゐる。

妻タカ(明治二二年生、福岡縣士族唐生惟義長女、日本女子大學卒)長男勝城(同四〇年生、歩兵少尉)長女芙美(同四三年生、お茶ノ水高女卒、三重縣人工學士竹島卓一妻)二女輝子(大正元年生、お茶ノ水高女卒)

滿田　寛一氏　世田谷二ノ一四〇五
(役場)神田區佐久間町三ノ八　電話下谷三九二

正五位、勳四等、法學士、公證人
明治九年八月生、山梨縣
明治三六年東京帝國大學獨法科卒業

都下公證人中屈指の名望家として知られてゐる氏は、山梨縣人向山正明氏の三男に生れ後滿田壽之氏の養子となり其の家督を相續した。大學卒業後直ちに法曹界に入り、明治三十八年判事に任ぜられ横濱區裁判所、東京區及地方裁判所に歷勤して東京地方裁判所部長となり、更に東京控訴院部長を經て大正十三年大審院判事に榮進し、前後二十餘年斯界に活躍して名判官の名を馳せた。昭和三年十月辭任して、現在の地に公證役場を開設し後その家督を相續し六代目當主となつた夙に家業に携はり創業以來の確乎たる信用を失墜せざることを念とし、專ら眞摯着實以てその發展を圖りたる結果、顧客間に倍舊の信用を得ると共に各方面に新規販路除々に拓け、業績年を逐ふて隆盛に赴き今日の盛況を呈するに至つた。氏は性來頗る溫厚にして義俠心に富み、同ぜられた。同四十年渡歐し各國に滯留して研鑽を積み、歸朝後同四十四年醫學博士の學位を授與され、母校に教鞭を執る傍ら大正三年には日本赤十字社の囑託を受け遣佛救護醫長として巴里に派遣され戰傷病者の治療に從事し偉功を樹てた。現時前揭の任に在り名實共に醫學界の第一人者として德望隆々たるものがある。

長女春子(同三八年生、日本橋高女卒)二女富美子(同四〇年生)孫淑子(大正一五年生、二男長長女)同清(養子始長男)

木下　龍夫氏　豐島區西巢鴨三ノ一九〇三

工學士、探偵小說家
明治二九年一一月生、長野縣
大正一〇年九州帝國大學工科卒業
大下宇陀兒のペンネームを以て文壇に名聲嘖々たる氏は、長野縣上伊那郡に生

正四位、勳二等、功五級、在鄉陸軍中將
明治八年一二月生、佐賀縣
明治四三年陸軍大學校卒業
氏は佐賀縣士族水町高朝氏の三男に生れ、大正九年分家した。夙に軍界に志し陸軍士官學校卒業後明治三二年歩兵少尉に任ぜられ、日露戰役には歩兵第四十七聯隊に屬し中隊長として出征し赫々たる武勳を樹てゝ功五級の金鵄勳章を下賜された。陸軍大學卒業後は直ちに參謀本部附となり、次いで印度駐劄武官として派遣

縣人工學士竹島卓一妻)二女輝子(大正元年生、お茶ノ水高女卒)

滿田　寛一氏　世田谷二ノ一四〇五(役場)神田區佐久間町三ノ八　電話下谷三九

正五位、勳四等、法學士、公證人
明治九年八月生、山梨縣
明治三六年東京帝國大學獨法科卒業
都下公證人中屈指の名望家として知られてゐる氏は、山梨縣人向山正明氏の三男に生れ後滿田壽之氏の養子となり其の

家督を相續した。大學卒業後直ちに法曹界に入り、明治三十八年判事に任ぜられ横濱區裁判所、東京區及地方裁判所に歷勤して東京地方裁判所部長となり、更に東京控訴院部長を經て大正十三年大審院判事に榮進し、前後二十餘年斯界に活躍して名判官の名を馳せた。昭和三年十月辭任して、現在の地に公證役場を開設し以て今日に及んでゐる。宗旨は禪宗、趣味は讀書、スポーツ等である。
養母たね(嘉永三年生)妻幾久尾(明治一七年生、石川縣人中川忠順妹、金澤高女卒)長男正彥(同四〇年生)二男文彥(同四四年生)長女悅子(同四一年生)

清水鐵五郎氏　小石川區市兵衛河岸　電話小石川四三〇七

土砂並砂利問屋「土金」店主
明治二八年一月生、東京府

當家は舊幕時代より土砂販賣を業とし斯業界屈指の老舗として信用を博してゐる。氏は東京府人小高藤吉氏の五男として都下に呱々の聲を揚げ、長じて先代清水次郎吉氏の養子となり、後その家督を相續し六代目當主となつた夙に家業に携はり創業以來の確乎たる信用を失墜せざることを念とし、專ら眞摯着實以てその發展を圖りたる結果、顧客間に倍舊の信用を得ると共に各方面に新規販路除々に拓け、業績年を逐ふて隆盛に赴き今日の盛況を呈するに至つた。氏は性來頗る溫厚にして義俠心に富み、同業界の發展、町內の親睦等に貢獻する所多く、其の事業經營の才腕と相俟つて信望を博してゐる。趣味として端唄を好くし、宗旨は眞宗を信仰してゐる。
妻よし(明治三二年生、東京府人富澤四郎吉四女)長男誠一(大正八年生)長女喜美子(同七年生)二女美惠子(同一〇年生)

鹽田　廣重氏　本鄉區弓町一ノ一〇　電話小石川一七一三

從四位、勳三等、醫學博士、東京帝國大學教授、同大學附屬醫院々長、日本醫科大學々長
明治六年一〇月生、京都府
明治三二年東京帝國大學醫科卒業
本邦刀圭界の泰斗たる氏は、京都府士族鹽田重威氏の長男に生れ、大正七年家督を相續した。夙に醫界に志し大學卒業後更に大學院に於て研究を重ね、後母校の助手となり、明治三十五年助教授に任ぜられた。同四十年渡歐し各國に滯留して研鑽を積み、歸朝後同四十四年醫學博士の學位を授與され、母校に教鞭を執る傍ら大正三年には日本赤十字社の囑託を受け遣佛救護醫長として巴里に派遣され戰傷病者の治療に從事し偉功を樹てた。現時前揭の任に在り名實共に醫學界の第一人者として德望隆々たるものがある。
父重威(弘化二年生)妻紀久代(明治一九年生、京都府人齋藤仙也長女)長男輝重(明治四四年生)二男義重(大正三年生)三男直重(同九年生)長女滿壽(明治三七年生、醫學博士服部大作妻)二女正子(大正元年生)三女安子(同一〇年生)四女幸子(昭和二年生)

金森又一郎氏　大阪市住吉區松崎町二ノ七六　電話天王寺八八九

大阪商工會議所議員、大阪電氣軌道、參宮急行電鐵、中勢鐵道各(株)社長、大阪鐵道、大和鐵道、境川運河、東京大宮電氣鐵道各(株)取締役、今里土地(株)監査役、信貴山電鐵(株)相談役、電氣協會理事
明治六年二月生、大阪市
氏は先代金森又兵衛氏の長男として大阪市北區中之島に生れ、明治二十年家督

を嗣いだ。小學校を卒へるや直ちに大阪府廳に給仕として入り、後書記に拔擢された。明治三十年之を辭して關西鐵工所に入社したが、同所が解散の爲め境川運河會社に轉じ、同三十六年支配人に擧げられた。後廣岡惠三、七里淸介諸氏と謀り明治四十三年大阪電氣軌道會社を設立し、取締役兼支配人として同社の發展に努力し、後專務取締役を經て社長に就任した。爾來同社を基礎として着々驥足を伸べ、私設鐵道界の雄として、又立志傳中の俊傑として今日の聲望を博するに至つた。

妻なみ（明治八年生、兵庫縣山本直吉妹）長男乾次（明治三〇年生、工學士）同妻文榮（同三四年生、大阪府關根道三二女）孫茂一郎（大正一一年生、乾次長男）孫和子（同一三年生、同長女）孫順次郎（昭和六年生、同二男）孫方子（同四年生、同二女）長女秋（明治三二年生、福井縣橫井藤四郎長男元一郎妻）

平岡　熙氏　品川區大井元芝八三　電話　高輪四七三二

資產家

安政三年八月生、東京府

當家は代々幕府に仕へたる名門にして氏は先代平岡凞一の長男に生れ、明治十年家督を相續した。夙に工藝を修めて鐵道省に職を奉じ、技師として多年活躍し名聲を博したが、後仕へを辭して事業界に入り、安田、大倉、奈良原諸氏と提携し器械製造業を開始し、各種優秀器械類を製出して着々業績を擧げ、更に車輛製造或は製鐵事業等に手を伸べ、後年に至つて汽車製造會社業務擔當社員兼副社長の要職に擧げられ、或は合資會社敬業社代表社員として敏腕を揮ひ、帝都財界に嘖々たる名聲を馳せた。現時巨萬の財を擁して悠々晩年を送りつゝあるが、各種公共事業に貢獻する所多く、町內屈指の名望家として尊敬されてゐる。

妻よね（萬延元年生、東京府士族、山本長安長女）長男太郎（明治一七年生）同妻勝（同二八年生、岸本順吉二女、お茶ノ水高女卒）二男次郎（同二三年生）同妻悅子（同三六年生、小池英吉二女）長女うた（同一二年生、東京府士族山本榮男妻）二女揚子（同一五年生、同上高橋義雄妻）孫花子（大正八年生、太郎長女）同鈴子（同九年生、同二女）同久次（昭和二年生、次郎長男）

森川　三郎氏　目黑區富士見臺二五五　電話　荏原三〇一二

工學士、日本航空輸送（株）檢査主任

明治二〇年二月生、福井縣

東京帝國大學工科卒業

航空機通として名聲嘖々たる氏は、福井縣下に呱々の聲を揚げた。東京帝國大學工科に學ぶや、孜々として研鑽に勵み優秀の成績を以て卒業した。卒業後直ちに梁瀨自動車會社に入社したが、後陸軍省航空部に奉職し、更に遞信省航空局に轉じ、技師として活躍すると共に航空機に關する凡ゆる研究を積み、實地經驗を重ね、その卓拔なる技倆と深き造詣を以て斯界に名聲を博するに至つた。その後昭和四年日本航空輸送株式會社に聘せられて技術方面を擔當し、現に檢査主任として活躍しつゝある。資性溫厚篤實にして其の練達の技術と相俟つて社內外に信望を博してゐる。宗旨は時宗、趣味は旅行、園藝等である。

妻アサ（明治三六年生、千葉縣人大多和直吉妹、房總高女卒）長男淸明（大正一一年生）長女タツ（昭和二年生）

故子爵澁澤榮一述
青淵論叢
菊版 175頁
定價 ¥1,50
統計資料協會發行

瀧川伊之助氏　大阪市東區北久寶寺町二ノ六〇ノ二　電話　船場三三三四

大阪電氣軌道、參宮急行電鐵各（株）取締役、神戸棧橋、別府觀海寺土地、中勢鐵道各（株）監査役

明治一四年四月生、大阪府

明治三三年大阪高等商業學校卒業

氏は故長谷部辰連氏の三男、同小平氏の實弟である。嚴父は貴族院議員として令名を馳せた。夙に東京帝國大學工科大學に於て專心研鑽に勵み、優秀の成績を以て卒業後直ちに住友合資會社に入り、技師として活躍すること十數年に及び、此の間絕えず研究を重ねて手腕益々冴え大正十四年技師長兼工作部建築課長の要を積みたる後、大正七年歐米諸國の染色業を調査研究し、同八年歸朝後直ちに稻畑染工場に入り、代表社員となつた。爾來同工場經營の衝に當ると共に其の練達の技倆を以て染色に新生面を拓き、現時專務取締役として益々同社の發展に貢獻しつゝある。宗旨は禪宗、趣味はゴルフ等。

次長男）孫和子（同一三年生、同長女）孫順次郎（昭和六年生、同二男）孫方子（同四年生、同二女）長女秋（明治三二年生、福井縣横井藤四郎長男元一郎妻）

平岡　熙氏　品川區大井元芝八三　電話　高輪四七三二

資産家

安政三年八月生、東京府

當家は代々幕府に仕へたる名門にして氏は先代平岡凞一の長男に生れ、明治十

お茶ノ水高女卒）二男次郎（同二三年生）同妻悅子（同三六年生、小池英吉二女）長女うた（同一二年生、東京府士族山本榮男妻）二女揚子（同一五年生、同上高橋義雄妻）孫花子（大正八年生、太郎長女）同鈴子（同九年生、同二女）同久次（昭和二年生、次郎長男）

森川　三郎氏　目黒區富士見臺二五四五　電話　荏原三〇一二

工學士、日本航空輸送（株）檢査主任

行、園藝等である。

妻アサ（明治三六年生、千葉縣人大多和直吉妹、房總高女卒）長男清明（大正一一年生）長女タツ（昭和二年生）

故子爵澁澤榮一述
青淵論叢
菊版 175頁
定價 ¥1,50
統計資料協會發行

瀧川伊之助氏　大阪市東區北久寶寺町二ノ六〇ノ二　電話　船場三三三四

大阪電氣軌道、參宮急行電鐵各（株）取締役、神戸棧橋、別府觀海寺土地、中勢鐵道各（株）監査役

明治一四年四月生、大阪府

明治三三年大阪高等商業學校卒業

氏は先代伊之助氏の長男として大阪に呱々の聲を揚げ、前名を伊之吉と呼び、明治二十五年家督を相續すると同時に伊之助を襲名した。夙に實業界に志して大阪高等商業學校に學び、卒業後大阪電氣軌道會社に入社し、漸次社内の信望を得て取締役に擧げられた。爾來同社經營の樞機に參じてその發展に貢献以て今日に及び、傍ら前掲各社の重役を兼ねて活躍しつゝある。

妻コト（明治二五年四月生、大阪府山口幸太郎妹）長男伊太郎（大正二年八月生）女トミ（同四年一月生）女かず（同一一年一一月生）

長谷部鋭吉氏　兵庫縣川邊郡小濱村米谷、電話寶塚二三一

工學士、住友（資）囑託技師、長谷部竹腰建築事務所（株）常務取締役

明治一八年一〇月生、東京府

明治四二年東京帝大工科建築科卒業

氏は故長谷部辰連氏の三男、同小平氏の實弟である。嚴父は貴族院議員として令名を馳せた。夙に東京帝國大學工科大學に於て專心研鑽に勵み、優秀の成績を以て卒業後直ちに住友合資會社に入り、技師として活躍すること十數年に及び、此の間絶えず研究を重ねて手腕益々冴え大正十四年技師長兼工作部建築課長の要職に拔擢され、後現職に就任した。爾來愈々その敏腕を發揮し、奮鬪以て今日に及んでゐる。

母かね（安政三年生）兄小平（明治一二年生、現戸主）妻喜代子（同三〇年生、東京府士族内海四男太四女）長男連吉（大正八年生）二男俊吉（大正一二年生）長女小枝（同五年生）二女千枝（同一〇年生）

松本　虎吉氏　兵庫縣武庫郡御影町字柳一二四一　電話　御影二九五二

稲畑染工場（株）代表取締役、稲畑商店（株）監査役

明治二三年一二月生、東京府

大正四年京都帝大理科化學科卒業

氏は公爵松方正義氏の男として東京に生れ、後大阪府松本重太郎氏の養子となり大正二年分れて一家を創立した。大學卒業後日本製布會社技師として實地經驗を積みたる後、大正七年歐米諸國の染色業を調査研究し、同八年歸朝後直ちに稲畑染工場に入り、代表社員となつた。爾來同工場經營の衝に當ると共に其の練達の技倆を以て染色に新生面を拓き、現時專務取締役として益々同社の發展に貢献しつゝある。宗旨は禪宗、趣味はゴルフ等。

妻鞠子（明治二八年生、稲畑勝太郎二女）長男重一郎（大正九年生）長女澄子（同七年生）二女惠美子（同一三年生）三女富美子（昭和二年生）四女義子（同五年生）

鈴木　雄輔氏　小石川區原町一二六　電話　小石川五一八

法學士、日本銀行員

明治二五年生、東京府

大正六年東京帝國大學法學部政治科卒業

堅實眞摯なる銀行家として名聲ある氏は、東京府士族鈴木知雄の長男として大東京に呱々の聲を揚げ、大正二年家督を相續した。幼少の頃より頭腦明敏にして學生時代は終始優秀の成績を以て一貫した。學業を終へるや直ちに日本銀行に入り爾來今日に至る迄十數年間孜々として行務に携はり、その熱心と溫厚なる性格加ふるに多年の經驗を積みて得たる事務的才腕は相俟つて行内の信望を高め、前

途有爲の材として各方面より期待せられてゐる。讀書に趣味を有し、經濟其他各方面の書を涉獵し、修養に努めてゐる。

母つね（慶應元年生、東京府人峰村宗助長女）妻玉枝（明治三六年生、醫學博士盤瀨雄一長女、お茶ノ水高女卒）

杉本　直寛氏　下谷區上根岸町八一　電話下谷四五五一

東京乘合自動車(株)常務

明治六年一一月生、石川縣

圓滿なる人格者として聲望隆々たる氏は、石川縣人杉本宗寛氏の長男として金澤市に呱々の聲を揚げた。夙に上京して實業界に投じ大正七年東京乘合自動車株式會社の創立されるや直ちに入社して營業部長の要役に就任した。當初同社の前途に對しては尠なからず憂慮されたるに拘らず、其盛衰に最も密接なる關係に在る營業部長たる氏は、確乎たる成算を以て前途を樂觀し、最も堅實なる營業方針を執つて除々に發展を圖りたる結果、社業日を逐ふて隆盛に赴き、遂に緊要欠く可らざる交通機關として歡迎されるに至つた。大正十四年取締役に擧げられ、現時常務取締役として益々同社に貢献しつつあるが、同社の發展更に之を大にしては帝都交通幾關の發達に臻したる氏の功績は、没す可らざるものとして各方面より賞讃されてゐる。

妻カツ（明治一二年生、埼玉縣人石川豐吉妹）養子登（大正三年生、東京府人高橋靜雄二男）

井上　重喜氏　中野區高根町五　電話四谷二五四

醫學博士、日本醫科大學教授、同大學附屬醫院々長兼外科部長

大正元年東京帝國大學醫科卒業

本邦に於ける外科醫界の權威として令名ある氏は、高知縣の出身である。明治三十七年東京府立第一中學校卒業後、第五高等學校を經て東京帝國大學に進み、學業を卒へるや更に母校附屬醫院近藤外科醫局に入り、助手として研鑽を積み、大正五年同大學法醫學教室に移つて專ら血清化學を研究しその蘊奥を窮めて、大正十年醫學博士の學位を授與された。翌十一年渡歐して更に研究に勵み新知識の吸收に努めて歸朝後、日本醫學專門學校に教鞭を執り、外科醫學講座を擔任した。同十五年同校の大學昇格後も引續いて外科醫學を講じ、後進の指導に努力する傍ら、同大學附屬第一醫院外科部長に就任し多年の蘊蓄を傾注して診療に當り昭和三年同院長に擧げられ、現時前揭の職に在つて活躍しつゝある。その豐富なる學識と老練の技は相俟つて今や名實共に本邦外科醫界の第一人者として推され、加ふるに斯界稀れに見る人格者として崇敬されてゐる。

林　友吉氏　淺草區橋場四一　電話淺草六七六

林商會(名)代表社員

明治一九年六月生、神奈川縣

明治四二年明治大學卒業

セメント防水紙商として夙に人望の聞え高き氏は、神奈川縣人林興子氏の長男として同縣三浦郡長井町に呱々の聲を揚げた。長じて明治大學に學び、孜々研學に勵み優秀の成績を以て卒業するや直ちに井谷商會に入り、實業界活躍の第一歩を踏出した。着實熱誠以て實地經驗を積みたる後、大正三年同商會を退き獨立して林商會を起し、金物ブローカーを專業としたが、同九年セメント防水紙の販賣を兼ね、爾來奮鬪努力以て着々その基礎を築き、次第に斯界に認められるに至つた。昭和二年組織を變更して合名會社とし、大いにその規模を擴張し一大躍進を試みるや、業績頓に向上し各方面に新販路を開拓し以て今日の隆況を呈し、氏は其統帥者として益々健鬪を續けてゐる。

妻初子（東京府人太田源右衞門長女、上野高女卒）男友治、同直次、女政江

東條　卯作氏　麴町區麴町四ノ八　電話九段八四三

東條寫眞館主

米國イリノイス寫眞專門學校卒業

當家の遠祖は代々千葉縣八幡に住み近郷に聞ゆる舊家であつたが、氏の曾祖父東條一堂氏は上京して神田お玉ケ池に漢學塾を開き、門弟を教養する傍ら「論語

功績は頗る顯著である。

千壽　豐彥氏　目黑區下目黑三ノ三三　電話高輪一五五八

東京市役所勤務

明治三二年生、大分縣

中央大學卒業

才腕兼備の人材として前途を囑望されてゐる氏は、千壽吉彥氏の長男に生れた

夙に寫眞を學び明治三十二年仙臺市に寫眞館を開設し、後上京して明治四十二年現地に大武寫眞館を創立した。拔群の技倆を具へて人氣を呼び、明治四十四年以來宮內省御用達を仰付けられ、平和博覽會、獨逸に於て開催せられたる萬國寫眞技術展覽會等に入賞し、或は時事新報社賞を獲得する等光榮を重ねて期界の第一

拘らず、其盛衰に最も密接なる關係に在る營業部長たる氏は、確乎たる成算を以て前途を樂觀し、最も堅實なる營業方針を執つて除々に發展を圖りたる結果、社業日を逐ふて隆盛に赴き、遂に緊要欠く可らざる交通機關として歡迎されるに至つた。大正十四年取締役に擧げられ、現時常務取締役として益々同社に貢献しつつあるが、同社の發展更に之を大にしては帝都交通幾關の發達に臻したる氏の功績は、没す可らざるものとして各方面より

十年醫學博士の學位を授與された。翌十一年渡歐して更に研究に勵み新知識の吸收に努めて歸朝後、日本醫學專門學校に教鞭を執り、外科醫學講座を擔任した。同十五年同校の大學昇格後も引續いて外科醫學を講じ、後進の指導に努力する傍ら、同大學附屬第一醫院外科部長に就任し多年の蘊蓄を傾注して診療に當り昭和三年同院長に擧げられ、現時前掲の職に在つて活躍しつゝある。その豐富なる學識と老練の技は相俟つて今や名實共に本

功績は頗る顯著である。

千壽　豐彦氏　目黑區下目黑二ノ三三　電話　高輪一五五八

東京市役所勤務

明治三二年生、大分縣

中央大學卒業

才腕兼備の人材として前途を囑望されてゐる氏は、千壽吉彦氏の長男に生れた吉彦氏は大分縣士族千壽萬藏氏の長男にして夙に實業界に雄飛し、新別府溫泉土地株式會社々長として令名を馳せ、又攻玉社後援會幹事等に選ばれ各方面に活躍しつゝある。氏は學業を卒へるや直ちに東京市役所に職を奉じ、現時その水道課に勤務中であるが、資性溫厚にして犧牲奉公的精神に富み、事に當つては着實熱心毫も他を顧みず、而も責任觀念强く、今や多年の經驗を積んで事務的手腕も亦冴え、所内の聲望隆々たるものがある。

妻松子（明治三七年生、東京女子美術卒）長男康夫（昭和三年生）長女榮子（同二年生）

大武　顯氏　麹町區有樂町一ノ三　電話銀座四五七

大武寫眞館主

明治三八年生、東京市

先考大武文夫氏は山形縣人大武可通氏の長男として同縣東村山郡天童町に生れ

としたが、同九年セメント防水紙の販賣を兼ね、爾來奮鬪努力以て着々その基礎を築き、次第に斯界に認められるに至つた。昭和二年組織を變更して合名會社とし、大いにその規模を擴張し一大躍進を試みるや、業績頓に向上し各方面に新販路を開拓し以て今日の隆況を呈し、氏は其統帥者として益々健鬪を續けてゐる。

妻初子（東京府人太田源右衛門長女、上野高女卒）男友治、同直次、女政江

東條　卯作氏　麹町區麹町四ノ八　電話九段八四三

東條寫眞館主

米國イリノイス寫眞專門學校卒業

當家の遠祖は代々千葉縣八幡に住み近郷に聞ゆる舊家であつたが、氏の曾祖父東條一堂氏は上京して神田お玉ケ池に漢學塾を開き、門弟を教養する傍ら「論語知言」を始め四十餘種の書を著はして鴻儒の名を海内に謳はれた。其子方庵も亦遺業を繼ぎ、その嗣子永胤氏は學習院教授、東京帝國大學講師等に聘せられて教育界に貢献する所甚大であつた。氏は永胤氏の三男にして夙に寫眞業に志し、米國に航して學理を研究し實地修練を積んで歸朝後直ちに開業した。爾來一意專心斯界に邁進して名聲を博し、業界の第一人者として推賞されるに至つが、性來公共心に富み名利に恬淡なる氏は徒らに斯技を以て產を興すことを望まず、寧ろ斯技の發達普及を圖り斯業界に貢献することを以て理想とし、或は秘訣を公開して業界の發達に資し或は天然色寫眞の實用化を圖り、或は附屬學院を開いて寫眞師の養成に努め、專ら斯界の爲めに盡瘁以て今日に及んでゐる。又此の間各種展覺會競技會等の審査員に選ばれ、或は大正天皇御大葬奉仕員に擧げられる等、その

夙に寫眞を學び明治三十二年仙臺市に寫眞館を開設し、後上京して明治四十二年現地に大武寫眞館を創立した。拔群の技倆を具へて人氣を呼び、明治四十四年以來宮内省御用達を仰付けられ、平和博覽會、獨逸に於て開催せられたる萬國寫眞技術展覽會等に入賞し、或は時事新報社賞を獲得する等光榮を重ねて斯界の第一人者に推され、又東京寫眞師組合副組合長に選ばれ業界に貢献する所甚大であつた。氏はその長男に生れ、幼少の頃より親しく父の薫陶を受け、寫眞學校を卒業後も或は父の教へを受け、或は專門書を繙き、只管技術の練磨に勵み、傍ら父を翼けて家業に携はつてゐたが、昭和五年十一月父の他界後はその遺業を繼いで館主となり、奮鬪以て今日に及んでゐる。既に多年の研究練磨を經てその卓拔なる技倆を認められ、顧客の信望厚く、同業界にも亦名聲高く、前途春秋に富んで一大飛躍を期待されてゐる。

沖　鳳道氏　淺草區松葉町七五

本覺寺住職

明治二七年生、東京市

俗世の名利に超然として只管法の道に精進しつゝある氏は、都下に呱々の聲を揚げ、大正八年師跡を襲ふて法燈を繼ぎ

以て今日に及んでゐる。號を日限と謂ひ夙に早大に於て文學宗教哲學等を修め、卒業後は師の下に在つて修業を積む傍ら佛教を中心とせる凡ゆる宗教に關する文献を渉獵して智を磨き徳を養ひ、孜々として是れ勗め毫も他を顧みるの暇なき研鑽を續けた。性來慈悲心に富み犧牲奉仕の念燃ゆるが如く、衆生一視同仁の襟度を以て濟度に當り教化に努めること既に多年、壇徒は勿論廣く一般に徳望を維ぎ、同宗界に重んぜられ、今や苦行を經て徳益々高く、知彌々廣く、行ひ亦堅く、都下宗教界に令名嘖々たるものがある。

渡邊平次郎氏　日本橋區蠣殼町二ノ一九、電話浪花四〇三三
日鮮興業(株)取締役、全國藝妓屋同盟會本部會長、正交會々長、葭町藝妓屋組合長、立憲民政黨東京支部幹事
明治二年一二月生、新潟縣

氏は長岡藩士渡邊龜之丞氏の二男として新潟縣下に呱々の聲を揚げ、後渡邊駒吉氏の養子となり、明治四十年その家督を相續した。夙に青雲の志を抱いて上京し、實業界に投じて敏腕を揮ふこと多年に亘り、大いに産を興した。性來公共奉仕の念に富み、政治に興味を有し、曩に東京府會議員に選ばれ同參事に擧げられるや、一身一家の得喪を毫も顧みずして府政の刷新向上に努め、顯著なる功績を樹てたが、現時も尚ほ民政黨東京支部幹事として同黨の勢力扶植の第一線に活躍しつゝある。此の外或は日鮮の融合に貢献し、或は藝妓屋業者の爲めに盡瘁する等、氏の公共的功績は實に沒すべからざるものにして、各方面に隆々たる聲望を馳せてゐる。

妻たか(明治一〇年生、養父女)長男政雄(同三八年生、藝名清元靜榮太夫)長女とり(大正二年生)

影山　佳雄氏　葛飾區柴又二ノ一五二
顯經寺住職
慶應三年四月生、島根縣

道徳堅固の名知識として都下宗教界に名望隆々たる氏は、霞庵と號し、夙に僧籍に入り研鑽に勵むこと多年、次第にその人格手腕を認められて要職に推される に至つた。立正大學理事、福田會理事長或は宗會議員、會計監査役、宗務所長、大本山法華寺執事、同宗審査員等に歴任して宗派の布教發展に貢献したる、顯著なる功績は沒す可らざるものとして賞揚されてゐる。宗祖日蓮上人に私淑して不撓不屈の意氣に燃え「國家の眼目となり國家の大船となる」理想の實現に身を挺し、宗祖の訓へを體して衆生の濟度に當らんとする勇猛精進の徳は、夙に普く斯界に認められ尊崇の的となつてゐる。現時題經寺住職として行ひ高く、教化事業等に携はつて益々活躍しつゝある。

加藤　藤七氏　澁谷區圓山六二　電話青山一二三二
澁谷三業組合(株)取締役、澁谷待合業組合長
元治元年一二月生、東京府

顯著なる功績を以て同業界に尊敬され澁谷華街の長老として令名嘖々たる氏は大鐘氏の息に生れ後加藤家の養子となり其の家督を相續した。明治四十五年日本橋に待合業を開始したが、機を見るに敏なる氏は帝都郊外の著しき發展に着眼し特に澁谷町の將來有望なるを看破して同町内に三業地認可の猛運動を起し、東奔西走遂に當局の認可を得るや率先して同地に待合「茂の家」を創設した。是れ實に澁谷花柳界の草分けである。爾來家業の隆盛に努めると共に同業者の發展に盡瘁すること多年、澁谷待合業組合の設けられるやその組合長に推されて益々組合員の福利增進に意を注ぎ、又大正八年澁谷三業組合株式會社の創立と同時に取締役に擧げられ、以て今日に及んでゐる。一方町内の發展にも亦常に第一線に立つて活躍し、當町屈指の功勞者として信望を博してゐる。趣味は旅行等。

妻ミヨ(養父長女)

加藤久米四郎氏　芝區白金猿町三三　電話高輪四八二五
正五位、衆議院議員、拓務政務次官
明治一七年一〇月生、三重縣
明治四一年日本大學卒業

政界に濶歩する事多年現時政務次官と嘉永五年二月生、東京市

彫刻界の元老として名聲嘖々たる氏は中島兼松氏の二男として下谷區北清島町に呱々の聲を揚げ、本名は幸吉と云ひ光雲は其號である。祖先は代々因州藩に仕へたが祖父中島富五郎氏の代より町人となり、氏が生誕當時は家運微々として振はなかつた。氏は十二歳の時當時都下屈指の彫刻師として名聲を地せる高村東

催に際し、氏は師匠東雲氏の依囑を受けて「白衣觀音」を出品するや、その卓拔なる技倆は認められて最高賞たる龍紋賞を授與され、爾來彫刻家としての氏の手腕は次第に各方面に認められるに至つた續いて同年末當時京橋區築地に獨逸人の經營せる著名の商館「アーレンス商會」の依頼に依り、「唐子が器物を差上げてゐる形の洋燈臺」の製作を引受け、約一ケ

長、立憲民政黨東京支部幹事
明治二年一二月生、新潟縣

氏は長岡藩士渡邊龜之丞氏の二男として新潟縣下に呱々の聲を揚げ、後渡邊駒吉氏の養子となり、明治四十年その家督を相續した。夙に靑雲の志を抱いて上京し、實業界に投じて敏腕を揮ふこと多年に亘り、大いに產を興した。性來公共奉仕の念に富み、政治に興味を有し、曩に東京府會議員に選ばれ同參事に擧げられるや、一身一家の得喪を毫も顧みずして

籍に入り研鑽に勵むこと多年、次第にその人格手腕を認められて要職に推される に至つた。立正大學理事、福田會理事長或は宗會議員、會計監査役、宗務所長、大本山法華寺執事、同宗審査員等に歷任して宗派の布敎發展に貢献したる、顯著なる功績は沒す可らざるものとして賞揚されてゐる。宗祖日蓮上人に私淑して不撓不屈の意氣に燃え「國家の眼目となり國家の大船となる」理想の實現に身を挺し、宗祖の訓へを體して衆生の濟度に當

西走遂に當局の認可を得るや率先して同地に待合「茂の家」を創設した。是れ實に澁谷花柳界の草分けである。爾來家業の隆盛に努めると共に同業者の發展に盡瘁すること多年、澁谷待合業組合の設けられるやその組合長に推されて益々組合員の福利增進に意を注ぎ、又大正八年澁谷三業組合株式會社の創立と同時に取締役に擧げられ、以て今日に及んでゐる。一方町內の發展にも亦常に第一線に立つて活躍し、當町屈指の功勞者として信望

を博してゐる。趣味は旅行等。
妻ミヨ(養父長女)

加藤久米四郎氏　芝區白金猿町三三　電話高輪四八二五

正五位、衆議院議員、拓務政務次官
明治一七年一〇月生、三重縣
明治四一年日本大學卒業

政界に濶步する事多年現時政務次官として令名赫々たる氏は、加藤伊三郎氏の實弟にして三重縣下に呱々の聲を揚げ、明治四十年分れて一家を樹てた。學業を卒へるや育英事業に投じ、多年明治大學幹事等を勤めてゐたが、後內務大臣秘書官となり、或は明治神宮造營局參事等に任ぜられた。夙に政界に志し、三重縣第一區より出馬し代議士に選ばれること五回、政友會錚々の政客として名聲を博し昭和二年田中內閣成立に際しては內務參與官に擧げられた。一方實業界にも驥足を伸べ、日本發明製作會社々長、日本特許インキ株式會社取締役等として敏腕を揮つた。犬養內閣組織されるや拓務政務次官に拔擢され、爾來その任に在つて活躍してゐる。

高村　光雲氏　本鄕區駒込林町一五五　電話小石川一一八二

從三位、勳二等、帝室技藝員、東京美術學校名譽敎授、國賓保存會委員、彫國家

嘉永五年二月生、東京市

彫刻界の元老として名聲嘖々たる氏は中島兼松氏の二男として下谷區北淸島町に呱々の聲を揚げ、本名は幸吉と云ひ光雲は其號である。祖先は代々因州藩に仕へたが祖父中島富五郎氏の代より町人となり、氏が生誕當時は家運微々として振はなかつた。氏は十二歲の時當時都下屈指の彫刻師として名聲を馳せたる高村東

雲氏の下に業務見習として入り、明治七年三月まで滿十一ヶ年間孜々として修業に勵み、更にその後も師の下に在つて指導を受け研鑽に勵んだ。此の間東雲氏の實姉高村悅女史の養子となり、高村姓を冒し、又之より先き師の許しを得て前名幸吉を改めて光雲と號した。其の後明治十年四月、本邦最初の內國勸業博覽會開

催に際し、氏は師匠東雲氏の依囑を受けて「白衣觀音」を出品するや、その卓拔なる技倆は認められて最高賞たる龍紋賞を授與され、爾來彫刻家としての氏の手腕は次第に各方面に認められるに至つた續いて同年末當時京橋區築地に獨逸人の經營せる著名の商館「アーレンス商會」の依賴に依り、「唐子が器物を差上げてゐる形の洋燈臺」の製作を引受け、約一ヶ年間心血を濺いで完成して以來、外國商館よりの注文漸增して海外にも漸く名聲を認められるに至つた。然れども氏は毫も技術に慢ずることなく益々研鑽に勵む內、幾何もなく獨乙公使館の某外人より「純日本式の童貞童女の併立せる形の洋燈臺」の注文を受け、氏は殆んど自己のみの考案に依つて、眞に日本式娘を表現し又童男を如實に表現することを苦心研究し、之を完成して外人の歡迎を受け益々名聲を博した。明治十二年九月恩師東雲氏の病歿後、氏はその遺業を守り代表者たる地位に在つて發展を圖り、恩師の名譽を傷けざることに最も意を注ぎ、各方面よりの注文に對しては師の生前に增して入念に仕上げることに努め、以て信用の向上を圖つたが、後兄弟子を表面に立てゝ活躍せしめ、氏は其の下に在つて之を援けつゝ、適當の時機を選んで之を

辭し、獨立して壽町に開業し、後淺草小島町に轉じ更に下谷區西町に移つた。

爾來刻苦勵精以て斯界に邁進し、自己の技を磨くと共に斯界の發達に貢献し以て今日に及んでゐる。此の間に於ける製作品は何れも斯界に認められ普く江湖の稱讃を博したる逸品にして、御大典用として宮内省の御下命に依り謹製したる「郭子儀の像」宮内省所藏の「矮鷄の置物」宮中貴婦人化粧間の御裝飾として用ひられてゐる「狆の置物」或は大正九年日佛交換展に出品して好評を博したる木彫の「鹿」、或は上野公園に偉風堂々として建

製作に丹精しつゝある光雲先生

つ「西鄕南洲翁の銅像」及び二重橋前の雄姿颯爽たる「楠公銅像」或は明治二十六年シカゴ萬國博覽會に出陳して名聲を博したる木彫の「猿」善光寺山門に安置されてある「三寶荒神の像」、羅漢寺の「五百羅漢」、本願寺淺草別院本堂の「蟇股」、淺草觀音境内の「木鼻の經堂」神田明神の「神馬」王子權現本堂の「右側障子」更に近年の作としては昭和三年作の「不動三尊の像」及「福は内の圖」其の他當代彫刻界の代表的名作として定評あるものゝみにても殆んど枚擧に遑がない。

田宮惣左衛門氏 荒川區日暮里四ノ三 電話下谷五六八八

明治二八年一二月生、東京府

當家は遠く元祿年間より代々當地に住み豪農として近鄕に聞え、名主を勤めた名門である。氏は先代惣左衛門氏の四男に生れ美四瑠と呼んだが、大正十一年家督を相續すると同時に歷代當主名たる惣左衛門を襲名した。父祖以來常に當地方の發展に貢献し、公共事業、慈善事業等に盡して近隣の德望を負ふてゐるが、氏も亦資性溫厚篤實にして公共に奉ずる念厚く、日暮里町の發展に對しては常に第一線に立つて活躍し、夙に聲望隆々たるものがある。昭和四年衆望を負ふて日暮里町長に就任するや、益々同町の爲めに盡瘁し、一家一身の得失に超然たる態度を以て町治に當り、其の顯著たる功績は沒す可らざるものとして町内の尊敬を受けてゐる。宗旨は日蓮宗趣味は謠曲等である。

母ケイ(安政三年生)妻久子(明治三八年生、冠權四郎三女)長女まさ(大正八年生)

田丸市衛門氏 澁谷町豐澤四三 電話高輪三六九三

澁谷惠比壽郵便局長

明治二六年生、東京府

青山學院卒業

當家は澁谷町内屈指の地主及家主として知られ、又父祖以來町内の發展に顯著なる功績ある名門として普く町民の尊敬を受けてゐる。氏は往年澁谷町會議員として或は區長代理其他の公職に在つて町自治界に盡瘁したる田丸銀三郎氏の長男にして、夙に青山學院に學び、卒業後家庭に於いて父を翼け、現時前記の職に在つて活躍しつゝある。資性溫厚篤實にして人格崇高、加ふるに父祖に似て公共奉仕の念に富み、陰に陽に町内の爲めに貢献する所尠なからず、借地人及借家人等に對しては溫情主義を以て臨み、各方面に信望を博してゐる。

妻テツ(明治三六年生、東京鳥居庄太郎二女、佐藤高等女學校卒業)

岡田 意一氏 大阪府泉北郡濱寺下町 八〇七電話濱寺二一一

從四位、勳四等、法學士、高野山電氣鐵道(株)代表取締役、南海鐵道(株)社長

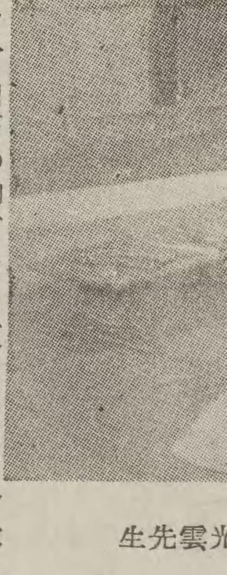
明治一四年二月生、栃木縣

明治四〇年東京帝大法科卒業

氏は栃木縣岡田眞三郎氏の二男、同島中里介山氏府下西多摩群三田村文士

明治一四年生、東京市

當代の代表的巨篇「大菩薩峠」の著者として、其の文名は天下に洽く文壇に獨歩氏はの境地を占めてゐる。幼少の頃より文學を好み、夙に筆を以つて起つたが、島縣庄原町の出身である。鄕里の中學校を經て第一高等學校に學んだが病氣の爲め學業を拋ち筆を以つて起つに至つた。その出世作たる「出家とその弟子を」發表するや、江湖の稱讃湧くが如く、不世出の天才として一躍文壇の寵兒となり、續いて「歌はぬ人」、「愛と認識の出發」、「布施太子の入山」、「靜思」



光雲先生

して宮內省の御下命に依り謹製したる「郭子儀の像」宮內省所藏の「矮鷄の置物」宮中貴婦人化粧間の御裝飾として用ひられてゐる「狆の置物」或は大正九年日佛交換展に出品して好評を博したる木彫の「鹿」、或は上野公園に偉風堂々として建

み豪農として近鄉に聞え、名主を勤めた名門である。氏は先代惣左衞門氏の四男に生れ美四瑠と呼んだが、大正十一年家督を相續すると同時に歷代當主名たる惣左衞門を襲名した。父祖以來常に當地方の發展に貢獻し、公共事業、慈善事業等に盡して近隣の德望を負ふてゐるが、氏も亦資性溫厚篤實にして公共に奉ずる念厚く、日暮里町の發展に對しては常に第一線に立つて活躍し、夙に聲望隆々たるものがある。昭和四年衆望を負ふて日暮

なる項紐ある各門として普く町民の尊敬を受けてゐる。氏は往年澁谷町會議員として或は區長代理其他の公職に在つて町自治界に盡瘁したる田丸銀三郎氏の長男にして、夙に靑山學院に學び、卒業後家庭に於いて父を翼け、現時前記の職に在つて活躍しつゝある。資性溫厚篤實にして人格崇高、加ふるに父祖に似て公共奉仕の念に富み、陰に陽に町內の爲めに貢獻する所尠なからず、借地人及借家人等に對しては溫情主義を以て臨み、各方面に信望を博してゐる。

妻テツ（明治三六年生、東京鳥居庄太郎二女、佐藤高等女學校卒業）

岡田　意一氏　大阪府泉北郡濱寺下町八〇七電話濱寺二一一

從四位、勳四等、法學士、高野山電氣鐵道(株)代表取締役、南海鐵道(株)社長

明治一四年二月生、栃木縣

明治四〇年東京帝大法科卒業

氏は栃木縣岡田眞三郎氏の二男、同畠太郎氏の實弟にして、同縣下に呱々の聲を揚げ、大正九年分家した。夙に東京帝國大學法科に學び、卒業後高文試驗に合格するや直ちに鐵道省に奉職し、勤直を以て知られ、漸時累進して監督局長に任ぜられた。大正十三年五月鐵道省を辭して南海鐵道會社に入り、其の專務取締役に選ばれ、熱心に同社の發展に努力すること多年に及び、株主、從業員の信望を一身にあつめ遂に推されて昭和六年渡邊千代三郎氏の後を享けて社長となつた。現時前揭兩社の重役を兼ね、關西に於ける私營鐵道界の重鎭として名聲を博してゐる。

妻ゆき（明治一四年生、東京府三浦忠姉）男信之（同四二年生）男公意（大正九年生）女靜香（明治四四年生）女禮子（大正四年生）

中里　介山氏　府下西多摩群三田村

文士

明治一四年生、東京市

當代の代表的巨篇「大菩薩峠」の著者として、其の文名は天下に洽く文壇に獨步氏はの境地を占めてゐる。幼少の頃より文學を好み、夙に筆を以つて起つたが、其著作は容易に認められず多年逆境に彷徨して辛酸具さに嘗めた。「大菩薩峠」を發表するに及んでも、當初は毀譽褒貶紛々たるものがあつたが、氏は之に超然として筆を進め、遂に江湖の賞讃を博するに至つた。「大菩薩峠」はその構想の雄大なる點に於て前代にその比を見ず、凡ゆる人物を拉し來つてその性格を躍如たらしめる巧妙老練なる筆致に於て將に當代隨一、而も氏は正義人道に根低を置いて凡ゆる時代相を畫き、社會相を寫し、人心の機微を穿ち、以て勸善懲惡破邪顯正を訓へんとする高遠の理想に立脚し、畢生の事業として其完璧に邁進しつゝある。

倉田　百三氏　牛込區柳町二二

文士、雜誌「生活者」主筆

明治二四年二月生、廣島縣

文壇の鬼才として令名嘖々たる、氏は廣島縣庄原町の出身である。鄉里の中學校を經て第一高等學校に學んだが病氣の爲め學業を拋ち筆を以つて起つに至つた。その出世作たる「出家とその弟子を」發表するや、江湖の稱讃湧くが如く、不世出の天才として一躍文壇の寵兒となり、續いて「歌はぬ人」、「愛と認識の出發」、「布施太子の入山」、「靜思」、「轉身」、「處女の死」等の力作を世に送つて洛陽の紙價を高からしめた。文才豐富にして創作に戲曲に、論說に、獨自の境地を開拓して文壇に濶步すること既に多年、今や益々圓熟の境に入り筆勢彌々冴えて讀者を魅了し、現時雜誌「生活者」を主宰する外各新聞、雜誌に筆を執り、名作を發表し依然として文壇の王座に在つて從橫に活躍してゐる。

松本　晃氏　麻布區市兵衞町一ノ六電話赤坂一六一三

法學士、三菱商事(株)重油部主任

明治二八年四月生、東京市

大正八年東京帝大法科政治科卒業

先考松本安正氏は行政裁判所評定官等を勤めて夙に令名を馳せた。氏はその長男として赤坂區に呱々の聲を揚げ、幼少の頃より秀才の譽れ高く、第一高等學校を經て東京帝國大學に進み、拔群の成績を以て大學を卒業したが、在學中既に文官高等試驗に合格して益々其鬼才を謳はれた。卒業後直ちに三菱合資會社に入社し、精勵恪勤して漸次重用せられ、大正十三年三菱商事株式會社に轉じて業務部投資監督に擧げられ、後燃料部に移り、更に昭和四年七月重油部主任に拔擢せられ、現にその職に在つて活躍しつゝある才氣煥發にして進取の意氣に富み、前途尙ほ春秋多く一大飛躍を期待されてゐる

妻孝子（明治三三年生、東京府人松崎靖一四女、三重縣立松坂高女卒）長男彌太郎（大正一四年生）長女節子（昭和三年生）

松浦　晋氏　小石川區茗荷谷四九　電話小石川三一〇〇

文部省社會教育局勤務

明治三五年生

上智大學獨逸文科卒業

新進有爲の材として大いに前途を囑望されてゐる氏は、九州帝國大學總長松浦鎭次郎氏の長男である同氏は夙に官界に雄飛し文部大臣秘書官、文部書記官等に歷任し、法學博士の學位を受け、現時九洲大學總長として教育界に嘖々たる名聲を馳せてゐる。氏も亦學を卒へるや直ちに官界に入り、現時文部省社會教育局に在つて活躍しつゝあるが、性來頭腦明晰にして研究心に富み、文部省に奉職後も勤務の餘暇に絕えず研究し其熱心なる學究的態度は普く省內に認められ、加ふるに資性溫厚にして犧牲奉公の念厚く、稀れに見る高潔なる人格者として信望を博し、將來の大成を期待されてゐる。

五木田次郎吉氏　深川區大島町一六　電話本所一九七一

深川浦漁業組合長、深川八幡宮氏子總代前東京市會及府會議員、前深川區會議員元治元年一月生、千葉縣

自治界の功勞者として名望隆々たる氏は、千葉縣人五木田源太氏の三男として同縣山武郡芝山村に呱々の聲を揚げた。夙に上京して實業界に投じ帝都近海に於ける漁撈業の不振を慨して決然奮起し、先づ淺草海苔の養殖に先鞭を着け、萬難を排して不撓不屈遂に功を奏し一般に普及の素因を作つた。その後明治十九年深川浦漁業組合を組織して組合長に推され、業界の發展に貢獻する所尠なからず、創立以來今日に至るまで引續き組合長の任に在る。又日本橋魚市場組合にも盡瘁し多年同組合取締役兼組合長として組合員の福利增進に貢獻した。一方夙に府市政に參與し、選ばれて市會議員たること一期、府會議員たること三期、深川區會議員たること實に六期に及び、直接間接に大東京の發展と市民の福祉增進に臻したる功績は絕大にして、各方面より尊敬されてゐる。趣味として俳句を好み、二甫の雅號を以て俳友間に知られてゐる。

遠藤　敬璋氏　小石川區八千代町一五　電話小石川七六四三

製本業獻文堂主

都下製本業界に聲名隆々たる氏は、朝鮮慶尙南道梁山郡上北面の出身である。父は博學の譽れ高き儒者であつたが、氏は夙に實業界雄飛を志して內地に轉じ、明治四十一年福岡市の貿易商會に業務見習として入り、後上京して日本橋區北島町の長倉製本所に勤めた。是れ氏が製本業界に起つ第一歩であつた。爾來孜々として職務に精勵し、製本の技術修得に努力すること實に十餘年に及び、悉く斯技を會得し經營に確乎たる自信を得て大正十四年神田區淡路町に獨立開業した。着實を旨とし信用を重んずる營業方針と多年の經驗を經たる優秀なる技術は相俟つて人氣を呼び、業績日に隆々として榮え忽ち斯界に擡頭し、昭和二年現所に移轉し業務を擴張して以來益々隆況を呈し、專ら講談社出版物の製本に從事して業礎

科學的管理法を專攻し、同大學卒業後歐米各國を視察して大正十一年歸朝した。歸朝後再び藤倉電線に入社し顧問に擧げられたが、同十二年協調會產業能率研究所囑託となり、更に同年荒木能率研究所を創立してその所長となり、爾來專ら能率の研究に努力する傍ら星製藥、朝日スレート、日本製布、大江印刷等各社の能率顧問に聘せられ、或は慶應義塾大學內

躍し、後東京帝國通信社重役に擧けられ斯界に名聲を謳はれるに至つた。烱眼敏才にして凡ゆる方面に曉通し、文章に巧みにして「人の今昔」を始ゆ洛陽の紙價を高からしめたる好著十數種に達し、文名嘖々たるものがある。現時前揭の職に在つて活躍の傍ら、神奈川縣茅ケ崎に於て園藝を兼營してゐる。趣味は讀書、園藝等。

靖一四女　三重縣立松坂高女卒）長男彌太郎（大正一四年生）長女節子（昭和三年生）

松浦　晋氏　小石川區茗荷谷四九　電話小石川三一〇〇

文部省社會教育局勤務
明治三五年生
上智大學獨逸文科卒業

新進有爲の材として大いに前途を囑望されてゐる氏は、九州帝國大學總長松浦鎭次郎氏の長男である同氏は夙に官界に雄飛し文部大臣秘書官、文部書記官等に

聲を揚げた。夙に上京して實業界に投じ帝都近海に於ける漁撈業の不振を慨して決然奮起し、先づ淺草海苔の養殖に先鞭を着け、萬難を排して不撓不屈遂に功を

自治界の功勞者として名望隆々たる氏は、千葉縣人五木田源太氏の三男として同縣山武郡芝山村に呱々の

遠藤　敬　麻布區　電話小石川七六四三

製本業献文堂主

都下製本業界に聲名隆々たる氏は、朝鮮慶尙南道梁山郡上北面の出身である。父は博學の譽れ高き儒者であつたが、氏は夙に實業界雄飛を志して內地に轉じ、明治四十一年福岡市の貿易商會に業務見習として入り、後上京して日本橋區北島町の長倉製本所に勤めた。是れ氏が製本業界に起つ第一歩であつた。爾來孜々として職務に精勵し、製本の技術修得に努力すること實に十餘年に及び、悉く斯技を會得し經營に確乎たる自信を得て大正十四年神田區淡路町に獨立開業した。着實を旨とし信用を重んずる營業方針と多年の經驗を經たる優秀なる技術は相俟つて人氣を呼び、業績日に隆々として榮え忽ち斯界に擡頭し、昭和二年現所に移轉し業務を擴張して以來益々隆況を呈し、專ら講談社出版物の製本に從事して業礎全く成り、更に昭和三年同町十五番地に第二工場を設置し、現時使用人二十餘名を擁して彌々斯界に躍進しつゝある。資性溫厚にして情誼に厚く公共心に富み、業界は勿論一般に信望が頗る高い。

荒木東一郎氏　澁谷區初臺七一九（事務所）芝公園協調會館　電話芝一一三三

荒木能率研究所長
明治二八年一月生、東京市
大正五年東京高工應用化學科卒業

能率研究の泰斗たる氏は、曾つて世界一周競爭に東行選手となり、三十三日の世界的記錄を作つて優勝し、普く江湖にその名聲を知られてゐる。故荒木寬大氏の長男として都下に生れ、神田尋常小學校、府立第一中學校を經て東京高等工業學校に學び、卒業後藤倉電線株式會社に入社して同社研究部主任となり、大正八年渡米しオハイオ州アクロン大學に於て科學的管理法を專攻し、同大學卒業後歐米各國を視察して大正十一年歸朝した。歸朝後再び藤倉電線に入社し顧問に擧げられたが、同十二年協調會產業能率研究所囑託となり、更に同年荒木能率研究所を創立してその所長となり、爾來專ら能率の研究に努力する傍ら星製藥、朝日スレート、日本製布、大江印刷等各社の能率顧問に聘せられ、或は慶應義塾大學內產業研究所、及び日本大學等の講師となり、現時東京護謨工業、千代田機械製靴淺野セメント、日本鋼管、東洋タイプライター、横濱船渠等の各社顧問として能率增進に貢獻しつゝある。著書には「歐米巡り夢の旅」「三十三日世界一週」等がある。

妻俊子、長女敬子、二女信子。

澤本　孟虎氏　赤坂區青山南町三ノ三　電話青山一一二〇八

青山書院（資）代表社員、大阪帝國通信社（株）監査役、臺灣總督府囑託
明治六年一〇月生、高知縣

操觚界並に出版界に敏腕を揮ふこと多年、隆々たる聲明を馳せてゐる氏は、高知縣人澤本楠彌氏の長男として同縣下に生れたが、後分れて一家を樹て、前名寬治を現名に改めた。夙に操觚界に投じ報知新聞時事新報等の記者として盛んに活躍し、後東京帝國通信社重役に擧けられ斯界に名聲を謳はれるに至つた。烱眼敏才にして凡ゆる方面に曉通し、文章に巧みにして「人の今昔」を始ゆ洛陽の紙價を高からしめたる好著十數種に達し、文名嘖々たるものがある。現時前揭の職に在つて活躍の傍ら、神奈川縣茅ヶ崎に於て園藝を兼營してゐる。趣味は讀書、園藝等。

妻たか（明治二三年生）、男孟彥（同三一年生）、同妻佳子（同三一年生、永井源太郎二女）男健三（同三九年生、男光男（大正五年生）長女信子（明治三四年生、伏見寬次妻）孫謙一（大正一二年生）同牧子（同一四年生）

佐久間久夫氏　豐島區池袋五ノ二八一　電話大塚七二七

佐久間製菓（株）專務、
明治三六年一月生、東京府

都下製菓業界に確乎たる地歩を占めてゐる佐久間製菓株式會社は、先代佐久間惣治郎氏の創立に係り、既に多年の歷史を有し信用を博してゐる。氏はその長男に生れ、夙に家業に携はり父を翼けて業績の向上に努力し、大正十四年父の他界後直ちに家督を相續すると共に其の遺業を繼承した。先代は千葉縣より出でゝ三港堂を經營し、後佐久間製菓株式會社を

創始し佐久間式ドロップ製造元として名を揚げ、苦闘努力以て今日の隆盛に赴きたる立志傳中の人物であるが、氏も亦才氣煥發にして闘志燃ゆるが如く、不撓不屈の忍耐力に富み、滿々たる覇氣を藏し尠なからず將來の大成を期待されてゐる

母さく（明治二六年生）妻さと（同四四年生）長男惣一郎（昭和三年生）

道家精市氏　日本橋區小傳馬町三ノ二　電話浪花 吾〇七三、吾〇七三

岡谷(資)東京金物部主任、金物同業組合會計係

明治一八年生、岐阜縣

眞摯なる實業家として同業界に聲望隆々たる氏は、明治三十二年十四歳の若冠を以て岡谷商店に入つて以來、既に三十餘年間一意專心同店の發展に盡し以て今日に及んでゐる。同店は名古屋に本店を有し、日本橋、京橋、大阪西區西長堀等に支店を置き、金物部、機械部、貿易部鐵部等に分れて商務隆盛を極めてゐる。當初は岡谷惣助氏の個人經營であつたが明治四十三年合資組織に變更された。此の間着實熱誠を以て終始一貫同店の業績向上に献身的努力を續けたる氏の功績は絶大にして、夙に店主に認められ、大正十五年東京金物部主任に拔擢された。此の重任に就くや氏は益々敏腕を發揮して興隆に努め、今や同店内は勿論、普く同業界に信望を博するに至つた。資性謹直にして公共奉仕の念に富み、士魂商才の典型的人物として好評を博してゐる。

三井八郎右衛門氏　麻布區今井町四二　電話赤坂五三一

從三位、勳一等、男爵、三井(名)社長

安政四年一月生

藤原道長の後裔信生は三井姓を名乘つた、是れ當家の鼻祖である。その十二世の孫出羽守乘定は佐々木滿經の二男高久を養嗣としたるため、以後源姓に改められた、高久は江州蒲江の城主であつたがその五代の孫高安は伊勢に移住し、高安の長男高俊は同國松坂に於て商業を開始し、其子八郎兵衛高利は京都、江戸、大阪の三都に店鋪を開き大いに産を興し現在の三井王國の基礎を築上げた。高利の長男高平は、五弟と共に六本家を創め、之に五連家を加へたる十一家が一致共同して三井家の繁榮を圖る制を設け、自ら六本家の首班となり總領家と稱した。是れ卽ち當家の祖にして、現當主たる氏は高平七世の孫高福の七男に生れたが、明治十八年長兄高朗氏の後を受けて總領家を繼ぎ、同時に八郎右衛門を襲名した。夙に米國に學を修め歸朝後明治二十六年以來三井王國の總帥となり、同二十九年男爵に列せられ、大正十三年勳一等に叙せられ、現時尙ほ三井一門の統轄者たる重位に在り、その各方面に於ける赫々たる功績は普く知る所である。

妻苞子（明治二年生、伯爵前田利男養叔母）嗣子高公（同二八年生、正五位法學士）同妻銀子（同三四年生、侯爵松平康昌妹、女子學習院卒）孫高元（大正一〇年生）同高實（昭和二年生）同公乘（同三年生）養女好子（大正九年生）三男高維は分家し、長女慶子（明治二七年生）二女裕子（同三〇年生）三女興子（同三三年生）四女禮子（同三八年生）五女祥子（同四〇年生）は各他家に嫁ぐ。

三井　高昶氏　麹町區富士見町五ノ一〇　電話九段 二五六

三井(名)出資社員、京都帝國大學在學

明治四四年八月生、東京市

氏は三井武之助の三男に生れ、大正三年家督を相續した。三井王國の一門にして總本家たる三井八郎右衛門氏の甥、三井壽太郎氏の從弟である。幼少の頃より頭腦頗る明晰にして營業を好み、現時京都帝國大學に在つて孜々として勉學中であるが、成績優秀加ふるに研究心に富み將來三井王國の大業に參與して顯著なる功績を樹つるに足る俊秀の材として大いに將來の雄飛を期待され、又資性溫良にして人格高潔、公共心に富み信望隆々たるものがある。

母文(明治一〇年生、子爵吉田清風姉)

姉春尾（同四二年生、双葉高女及女子學習院高等科卒）同雅尾（同四三年生日本女子大學卒）弟洋（大正二年生）

妹安尾（同三年生）兄高貞（明治三一年生、京都府人中川元藏養子）姉美尾クニ（同六年生）三女綾子（同九年生）

白石幸三郎氏　大森區山王三ノ一八九七　電話大森四九二一

東京朝日新聞經濟部勤務

明治二二年一一月生、島根縣

明治三九年大阪商業學校卒業

操觚界に雄飛しつゝある氏は、島根縣人比良源太郎氏の二男として松江市に呱々の聲を揚げ、後絶家となつてゐた母方を取扱ひ、漸次斯界に擡頭して名聲を博し、今や斯界の錚々たる材として普く信望を得てゐる傍ら、東洋金網株式會社その他に關係して財界にも驥足を伸べ、その敏腕と溫厚なる性格と相俟つて好評を得てゐる、家庭にはしま子夫人との間に二男があつて頗る圓滿である。

下坂　八郎氏　淀橋區諏訪一〇二　電話牛込五三七八

日に及んでゐる。同店は名古屋に本店を有し、日本橋、京橋、大阪西區西長堀等に支店を置き、金物部、機械部、貿易部鐵部等に分れて商務隆盛を極めてゐる。當初は岡谷惣助氏の個人經營であつたが明治四十三年合資組織に變更された。此の間着實熱誠を以て終始一貫同店の業績向上に献身的努力を續けたる氏の功績は絶大にして、夙に店主に認められ、大正十五年東京金物部主任に拔擢された。此の重任に就くや氏は益々敏腕を發揮して

在の三井王國の基礎を築上げた。高利の長男高平は、五弟と共に六本家を創め、之に五連家を加へたる十一家が一致共同して三井家の繁榮を圖る制を設け、自ら六本家の首班となり總領家と稱した。是れ卽ち當家の祖にして、現當主たる氏は高平七世の孫高福の七男に生れたが、明治十八年長兄高朗氏の後を受けて總領家を繼ぎ、同時に八郎右衞門を襲名した。夙に米國に學を修め歸朝後明治二十六年以來三井王國の總帥となり、同二十九年

三井(名)出資社員、京都帝國大學在學
明治四四年八月生、東京市

氏は三井武之助の三男に生れ、大正三年家督を相續した。三井王國の一門にして總本家たる三井八郎右衞門氏の甥、三井壽太郎氏の從弟である。幼少の頃より頭腦頗る明晰にして營業を好み、現時京都帝國大學に在つて孜々として勉學中であるが、成績優秀加ふるに研究心に富み將來三井王國の大業に參與して顯著なる功績を樹つるに足る俊秀の材として大い

に將來の雄飛を期待され、又資性溫良にして人格高潔、公共心に富み信望隆々たるものがある。

母文(明治一〇年生、子爵吉田清風姉)
姉春尾(同四二年生、双葉高女及女子學習院高等科卒)同雅尾(同四三年生日本女子大學卒)弟洋(大正二年生)
妹安尾(同三年生)兄高貞(明治三一年生、京都府人中川元藏養子)姉美尾同三三年生、三井高光妻)

繁田　保吉氏　麴町區四番町八　電話九段六七八

正七位、辯護士、東洋金網(株)監査役、臺灣銀行、華南銀行各顧問
明治三八年京都法政大學卒業

法曹界に敏腕の聞え高き氏は、三重縣人繁田金松氏の長男として同縣阿山郡に呱々の聲を揚げた。夙に京都法政大學に學び、卒業後も更に法律を研究して明治四十年判檢事試驗に合格した。後司法官試補として東京區裁判所及同地方裁判所に勤務し、幾何もなく檢事に任ぜられたが、同四十二年徵兵檢査に合格したる爲め主計として軍隊生活を送り、除隊後判事に轉じて東京地方裁判所を始め岡山、横濱各地方裁判所に歷勤し、名判官の名を馳せた。大正五年官を辭して辯護士を開業し、主として民事及商事の各種事件

を取扱ひ、漸次斯界に擡頭して名聲を博し、今や斯界の錚々たる材として普く信望を得てゐる傍ら、東洋金網株式會社その他に關係して財界にも驥足を伸べ、その敏腕と溫厚なる性格と相俟つて好評を得てゐる、家庭にはしま子夫人との間に二男があつて頗る圓滿である。

下坂　八郎氏　淀橋區諏訪一〇二　電話牛込五三七八

法學士、日商(株)取締役兼東京支店支配人、東京精糖(株)取締役
明治二〇年五月生、福島縣
大正四年東京帝國大學法科卒業

氏は福島縣士族下坂藤次郎氏の三男に生れ、昭和三年分れて一家を樹てた。下坂藤太郎氏及び、田村藤四郎氏の實弟である。夙に東京帝國大學に於て法律を修め、優秀の成績を以て卒業するや直ちに實業界に入り、爾來着々その地歩を開拓して次第に帝都斯界に名聲を博し、信望を高めるに至つた。現時前揭の職に在つて敏腕の聞え高く、その高潔なる人格と相俟つて大いに前途の飛躍を期待せられてゐる。

妻キク(明治二九年生、東京府人齋藤熊三郎長女)長男良太郎(大正一二年生)二男正次郎(同一五年生)三男幸三昭和四年生)長女民(大正五年生)二女

クニ(同六年生)三女綾子(同九年生)

白石幸三郎氏　大森區山王三ノ一八九七　電話大森四九二一

東京朝日新聞經濟部勤務
明治二二年一一月生、島根縣
明治三九年大阪商業學校卒業

操觚界に雄飛しつゝある氏は、島根縣人比良源太郎氏の二男として松江市に呱々の聲を揚げ、後絶家となつてゐた母方の白石家を再興した。學業を卒へるや直ちに住友銀行に入社し、外國課に勤務すること多年に亘り行内の信望を得て地位次第に昇進したが、大正八年辭して大阪朝日新聞社に轉じ、同社經濟部記者として敏腕を揮ひ關西操觚界に漸次名聲を認められるに至つた。大正十一年再び金融界に移り、德田銀行支配人に就任したがその後轉じて東京朝日新聞社に入り、現にその經濟部に在つて活躍しつゝある。才氣煥發にして計數に長じ文筆を好くし同業界に普くその敏腕を認められ、好評を博してゐる。宗旨は眞宗、趣味はスポーツ就中野球、庭球等である。

妻うめ(明治三一年生、植村敏三姉、梅田高女卒)長女ゆき(大正七年生)
二女福子(同一一年生)

清水　直治氏　神田區元佐久間町五　電話下谷四、三八八

浮世繪商清水源泉堂主

明治二四年七月生、新潟縣

浮世繪の鑑定に非凡の眼識を具へ斯界の權威として名聲嘖々たる氏は、清水佳一郎氏の三男として新潟縣直江津町に呱々の聲を揚げた。明治四十三年十九歳の時實業界に雄飛を志して上京し、下谷區上野の松野書店に入つた。是れ氏が書肆として立つに至れる動機であつた。入店後は孜々として職務に勵精し將來飛躍の基礎を築くと共に特に浮世繪を研究し鑑識眼の涵養に努めた。同店に在ること約七ケ年に及んで確乎たる自信を得るや、大正五年現地に獨立開業して雄々しく斯界活躍の第一歩を踏み、爾來着實眞摯專ら信用を重んじて店勢の隆興に努力すると共に、浮世繪に關する凡ゆる研究を積みたる結果遂に業績隆々以て今日の盛況を呈するに至り、又鑑定に於て斯界の權威として普く認められるに至つた。資性溫厚にして公共的に奉ずる所多く、その機敏なる商才と相俟つて同業界は勿論一般の信望を聚めてゐる。

妻たね子、嗣子源一、其他三男一女。

島　貢介氏　澁谷區代々木富ケ谷一四三、電話四谷八七

從六位、勳六等、太陽生命保險(株)監査役

慶應二年一二月生、山口縣

保險界に敏腕の聞えある氏は、山口縣人島百合藏氏の長男として下關市に呱々の聲を揚げ、明治二十年分家した。夙に官界に投じ沖繩縣屬兼警部となり、後奈良縣に轉じて縣屬を經て同縣宇陀郡長に榮轉し、更に山口縣大島郡、同縣吉敷郡同縣玖珂郡の各郡長に歷任し、後朝鮮元山居留民團長に擧げられ、次いで長崎市助役となり市政の刷新に貢獻して聲望を博した。其後實業界に轉じ、大正三年太陽生命保險株式會社に入社して主事兼東京支店長となり、敏腕を揮つて業績の向上に努力すること十年一日の如く、その才腕と熱心は次第に社内の信望を高め株主間に認められ、監査役に擧げられた。現時その任に在つて益々同社の爲め健闘しつゝある。眞宗を信仰し、讀書、繪畫等に趣味を持つてゐる。

妻トミ（明治九年生、山口縣人國司義衞二女、東京高女卒）長男剛（同二六年生）

守岡　功氏　下谷區二長町三　電話下谷三六五一

凸版印刷(株)本所分工場長

明治九年三月生、廣島縣

印刷業界に名聲嘖々たる氏は、廣島縣人守岡瀨助氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後分れて一家を創立した。夙に青雲の志を抱いて上京し、明治四十二年凸版印刷株式會社に入社し、本所分工場に勤務するや着實熱心以て業務に精勵し、只管同社の爲め奉仕怠らず、經驗を重ねるに伴れて次第に社内の信任を得大正十三年分工場長に拔擢された。爾來一層健闘して同社の發展に貢獻以て今日に及んでゐるが、資性溫厚にして義俠心に富み、常に部下を愛撫拔導し、慈父の如く仰がれてゐる。宗旨は眞宗、趣味は旅行等である。

妻ツヤ（明治二一年生、石川縣人北橋安太郎三女）長男昶（同三九年生）四男隆（大正一一年生）五男稔（同一五年生）長女操（明治三七年生、横川梧樓に嫁す）二女君子（同四三年生）三女清子（大正四年生）四女政子（同五年生）

平幡　照法氏　千葉縣海上郡本銚子町　圓福寺

新義眞言宗智山派宗務長兼教學財團理事長、總本山智積院事務長、圓福寺住職

明治九年生、愛知縣

明治三二年音羽大學卒業

新義眞言宗智山派の權威として宗教界に重きをなし名望隆々たる氏は、愛知縣下に呱々の聲を揚げた。夙に僧籍に入り音羽大學林卒業後智山大學教授として後進の指導に當りその豐富なる學識と懇切なる訓育と相俟つて學生の尊崇を受けたが、後同派の宗機顧問となり更に宗勢調査局長、智山大學移東局長等に擧げられて同派の發展に貢獻する所甚大であつた昭和四年九月同派宗務長に選ばれ、又總本山事務長の要職に拔擢されて益々名聲在任中昭和七年四月大井町長に就任した る爲め之を辭し、現時町會の革新と町内居住民の福祉增進を天職とし、奉公の至誠を披瀝して努力しつゝある。資性溫厚にして仁慈に富み、崇高なる人格者として夙に信望高く、その町長在任に對して各方面より多大の感謝を以て迎へられてゐる。越味は釣等。

や深遠なる造詣と卓拔の技倆相俟つて斯界に聲望隆々たるものがある。資性溫厚にして公共奉仕の念に富み、前記の公職に在つて業界の發達に努め、町内の和平に盡し、或は日本小兒科學會理事長として學界に貢獻し、その他各種公共の福祉增進に貢献する所頗る甚大である。宗旨は日蓮宗、趣味は園藝、讀書、考古學、

界活躍の第一歩を踏み、爾來著實眞摯專ら信用を重んじて店勢の隆興に努力すると共に、浮世繪に關する凡ゆる研究を積みたる結果遂に業績隆々以て今日の盛況を呈するに至り、又鑑定に於て斯界の權威として普く認められるに至つた。資性溫厚にして公共的に奉ずる所多く、その機敏なる商才と相俟つて同業界は勿論一般の信望を聚めてゐる。

妻たね子、嗣子源一、其他三男一女。

島　貢介氏　澁谷區代々木富ケ谷一四三、電話四谷八七

主間に認められ、監査役に擧げられた。現時その任に在つて益々同社の爲め健闘しつゝある。眞宗を信仰し、讀書、繪畫等に趣味を持つてゐる。

妻トミ（明治九年生、山口縣人國司義衞二女、東京高女卒）長男剛（同二六年生）

守岡　功氏　下谷區二長町三　電話下谷三六五一

凸版印刷(株)本所分工場長

明治九年三月生、廣島縣

印刷業界に名聲嘖々たる氏は、廣島縣生）長女操（明治三七年生、横川梧樓に嫁す）二女君子（同四三年生）三女清子（大正四年生）四女政子（同五年生）

平幡　照法氏　千葉縣海上郡本銚子町　圓福寺

新義眞言宗智山派宗務長兼教學財團理事長、總本山智積院事務長、圓福寺住職

明治九年生、愛知縣

明治三二年音羽大學卒業

新義眞言宗智山派の權威として宗教界に重きをなし名望隆々たる氏は、愛知縣下に呱々の聲を揚げた。夙に僧籍に入り音羽大學林卒業後智山大學教授として後進の指導に當りその豐富なる學識と懇切なる訓育と相俟つて學生の尊崇を受けたが、後同派の宗機顧問となり更に宗勢調査局長、智山大學移東局長等に擧げられて同派の發展に貢献する所甚大であつた昭和四年九月同派宗務長に選ばれ、又總本山事務長の要職に拔擢されて益々名聲を博し、現にその職に在つて專ら同宗派の布教と勢力扶植に努力しつゝある。學才兼備加ふるに高邁なる人格者として普く信望を博してゐる。

西村菊次郎氏　品川區大井瀧王子四八三　電話大森八三二

明治四年一一月生、東京府

當家は長く現所に住み地主として近鄕に聞ゆる名門である。氏は先代菊次郎氏の息に生れ、明治二十五年家督を相續すると同時に菊次郎を襲名した。青年時代より自治界に投じ村會議員、町會議員、郡會議員等に選ばれて大井町の發展に貢献し、或は營業稅調査委員、所得稅調査委員等に推されて活躍至らざるなく、衆望を負ふて大正十三年東京府會議員に當選するや、府政の刷新に敏腕を揮ひ大井町民の權益擁護に顯著なる功績を顯はした。昭和三年再び府會議員に當選したが在任中昭和七年四月大井町長に就任した る爲め之を辭し、現時町會の革新と町内居住民の福祉增進を天職とし、奉公の至誠を披瀝して努力しつゝある。資性溫厚にして仁慈に富み、崇高なる人格者として夙に信望高く、その町長在任に對して各方面より多大の感謝を以て迎へられてゐる。越味は釣等。

妻かね、長男周作（三二歳、慶應義塾大學卒）同妻はつ子。

河内　全中氏　麴町區五番町七　電話九段二一〇

河内小兒科醫院長、麴町區醫師會副會長日本醫師會・東京府醫師會・東京市醫師會各理事、二五會々長、日本小兒科學會理事長

明治七年五月生、東京市

明治二九年千葉醫學專門學校卒業

小兒科界の權威として名聲ある氏は、先代全節氏の長男として現地に呱々の聲を揚げ後家督を相續した。當家は二百年前より當地に居住し區内屈指の舊家として知られてゐる。夙に醫界雄飛を志し、千葉醫專卒業後更に東京帝國大學小兒科教室に入つて研究の傍ら、小兒科助手として實地經驗を積み、明治三十三年現在の地に小兒科診療所を開業し、爾來一般の診療に從事して次第に信用を博し、今や深遠なる造詣と卓拔の技倆相俟つて斯界に聲望隆々たるものがある。資性溫厚にして公共奉仕の念に富み、前記の公職に在つて業界の發達に努め、町内の和平に盡し、或は日本小兒科學會理事長として學界に貢献し、その他各種公共の福祉增進に貢献する所頗る甚大である。宗旨は日蓮宗、趣味は園藝、讀書、考古學、人類學等。

妻りせ（明治一一年六月生）長男全春（同三八年生、日本大學醫科卒業、千葉醫科大學勤務）二男隆二（同三九年生、早稻田大學卒）三男明（同四一年生）四男郁男（大正三年生）

松本亦太郎氏　小石川區小日向臺町二ノ一五電小石川三〇〇五

從三位、勳二等、文學博士、日本女子大學教授、東京商科大學、東京文理科大學日本大學各講師、東京帝國大學航空研究所囑託航空心理部主任、日本心理學會々長、帝國學士院會員

慶應元年九月生、群馬縣

明治二六年東京帝國大學文科哲學科卒業

心理學の泰斗として學界に於て令名ある氏は、群馬縣士族飯野翼氏の二男に生れ後ち松本勘十郎氏の養子となり、明治三十一年その家督を相續した。大學卒業後大學院に進んで心理學を研究し、更に

明治二十九年渡米してエール大學に學び同校卒業後獨逸に轉じて研鑽を積み、歸朝後明治三十二年文學博士の學位を授與された。その翌年東京高等師範學校及び女子高等師範學校教授に任ぜられ、爾來京都帝國大學教授兼京都市立繪畫專門學校長兼美術工藝學校長、東京帝國大學教授等に歷任し、又此の間再度歐米に遊學し現時前記の職に在る。宗旨は眞言宗、趣味は美術研究、著書には「諸民族の藝術」「心理學講話」「實驗心理學十講」「渡鳥日記」等がある。

妻レン（明治八年生、神奈川縣士族坂本七三郎四女、横濱共立高女卒）長男忍（同二一年生、詳馬縣倉賀野町助役）同妻あい（同三〇年生、前橋共愛高女卒）二男厚（同三七年生、文學士）三男達郎（大正二年生）四男道也（同八年生）長女靜枝（明治三四年生、法學士川田熊太郎妻）三女智慧（同四一年生、工學士佐藤隆彌妻）四女諒（同四三年生）五女春來（同四五年生）六女育（大正五年生）

伏島　興雄氏　麻布區山元町五九　電話高輪五八一五

伏島病院々長
明治二四年一月生、東京府
東京慈惠會醫學專門學校卒業

都下刀圭界に名勢嘖々たる氏は、夙に東京慈惠會醫學專門學校に學んで斯界活躍の素地を作り、優秀の成績を以て同校卒業後直ちに市内芝區樋口病院に勤務し實地診療の經驗を積むと共に不斷の努力を以て研鑽に勵んだ。かくて自信を得るや大正十二年現地に獨立開業し、廣く一般の診療に從事し年を逐ふて隆盛に赴きつゝ今日に及んでゐる。此の間氏は醫の仁術たる所以を發揮することを主義として終始一貫し、懇切叮嚀なる診察をモットーとして患者に臨み、漸次信望を高めて現在の盛名を得た。その溫厚篤實なる性格は專門技倆の卓拔と相俟つて患家に絕大の信用を博し、又業界に普く認められてゐる。

妻安子（明治三二年生、眞田英長女）長男茂興（昭和二年生）長女キヨ（大正一二年生）

畔高　定行氏　芝區仲門前町三

醫師、仲門前町會長、十七ケ町聯合會常任庶務、慈惠會醫科大學校友會・同後援會・同父兄會各常任監事
明治二〇年九月生、山梨縣
大正四年慈惠會醫科大學卒業

都下醫界に聲望隆々たる氏は、山梨縣下に呱々の聲を揚げた。夙に刀圭界に志して上京し、慈惠會醫科大學に於て專心研究を積み、卒業後更に研鑽すると共に實地經驗を重ね、大正六年開業した。爾來懇切叮嚀を第一義として廣く一般の診療に從事する傍ら益々學理的研究に勵み次第に患家の信用を高めて隆況を呈するに至り、後現在の地に移轉擴張以來彌々聲名を博し以て今日に及んで居る。常に社會公共に奉ずることを理想として犧牲的努力を惜まず、偉人を崇拜すること厚く、種痘の發明者ジェンナーを敬慕し大正十一年ジェンナー百年祭の主唱者となつて東奔西走し、有樂座に盛大なる祭典を擧行して英國大使其他より感謝狀を贈られ、或は町内の親睦に努め、或は母校の發展に盡瘁する等、氏の犧牲奉公的美擧に遑なく、各方面より尊敬されてゐる。

妻八重子との間に三男一女がある。

佐津川　準氏　牛込區市ケ谷余丁町六四、電話四谷三七九一

天理教布教師、本保支教會長、東京府教友會牛込區及四谷區支會長、東京教務支廳地方委員、天理教青年會東京府地方委員
明治二七年八月生、東京市

當教會は明治三十八年五月、先代贈少教正佐津川龜太郎氏の創立に係り、都下天理教界に普く知られてゐる。氏は先代の嗣子にして現住所に呱々の聲を揚げ幼時より信仰篤く教務に從事した。早稻田中學卒業後東京教友會發行の機關誌「教の友」の主幹として教派の普及發展に努力し、或は「天理教三才文庫」係等を勤めて天理教界に盡瘁する所尠なからず、現時前掲の要職を兼ねて教化に沒頭してゐる。濟世救人の高遠なる理想に立つて毫高潔なる人格者として壇徒の信任を博し前途春秋に富み宗教界の新進として將來を期待されてゐる。趣味として茶道及び華道を好み、茶道は千家裏、華道は池之坊を修め共に練達の技を有してゐる。

妻文枝（明治四〇年生、東京女學校卒）長男泰正（四歲）長女玲子（七歲）三女綾子（五歲）

るに至つた。氏は性來頗る義俠心に富み奉公の念篤く、就中自治に對して深く留意し、曩に區會議員に選ばれて區民の爲め盡瘁し、或は區劃整理委員長として復興の大業に貢献する等、その顯著なる功績は夙に普く認められ、現時も前掲の公職に在つて活躍至らざるなく、信望隆々たるものがある。

達郎（大正二年生）四男道也（同八年生）長女靜枝（明治三四年生、法學士川田熊太郎妻）三女智慧（同四一年生、工學士佐藤隆彌妻）四女諒（同四三年生）五女春來（同四五年生）六女育（大正五年生）

伏島　興雄氏　麻布區山元町五九　電話高輪五八一五

伏島病院々長
明治二四年一月生、東京府
東京慈惠會醫學專門學校卒業

男茂興（昭和二年生）長女キヨ（大正一二年生）

畔高　定行氏　芝區仲門前町三

醫師、仲門前町會長、十七ケ町聯合會常任庶務、慈惠會醫科大學校友會・同後援會・同父兄會各常任監事
明治二〇年九月生、山梨縣
大正四年慈惠會醫科大學卒業
都下醫界に聲望隆々たる氏は、山梨縣下に呱々の聲を揚げた。夙に刀圭界に志

妻八重子との間に三男一女がある。

佐津川　準氏　牛込區市ケ谷余丁町六四、電話四谷三七九一

天理教布教師、本保支教會長、東京府教友會牛込區及四谷區支會長、東京教務支廳地方委員、天理教青年會東京府地方委員
明治二七年八月生、東京市
當教會は明治三十八年五月、先代贈少教正佐津川龜太郎氏の創立に係り、都下天理教界に普く知られてゐる。氏は先代の嗣子にして現住所に呱々の聲を揚げ幼時より信仰篤く教務に從事した。早稻田中學卒業後東京教友會發行の機關誌「教の友」の主幹として教派の普及發展に努力し、或は「天理教三才文庫」係等を勤めて天理教界に盡瘁する所尠なからず、現時前掲の要職を兼ねて教化に沒頭してゐる。濟世救人の高遠なる理想に立つて毫も他を顧みず、畢世を教化に献げんとする崇高なる信念は夙に信徒の尊敬の的である。尙ほ當教會には山田茂八、大澤鍋吉、安岡豐吉、小林醇一、安岡角藏、杉浦長之助の諸氏が役員として克く氏を翼け、氏と共に教會の興隆に勗めてゐる。

北越　宗之氏　大森區馬込東二ノ八二

慈眼院住職
明治三五年一月生、東京市
曹洞宗大學卒業
當山は遠く鎌倉幕府時代の開基にして法燈連綿たること實に二十五世に及び、寺域一萬一千餘坪に達し、梶原景時を始め著名なる人士の墓基尠なからず、由緒深き寺院として知られてゐる。氏は當山に生を享け二十一歲の時第二十五世住職となつた。夙に世田ケ谷中學を經て現駒澤大學の前身たる曹洞宗大學に學び、學識博く志操堅固にして靈界奉仕の念厚く高潔なる人格者として壇徒の信仕を博し前途春秋に富み宗教界の新進として將來を期待されてゐる。趣味として茶道及び華道を好み、茶道は千家裏、華道は池之坊を修め共に練達の技を有してゐる。

妻文枝（明治四〇年生、東京女學校卒）
長男泰正（四歲）長女玲子（七歲）三女綾子（五歲）

喜多　武秀氏　本所區太平町二ノ一八　電話墨田二四〇八

勳七等、喜田鐵工所々長、太平町二丁目町會々長、在鄕軍人本所分會副會長、方面委員
明治一六年生、東京市
商工中學校及順天求合舍卒業
機械製造業界に獨歩の地位を占め名聲嘖々たる當鐵工所は、前東京高等工業學校助教授喜田武英氏の創設に係り、化學工業用諸機械、石鹼製造機械、製靴用機械等が主製品である。氏は武英氏の息として日本橋區に呱々の聲を揚げ、夙に學業を修め、日露戰役には二等看護長として偉功を樹て勳七等に叙せられた。凱旋後直ちに家業に從事し、所長として專ら經營の衝に當り、優秀機械の製出に心血を濺ぎたる結果、遂に當所製品は堅牢にして精巧無比の逸品なりと江湖の稱賛を博し、業績隆々として今日の盛況を呈するに至つた。氏は性來頗る義俠心に富み奉公の念篤く、就中自治に對して深く留意し、曩に區會議員に選ばれて區民の爲め盡瘁し、或は區劃整理委員長として復興の大業に貢献する等、その顯著なる功績は夙に普く認められ、現時も前掲の公職に在つて活躍至らざるなく、信望隆々たるものがある。

菅野和三郎氏　大阪市住吉區住吉町一〇一五、電話住吉二四西

大倉洋紙店（株）常務取締役兼大阪支店長
洋紙合同販賣、大紙會各（株）取締役
明治一九年六月生、石川縣
氏は石川縣潮和平氏の二男にして、同縣下に呱々の聲を揚げ、明治三十八年叔父菅野秀吉氏の死跡を相續した。夙に大倉洋紙店に入り、只管その職務に勵精し同店の發展に努力すること多年に亘り、漸次社内の信望を得て要職に擧げられ、遂に取締役に選ばれた。現時常務取締役たると同時に大阪支店長として關西方面に於ける販路の擴張に氏獨特の敏腕を發揮し、傍ら前掲の任に在つて洋紙業界に聲望を博してゐる。經營の才腕に秀で資性溫厚篤實、業界稀れに見る人格者として夙に各方面に識られてゐる。

妻千代（明治二九年生、石川縣保田已之吉二女）

溝部　健太氏　大阪市住吉區天王寺町二二八六　電話　天王寺一〇五二

法學士、東神倉庫(株)大阪支店長、三榮組(株)取締役、共進組(株)監査役

明治一九年一〇月生、山口縣

大正四年東京帝大法科政治科卒業

氏は山口縣士族溝部惟幾氏の長男として同縣下に生れ、明治三十六年その家督を相續した。生家は代々毛利藩に仕へたる名門である。夙に東京帝國大學法科大學に入り、拔群の成績を以て卒業後直ちに東神倉庫會社に入社し、累進して名古屋支店長に拔擢された。後大阪支店長に榮轉し以て今日に及び、傍ら三榮組及び共進組兩社重役をも兼ねて活躍しつゝある。經營の才腕卓拔にして、その崇高なる人格と相俟つて各方面に信望がある。

妻今枝（明治二七年生、福岡縣守田辰次郎姪）

加藤　新松氏　京橋區木挽町一ノ一　電話　京橋四七一〇

西本組顧問、日刊「中外情報社」顧問

土木業界の異彩として信望隆々たる氏は愛知縣の出身にして、若冠の頃より斯界に投じ東奔西走或は朝鮮に或は滿洲に西本組代人として縱横無碍の才腕を揮ひ鐵道建設工事、發電所工事等の大工事を請負ひ大いに業績を擧げて店主貴族院議員西本建次郎氏の厚き信任を得た。氏は如何なる難工事又短期限の工事をも必ず竣工期限前に完成せしめる點に於て他の追隨を許さず、業界獨歩の觀がある。彼の神奈川縣愛甲郡に於ける發電工事或は靜岡縣下の難工事等は其一例にして是れ實に氏が人を用ふるに妙を得たるに因る卽ち氏は常に土木建築に志を有する十數名の學生を養成し、之を工事現場に引率して半日は修學せしめ、半日は實地勞働の傍ら人夫の監督に當らしめたが、氏の恩顧を受けつゝある學生達は誠實を披瀝して自ら努力すると共に嚴重に人夫を監視し、能率の增進著しく意外の効果を收めた。氏は資性溫厚にして公共博愛心に富み情に脆く、新聞雜誌等を通じて社會公益に關する意見を發見したことも屢々あるが、常に進んで貧困者或は不遇の知己等の救濟に金品を投じ、業界不振の當今に於ては自己の無駄を省節してまでも猶且つ他に盡してゐる。其の高潔なる心事は實に敬服の外なく、非人格者猶ほ尠なからざる土木業界に於て、氏の如きは群鷄中の一鶴にも譬ふべく、業界の範として仰がれてゐる又玲瓏玉の如き圓滿なる人格者であるが、一面に於て秋霜烈日の如き嚴格さを失はず不義不正に對しては寸毫と雖も假籍せず斷々乎として之を膺懲せざれば止まざる底の俠客的風格の所有者である。

片岡　安氏　（自宅）京都市伏見區桃山松平築前二〇ノ一　電話伏見三四三　（事務所）大阪市北區堂島二大毎ビル內　電話　北四〇六四

工學博士、日本エレベーター(株)社長、日本建築協會長、關西工業、都ホテル、昭和火災保險各（株）取締、日本土地商事(株)相談、專修大學々長、關西商業工業學校理事長、日本動力協會理事、大阪府信用組合聯合會長、片岡土木建築事務所長

明治九年六月生、石川縣

氏は舊加賀金澤藩士細野直重氏の二男として金澤市に呱々の聲を揚げ、明治三十一年現戸主直溫氏の養子となつた。夙に幼少の頃より神童の譽れ高く、東京帝國大學を拔群の成績を以て卒業し、後工學博士の學位を授與された。現に前揭の各要職にあり、曩に大正七年都市計畫調査會成立以來、右法制調査に任じ、其の後東京、大阪等の都市計畫委員としして盡瘁し、今日の都市美に貢獻する所多い又氏は大阪倶樂部理事である。

妻盈衞(明治一四年生、養父直溫長女)男銓太郎(明治三二年生)同妻さき（明治三八年生、貴族院議員高廣次平妹)同長男宗一(大正一五年生)同長女貴美子(昭和五年生)女登代子（明治四四年生)二男彰(大正二年生)長女喜代子(明治三六年生、醫學博士日陰董妻)

於て、將た治療の實地技倆に卓拔せる點に於て斯界の重鎭として信望を博してゐる。著書には「漢方醫學新研究」「日本人に適する衣食住」「漢方醫學餘談等」がある。趣味として詩、和歌、俳句等に通じ詩集「火星」の著がある。

妻つた子(二六歲)妹民子(三〇歲)義弟德次郎(三二歲、民子夫)長男充(六歲)

內は勿論廣く一般に前途有爲の材として認められるに至つた。今や經驗を重ねて俊敏の才腕はその萠芽を顯はし敦厚なる性格と相俟つて益々信望を博してゐる。

古川　虎吉氏　向島區寺島七ノ一八三

天理教少教正、同高安本隅支教會長、同東京府教友會南葛飾郡中部支會長、同東

る人格と相俟つて各方面に信望がある。
妻今枝（明治二七年生、福岡縣守田辰次郎姪）

加藤　新松氏　京橋區木挽町一ノ一　電話京橋四七一〇

西本組顧問、日刊「中外情報社」顧問

土木業界の異彩として信望隆々たる氏は愛知縣の出身にして、若冠の頃より斯界に投じ東奔西走或は朝鮮に或は滿洲に西本組代人として縱横無碍の才腕を揮ひ鐵道建設工事、發電所工事等の大工事を

に實の情に厚く、雜問等を通して社會公益に關する意見を發見したことも屢々あるが、常に進んで貧困者或は不遇の知己等の救濟に金品を投じ、業界不振の當今に於ては自己の無駄を省節してまでも猶且つ他に盡してゐる。其の高潔なる心事は實に敬服の外なく、非人格者猶ほ尠なからざる土木業界に於て、氏の如きは群鷄中の一鶴にも譬ふべく、業界の範として仰がれてゐる又玲瓏玉の如き圓滿なる人格者であるが、一面に於て秋霜烈日の如き嚴格さを失はず不義不正に對し

明治三〇年東京帝國大學工科建築科卒業

氏は舊加賀金澤藩士細野直重氏の二男として金澤市に呱々の聲を揚げ、明治三十一年現戸主直溫氏の養子となつた。夙に幼少の頃より神童の譽れ高く、東京帝國大學を拔群の成績を以て卒業し、後工學博士の學位を授與された。現に前掲の各要職にあり、曩に大正七年都市計畫調査會成立以來、右法制調査に任じ、其の後東京、大阪等の都市計畫委員としして盡瘁し、今日の都市美に貢獻する所多い又氏は大阪倶樂部理事である。

妻盈衞（明治一四年生、養父直溫長女）
男銓太郎（明治三二年生）同妻さき（明治三八年生、貴族院議員高廣次平妹）
同長男宗一（大正一五年生）同長女貴美子（昭和五年生）女登代子（明治四四年生）二男彰（大正二年生）長女喜代子（明治三六年生、醫學博士日陰董妻）

中山　忠直氏　牛込區若松町一二　電話牛込五〇

漢方醫、中山研究所長
明治二八年四月生
早稲田大學卒業

西洋醫學の輸入に伴ひ在來の漢方醫學は漸次衰微し一時洋式醫學が全盛を極めたが、多年の歷史を有する漢方醫は近代の科學を以て說明し得ざる特徵を有することが事實に於て立證されるに及んで再び擡頭し、近年漢方醫の研究は益々旺んとなり漸次各方面にその眞價を認められるに至つた。茲に於て漢方醫を業とする者も亦逐年增加しつゝあるが、都下斯界に於て嘖々たる名聲を馳せ、斯界の新進として普く認められてゐる、氏はまた逸すべからざる一偉材である。氏は夙に斯界に投じ、凡ゆる文獻を繙き或は專門大家の敎へを受けて研鑽を積むこと旣に多年、現今に於てはその造詣の深き點に於て、將た治療の實地技倆に卓拔せる點に於て斯界の重鎭として信望を博してゐる。著書には「漢方醫學新研究」「日本人に適する衣食住」「漢方醫學餘談等」がある。趣味として詩、和歌、俳句等に通じ詩集「火星」の著がある。

妻つた子（二六歲）妹民子（三〇歲）義弟德次郎（三二歲、民子夫）長男充（六歲）

松崎　一雄氏　麻布區本村町二〇〇　電話高輪七、四六六

森永製菓販賣店勤務
明治三四年生、東京市
立敎大學及東京帝國大學卒業

實業界の新進として前途の飛躍を期待されてゐる氏は、松崎半三郎氏の二男として都下に呱々の聲を揚げた。父は森永製品販賣株式會社及び山城製茶株式會社の社長たるを始めとし、森永煉乳株式會社專務取締役として、或は南洋貿易信用株式會社取締役會長として、或は小島印刷株式會社及び南洋商會の取締役として財界に敏腕を揮ふこと多年に亘り、財界一方の雄、特に製菓界の覇王たる森永をして今日あらしめたる功勞者として夙に聲望隆々たるものがある。氏も亦幼少の頃より頭腦明晰にして滿々たる覇氣を藏し進取の氣象に富み學業を卒へるや直ちに實業界に投じ、漸次其地步を進めて社內は勿論廣く一般に前途有爲の材として認められるに至つた。今や經驗を重ねて俊敏の才腕はその萠芽を顯はし敦厚なる性格と相俟つて益々信望を博してゐる。

古川　虎吉氏　向島區寺島七ノ一八三

天理敎少敎正、同高安本隅支敎會長、同東京府敎友會南葛飾郡中部支會長、同東京敎務支廳地方委員、同靑年會東京府地方評議員、同東本分敎會理事、財團法人六踏園理事
文久元年五月生、東京府

都下天理敎界の長老として信望高き氏は、明治三十一年入信以來同敎を信仰すること日に篤く、同四十二年本志宣敎所を設置してその所長となり、同四十四年本隅宣敎所を開設し、大正十三年該宣敎所は支敎會に昇格を認可された。此の間明治三十五年神道本局管長より敎導職試補に任ぜられ、次いで同三十七年訓導に昇進し、爾來同四十年權少講義、同四十二年少講義、大正三年權中講義、同九年中講義、同十三年權大講義、同十四年大講義と漸次地步を進め、昭和三年少敎正に任ぜられた。敎界に在つて活躍すること實に三十餘年に亘り、帝都を始め內地各方面は素より、朝鮮、大連等に布敎し敎化に盡したる功績は沒す可らざるもの

がある。嗣子萬之助(明治二五年生)も亦夙に入信し、中講義の位に在り、同妻たか(三二歳)は訓導に任ぜられ、共に布教に從事してゐる。因みに當支教會の理事は左の四氏である。

山川金次郎、吉川丑太郎、村山乙助、古川萬之助。

小西　茂吉氏　本郷區駒込曙町一〇　電話小石川七二三四

天理教權少教正、同高安大教會都分教會々長、同青年會支會長、同東京教務支廳主事、同大教會役員、同本郷區地方委員曙町々會委員

明治二三年三月生、東京市

大正四年天理教高安大教會教師講習卒業

當教會は父政吉氏が明治三十三年四月日本橋區蠣殼町に都出張所を設けたるに其の端を發してゐる。氏は十八歳の頃入信したが、之より先き明治三十五年天理教中學に學び、同三十七年正則中學に轉じ、同三十九年教導職試補となり、同訓導等を經て大正三年權少講義に任ぜられ爾來都深川宣教所長、青年會都支會長南森宣教所長、高安大教會準役員、青年會高安分會主事、東京管內活動寫眞係主任教祖四十年祭鐵道輸送係、高安大教會承事、同教會財團部副主任、同教務部副主任等に歷任し、此の間累進して昭和三年權少教正に陞任し、現時前掲の要職を兼ねて同教の爲め活躍至らざるなく、顯著なる貢獻者として德望隆々たるものがある。

因みに當教會の理事は左の諸氏である

千田まつ、大橋武一、塚原市太郎、古辻末吉、高野昭雄、小西秀吉、小西利臣。

寺門　敏雄氏　神田區錦町一ノ二　電話神田一三九一

勳八等、天理教權中講義、同錦江分教會理事、同麹町中教會準員、同三歳文庫員

明治三〇年六月生、靜岡縣

大正五年日本中學校卒業

錦江分教會の創始者たる寺門きみ女史は、明治三十四年頃天理教の布教に從事し、神田區錦町三丁目に布教所を設けて教化に努力すること多年に及び、該布教所は同四十二年支教會に昇格し、後昭和四年十月分教會として認可され、女史はその功績に依つて歿後少教正を贈られた氏はその息として靜岡縣燒津町に呱々の聲を揚げ、長じて日本中學校に學び、同校卒業後中野電信隊に入營して三等看護長となり、尼港及びシベリヤに出征して偉功を樹て勳八等に叙せられた。之より先き十九歳の頃祖父の教務を翼けたることが動機となつて天理教の信仰者となり遂に專念教務に從事するに至り、母と共に教化に努力中、偶々母の死に遭ひたるを爲め、爾來錦江分教會理事として奮鬪以て今日に及んでゐる。資性濶達にして靈界奉仕の念篤く、夙に教徒の信望を博してゐる。

妻ゆき子（明治三八年生、天理教權少講義）

池上　久道氏　大阪市住吉區阿部野一ノ九二　電話　戎九〇〇

市立天六職業紹介所長

大正一四年京都帝國大學法科英法科卒業

氏は前朝鮮總督府政務總監池上四郎氏の長男として大阪市に呱々の聲を揚げた夙に京都帝國大學に學び、優秀の成績を以て同校を卒業後は官界に志し、現時大阪市立天六職業紹介所長として、同事業のため全力を盡瘁し、才能亦凡ならず、將來を囑望されてゐる。公共奉仕の念に富み、稀れに見る人格者である。

乾　茂氏　京都上京區小山堀池町三四、電話西陣九一四

大同洋紙店(株)專務取締役兼京都支店長

明治二年五月生、大阪府

氏は大阪府小原茂平氏の長男として同府下に生れ、後先代くにの養子となり家督を相續した。夙に大同洋紙店に入り專務取締役に就任、京都支店長を兼ね社內外の信望を博し以て今日に及んでゐる。

妻きん（明治一四年生、京都府中井三郎兵衞長女）女春子(大正六年生)

青木十三郎氏　目黑區下目黑一ノ二四　電話高輪三一九〇

原町紡績(株)社長、福田農事(株)取締役

慶應元年一〇月生、新潟縣

茂の長男）

佐野辰一郎氏　麻布區市兵衞町一ノ六役下谷區黑門町二三　場電話下谷五八三三

從四位、勳四等、公證人、東京公證人會會計委員

明治元年四月生、東京市

明治二五年中央大學卒業

男直次(同四一年生)長女節子（同三四年生、大分縣人溝部正孝妻）二女政子（同三六年生、東京朝日新聞社員千葉雄次郎妻）三女幾久子（大正二年生、山脇高女卒）孫多惠(昭和二年生、茂樹長女）姪富美（明治四五年生、山脇高女卒）

佐竹　大雄氏　中野區昭和通一ノ一六正見寺、電話中野二九五

其の端を發してゐる。氏は十八歳の頃入信したが、之より先き明治三十五年天理教中學に學び、同三十七年正則中學に轉じ、同三十九年教導職試補となり、同訓導等を經て大正三年權少講義に任ぜられ爾來都深川宣教所長、青年會都支會長南森宣教所長、高安大教會準役員、青年會高安分會主事、東京管內活動寫眞係主任教祖四十年祭鐵道輸送係、高安大教會承事、同教會財團部副主任、同教務部副主任等に歷任し、此の間累進して昭和三年教化に努力すること多年に及び、該布教所は同四十二年支教會に昇格し、後昭和四年十月分教會として認可され、女史はその功績に依つて歿後少教正を贈られた氏はその息として靜岡縣燒津町に呱々の聲を揚げ、長じて日本中學校に學び、同校卒業後中野電信隊に入營して三等看護長となり、尼港及びシベリヤに出征して偉功を樹て勳八等に叙せられた。之より先き十九歳の頃祖父の教務を翼けたることが動機となつて天理教の信仰者となり以て同校を卒業後は官界に志し、現時大阪市立天六職業紹介所長として、同事業のため全力を盡瘁し、才能亦凡ならず、將來を囑望されてゐる。公共奉仕の念に富み、稀れに見る人格者である。

乾　茂　氏　京都上京區小山堀池町三四、電話西陣九一四

大同洋紙店(株)專務取締役兼京都支店長

明治二年五月生、大阪府

氏は大阪府小原茂平氏の長男として同府下に生れ、後先代くにの養子となり家督を相續した。夙に大同洋紙店に入り專務取締役に就任、京都支店長を兼ね社內外の信望を博し以て今日に及んでゐる。

妻きん（明治一四年生、京都府中井三郎兵衞長女）女春子（大正六年生）

青木十三郎氏　目黑區下目黑一ノ二四　電話高輪三一九〇

原町紡績(株)社長、福田農事(株)取締役

慶應元年一〇月生、新潟縣

都下實業界に確乎たる地歩を占め名聲嘖々たる氏は、新潟縣士族中村敬作氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げ、幼少の頃青木郡兵衞氏の養子となり、明治十年その家督を相續した。夙に上京して實業界に入り誠實主義を以て奮闘すること多年、その溫厚なる性格と先天的敏腕加ふるに業務に對する献身的努力は相俟つて年と共に各方面に信用を博し、着々業界に擡頭し遂に今日の名聲を得るに至つた。現時前揭の要職に在つて益々敏腕を發揮し社業に努力しつゝある。

妻ヨシ(明治六年生、青木永吾長女)長男茂(同三〇年生)同妻みつ（同三八年生、群馬縣人藤井菊次郎姪)二男實(同三九年生）三男正(大正四年生)四男勇(同六年生）長女タミ(明治二五年生、新潟縣人川田治一妻)二女千代子(同四三年生）孫駒之助（昭和二年生、長男茂の長男）

佐野辰一郎氏　麻布區市兵衞町一ノ六（役場下谷區黑門町二三　電話下谷五八三三）

從四位、勳四等、公證人、東京公證人會會計委員

明治元年四月生、東京市

明治二五年中央大學卒業

都下公證人界に聲望隆々たる氏は、夙に中央大學に於て法律を修め、卒業後更に研究して判檢事試驗に合格した。明治二十八年上田區裁判所判事に任ぜられ、同三十二年長野地方裁判所に轉じ、同三十四年前橋地方裁判所部長、同四十年水戸地方裁判所部長、同四十三年下妻區裁判所監督判事、同四十五年東京控訴院判事大正二年東京區裁判所判事に各就任し法曹界に名聲を博した。大正十一年官を辭するや多年の功績に依つて從四位勳四等に陞叙され、同年淺草區花川戸に公證役場を開設したが、震災のため一時自宅に移し、後下谷區旅籠町に假事務所を設け、大正十五年現地に移轉し以て今日に及んでゐる。

妻貞子（明治一〇年生、東京府人三田利德長女）長男茂樹（同三一年生、法學士、檢事）同妻輝子(同三九年生)二男直次(同四一年生)長女節子（同三四年生、大分縣人溝部正孝妻）二女政子（同三六年生、東京朝日新聞社員千葉雄次郎妻）三女幾久子（大正二年生、山脇高女卒）孫多惠(昭和二年生、茂樹長女）姪富美（明治四五年生、山脇高女卒）

佐竹　大雄氏　中野區昭和通一ノ一六　正見寺、電話中野二九五

本願寺執行出仕、同總代會衆、正見寺住職

明治九年生、福岡縣

眞宗本願寺派の名知識として聲名高き氏は福岡縣下に呱々の聲を揚げた、夙に僧籍に入り、京都本願寺大學林に學を修め、哲學館を優秀の成績を以て卒業するや直ちに布教師となり、各地に巡錫して衆生濟度に努め本願寺派の發展に貢献する所尠なからず、青壯の頃より豐富なる學識と俗世の名利に超越し畢生を教化に献げんとする敬虔なる態度は普く認められ、同派內に信望を博するに至つた。其の後東洋大學に教鞭を執り、或は千代田女學園評議員、龍谷大學評議員等に擧げられて教育に盡し、更に帝都復興事業に際しては委員として復興完成に努力し、後齊修會理事、六華園評議員等に歷任し現時前揭の職に在つて活躍しつゝある。

資性慈悲博愛の念に富み、靈界奉仕を標榜して終始一貫以て今日に及び、高德の人格者として一般に尊敬されてゐる。

櫻井久我治氏　中野區高根町二六　電話中野二三七八

北海水力電氣、樺太電氣(各株)專務取締役、南樺太鐵道、樺太木材(各株)取締役

明治四年五月生、大分縣

明治三四年陸軍大學卒業

氏は大分縣人櫻井宗十郎の二男にして明治三十八年家督を相續した、夙に陸軍に入り秀才を以て目せられ、前途を囑目せられたが明治三十四年陸軍大學卒業後自ら期する處ありて現役を退き實業界の人となり、同三十九年三井合名會社樺太紙料工場長となり、後ち同社が王子製紙株式會社となるに及び同社樺太工場長となつて敏腕を振ひ、大いに業績を上げ、現時前記の會社重役として東洋の財界に雄飛しつゝある。

妻梅明治一一年二月生（東京府士族川本清一氏二女）長男武（明治三一年八月生、東京高等商業學校卒業三井鑛山會社員）同妻富美（明治三八年二月生東京山田縫三郎四女）

木村　清氏　葛飾區本田篠原二七八　電話　本田七

天理教權少講義、同深川分教會長、同東京支廳地方委員、同教友會南葛飾郡北部支會長、同青年會東京府地方評議員

明治三八年一二月生、東京市

大正一四年天理教中學校卒業

當教會の創立者たる木村八十八氏は明治十八年入信以來大正九年迄天理教布教師として教化に從事し、初代教會長となり、少教正に任ぜられた。二代市三郎(大講義)はその後を襲いだが、幾何もなく大震災の爲め他界し、三代椿卯之助氏權大教正は昭和二年逝去したる爲め、氏はその後を享けて四代目教會長に就任した當教會は以前本所相生町に在つたが大震災の厄に遭ひ大正十四年現地に復興し以て今日に至れるものにして、歷代の努力空しからず都下天理教界に名聲を博し、多數の信徒を擁して隆況を呈してゐる。氏は二代市三郎氏の二男にして夙に入信し、天理教中學校卒業後益々修業研鑽に勵み、若冠を以て前記の要職を兼ねて只管教化に努力しつゝあるが、天性の俊敏に加ふるに殉教の意氣燃ゆるが如く、教徒の信望を博し大いに前途を囑望されてゐる。

母まる（六一歳、天理教少講義）妻きよ(明治四二年生、同權訓導)

宮本平十郎氏　下谷區下根岸町一八

當家は舊幕時代より長く當地に住み、町內屈指の舊家として知られ、又當地方の發展に功績顯著なる名門として父祖以來近隣の尊敬を聚めてゐる。此の由緒ある家柄に生を享けたる氏は、青少の頃より社會公共的事業に奉仕することを理想とし、明治四十年家督相續後は益々犧牲奉公の精神を發揮して各方面に活躍するに至つた。下谷區町會聯合會委員、同青年團相談役、小學兒童保護者會々計係、國勢調査委員等の職に在つて克くその任を完ふし、或は慈善博愛的事業、社會公共的事業等に意を注ぎたる偉大なる功績は夙に普く認める所であるが、特に附近住民の賞揚措かざるは、去る大正十二年の大震火災に際し、氏の奮鬪努力に依つて根岸一圓を火災の厄より免れしめたる點にして、其の絕大なる功勞に對しては警視廳より感謝狀を贈られた。その他氏の社會公共的に盡したる功績は殆んど枚擧に遑なく、現時益々各方面に貢獻し尊敬の的となつてゐる。

清水三十郎氏　日本橋區通三ノ五　電話日本橋二〇三五

羅紗直輸入及び高等洋服商、毛織物中央同盟會幹事、同日本橋區洋服商顧問、日京聯合會幹事、六ノ部會評議員

明治六年三月生、東京市

當家は清水長左衞門宗治の後裔にして先々代清水水翁は田安家の槍術指南番を勤め炳乎たる家に在つて活躍し、信望を博してゐる。宗旨は日蓮宗、趣味は和歌である。

妻らく(明治一五年生)一女さく子(一四歳)

平田　盛胤氏　小石川區第六天町一七　電話小石川三三九〇

神田明神社司

明治一九年東京帝國大學文科古典講習所垂んとする長年月に亘り、誠心誠意神に仕へて他を顧みず、以て今日に及んでゐる。氏は實に古典に通曉し國學に秀で、人格頗る高潔にして、學德兼備の士として普く尊崇されてゐる。

井上利一郎氏　豐島區西巢鴨三ノ三七八　電話　大塚一七一九

富士西商店(株)常務

組料工場長となり、後ち同社の工場長となつて敏腕を振ひ、大いに業績を上げ、現時前記の會社重役として東洋の財界に雄飛しつゝある。

妻梅明治一一年二月生（東京府士族川本清一氏二女）長男武（明治三一年八月生、東京高等商業學校卒業三井鑛山會社員）同妻富美（明治三八年二月生東京山田縫三郎四女）

木村　清氏　葛飾區本田篠原二七八　電話　本田七

空しからず天理教界に名聲を博し多數の信徒を擁して隆況を呈してゐる。氏は二代市三郎氏の二男にして夙に入信し、天理教中學校卒業後益々修業研鑽に勵み、若冠を以て前記の要職を兼ねて只管教化に努力しつゝあるが、天性の俊敏に加ふるに殉教の意氣燃ゆるが如く、教徒の信望を博し大いに前途を囑望されてゐる。

母まる（六一歳、天理教少講義）妻きよ（明治四二年生、同權訓導）

清水三十郎氏　日本橋區通三ノ五　電話日本橋二〇三五

羅紗直輸入及び高等洋服商、毛織物中央同盟會幹事、同日本橋區洋服商顧問、日京聯合會幹事、六ノ部會評議員

明治六年三月生、東京市

當家は清水長左衞門宗治の後裔にして先々代清水水翁は田安家の槍術指南番を勤め炳乎たる家柄である。

氏は幼少の頃先代喜三次氏の養子となり、後その家督を相續した。夙に牛込中學校に學び、卒業後洋服業界に志し、明治二十三年大谷金次郎氏の經營する洋服商に入つた。大谷氏は宮內省御用達を勤め都下同業界の重鎭として知られてゐたが、氏はその下に在つて修業に勵むこと約十ヶ年に亘り、明治三十三年獨立して日本橋に洋服商を開業した。爾來信用本位を以て健闘し、漸次業界に認められ同大正二年宮內省より御用命の光榮に浴して益々名聲を博した、同四十二年には更に羅紗の直輸入を開始し、兩々相俟つて逐年發展以て今日の盛況を呈するに至つた。資性溫厚にして義俠心に富み、大正元年以來東京洋服商組合日本橋區部長として業界の進展に貢獻したが、昭和四年之を辭し現時前掲の職に在つて活躍し、信望を博してゐる。宗旨は日蓮宗、趣味は和歌である。

妻らく（明治一五年生）二女さく子（一四歳）

平田　盛胤氏　小石川區第六天町一七　電話小石川三三九〇

神田明神社司

明治一九年東京帝國大學文科古典講習所卒業

神田明神は平將門を祀り江戸民衆の最も崇敬する神社として古來人口に膾炙してゐる。その社司として德望高き氏は、岐阜縣笠松町の出身にして、夙に教育界に志し、同縣立師範學校卒業後直ちに教鞭を執り、同縣下各小學校に轉勤して初等教育に盡瘁する所甚大であつた。明治十三年小學校を辭して上京し獨逸協會學校に學んだが、翌年東京府立師範學校に轉じ、後北豐島郡豐川小學校に職を奉じた。その後東京帝國大學に於て古典の研究に沒頭し、學成るや一橋高等女學校教諭に任ぜられ、又農科大學講師に聘せられ、更に母校の哲學科講師を兼任し、次で京華中學校講師となり、更に大成中學校國語傳習所等に教鞭を執り、教育界に活躍すること多年に亘り功績顯著なるものがあつた。明治二十七年教育界を去り神田明神社司となつて以來既に四十年に垂んとする長年月に亘り、誠心誠意神に仕へて他を顧みず、以て今日に及んでゐる。氏は實に古典に通曉し國學に秀で、人格頗る高潔にして、學德兼備の士として普く尊崇されてゐる。

井上利一郎氏　豐島區西巢鴨三ノ三七八　電話　大塚一七一九

富士西商店（株）常務

明治一四年三月生、兵庫縣

溫厚なる人格と事業經營上の獨特の手腕と相俟つて好評嘖々たる氏は、酒の本場として著名なる兵庫縣伊丹町に呱々の聲を揚げた。幼少の頃より業界に確乎たる名聲ある小西新右衞門氏の商店に入つて斯界活躍の第一歩を踏み、爾來孜々として毫も他を顧みず、一意專心業を見習ひ、只管同店の發展に努力した。その忠實と熱心、加ふるに機を見るに敏なる商才は年と共に店主に認められて愛顧を深くし、店內は勿論取引先に厚き信任を得るに至つた。昭和三年店主小西氏の經營に係る富士西商店がその組織を變更して株式會社となるや、氏は衆望を負ふて專務取締役に擧げられた。是れ蓋し氏の多年に亘る忠實黽勉と奮鬪努力の賜と稱すべきである。爾來此重任に在つて益々敏腕を揮ひ、同店の發展に貢獻以て今日に及んで居る。

佐々木國藏氏　兵庫縣武庫郡御影町家宇殿二、電話御影三五四五
內外綿(株)專務
明治八年一一月生、大阪府
明治二九年大阪高等商業學校卒業

氏は大阪府佐々木多助氏の實弟にして同府に呱々の聲を揚げ、大正二年分れて一家を創めた。夙に實業界に志し、大阪高等商業學校に入り專心學業に勵み、卒業後明治三十一年內外棉株式會社に入社した。爾來只管その職務に精勵し、經驗を積むに伴れて漸次その敏腕を發揮して同社の發展に貢献する所尠なからず、社內の信望を得て大正九年取締役に選ばれ後更に專務取締役に擧げられた。又此の間靑島商業會議所會頭等として敏腕を揮ひ、普く其名聲を認められるに至つた。

妻ハツノ（明治一七年生、大阪府中條榮次郎長女）養子三治（大阪府稻本榮三男）女津美（同三九年生、養子三治妻）女俊子（大正六年生）孫美代子（昭和二年生、三治長女）

丸山　精一氏　大阪市住吉區古寺町四八五、電話御影三四三
法學士、住友本家支配人
明治一八年五月生、富山縣
明治四四年東京帝大法科卒業

氏は富山縣丸山七孝氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に東京帝國大學法科大學に入り獨法科を優秀の成績を以て卒業後直ちに住友倉庫會社に奉職し、精勵恪勤次第にその敏腕を認められ累進して道頓堀支店支配人に擧げられた後住友合資會社に轉じ、人事部第一課長として敏腕を揮ふこと多年に及び、その後更に住友本家支配人の要職に拔擢され以て今日に及んでゐる。

妻霜（明治二四年生、宮崎縣中村道貫二女）長男修一（大正一〇年生）二男健次郎（同一五年生）長女信（同二年生）二女清（同四年生）三女まさ（同一三年生）

桃谷幹次郎氏　大阪市住吉區阪南町中一ノ二三、電話天王寺五三六
藥學博士、桃谷順天館(株)常務取締役、桃井商事(株)取締役、大阪藥學專問學校講師、桃谷化粧品研究所長
明治二二年九月生、和歌山縣
大正二年東京帝大醫科藥學科卒業

當家は代々紀州粉河町に於て庄屋を勤めたる舊家にして、嚴父政次郎氏は「美顏水」を創製し桃谷順天館を起して今日の業礎を築上げた。氏はその二男にして昭和二年分家した。夙に學業を卒へるや長兄順一氏と共に桃谷化粧品研究所を起して各種化粧品の製造に從事し、大正九年渡佛レソジョウ會社、シュメー會社等に於て化粧品及び香料の製法を研究し、同十年歸朝して藥學博士の學位を受けた爾來益々家業の發展に努力以て今日に及び、此の間日佛學館の創立に奔走したる功勞に依り、佛國政府よりシュパリエー、ド、レヂョン、ドノール勳章を授けられた。趣味は旅行等。

妻滿知子（明治三〇年生、京都府島津源藏長女、京都高女卒）外に三男一女

桃谷勘三郎氏　大阪市住吉區住吉町一二一九　電話天下茶屋二三二四
桃谷順天館(株)取締役
明治三二年三月生、和歌山縣

化粧品界に名聲嘖々たる桃谷順天館は桃谷政次郎氏の「美顏水」創製を第一歩とし爾來堅實なる營業方針と信用本位の取引、加ふるに巧妙なる宣傳と不斷の努力に依つて一路斯界に邁進し、今日の大成を爲すに至つた。氏はその三男にして桃谷順一、同幹次郎兩氏の實弟、同嘉四郎氏の實兄である。昭和二年分れて一家を創めたが、夙に家業に携はり、兩兄と共に嚴父の業を繼いで其の發展に努力し以て今日に及んでゐる。

妻登美子（明治三五年生、大阪府竹田英一妹）長男信行（大正一四年生）長女華子（同一五年生）二女聖子（昭和四年生）

中橋　武一氏　大阪市天王寺區悲田院一八、電話天下茶屋四九七
大阪ビル(株)社長、大阪陶業(株)取締役
大阪鐵工所、大阪商船各(株)監査役
明治二三年二月生、大阪府
明治四五年神戸高等商業學校卒業

嚴父中橋德五郎氏は大阪商船會社々長同縣長生郡豐岡村に呱々の聲を揚げ、大正五年その家督を嗣いだ。父は醫を業としたが氏は之を繼承せず、夙に明治十二年十四歳の時上京して叔父秋葉昌作氏の許に於て、土木建築請負業に從事し孜々として斯業の

上總國長柄郡栗生野邨鎭座米玉神社奉仕神主秋葉家の分家也。本國美濃。生國上總。紋は丸に違鷹の羽、丸に劍肩蛇篠ドウ。

清和天皇—貞純親王—經基（六孫王）—
美義（秋葉縫殿亮）
美時—美弘—美村—美豐—美貞—美祐—美秀—美保—保時—美澄—美長—美盛—美友—美綱—美清—美實（文左衞門

妻ハツノ（明治一七年生、大阪府中條榮次郎長女）養子三治（大阪府稻本榮三男）女津美（同三九年生、養子三治妻）女俊子（大正六年生）孫美代子（昭和二年生、三治長女）

丸山　精一氏　大阪市住吉區古寺町四八五、電話　御影三四三

法學士、住友本家支配人
明治一八年五月生、富山縣
明治四四年東京帝大法科卒業

氏は富山縣丸山七孝氏の長男として同桃井商事（株）取締役、大阪藥學專問學校講師、桃谷化粧品研究所長
明治二二年九月生、和歌山縣
大正二年東京帝大醫科藥學科卒業

當家は代々紀州粉河町に於て庄屋を勤めたる舊家にして、嚴父政次郎氏は「美顏水」を創製し桃谷順天館を起して今日の業礎を築上げた。氏はその二男にして昭和二年分家した。夙に學業を卒へるや長兄順一氏と共に桃谷化粧品研究所を起して各種化粧品の製造に從事し、大正九年桃谷順一、同幹次郎兩氏の實弟、同嘉四郎氏の實兄である。昭和二年分れて一家を創めたが、夙に家業に携はり、兩兄と共に嚴父の業を繼いで其の發展に努力し以て今日に及んでゐる。

妻登美子（明治三五年生、大阪府竹田英一妹）長男信行（大正一四年生）長女華子（同一五年生）二女聖子（昭和四年生）

中橋　武一氏　大阪市天王寺區悲田院一八、電話　天下茶屋四九七

大阪ビル（株）社長、大阪陶業（株）取締役
大阪鐵工所、大阪商船各（株）監査役
明治二三年二月生、大阪府
明治四五年神戸高等商業學校卒業

嚴父中橋德五郎氏は大阪商船會社々長たる外各社重役を兼ねて關西財界に飛躍すること多年、後政界に轉じて臺閣に列し、嘖々たる名聲を博した。氏は長男にして、中橋謹二氏の長兄である。夙に神戸高等商業學校に學び、卒業後大阪商船會社に入り、同社大株主として又重役として活躍する傍ら、同社系の大阪ビルディング社長、及び大阪鐵工所重役として今日に及び、關西財界に信望を博してゐる。佛教を信仰し、スポーツ、美術等に趣味がある。

父德五郎（元治元年生）妻敬子（明治三五年生、男爵小原駩吉二女）長女竹子（大正一〇年生）二女明子（同一一年生）

秋葉秀三郎氏　赤坂區表町一ノ三　電話青山四五一二

秋葉工務所々主、土木建築請業負
明治九年七月生、千葉縣

氏は千葉縣秋葉道太郎氏の長男として同縣長生郡豐岡村に呱々の聲を揚げ、大正五年その家督を嗣いだ。父は醫を業としたが氏は之を繼承せず、夙に明治十二年十四歳の時上京して叔父秋葉昌作氏の許に於て、土木建築請負業に從事し玆々として斯業の經驗を積むこと十數年に及び、

幼少時代の秋葉秀三郎氏

明治四十年獨立して秋葉工務所を開き土木建築請負業を創めた。爾來健鬪努力以て着々斯界に擡頭し、各方面の信望を博し業務逐年發展し、帝都斯業界に牢固たる地歩を占むるに至つた。此の間に請負ひたる工事は眞田伯邸、島津侯邸、佐々木侯邸、原六郎氏邸、毛利侯邸、三井家青山學院、千代田高女、日佛銀行其他大小枚擧に遑なく、現時東京土木建築組合第二支部赤坂區長として斯界に重きをなし、傍ら三井生命、國光生命兩保險會社の代理店をも兼營し、家運隆昌を極めてゐる。

妻サク（明治一四年生、叔父秋葉昌作長女）養子三郎、長女まつ（同四二年生、千代田高女卒、養子三郎妻）

〔秋葉秀家系〕

上總國長柄郡粟生野邨鎭座米玉神社奉仕神主秋葉家の分家也。本國美濃。生國上總。紋は丸に違鷹の羽、丸に劍眉蛇篠ドウ。

清和天皇—貞純親王—經基（六孫王）—
- 美秀（秋葉縫殿亮）
- 美時—美弘—美村—美豐—美貞—美祐—美秀—美保—保時—美澄—美長—美盛—美友—美綱—美清—美實（文左衞門寛文元年八月生、元祿二年三月卒）

和田久左衞門氏　大阪市南區南炭屋町三五、電話　南二六五

鴻池信託、三十四銀行各（株）監査役
明治二三年一〇月生、京都府

氏は三井源右衞門氏の實弟にして京都に呱々の聲を揚げ、前名を高隣と呼び、明治三十四年先代和田久左衞門氏の養子となり、大正四年家督相續と同時に久左衞門を襲名した。夙に三井銀行に入り銀行業務に關する經驗を積むこと多年に及び、後三十四銀行に轉じて其の監査役に擧げられ、更に鴻池信託會社監査役に就任し、兩社監査役を兼ねて今日に及んでゐる。巨萬の財を善用して社會公共事業に貢献し、實業界の發展に資したる功勞に依り、大正十一年紺綬褒章を下賜され更に昭和三年、同四年、同五年の三回に亘り紺綬褒章飾版を授けられた。

溫厚篤實、稀れに見る人格者として各方面に信望を博してゐる。
妻久子（明治三二年生、伯爵大谷光暢叔母）男安辰（大正一二年生）女隣子（同九年生）女久邇子（同一〇年生）

松尾　元顯氏　世田谷區代田一ノ六三五、電話松澤九九
原町紡績(株)專務、古河(名)理事
明治二三年一一月生、山口縣
大正二年東京高等商業學校卒業
實業界に敏腕の聞え高き氏は、山口縣萩町江向に呱々の聲を揚げた。夙に青雲の志を抱いて上京し東京高等商業學校に入つて孜々研學に勵み、優秀の成績を以て同校を卒業するや直ちに古河合名會社に入社した。爾來只管職務に黽勉し專ら社の發展に努め、その熱心と着實眞摯の性格は次第に認められて年と共に重んぜられるに至つた。その後古河商事株式會社、古河鑛業株式會社、富士電氣株式會社等に歷勤して益々敏腕を認められ、昭和元年以來古河合名會社に在籍の儘原町紡績株式會社の專務取締役に選ばれ、現にその職に在つて活躍しつゝある。資性溫厚にして人情に厚く高潔なる人格者として社内外の信望を博してゐる。宗旨は曹洞宗、趣味は謠曲、ゴルフ、圍碁等である。家庭には喜久子夫人(三三歳)との間に四男があつて、頗る圓滿である。

福井　三郎氏　澁谷區原宿二ノ一七〇　電話青山三〇九
勳三等、東京米穀商品取引所(株)監査役
安政四年五月生、岡山縣
岡山縣立師範學校卒業
往時政界に英名を馳せ、現時帝都輸贏市場に信望ある氏は、岡山縣士族福井眞兵氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げた。初め教育界に志し、師範學校卒業後各小學校に教鞭を執つて初等教育の普及に努めたが、幾何もなく操觚界に轉じ甲府日々新聞記者、峽中新報主幹等として東西に馳驅し大いに文名を擧げた。其の後朝鮮に航し、鷄林商業團を組織して其の團長に推され、後更に政界に進出し代議士に當選すること實に前後七回に及び、議政壇上に雄飛して烱眼敏才を謳はれ、多年の功勞に依つて勳三等に叙せられた。政界を去つて以來東京米穀商品取引所の監査役として敏腕を揮ひ、斯界の長老として尊敬されてゐる。性來義俠心に富み公共奉仕の念厚く、業界稀に見る崇高なる人格者として尊敬されてゐる。著書には「櫻蔭文庫」「實祚大典」等がある。宗旨は眞宗、趣味は讀書等。
妻フク(慶應元年生)養姪さだよ(明治一一年生、亡兄芳太郎養子、岡山縣人天野教增長女、現戸主）長男清

小西新右衞門氏　兵庫縣伊丹町三四〇
法學士、富士本商店・富士西商店各(株)取締役會長、本辰酒造(株)社長、大和釀造（株）代表取締役、日本相互貯蓄銀行(株)頭取、兵庫縣農工銀行・阪神電鐵・寶塚尼崎電氣・鴻池信託各(株)取締役、京都火災保險(株)監査役、酒造業、兵庫縣多額納稅者
明治八年一二月生、兵庫縣
明治三六年東京帝國大學法科卒業
銘酒「白雪」の釀造元として釀造業界に普く名聲を博し、兵庫縣下屈指の富豪として關西財界に信望隆々たる氏は、先代小西新右衞門氏の長男にして、現住地に呱々の聲を揚げ、明治三十九年家督相續と同時に前名利右衞門を改め新右衞門を襲名した。夙に東京帝國大學に學び政治を專攻し、卒業後大藏省理財局に勤務したが、後官界を去つて父祖の業を繼承した。資性頗る溫厚の君士人にして俊敏の譽れ夙に高く、往年海外に航して歐米各國の實狀に通曉し、著々財界に地歩を進めて現時は前掲の諸要職を兼ね活躍しつゝある。
妻完（明治二〇年生、子爵大河内正倫妹）長女靜子（大正八年生）二女文子（同一四年生）妹庸(明治一五年生)弟愼三(同一三年生、分家)

齊田　萬藏氏　世田谷區代田一ノ六三五
勳八等、澁谷劇場(株)社長、地主
明治一〇年七月生、東京府
當家は木曾義仲の後裔にして、左馬守の殁後齊田姓を稱へ信州樽井鄕を領して政學院卒）四女泰子(昭和二年生)

三島八喜藏氏　芝原區小山五〇三　電話高輪五五〇〇
橫濱タクシー(株)取締役、セールフレザー商會(資)出資社員
明治一四年八月生、東京府
敏腕達識加ふるに業界稀に見る高潔なる人格者として信望隆き氏は、神奈川縣天理教少教正、同本瑞支教會長、同東京支廳地方委員、同教友會南葛飾郡南部支會長、同青年會東京府地方評議員
明治三年一〇月生、長野縣
都下天理教界の重鎭たる氏は、幸七氏の二男として長野縣下に呱々の聲を揚げた。明治三十二年入信以來只管布教に努め、同四十一年布教所を設置して宣教所

社の發展に努め、その熱心と着實眞摯の性格は次第に認められて年と共に重んぜられるに至つた。その後古河商事株式會社、古河鑛業株式會社、富士電氣株式會社等に歷勤して益々敏腕を認められ、昭和元年以來古河合名會社に在籍の儘原町紡績株式會社の專務取締役に選ばれ、現にその職に在つて活躍しつゝある。資性溫厚にして人情に厚く高潔なる人格者として社內外の信望を博してゐる。宗旨は曹洞宗、趣味は謠曲、ゴルフ、圍碁等である。家庭には喜久子夫人(三三歲)との

代議士に當選すること實に前後七回に及び、議政壇上に雄飛して烱眼敏才を謳はれ、多年の功勞に依つて勳三等に叙せられた。政界を去つて以來東京米穀商品取引所の監査役として敏腕を揮ひ、斯界の長老として尊敬されてゐる。性來義俠心に富み公共奉仕の念厚く、業界稀に見る崇高なる人格者として尊敬されてゐる。著書には「櫻陰文庫」「實祚大典」等がある。宗旨は眞宗、趣味は讀書等。

妻フク(慶應元年生)養姪さだよ(明治一一年生、亡兄芳太郎養子、岡山縣人

呱々の聲を揚げ、明治三十九年家督相續と同時に前名利右衞門を改め新右衞門を襲名した。夙に東京帝國大學に學び政治を專攻し、卒業後大藏省理財局に勤務したが、後官界を去つて父祖の業を繼承した。資性頗る溫厚の君士人にして俊敏の譽れ夙に高く、往年海外に航して歐米各國の實狀に通曉し、著々財界に地步を進めて現時は前揭の諸要職を兼ね活躍しつゝある。

妻完(明治二〇年生、子爵大河內正倫妹)長女靜子(大正八年生)二女文子

同一四年生)妹庸(明治一五年生)弟愼三(同一三年生、分家)

齊田　萬藏氏　世田谷區代田一ノ六三五

勳八等、澁谷劇場(株)社長、地主

明治一〇年七月生、東京府

當家は木曾義仲の後裔にして、左馬守の歿後齊田姓を稱へ信州樽井鄕を領してゐたが、後武藏國荏原郡に轉住した。代々名主を勤め苗字帶刀を許され豪農として知られてゐたが、七世の祖は醫者となり、八世平吉は漢學者として起ち東野と號し、九世萬藏は畫家となり雲岱と號した。氏は十二世の當主にして、先代又一郎氏の長男に生れ明治四十年家督を相續した。之より先き日露戰役に從軍して偉功を樹て勳八等に叙せられ、除隊後家業に從事する傍ら世田ケ谷町會議員同學務委員等に選ばれて自治に貢獻する所尠なからず、夙に德望隆々たるものがある。宗旨は眞言宗、趣味として植木、盆栽、繪畫等を好み、仙洲の雅號を以て知られてゐる。

妻ふみ(明治二二年生、池田松五郎二女)長男平太郎(同三九年生、中央大學卒)二男隆(同四一年生拓殖大學卒)二女最譽子(同三七年生、佐賀縣人持永秀武妻)三女實枝(同四二年生、家政學院卒)四女泰子(昭和二年生)

三島八喜藏氏　荏原區小山五〇三　電話高輪五五〇〇

橫濱タクシー(株)取締役、セールフレザー商會(資)出資社員

明治一四年八月生、東京府

敏腕達識加ふるに業界稀に見る高潔なる人格者として信望隆き氏は、神奈川縣人三島五郎氏の長男として東京に生れ、大正七年家督を相續した。夙にセールフレザー商會に入社し、只管職務に恪勤して次第に信任を得、蓄音器部販賣主任に進み、後機械部販賣主任に轉じ、更に社長秘書に拔擢され、雜貨部長の要職に擧げられ、同社に在つて敏腕を揮ひその發展に努力すること多年に及び、顯著なる功績は普く社內に認められてゐる。現時も依然同社主腦部に在つて活躍する傍ら前記重役を兼ねて業界に濶步しつゝある資性敦厚にして義俠心に富み、社會公共的に盡したる功績も亦尠なからず、同業界は勿論一般の信望厚く、各方面より尊敬されてゐる。

妻チヨ(明治一四年生、神奈川縣人城田金次郎長女、橫濱高女卒)長男一夫(同三八年生、立敎大學卒)

三戸部邸治郎氏　江戸川區下鎌田三六〇

天理敎少敎正、同本瑞支敎會長、同東京支廳地方委員、同敎友會南葛飾郡南部支會長、同靑年會東京府地方評議員

明治三年一〇月生、長野縣

都下天理敎界の重鎭たる氏は、幸七氏の二男として長野縣下に呱々の聲を揚げた。明治三十二年入信以來只管布敎に努め、同四十一年布敎所を設置して宣敎所長に任ぜられ、大正十三年十月本瑞支會長に就任し以て近日に及んでゐる。此の間明治三十五年敎導職試補を許されたるを始めとし年を逐ふて地位進み、同四十年權少講義、同四十二年少講義、大正三年權中講義、同九年中講義、同十三年權大講義、同十四年大講義、同十五年權少敎正に順任して昭和三年少敎正に陞進し昭和五年九州、朝鮮、大連等の各地を歷遊して同敎の布敎に努めた。現時支敎會長としてその發展に意を注ぐと共に、前揭の職に在つて活躍しつゝある。尙同敎會に功績顯著なる理事は須賀三平、保戸田熊藏、野口武八、三橋倉吉諸氏である

妻てる(明治一六年生、天理敎少講義)嗣子寬之助(同三七年生、同訓導)同妻とら(同三七生、同權訓導)

宮本米次郎氏　瀧野川區西ケ原九〇四

天理敎少講義、同高安本原支敎會長、同

東京教友會北豐島郡支會部員
明治三四年九月生、東京市
昭和三年日本大學宗教科卒業
先考宮本伊三郎氏は食料品問屋を營み同業界に名聲を博してゐたが、不慮の災難に遭つて以來天理教を信仰し、明治四十一年入信し大正二年教會を創立して同教の發展に努力すること多年に亘り、天理教今日の隆盛は同氏の功績に負ふ所甚大なるは普く認める所にして、昭和五年他界後大講義を贈られた。氏はその二男として神田區に呱々の聲を揚げ、日本大學卒業後幾何もなく父の死後を享けて教會長を襲いだ。夙に天理教を遵奉し、教會長就任後は一意專心布教に努め、靈界奉仕を畢生の業として毫も他を顧みず、一路斯界に精進し、斯界の新進として德望隆々たるものがある。尚ほ當教會の理事たる五十嵐彌一郎、鎌田庄次、石田善五郎の三氏は共に氏を援け、相携へて教化に盡瘁してゐる。
母なか（五九歳、本宿宣教所長、天理教少講義、全婦人會本原委員部長）妻喜久惠（二四歳、天理教訓導）

鈴木堅次郎氏　世田谷區三軒茶屋四三　電話世田ケ谷一七二
駒澤町長、同町會議員、同社會事業協會長、東京府會議員、荏原郡病院組合會議員、明治大學（財法）商議委員、日本計理士協會（社法）理事
明治二〇年五月生、東京府
明治大學商科卒業
當家は四百餘年前より當地に住み祖先は世田ケ谷城主吉良家に仕へたる名門である。氏は鎌太郎氏の長男に生れ、駒澤旭小學校、世田ケ谷櫻小學校、駒澤高等小學校、日本中學校を經て明治大學商科に學び、卒業後直ちに東京市役所に入り市會及び調査課に勤務すること十一ケ年に及んだ。大正三年駒澤町會議員に選ばれて以來專ら町政の刷新に努力し、四期を通じて議員に連選され、昭和三年には府會議員に當選し、更に昭和六年一月衆望を負ふて町長に就任した。現時その任に在ると共に前記の要職を兼ねて活躍しつゝあるが、多年に亘つて駒澤町の隆興に盡したる功績は沒す可らざるものとして普く町内の尊敬を受けてゐる。熱心なる日蓮信者にして不撓不屈の氣魄に富み趣味としては鄕土研究、マツチレツテル乘車券及び名物籤の蒐集讀書旅行等を好み、鄕土並びに政治經濟に關する造詣深く研究論說等數百篇に及んでゐる。
妻達子、女要子

井坂孝氏　横濱市中區本町五ノ四八　電話本局五一三一　東京市芝區高輪南町三　電話高輪一二〇
横濱商工會議所會頭、日本商工會議所副會頭、横濱興信銀行副頭取、横濱取引所理事長、大成、横濱火災海上保險各（株）社長、ホテルニューグランド、横濱船渠各（株）取締役會長、藤澤ゴルフ（株）代表日本郵船、共盛不動產、東洋電機製造、日本無線電信、復興建築助成、横濱帆布東京報知機、東京灣汽船、横濱商品倉庫横濱新港倉庫、横濱工業、東京瓦斯、野澤屋、七十四銀行、程ケ谷ゴルフ、滿洲棉花各（株）取締役、松尾鑛業、日本香料東洋麻絲紡績各（株）監査役、日本カーボン（株）相談役
明治二年一二月生、茨城縣
明治二九年東京帝大法科卒業
氏は茨城縣士族井坂幹氏の三男、同縣下に生れ、明治二十九年分家した。大學卒業後直ちに東洋汽船會社に入り、爾來漸次財界に進出し、横濱財界の巨頭として今日に及んでゐる。趣味は園藝等。
妻せつ（明治一七年生、東京府原林之助長女）男富士男（同三七年生）長女富美（同三八年生、東京府高橋茂雄妻）二女喜美（同四二年生、同府有賀長毅妻）

伊東顯氏　深川區木場町四ノ一八　電話本所七八九
伊東製材所々主、東京製材協會幹事兼會計、北洋會副會長、木場四丁目町會長、藏前工業會正會員
明治二一年二月生、滋賀縣
大正四年東京高工附設工業教員養成所卒
郡下製材界に名聲嘖々たる氏は、滋賀年生、關西商業在學）二男亨（同六年生、府立三中在學）三男孝（同一〇年生）

岩田辰五郎氏　大森區山王一ノ三五六　電話大森一二六
入丸商店（株）取締役、東京株式取引所一般取引員
明治七年一月生、神奈川縣
帝都瑜瀛市場に地盤すること多年にして女卒業）二女富子（大正元年生）五女靜子（大正八年生）

青木菊雄氏　品川區大井鹿島谷三六　電話高輪一六五二
旭硝子（株）取締役、三菱造船、三菱電機三菱倉庫、三菱信託、古河電氣工業、汽車製造、菱華倉庫各（株）監査役、理化學興業（株）相談役、理化學研究所理事
慶應三年三月生、奈良縣

望隆々たるものがある。尚ほ當教會の理事たる五十嵐彌一郎、鎌田庄次、石田善五郎の三氏は共に氏を援け、相携へて教化に盡瘁してゐる。

母なか（五九歳、本宿宣教所長、天理教少講義、全婦人會本原委員部長）妻喜久惠（二四歳、天理教訓導）

鈴木堅次郎氏　世田谷區三軒茶屋四三　電話世田ケ谷一七二

駒澤町長、同町會議員、同社會事業協會長、東京府會議員、荏原郡病院組合會議つゝあるが、多年に亘つて駒澤町の隆興に盡したる功績は沒す可らざるものとして普く町内の尊敬を受けてゐる。熱心なる日蓮信者にして不撓不屈の氣魄に富み趣味としては鄕土研究、マツチレツテル乘車券及び名物籤の蒐集讀書旅行等を好み、鄕土並びに政治經濟に關する造詣深く研究論說等數百篇に及んでゐる。

妻達子、女要子

明治二年一二月生、茨城縣

明治二九年東京帝大法科卒業

氏は茨城縣士族井坂幹氏の三男、同縣下に生れ、明治二十九年分家した。大學卒業後直ちに東洋汽船會社に入り、爾來漸次財界に進出し、横濱財界の巨頭として今日に及んでゐる。趣味は園藝等。

妻せつ（明治一七年生、東京府原林之助長女）男富士男（同三七年生）長女富美（同三八年生、東京府高橋茂雄妻）二女喜美（同四二年生、同府有賀長穀妻）

伊東　顯氏　深川區木場町四ノ一八　電話本所七八九

伊東製材所々主、東京製材協會幹事兼會計、北洋會副會長、木場四丁目町會長、藏前工業會正會員

明治二一年二月生、滋賀縣

大正四年東京高工附設工業教員養成所卒

都下製材界に名聲嘖々たる氏は、滋賀縣甲賀郡龍池村の出身である。初め教育界に志し大津師範學校卒業後滋賀縣下の各小學校に教鞭を執つたが、約三ヶ年にして教育界を退いて上京し東京高工附設の工業教員養成所應用化學科に入り孜々研學に勵んだ。同校卒業後小石川小學校訓導として再び教育界に起つたが、大正五年辭して中央製紙株式會社に入社し、同社中津工場技師として活躍し、同七年同社眞岡工場長に拔擢せられた。然るに同年七月之を辭して自ら製材所を創立し爾來專らその經營に心血を濺ぎ、逐年發展以て今日に及んで居る。氏は性來頭腦頗る明晰にして、夙に秀才の譽れ高く學校時代は常に首席を以て一貫した。又資性溫厚にして公共奉仕の念厚く、前揭の任に在つて盡瘁する所尠なからず、同業界は勿論一般に信望隆々たるものがある

妻秀子（明治一六年生）長男宏（大正四年生、關西商業在學）二男亨（同六年生、府立三中在學）三男孝（同一〇年生）

岩田辰五郎氏　大森區山王一ノ三五六　電話大森二二六八

入丸商店（株）取締役、東京株式取引所一般取引員

明治七年一月生、神奈川縣

帝都輸贏市場に馳驅すること多年に亘り烱眼敏才の譽れ高き氏は、神奈川縣人岩田倉吉氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後分れて一家を創めた。十五歳の時、當時兜街に隆々たる名聲を馳せたる先代村上太三郎商店に入り孜々として店務に勵精し次第に店主の愛顧を受けるに至つた。爾來一意專心業界に精進し現時入丸商店重役として活躍しつゝあるが、性來の機敏の才は多年の經驗を積んで遺憾なく發揮され、その篤實なる性格と相俟つて業界に信望を博してゐる。

妻むら（明治九年生、靜岡縣人加藤品太郎妹）長男春一（同三二年生、慶大卒、內外編物會社勤務）同妻賴子（同四〇年生、志村豐作長女、神奈川縣立高女卒）二男久二（同三八年生、慶大卒）三男健三（同四一年生、慶大在學）四男慶四郎（大正五年生、村上賢二養子）長女幾子（明治四三年生、山脇高女卒業）二女富子（大正元年生）五女靜子（大正八年生）

青木　菊雄氏　品川區大井鹿島谷三六　電話高輪一六五二

旭硝子（株）取締役、三菱造船、三菱電機三菱倉庫、三菱信託、古河電氣工業、汽車製造、菱華倉庫各（株）監査役、理化學興業（株）相談役、理化學研究所理事

慶應三年三月生、奈良縣

明治二五年東京帝大法科卒業

氏は大和國郡山藩士青木左京氏の二男として郡山町に呱々の聲を揚げ、明治三十年分れて一家を創めた。之より先き東京帝國大學を卒業して直ちに三菱に入社し、爾來累進して三菱合資常務理事となり、又三菱系諸會社の重役として名聲を馳せ、現時前揭の職に在つて活躍しつゝある。

妻トミ（明治五年生、長崎縣橫山雄左衞門二女）長男岩雄（同三四年生、三菱銀行員）二男定雄（同三八年生）同妻三重子（同四四年生、京都府片山三郎二女）三男安雄（同四三年生）養子直壽（同二六年生、長野縣池內良作二男）長女恒子（同三六年生、直壽妻）孫和雄（大正一四年生、直壽長男）二女松子（明治四〇年生、茨城縣士族加納百里妻）

石塚　粂藏氏　小石川區戸崎町三　電話小石川三一一七

日本製鋼所(株)專務、价川鐵道(株)取締役

明治一九年二月生、東京府

明治四一年東京高等工業學校卒業

本邦製鋼業界の雄日本製鋼所に在つて敏腕の聞え高き氏は、東京府人石塚德次郎氏の長男に生れ、昭和二年前戸主小蘭の死跡を相續した。幼少の頃より頭腦緻密透徹を以て知られ、長じて東京高等工業學校に學ぶや頭腦益々冴え、夙に將來の飛躍を期待されてゐた。卒業後直ちに實業界に投じ、當初技師として敏腕を揮ひ、次第に地歩を進めて今や日本製鋼所の專務取締役たる外价川鐵道株式會社の重役をも兼ねて活躍し、名聲を博してゐる。資性頗る敦厚にして情誼に厚く、業界稀に見る人格者として社内は勿論廣く一般に尊敬されてゐる。

母ミホ(慶應三年生、子爵大久保立姉)

妻昭(明治三二年生、東京府人松本楓湖五女)

石川　源二氏　横濱市神奈川區幸ケ谷三五電話本局一七七七

從四位、勳四等、工學博士、石川工業所(資)代表社員

明治一五年一〇月生、山口縣

明治四〇年東京帝國大學工科卒業

土木建築界に名聲嘖々たる氏は、山口縣人吉野市之進氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治三十八年石川榮吉氏の養子となり其の家督を相續した。山口高等學校を經て東京帝國大學に進み、土木科を專攻し、優秀の成績を以て卒業後直ちに官界に入り、遞信省技師を始め航路標識管理所技師、燈臺局技師等に歷任して漸次その手腕を認められ、工務課長に陞進した。昭和三年任を辭すると同時に自ら工務所を開設して土木建築界に進出し、爾來健鬪努力次第に斯界の信望を博し今日の隆況を呈するに至つた。此の間大正九年工學博士の學位を授與され又曩に日本築造株式會社々長に擧げられた。大正十年には歐米に航して先進諸國の土木界を視察し、學識經驗共に斯界の權威として普く名聲を博してゐる。趣味は旅行、圍碁等。

妻シエ(明治二四年生、山口縣立高女卒)長男元夫(同四三年生)二男淳二(大正五年生)二女澤子(同一二年生)

ハッ七師　清二氏　牛込區南町二七

著述家

明治二六年九月生、岡山縣

大衆作家の巨星として文名江湖に赫々たる氏は、本名を赤松靜太と呼び、赤松久五郎氏の長男として岡山縣邑久郡國府村福里に呱々の聲を揚げた。家は農業の傍ら小商を營んでゐたが、幼にして父)を喪ひたる爲め赤貧洗ふが如き中に母と共に辛うじて糊口を凌ぎ十一歳の時吳服屋の丁稚となり、十三歳の時荒物並履物商に移り、十七歳の時更に活版用具商に轉じ、辛酸具さに嘗めた。性來文學を好み勤務の餘暇を以て夜學に通ひ或は文學書を繙いて窃に耽讀し、遂に文學を以て起つ決心を固めて十九歳の時上京し石川半山氏の門下生となつた。二十一歳の時中國民報社に入社して以來、大阪時事新聞、大阪朝日新聞等に轉勤し記者生活を送ること十餘年に及んだが、後辭して著述に轉じ續々名作を發表して文名を博し今や大衆作家の覇者として普く謳歌せられてゐる。「砂繪呪縛」「水野十郎左衞門」「青頭巾」「青鷺の靈」等は傑作中の傑作として好評を博し、代表的大衆讀物として人口に膾炙してゐる。

大谷竹次郎氏　麹町區中六番町二三　電話九段七六

松竹興業・歌舞伎座・新富座・明治座各(株)社長、松竹キネマ(株)副社長、常盤興業(株)專務、帝都興業(株)代表取締役邦樂座・松竹土地建物興業各(株)取締役

東京商工會議所議員、京都府多額納稅者

明治一〇年一二月生、京都府

興業界の覇者として聲望隆々たる氏は先代榮吉氏の次男に生れたが。故あつて長兄松次郎氏は白井家を繼ぎ、氏は明治三十年三月大谷家を相續した。祖先は島津藩に仕へたが祖父森田傳太郎氏の代に京都に移住し、父の代には大谷姓を名乘の住職として德望隆々たる氏は、埼玉縣忍藩士隈山泰助氏の息として同地に呱々の聲を揚げた。明治三年新義眞言宗の總本山たる奈良縣の長谷寺に入り壇化主隆盛權僧正に就いて得度し、專心修業を積んで同九年群馬縣邑樂郡館林町の遍照寺住職となつた。後新義眞言宗代議員、管理學頭、支所長等の要職に擧げられ、又父の膝下に在つて丹青の道に勵み、天禀の才は父の薫陶宜しきを得て年と共に伸び、父亡き後は或は古畫に依つて古名人の筆致を窮め、或は現存大家の名作を他山の石とし只管研鑽に努力した。その苦心空しからず筆勢愈々冴え、筆意巧緻の極に達して次第に帝都畫壇に認められるに至り、現時前掲の任に在つて益々斯道

重役をも兼ねて活躍し名聲を博してゐる。資性頗る敦厚にして情誼に厚く、業界稀に見る人格者として社内は勿論廣く一般に尊敬されてゐる。

母ミホ（慶應三年生、子爵大久保立姉）
妻昭（明治三二年生、東京府人松本楓湖五女）

石川　源二氏　横濱市神奈川區幸ケ谷三五電話本局一七七七
從四位、勳四等、工學博士、石川工業所（資）代表社員
明治一五年一〇月生、山口縣

た。大正十年には歐米に航して先進諸國の土木界を視察し、學識經驗共に斯界の權威として普く名聲を博してゐる。趣味は旅行、圍碁等。

妻シエ（明治二四年生、山口縣立高女卒）長男元夫（同四三年生）二男淳二（大正五年生）二女澤子（同一二年生）

ハッ七師　清二氏　牛込區南町二七
著述家
明治二六年九月生、岡山縣
大衆作家の巨星として文名江湖に赫々述に轉じ續々名作を發表して文名を博し今や大衆作家の覇者として普く謳歌せられてゐる。「砂繪呪縛」「水野十郎左衞門」「青頭巾」「青鷺の靈」等は傑作中の傑作として好評を博し、代表的大衆讀物として人口に膾炙してゐる。

大谷竹次郎氏　麹町區中六番町二三
電話九段七六
松竹興業・歌舞伎座・新富座・明治座各（株）社長、松竹キネマ（株）副社長、常盤興業（株）專務、帝都興業（株）代表取締役、邦樂座・松竹土地建物興業各（株）取締役

東京商工會議所議員、京都府多額納稅者
明治一〇年一二月生、京都府

興業界の覇者として聲望隆々たる氏は先代榮吉氏の次男に生れたが。故あつて長兄松次郎氏は白井家を繼ぎ、氏は明治三十年三月大谷家を相續した。祖先は島津藩に仕へたが祖父森田傳太郎氏の代に京都に移住し、父の代には大谷姓を名乘つて純然たる町人となり、京都花見小路の祇園館に賣店を營み家運大いに衰微した。氏は十二三歳の頃より實兄松次郎氏と共に父母を助けて辛酸具さに嘗め、赤貧洗ふが如き中に勃々たる雄志を抱いて奮鬪努力し、十九歳の時京都阪井座の歩方の一人に加はつた。是れ氏が興業界進出の第一歩にして、爾來氏の非凡なる經營の才腕と不撓不屈の健鬪は着々功を收め、軈て關西劇界を風靡し更に帝都興行界を席捲し、大松竹王國建設の覇業は成された。覇氣滿々たる一面に於て頗る涙脆く、幼時より「孝行兄弟」として知られ社會公共的貢献尠なからず、業界の範として推服されてゐる。

小野方良行氏　小石川區大塚坂下町一六電話大塚七六四
一等司教權大僧正、音羽護國寺住職
安政元年一一月生、埼玉縣

都下屈指の巨刹音羽護國寺第四十九世の住職として德望隆々たる氏は、埼玉縣忍藩士隣山泰助氏の息として同地に呱々の聲を揚げた。明治三年新義眞言宗の總本山たる奈良縣の長谷寺に入り壇化主隆盛權僧正に就いて得度し、專心修業を積んで同九年群馬縣邑樂郡館林町の遍照寺住職となつた。後新義眞言宗代議員、管理學頭、支所長等の要職に擧げられ、又此の間豐山東校に學び或は大内青巒、杉竹外等の諸大家に師事して經史詩文等を學び、次第に新義眞言宗界に重んぜられ繪刷「一切經」の刊行に際してはその校合の衝に當る等功績少なからず、明治二十七年豐山大學林教頭に任ぜられ、同三十三年には邑樂郡各宗協會々長に推され、更に大正十五年名刹護國寺に就任すると同時に權大僧正を賜はつた。現時その任に在ると共に教化事業、慈善事業等に携はり、畢生を靈界に捧ぐる有德の名知識として尊敬されてゐる。趣味として書畫建築等を好み、書に堪能である。

高林　五峰氏　日本橋區北島町一ノ三五
電話茅場町一五五八
畫家、泰東書院總務、日本美術協會理事
安政六年生、東京市

先考高林二峰氏は上州の出身にして畫壇に雄飛することと多年、練達の伎を以て斯界に名聲を馳せた。氏は幼少の頃より父の膝下に在つて丹青の道に勵み、天稟の才は父の薫陶宜しきを得て年と共に伸び、父亡き後は或は古畫に依つて古名人の筆致を窮め、或は現存大家の名作を他山の石とし只管研鑽に努力した。その苦心空しからず筆勢愈々冴え、筆意巧緻の極に達して次第に帝都畫壇に認められるに至り、現時前掲の任に在つて益々斯道に精進すると共に、斯界の發達に貢献しつゝある。今や氏の老練枯淡の藝術は普く斯界に知られてゐるが、就中氏の最も得意とする「仁王」の畫に於ては斷然他の企及を許さず、當代隨一の名人として推賞され知名の畫家にして氏の教へを乞ふ者が尠くない。資性溫厚にして公共奉仕的義氣に富み、崇高なる人格は卓拔なる技倆と相俟つて名聲を博してゐる。

梅村　貞明氏　芝區高輪南町五一
電話高輪一〇一七
從四位、勳四等、法學士、辯護士、帝國海事協會常務理事、日本海員掖濟會理事
船員職業紹介所委員會委員
明治元年四月生、東京府
明治二五年東京帝國大學英法科卒業

溫厚篤實なる人格者として信望高き氏は東京府士族梅村貞友氏の長男に生れ、明治三十三年家督を相續した。大學卒業後司法官試補となり、後地方海員審判所

理事官兼船舶試驗所試驗官に就任し、更に高等海員審判所審判官に轉じ、漸次その敏腕を認められて累進し遞信省海事局長に擧げられた。その後地方海員審判所長、遞信管理局書記官、東部遞信局海事部長、北海道遞信局長等に歷任して名聲を博した。後官界を去り、帝國海事協會常務理事に就任し、現時その任に在る傍ら前揭の職を兼ねて活躍しつゝある。趣味は謠曲、圍碁、日本音樂等。

妻たね(明治九年生、府立高女卒)男貞夫(大正一一年生)

潮田　江次氏　神奈川縣鎌倉町長谷大谷三五〇　電話　鎌倉一四三

慶應義塾大學教授
明治三四年六月生、東京府
慶應義塾大學政治科卒業

先考潮田傳五郎氏は東京帝國大學電氣工學科卒業後芝浦製作所に入社し電氣知識の幼稚なる時代に於て同氏の卓拔なる技倆は斯界に異彩を放ち、同製作所の發展に顯著なる功績を樹てたるのみならず本邦電氣事業界に裨益する所甚大であつた。氏は傳五郎氏の二男にして、母は明治の先覺者福澤諭吉氏の第五女みつ子女史である。夙に慶應幼稚舍、同普通部を卒業後、大正十一年渡米して各大學に學び、歸朝後母校の講師に擧げられたが、同十四年再び遊學の途に上り、英京倫敦獨逸等の各地に於て研鑽を積み、昭和四年歸朝して再び母校に教鞭を執り新知識を傾注して後進の指導に當り、現時政治哲學を擔當してゐる。資性溫厚篤實にして學識豐富、研究心に富み、新進教授として學生の崇敬を受け、大いに前途を囑望されてゐる。趣味は音樂、文藝等である。

妻マリア(獨逸生)

山添　平作氏　本郷區本郷四ノ四　電話小石川三一三六

圖書出版業文武堂書店主
明治一二年一二月生、新潟縣

奮鬪努力以て現在の地歩を開拓したる立志傳中の人として同業界に信望厚き氏は、山添平太郎氏の長男として新潟縣西蒲原郡濱町に呱々の聲を揚げた。二十歲の時勃々たる雄志を抱いて上京し、圖書出版の有望なるに着眼して斯界の雄東京堂に入り、爾來誠心誠意を披瀝して只管業務に精勵すること實に二十有餘年に及び、大正五年四月現在の地に獨立開業した。開業以來多年の蘊蓄を傾注して經營の衝に當り、誠實本位、信用第一主義を標榜して店勢の擴張に努力したる効果空しからず、漸次顧客の信用を得て業績逐年向上し、大正十二年の大震災には一大打擊を蒙つたが幾何もなく復興し、現時主として兒童關係の圖書出版を爲し業勢隆々たるものがある。資性溫厚にして獨立進取の氣象に富み、社會公共に奉ずるの念厚く、曩に本郷四丁目表町會長に擧げられ現にその幹事として町內の和平親睦に盡し、或は同業界の發展に貢獻し、鄕黨後進の接導に盡瘁する等、その功績は顯著にして、事業經營の敏腕と相俟つて好評を博してゐる。

妻ひさ子(東京府人大久保郁三郎長女)との間に二男がある。

福井　正憑氏　赤坂區青山北町四ノ一〇六　電話(代)青山三九九

醫學博士、福井產婦人科病院長、母性保健院長
明治二二年一月生、奈良縣
大正三年千葉醫學專門學校卒業

產婦人科界の權威として名聲嘖々たる氏は奈良縣宇陀郡三本松の出身である。鄕里の小學校卒業後明治三十八年上京し獨逸協會中學校を經て千葉醫專に學び、同校卒業後母校助手及び縣立千葉病院醫員となり實地研究を積んだ。大正五年東京帝國大學醫學部介補及東京市醫員となり、同大學及び市養育院に於て內科を確居龍太郎博士、物理療法を眞鍋學士、外科を井上善吉博士、眼科を河本博士に就いて夫々專門的に研究し、後望月產婦人科病院に於て產婦人科を研鑽し、大正七年鄕里に福井病院を開設した。その後三重縣名張町に名張病院を設けたが、大正十二年之を廢して上京し慶應大學醫學部助手として研究を重ね、同年醫學博士の學位を授與された。昭和三年曩に勤務したる望月產婦人科病院を讓受け、諸設備を改修し規模を擴張して福井產婦人科病院を去るや直ちに實業界に投じ、菅生商會外國貿易部に勤務し後國際信託金融課に轉じたが、大正十年再轉して松竹合名會社に入社した。爾來松竹王國建設の偉業に參劃して敏腕至らざるなく、常に第一線に活躍して日に名聲々博し、以て今日に及んでゐる。資性溫厚にして而も新取の意氣燃ゆるが如く、多年の經驗と研究に依つて今やキネマ界の一大權威奮戰力鬪遂に克く當選の榮を獲て中央政界に進出した。政治家としての日尙ほ淺きも、博識多才特に財政に曉通し政界の刷新を標榜して、進取の意氣に燃える氏の將來に對しては各方面より多大の期待を以て迎へられてゐる。一方實業界に於ては屋井乾電池株式會社の監査役として同社の發展に貢獻する所尠なからず、政界、實業界の新進にして信望[illegible]

先考潮田傳五郎氏は東京帝國大學電氣工學科卒業後芝浦製作所に入社し電氣知識の幼稚なる時代に於て同氏の卓拔なる技倆は斯界に異彩を放ち、同製作所の發展に顯著なる功績を樹てたるのみならず本邦電氣事業界に裨益する所甚大であつた。氏は傳五郎氏の二男にして、母は明治の先覺者福澤諭吉氏の第五女みつ子女史である。夙に慶應幼稚舍、同普通部を卒業後、大正十一年渡米して各大學に學び、歸朝後母校の講師に擧げられたが、蒲原郡濱町に呱々の聲を揚げた。二十歳の時勃々たる雄志を抱いて上京し、圖書出版の有望なるに着眼して斯界の雄東京堂に入り、爾來誠心誠意を披瀝して只管業務に精勵すること實に二十有餘年に及び、大正五年四月現在の地に獨立開業した。開業以來多年の蘊蓄を傾注して經營の衝に當り、誠實本位、信用第一主義を標榜して店勢の擴張に努力したる効果空しからず、漸次顧客の信用を得て業績逐年向上し、大正十二年の大震災には一大

大正三年千葉醫學專門學校卒業

產婦人科界の權威として名聲嘖々たる氏は奈良縣宇陀郡三本松の出身である。鄕里の小學校卒業後明治三十八年上京し獨逸協會中學校を經て千葉醫專に學び、同校卒業後母校助手及び縣立千葉病院醫員となり實地研究を積んだ。大正五年東京帝國大學醫學部介補及東京市醫員となり、同大學及び市養育院に於て內科を確居龍太郎博士、物理療法を眞鍋學士、外科を井上善吉博士、眼科を河本博士に就いて夫々專門的に研究し、後望月產婦人科病院に於て產婦人科を研鑽し、大正七年鄕里に福井病院を開設した。その後三重縣名張町に名張病院を設けたが、大正十二年之を廢して上京し慶應大學醫學部助手として研究を重ね、同年醫學博士の學位を授與された。昭和三年曩に勤務したる望月產婦人科病院を讓受け、諸設備を改修し規模を擴張して福井產婦人科病院と改稱し爾來院長として診療に應ずる傍ら、或は著書に、或は新聞雜誌に產婦人科に關する意見を發表し、或は產婆を養成する等盛んに活躍以て今日に及び、產婦人科就中不姙症の權威として普く知られてゐる。

城戸　四郎氏　赤坂區榎町九　電話靑山四六〇四

法學士、松竹興業(株)專務、松竹キネマ松竹土地建物興業・明治座各(株)取締役新富座(株)監査役、松竹キネマ蒲田撮影所々長

明治二七年生八月

大正八年東京帝國大學英法科卒業

縱橫無碍の才腕を揮つてキネマ界に雄飛し驍名洽ねき氏は、北村宗平氏の息に生れ後城戸家の養子となつた。幼少の頃より俊敏の譽れ高く、第一高等學校を經て東京帝國大學に進み、拔群の成績を以て學門を去るや直ちに實業界に投じ、菅生商會外國貿易部に勤務し後國際信託金融課に轉じたが、大正十年再轉して松竹合名會社に入社した。爾來松竹王國建設の偉業に參劃して敏腕至らざるなく、常に第一線に活躍して日に名聲々博し、以て今日に及んでゐる。資性溫厚にして而も新取の意氣燃ゆるが如く、多年の經驗と研究に依つて今やキネマ界の一大權威として普く認められ、現時前揭の要職を兼ねて益々松竹王國の飛躍に貢獻しつゝある。

駒井　重次氏　小石川區金富町五六　電話小石川二〇三五

從五位、衆議院議員、

明治二八年二月生、東京府

大正九年東京帝國大學法科卒業

政界の新進氣鋭の士として前途を囑望されてゐる氏は、東京府人駒井重格氏の息として呱々の聲を揚げた。大學卒業するや直ちに官界に投じ、大藏省に奉職して前橋稅務署長に進み、後龜戸、神田橋各稅務署長に歷任して次第に斯界に擡頭し、更に銀行檢査官に陞任し有爲の財務官として有望視されるに至つたが、昭和七年の總選擧に際し東京市第二區より代議士立候補を宣し、古强者の間に伍して奮戰力鬪遂に克く當選の榮を獲て中央政界に進出した。政治家としての日尙ほ淺きも、博識多才特に財政に曉通し政界の刷新を標榜して、進取の意氣に燃える氏の將來に對しては各方面より多大の期待を以て迎へられてゐる。一方實業界に於ては屋井乾電池株式會社の監査役として同社の發展に貢獻する所尠なからず、政界、實業界の新進として信望隆々たるものがある。

妻壽賀（樞密顧問官水町袈裟六長女）

男一夫、女華子

横井　有氏　豐島區池袋三ノ一三五四　電話人塚三二八八

工學士、屋井乾電池(株)代表取締役

明治二三年九月生、岡山縣

大正五年九州帝國大學工科電氣科卒業

世界的に名聲隆々たる屋井乾電池株式會社の代表者として敏腕の聞え高き氏は岡山縣阿哲郡新美村の出身である。夙に九州帝國大學に於て電氣科を專攻し、優秀の成績を以て卒業するや直ちに實業界に投じ、日立製作所に入社し技師として活躍し、勵精恪勤次第に社內の信任を得るに至つた。大正九年同社を辭し電氣化學工業會社に轉じ技師長に擧げられ、同社の發展に盡瘁する所甚大であつたが、昭和三年之を辭して日本電力株式會社に

移り、同社神戸支店長の要職に在つて縱横の才腕を發揮し、更に同五年五月京都電機會社に轉じ、取締役兼東京支店長として敏腕を謳はれた。昭和六年五月屋井乾電池合資會社が、その組織を改めて株式會社となし、規模を擴張し內容の充實を圖るに及んで、聘せられて同社に入り由緒ある同社の代表取締役として活躍以て今日に及んでゐる。趣味は野外運動等である。

日野水忠作氏　世田ケ谷區若林一六九　電話世田ケ谷三一四八

三井合名會社庶務課長

明治二〇年一一月生、愛媛縣

大正二年東京帝國大學法科大學英法科卒業

大財閥三井合名會社に庶務課長の要職に在り令名隆々たる氏は愛媛縣下に於て豪農として聞えたる日野水家に生誕した當家は累代農を業とし樋水姓を稱えてゐたが明治初年現姓に改めた。氏は夙に鄕校を經て東京帝大に英法科を專攻し、之を卒えるや直に三井合名會社に入り、頭腦の明敏と、不斷の努力とは相俟つて漸次認められ入社後幾年を出でず、大正七年同社より特派員附として支那北京に渡航し該地に於て敏腕を振ふ事多年、昭和一二年歸朝するや本社に山林課長代理として就任し益々名聲を博するに至つた。其の後擧げられて庶務課長の要職に就き今日に至つてゐるが、資性頗る敦厚なる好紳士として社內外に信望厚く、年齡今や壯、將來の期待は又絕大なるものがある。

池田元太郎氏　世田ケ谷區羽木一七六　電話　四谷三九四〇

池田化學工業(株)社長

明治一五年一一月生、東京府

獨逸皇立工科大學卒業

本邦に於ける色料製造界の偉大なる貢献者として尊崇されてゐる氏は、先代池田安之助氏の長男として呱々の聲を揚げた。東京高等工業學校卒業後渡獨しシャロッテンブルグ、テヒニッセ、ホッホ、シューレーに入學し、色素化學を專攻すること三ケ年に及び、その蘊奧を究めて大正四年歸朝し翌五年五月現在の地に池田化學工業所を設立した。爾來同所經營の衡に當り染料顏料等の製造に從事する傍ら不斷の研鑽を積んで各種堅牢不變色々料の工業的製出に成功し、更に大正九年以來自家製色料を材料とする繪具製造部を兼營し業績隆々普く江湖の信望を得て逐年發展し、昭和三年株式組織に改革以來業礎益々鞏固となり、氏が苦心研究の結晶たる四專賣特許權を事業の根幹とし、活躍以て今日に及んでゐる。色料製造界の權威として夙に名聲を博し、著書には「色素レーキ」「繪具製造法」「色彩常識」等がある。趣味はスポーツ、徒步旅行等。

妻春子、長男博、長女春江

植村泰二氏　市外砧村喜多見成城七九五　電話　砧一二一

農學士、オリエンタル寫眞工業、オリエンタル酵母工業各(株)取締役、大日本麥酒(株)監査役、寫眞化學研究所(株)取締役所長

明治二九年八月生、東京府

大正一二年北海道帝大農科卒業

嚴父植村澄三郎氏は大日本麥酒其他各社の重役を兼ねて財界に雄飛すること多年、斯界に嘖々たる名聲を馳せてゐる。氏はその二男、同甲子郎氏の實弟にして大正十二年分れて一家を創めた。夙に北海道帝國大學農科農藝化學科を卒業後、實業界に入り、奮鬪努力次第にその地步を開拓し、現時前揭各社重役を兼ねて活躍しつゝある。基督敎を信仰し、趣味は洋樂、野球、ランニング、乘馬、ゴルフ等頗る廣汎である。

妻マサ（明治三一年生、東京府太田長佑二女）長女泰子（大正一二年生）二女文子（同一五年生）三女百合（昭和二年生）四女公（同三年生）

井上信氏　品川區大井庚塚兇二六　電話　大森一四七二

三井信託(株)幹事、三信建物(株)常務

明治一八年五月生、東京市

明治三八年東京高等商業學校卒業

都下財界に敏腕の聞え高き氏は東京府人井上泰氏の五男に生れ、大正二年分れて一家を創めた。專門を去るや直ちに三

池部鈞氏　大森區新井宿四ノ一〇四

漫畫家

明治一九年三月生、東京府

明治四三年東京美術學校卒業

漫畫の流行は近年特に著しく、斯界の重鎭たる氏の名聲も亦日に隆々たるものがある。氏は幼少の頃より繪畫を好み、實業界に飛躍すること多年に亘り、縱横の才腕と高潔なる人格と相俟ち名聲嘖々たる氏は、東京府士族盧辰氏の長男として呱々の聲を揚げ後分れて一家を創めた。夙に實業界に投じ、着實眞摯主義を以て業務に精勵したる努力空しからずして漸次その地步進み、加納鑛山株式會社專務取締役、或は加納電氣亞鉛株式會社

業

大財閥三井合名會社に庶務課長の要職に在り令名隆々たる氏は愛媛縣下に於て豪農として聞えたる日野水家に生誕した當家は累代農を業とし樋水姓を稱えてゐたが明治初年現姓に改めた。氏は夙に鄉校を經て東京帝大に英法科を專攻し、之を卒えるや直に三井合名會社に入り、頭腦の明敏と、不斷の努力とは相俟つて漸次認められ入社後幾年を出でず、大正七年同社より特派員附として支那北京に渡航し該地に於て敏腕を振ふ事多年、昭和二年歸朝するや本社に山林課長代理として三ケ年に及び、その蘊奥を究めて大正四年歸朝し翌五年五月現在の地に池田化學工業所を設立した。爾來同所經營の衡に當り染料顏料等の製造に從事する傍ら不斷の研鑽を積んで各種堅牢不變色々料の工業的製出に成功し、更に大正九年以來自家製色料を材料とする繪具製造部を兼營し業績隆々普く江湖の信望を得て逐年發展し、昭和三年株式組織に改革以來業礎益々鞏固となり、氏が苦心研究の結晶たる四專賣特許權を事業の根幹とし、活躍以て今日に及んでゐる。色料製氏はその二男、同甲子郎氏の實弟にして大正十二年分れて一家を創めた。夙に北海道帝國大學農科農藝化學科を卒業後、實業界に入り、奮鬪努力次第にその地歩を開拓し、現時前掲各社重役を兼ねて活躍しつゝある。基督教を信仰し、趣味は洋樂、野球、ランニング、乘馬、ゴルフ等頗る廣汎である。

妻マサ（明治三一年生、東京府太田長佑二女）長女泰子（大正一二年生）二女文子（同一五年生）三女百合（昭和二年生）四女公（同三年生）

井上　信氏　品川區大井庚塚兇二八　電話　大森一四七二

三井信託(株)幹事、三信建物(株)常務

明治一八年五月生、東京市

明治三八年東京高等商業學校卒業

都下財界に敏腕の聞え高き氏は東京府人井上泰氏の五男に生れ、大正二年分れて一家を創めた。學門を去るや直ちに三井物産に入社し、明治三十九年同社紐育支店に轉じ、大正九年シドニー支店に移り、同十一年歸朝と同時に本社參事に擧げられた。同十三年三井信託株式會社に轉じ、更に昭和二年末三信建物株式會社の創立されるや其の常務取締役に選ばれ爾來兩社の樞機に參與して發展に努力し以て今日に及んでゐる。夙に多年の經驗を積んで才腕冴え、稀に見る高潔なる人格者として社内外の信望を博してゐる。宗旨は禪宗、趣味として一般スポーツを嗜み就中ゴルフに長じ、東京ゴルフ、程ケ谷ゴルフ、ロータリークラブ等の各會員である。

妻恒子（明治二九年生、愛知縣士族天野重次長女、紐育高女卒）長男孝（大正六年生）二男禮二（昭和元年生）長女文子（大正四年生）二女貞子（同九年生）三女道子（同一一年生）

池部　鈞氏　大森區新井宿四ノ一〇四

漫畫家

明治一九年三月生、東京府

明治四三年東京美術學校卒業

漫畫の流行は近年特に著しく、斯界の重鎭たる氏の名聲も亦日に隆々たるものがある。氏は幼少の頃より繪畫を好み、藝術的天分豐富にして夙に將來の飛躍を期待されてゐた。東京美術學校に入るや專ら西洋畫を研究し、卒業後も更に研鑽を積んで技倆圓熟し、文展及帝展に出品して漸次畫壇に認められるに至り、現に帝展推薦者である。此の間漫畫を研究し國民新聞、大阪毎日新聞、東京日々新聞等を始め各新聞雜誌に筆を執つて江湖の稱讃を博し、漫畫の勃興に貢獻する所甚大であつた。現時日本漫畫會、白日會等の同人として漫畫の向上に努め、東京日々新聞其他に輕妙の技を揮ひ、名實共に斯界の第一人者として活躍してゐる。

妻篁（明治三一年生）

盧　百壽氏　麹町區中六番町二ノ七　電話九段四四六

磐城電氣(株)取締役、日本製鍊(株)監査役

慶應三年一二月生、東京府

實業界に飛躍すること多年に亘り、縱横の才腕と高潔なる人格と相俟ち名聲嘖々たる氏は、東京府士族盧辰氏の長男として呱々の聲を揚げ後分れて一家を創めた。夙に實業界に投じ、着實眞摯主義を以て業務に精勵したる努力空しからずして漸次その地歩進み、加納鑛山株式會社專務取締役、或は加納電氣亞鉛株式會社取締役、日本塗料株式會社取締役等に擧げられて次第に名聲を博し、現時前掲の職に在つて活躍しつゝある。多年の經驗を積んで經營の才に勝れ、崇高なる人格者として株主間の信望厚く、社内は勿論各方面より尊敬されてゐる。

姉コウ（文久三年生、工學博士青木元五郎に嫁す）

橋本　允雄氏　四谷區麹町一二ノ一五　電話四谷三、七七八

橋本允雄商店主

明治二一年七月生、埼玉縣

謹直にして信用高き商人として確乎たる地歩を占め、名聲嘉々たる氏は、埼玉縣人橋本榮吉氏の四男として同縣下に呱々の聲を揚げた。家は近隣に聞ゆる舊家であつたが、氏は夙に實業界雄飛を志し大正二年勃々たる雄心を抱いて上京した爾來精勵恪勤只管將來の大成に向つて邁

進し、信用本位を標榜して各小學校その他の御用商として健闘すること多年、其の清廉潔白なる性格と商業道德を重んずる取引は次第に各方面の信用を得、加ふるに機を見るに敏なる商才と百折不撓の勇猛心とは相俟つて業績を日に隆盛に導き、遂に今日の盛況を呈するに至つた。資性溫厚にして情誼に厚く、社會公共的に盡したる功績も亦尠なからず、各方面に尊敬されてゐる。

妻リヨ(明治三二年生) 長女菊江(一二歳) 二女光江(九歳)

西　酉乙氏

大森區山王一ノ二七四
電話大森九

正五位、經濟學士、第一銀行勤務
明治三〇年五月生
大正一一年京都帝大經濟學部卒業

當家の先代周氏は舊石州津和野藩士にして、後幕府に仕へ、文久二年和蘭に遊學し歸朝後開成所教授、陸軍學校頭取等を歷任後元老院議官となり更に貴族院議員に擧げられ、明治三十年男爵に列せられた。當主紳六郎氏は舊幕臣林洞海の六男にして先代周氏の養子となり、明治三十年家督相續と同時に襲爵仰付けられ、現時正三位勳二等、海軍中將、貴族院議員、宮中顧問官の榮位に在る。氏は正三位男爵貴族院議員赤松範一氏の實弟にして、後當主紳六郎氏の養子となつた。學習院を經て京都帝國大學に進み、卒業後直ちに第一銀行に入り、爾來精勵恪勤以て今日に及び、現時同行信用調査課に在つて活躍しつゝある。資性溫厚にして信望高く、敏腕達識と相俟つて大いに將來を囑望されてゐる。

養父紳六郎(萬延元年九月生) 妻三保子(明治四〇年生、群馬縣人高久馨二女、フレンド、ミツション女學校卒) 長女映子(昭和四年生) 二女亮子(同五年生)

男庭善之助氏

澁谷區榮通一ノ二二
(役場)同上一ノ一〇
電話青山一、四三九

從三位、勳三等、公證人
明治五年八月生、茨城縣
明治二五年東京法學院卒業

法曹界に英名を博したる氏は、茨城縣人男庭源作氏の二男として同縣生方郡武田村に呱々の聲を揚げた。東京法學院卒業後直ちに司法官となり、明治三十一年檢事に任ぜられ和歌山裁判所に出仕以來和歌山地方裁判所、白河、大阪各區裁判所、福島、青森、福岡各地方裁判所、姫路區裁判所各檢事、佐賀、大分、富山、松山、札幌、岡山、浦和各地方裁判所各檢事正に歷任し、敏腕を揮ふこと實に三十餘年に及び、其の顯著なる功績に依つて從三位勳三等に陞叙せられた。昭和七年三月官界を去り、同四月現在の地に公證役場を開設以て今日に及んでゐる。資性謹直溫厚にして「周章てず、焦らず、常に心を冷靜に保つ事」を以て處世の訓とし、夙に高邁なる人格者として識られてゐる。

妻うめ子、長男正廣、次男俊廣、三男光廣、長女廣子、次女實枝

大塚　樂堂氏

瀧野川區田端三二七
電話小石川六五七一

正七位、彫塑家、忠孝會司宰
明治三年一〇月生、山口縣

彫塑界に名聲嘖々たる氏は、本名を秀之丞と謂ひ、山口縣下に呱々の聲を揚げた。先天的に彫刻の才に惠まれ、毫も師に就かずして獨特の技倆を備へ二十歳の頃には既に數名の門弟を有してゐた。明治二十七年、富山縣立工藝學校教諭に聘せられて以來、大正六年迄同校に在つて後進の指導に當る傍ら技を磨き、同年教職を去るや服部一三、床次竹二郎、川西清兵衞、横井時敬、高村光雲、多木粲次郎、水野錬太郎の諸氏の賛同を得て「忠孝會」を組織した。該會は修身、齊家、治國、平天下の鐵則を指導精神とし忠孝の念を喚起して思想善導に資し、代表的人物の銅像を以て反省の具となし不斷の戒鑑になさんとする大理想に立脚し、氏は創立以來同會を主宰し、既に全國名士の銅像三百六十五基を完成した。氏の技倆は夙に普く認められ、青山御所正門車寄傍らの「母子の虎」「田中大將像」「東郎稱し福島縣の壁村に彦十郎氏の次男として生誕した。夙に司法界に志し山形地方裁判所書記登用試驗に登第し、明治三十六年東京法學院卒業後は宇都宮、栃木の各地方裁判所に勤務し令名あつたが、大正六年在職のまゝ會計檢査院に轉じ同十三年官を辭し、次で東京府市場協會に勤務すること二ケ年に及び職を辭し專ら尺八の研究に專念した。當初は義太夫に歌舞伎劇を窮め、「早稻田文學」等に寄稿して次第に名聲を認められるに至つた爾來演劇に關する各方面に活躍し、或は脚本を發表し、或は母校に教鞭を執り、或は新聞雜誌に筆を執る等、その深き蘊蓄を傾注して劇の發達向上に資する所尠なからず、今や斯界の權威として普く認められてゐる。宗旨は眞宗、趣味は演劇

大正一一年京都帝大經濟學部卒業

當家の先代周氏は舊石州津和野藩士にして、後幕府に仕へ、文久二年和蘭に遊學し歸朝後開成所教授、陸軍學校頭取等を歷任後元老院議官となり更に貴族院議員に擧げられ、明治三十年男爵に列せられた。當主紳六郎氏は舊幕臣林洞海の六男にして先代周氏の養子となり、明治三十年家督相續と同時に襲爵仰付けられ、現時正三位勳二等、海軍中將、貴族院議員、宮中顧問官の榮位に在る。氏は正三位、勳三等、公證人

明治五年八月生、茨城縣
明治二五年東京法學院卒業

法曹界に英名を博したる氏は、茨城縣人男庭源作氏の二男として同縣生方郡武田村に呱々の聲を揚げた。東京法學院卒業後直ちに司法官となり、明治三十一年檢事に任ぜられ和歌山裁判所に出仕以來和歌山地方裁判所、白河、大阪各區裁判所、福島、青森、福岡各地方裁判所、姫路區裁判所各檢事、佐賀、大分、富山、彫塑界に名聲嘖々たる氏は、本名を秀之丞と謂ひ、山口縣下に呱々の聲を揚げた。先天的に彫刻の才に惠まれ、毫も師に就かずして獨特の技倆を備へ二十歳の頃には既に數名の門弟を有してゐた。明治二十七年、富山縣立工藝學校教諭に聘せられて以來、大正六年迄同校に在つて後進の指導に當る傍ら技を磨き、同年教職を去るや服部一三、床次竹二郎、川西清兵衞、横井時敬、高村光雲、多木粲次郎、水野錬太郎の諸氏の贊同を得て「忠孝會」を組織した。該會は修身、齊家、治國、平天下の鐵則を指導精神とし忠孝の念を喚起して思想善導に資し、代表的人物の鋼像を以て反省の具となし不斷の戒鑑になさんとする大理想に立脚し、氏は創立以來同會を主宰し、既に全國名士の銅像三百六十五基を完成した。氏の技倆は夙に普く認められ、青山御所正門車寄傍らの「母子の虎」「田中大將像」「東鄕元帥、大楠公像」「爆彈三勇士像」等代表的力作として江湖の稱賛を博し、又萬國博覽會其他に於ける名譽の受賞は枚擧に遑なき程である。

妻シサ(五七歳)嗣子俊雄(二九歳、法政大學卒、講談社勤務)長女ゑつ(高岡高女卒、彫塑家國方林三妻)二女とし(東洋高女卒、保賀俊治妻)三女その(府立第一高女卒、法學士西脇週祐妻)四女貞野(聖心女學院卒)

渡邊　柳童氏　本鄕區森川町五〇　高橋方

從七位、勳八等、民謠尺八教授、東京鷗會々長

明治八年三月生、福島縣
明治三六年東京法學院卒業

現時東京鷗會々長として東都尺八斯道界に令名嘖々たる氏は本名を木與之助と稱し福島縣の壁村に彦十郎氏の次男として生誕した。夙に司法界に志し山形地方裁判所書記登用試驗に登第し、明治三十六年東京法學院卒業後は宇都宮、栃木の各地方裁判所に勤務し令名あつたが、大正六年在職のまゝ會計檢査院に轉じ同十三年官を辭し、次で東京府市場協會に勤務すること二ケ年に及び職を辭し專ら尺八の研究に專念した。當初は義太夫尺八に趣味を有し「壺坂」を得意としてゐたが現時は民謠尺八に主力を注ぎ斯界に名を爲すに至つた。上州名物八木節尺八の創始者たる外「追分本吹尺八獨習本」の發刊者として夙に其の名は顯著である。

河竹　繁俊氏　澁谷區松濤五六

劇作家、早稲田大學講師、早稲田演劇博物館副館長

明治二二年六月生、長野縣
明治四四年早稲田大學英文科卒業

演劇界に聲望隆々たる氏は、長野縣下伊那郡山本村の吉村家に生れ後梨園の名門河竹家の養子となり、大正十三年その家督を相續した。幼少の頃より藝術に趣味を有し、長じて早稲田大學に進むや坪內逍遙博士等の指導を受けて英文學を研究し、卒業後は劇文學の研鑽に沒頭し特に歌舞伎劇を窮め「早稲田文學」等に寄稿して次第に名聲を認められるに至つた爾來演劇に關する各方面に活躍し、或は脚本を發表し、或は母校に教鞭を執り、或は新聞雜誌に筆を執る等、その深き蘊蓄を傾注して劇の發達向上に資する所尠なからず、今や斯界の權威として普く認められてゐる。宗旨は眞宗、趣味は演劇等である。

妻みつ(明治三四年生、田中佐次兵衞女、府立第一高女卒)長男俊雄(大正一三年生)長女壽美子(同七年生)

賀古　弓弦氏　神田區小川町五一　電話神田三一二五

醫學博士、耳鼻咽喉科賀古病院々長
明治三〇年生、東京府
京都帝國大學醫科卒業

醫界の新進として前途を囑望され信望隆々たる氏は、本邦に於ける耳鼻咽喉科の始祖たる賀古鶴所氏の後である。鶴所氏は千葉縣人賀古公齊氏の長男として安政三年一月を以て生れ明治二十二年家督を相續したが、之れより先き維新直後藩命を帶びて東京帝國大學醫科に學び、卒業後陸軍々醫となり、明治二十一年山縣有朋公に隨伴して歐洲に學び、歸朝後小松宮殿下の囑託を受けて赤十字病院に

耳鼻咽喉科を創設すると共に、傍ら陸軍々醫學校に教鞭を執り、軍醫監に陞任して我が醫學界の進歩に貢献する所甚大であつた。氏も亦夙に醫界に志し、京都帝國大學卒業後更に諸大家に師事し或は東西の文献を漁つて只管研鑽に勵み、昭和三年「異種細菌免役後に於けるヂフテリートキシンの抵抗力に就いて」なる論文を提出して醫學博士の學位を授與され、現時先代の創立せる賀古病院々長を襲いで診療に從事してゐるが、その手腕識見共に卓拔にして、耳鼻咽喉科界に異彩を放ち聲望を博してゐる。

團　伊能氏　澁谷區原宿三ノ三四　電話青山二、六六九

從五位、男爵、文學士、東京帝國大學教授

明治二五年二月生、福岡縣

大正六年東京帝國大學文科卒業

先考團琢磨男は福岡縣士族諏訪宅之丞氏の三男として安政五年同地に生れ、明治十三年東京府士族團尚靜氏の養子となり後分家した。明治四年舊藩士黑田長和氏に隨行してボストンに遊學し、歸朝後工部省及工部大學校に勤務し、後三池炭礦に轉じ、後三井に入り三井王國の大御所として財界に君臨し、昭和四年男爵に列せられ、同七年不幸兇刄に殪れた。氏はその長男にして、大學卒業後米國ハーバード大學、及佛國里昂大學等に學び、大正十一年歸朝し翌年東京帝國大學講師に就任した。昭和二年助教授となり、爾來一意後進の指導に精勵以て今日に及んでゐる。此の間昭和四年伊太利皇帝よりコンマンドールクーロンヌ勳章を賜はり昭和七年父の死後直ちに襲爵仰付けられた。著書には「伊太利美術紀行」「パルナスの巡禮」等がある。

妻美智子（明治三一年生、上野愛三郎長女、學習院女學部卒）長男伊玖麿（大正一三年生）長女朗子（昭和元年生）

高崎德之助氏　日本橋區濱町三ノ三五　電話浪花七、二五八

小網商店（資）無限責任社員

明治一五年五月生、東京市

都下業界に確乎たる地歩を占め聲望高き氏は、先代高崎長平氏の長男として呱々の聲を揚げ、後その家督を相續した。幼少の頃より實業界に於ける經驗を積み大正四年獨立して高崎屋を創始して酒類及醬油問屋として着々地盤を開拓し、良品廉賣をモットーとして終始一貫した。その業務に對する熱心と獨特の敏腕、加ふるに誠實本位の商取引は渾然相俟つて同業界に普く認められ、商勢年と共に隆況を呈した。その後昭和三年小網商店を提げて起つや、その敏腕は遺憾なく發揮され、倍舊の信用を博して遂に今日の盛況を呈するに至つた。資性溫厚篤實にして、業界の人望高く、公共的に盡瘁したる功績も亦尠くない。宗旨は日蓮宗、趣味は書畫等である。

妻ふみ子（明治二〇年生、東京府人加藤半兵衞長女）長男精二（同四二年生中央大學在學）二男孝吉（大正五年生）三男明（同七年生）長女園子（同一四年生）二女滋子（昭和二年生）

竹中英太郎氏　中野區西町一五

挿畫家

明治三九年一二月生、福岡縣

挿畫界の新進として異彩を放ち、大いに其前途を囑望されてゐる氏は福岡縣の出身である。幼少の頃より繪畫に趣味深く、遂に畫家として起つべく青雲の志を抱いて東上した。爾來主として挿畫を研究し、獨學を以て研鑽に勵む傍ら各新聞雜誌に寄稿し、昭和二年頃より漸次斯界に認められるに至つた。然れども研究熱燃ゆるが如き氏は、小成に康んずることなく絶えず研鑽努力に沒頭し、その豐富なる天分は年と共に發揮され、斯界の鬼才として普く名聲を博してゐる。昭和七年三月スケッチ旅行の途に上り、新滿洲國、朝鮮等を歷遊し新聞雜誌界を視察して同六月歸朝し、現今斯界に一新機軸を出すべく熱心に研究中である。

妻八重子、長男勞

は「沓手孤城落月」「桐一葉」「役の行者」「お夏狂亂」等の傑作を始めとし、新劇運動の第一着手として公表したる長唄物「新曲浦島」の如き名作があり、「逍遙全集」十五卷は實に現代文化の代表として江湖に認められてゐる。雅號を逍遙又は春廼家おぼろと號し、多年心血を濺いで草集したる東西演劇の研究資料は、早稻るや、直ちに實業界に志し、三菱銀行に入社した。爾來只管行務に精勵し、實地經驗を積むと共に經濟學に關する研究を怠らず、現時同行證券係として活躍しつゝある。入行後日尚淺きに拘らず社内の信望厚きは、その業務に對する熱心と、旺盛なる研究心、加ふるに新時代的人格者たる反映と稱すべく、春秋に富む氏の

從五位、男爵、文學士、東京帝國大學教授
明治二五年二月生、福岡縣
大正六年東京帝國大學文科卒業
先考團琢麿男は福岡縣士族諏訪宅之丞氏の三男として安政五年同地に生れ、明治十三年東京府士族團尙靜氏の養子となり後分家した。明治四年舊藩士黑田長和氏に隨行してボストンに遊學し、歸朝後工部省及工部大學校に勤務し、後三池炭礦に轉じ、後三井に入り三井王國の大御所として財界に君臨し、昭和四年男爵になる天分は年と共に發揮され、斯界の鬼才として普く名聲を博してゐる。昭和七年三月スケッチ旅行の途に上り、新滿洲國、朝鮮等を歷遊し新聞雜誌界を視察して同六月歸朝し、現今斯界に一新機軸を出すべく熱心に研究中である。
妻八重子、長男勞

坪內　雄藏氏　牛込區余丁町一一四

文學博士、早稻田大學名譽教授
安政六年五月生、岐阜縣
明治一六年東京帝國大學文科卒業
文學界の權威として將た劇界の大恩人として聲名赫々たる氏は、舊尾張藩士坪內其樂氏の三男として岐阜縣下に呱々の聲を揚げ、明治十六年分れて一家を樹てた。夙に東京帝國大學に學び、卒業後大隈侯の幕下に參じ高田早苗、市島謙吉の諸氏と共に早稻田大學の前身たる東京專門學校の創立に奔走し、創立後同校に教鞭を執る傍ら劇文學の研鑽に勵み、明治三十二年文學博士の學位を授與された。シエークスピアの研究家としては世界屈指にして沙翁全集は不朽の大典として普く識られてゐる。その他著書には「小說神髓」「當世書生氣質」等洛陽の紙價を狂騰せしめたる好著尠なからず、又脚本には「沓手孤城落月」「桐一葉」「役の行者」「お夏狂亂」等の傑作を始めとし、新劇運動の第一着手として公表したる長唄物「新曲浦島」の如き名作があり、「逍遙全集」十五卷は實に現代文化の代表として江湖に認められてゐる。雅號を逍遙又は春廼家おぼろと號し、多年心血を濺いで蒐集したる東西演劇の研究資料は、早稻田學園の誇りたる演劇圖書館に收藏せられ燦として氏の偉大なる功績を物語つてゐる。
妻せん（文久三年生、大阪府人眞田彌兵衞三女）姪はる（三三歲、平田盛重妹）養女くに（三二歲、鹿島淸兵衞二女、成女高女卒、飯塚友一郎妻）

中野　六郎氏　荏原區大原北一一三八

電話荏原三、四五四
經濟學士、三菱銀行勤務
明治四二年二月生、東京府
昭和六年慶應義塾大學經濟學部卒業
新進氣鋭の材として前途を囑望されてゐる氏は、金モール商として名聲を馳せたる先代中野要藏氏の六男にして、株式會社中野商店の代表取締役たる當主要藏氏はその長兄である。夙に慶應義塾幼稚舍に入り、同普通部を經て更に大學部に學び、優秀の成績を以て同大學を卒業するや、直ちに實業界に志し、三菱銀行に入社した。爾來只管行務に精勵し、實地經驗を積むと共に經濟學に關する研究を怠らず、現時同行證券係として活躍しつゝある。入行後日尙淺きに拘らず社內の信望厚きは、その業務に對する熱心と、旺盛なる研究心、加ふるに新時代的人格者たる反映と稱すべく、春秋に富む氏の將來は各方面より尠なからず期待されてゐる。趣味は演劇等である。

中野　要藏氏　澁谷區代々木初臺四三

電話四谷五六七九
中野商店（株）代表取締役、巴里院（株）取締役
明治二八年一二月生、東京府
當家は先々代要藏氏が金モール製造を創始して以來逐年隆盛に赴き、斯界に確乎たる地步を占め名聲を博してゐる。氏は先代要藏氏の長男に生れ、明治四十四年家督を相續すると共に前名一郎を改め要藏を襲名した。夙に慶應義塾に學び、卒業後直ちに家業に携はり、金銀モール小幅織物、組物、文武官制服及附屬品の製造販賣並にその輸出入業に從事し、父祖の築上げたる鞏固なる地盤を擁護するのみならず更に進んでその發展に努力すること多年、曩に株式會社中野商店を創

高崎德之助氏　電話浪花七、二五八

小網商店（資）無限責任社員
明治一五年五月生、東京市
都下業界に確乎たる地步を占め聲望高き氏は、先代高崎長平氏の長男として呱々の聲を揚げ、後その家督を相續した。幼少の頃より實業界に於ける經驗を積み大正四年獨立して高崎屋を創始して酒類及醬油問屋として着々地盤を開拓し、良品廉賣をモットーとして終始一貫した。その業務に對する熱心と獨特の敏腕、加ふるに誠實本位の商取引は渾然相俟つて

挿畫家

明治三九年一二月生、福岡縣
挿畫界の新進として異彩を放ち、大いに其前途を囑望されてゐる氏は福岡縣の出身である。幼少の頃より繪畫に趣味深く、遂に畫家として起つべく靑雲の志を抱いて東上した。爾來主として挿畫を研究し、獨學を以て研鑽に勵む傍ら各新聞雜誌に寄稿し、昭和二年頃より漸次斯界に認められるに至つた。然れども研究熱燃ゆるが如き氏は、小成に康んずることなく絕えず研鑽努力に沒頭し、その豐富

立して以來代表取締役の要職に在つて敏腕至らざるなく、今や倍舊の信望を博して業績益々活況を呈してゐる。

母サキ（明治一〇年生）妻友枝（同三五年生、横濱第一高女卒）長女芳枝（大正一二年生）二女后子（同一五年生）弟三郎（明治三五年生、理學士）同四郎（同三七年生、海軍機關大尉）同五郎（同三九年生、法學士）同六郎（同四二年生、經濟學士）同二郎（慶大卒、川島齊兵衛長女つね養子）

長崎　行重氏

世田ヶ谷區玉川瀬田一、〇〇〇、電話玉川二五

地主

明治一八年二月生、東京府

慶應義塾大學豫科卒業

當家は北條時賴に仕へたる日向守長崎次郎左衛門尉平光盛の裔にして從五位下土佐守長崎新次良平重光は今川義元の下に偉功をたて天正五年美濃清水に閑居した。其子長崎隱岐守平重高當地に來り父重光（本誓院殿重譽願虚行善大居士）及母西光院殿願譽不虚行念大姉（石川讃岐守源良信ノ女）の菩題を弔ふ爲めに西光院行善寺を供養し永住の念を定む、それより十三代重固を經て先代長十郎平重高に至つてゐるが玉川村屈指の舊家として

また近隣に聞ゆる大地主である。氏は先代の息として現住所に呱々の聲を揚げ、慶應義塾普通部を經て同大學豫科に進んだが、豫科修了後學業を拋つて家事に携はり、以て今日に及んでゐる。七〇月二十八歳の時村會議員に選ばれて以來、三期十二ケ年間その任に在つて專ら村治の革新向上に努め、或は昭和二年荏原郡立病院組合會議員に選ばれ、公人として將た私人として地方の發展に盡瘁したる偉大なる功績は普く認められ、その他社會公共的美擧頗る多くその崇高なる人格と相俟つて信望隆々たるものがある。

妻ハナ子（東京府會議員朝倉虎治郎養姉、實踐高女卒）女康子（一九歳、東洋英和女學校卒）姉立於（東京府人下山德治郎に嫁す）

中村六兵衛氏

小石川區水道端一ノ四八

天理教中講義、同小石川支教會長、同東京教務支廳主事、同教友會小石川支會長、同沼津分教會承事、同青年會小石川支會長、同東京府教友會評議員

明治二一年九月生、東京市

當家は江戸時代より代々菓子商を營み桔梗屋を名乘り斯界屈指の老舗であつたが、先代六兵衛氏は深く天理教に歸依し遂に家業を廢し、布教に專念するに至つた。當教會は明治三十四年の創立にして同四十年支教會に昇格し、現時東京、千葉、神奈川、長野各縣を布教區域とし一支教會、七宣教所の上級である。氏は先代六兵衛氏の長男にして、幼時宮内省樂師山井景安氏に龍笛を學び、雅樂師として宮内省に奉職し、又白山神社助務祭官等を勤め、或は材木商に勤務したこともあるが、夙に天理教を信仰し、大正四年權訓導に任ぜられて以來累進して昭和三年中學講義に陞任した。此の間大正十四年父の逝去と同時に支教會長に就任し、現時前掲の要職を兼ねて教化に努力してゐる。尚ほ當教會理事は宮城安五郎、上田荒五郎、宮越末吉、木村七郎、神田定吉の諸氏である。

妻ケイ（明治二六年生、權大教正中臺赤太郎二女、少講義）嗣子直明（大正五年生）弟善明（權少講義）同正雄（宮内省雅樂師）同忠雄（同上）

金萬　喜人氏

芝區三田綱町三ノ一　三井邸内電話高輪三五一七

三井（名）用度課長

明治五年二月生、鳥取縣

明治二四年東京商業主計學校卒業

三井合名會社に在つて聲名高き氏は、

鳥取縣士族金萬次敏氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治三十九年家督を相續した。夙に青雲の志を抱いて上京し東京商業主計學校卒業後外交界に入り、各國領事館に轉勤して漸次その敏腕を認められ、副領事に昇進した。後大正三年官を辭して三井合名會社に入り、現時同社用度課長の要職に在つて活躍しつゝある。資性溫厚にして情に脆く、常に鄕黨

られるに至つた。昭和四年三月同行を辭して江東製藥株式會社に轉じ、支配人に就任以來只管同社の發展に意を注ぎ、その顯著なる功績は社内の厚き信望を得、昭和六年五月取締役に選ばれた。現時取締役兼支配人の要職に在つて經營の衝に當り、益々同社の隆盛に盡しつゝあるが同社現在の盛況は氏の奮闘に負ふ所尠なからず、而も氏の眞の活躍は寧ろ今後に相俟つて顧客の信望を高め、業績隆々大いに產を興し現に東京府多額納稅者として普く同業界に知られてゐる。性來公共博愛の念に燃え、東京府政或は澁谷町治の向上に盡したる功績を始めとし、特別都市計畫委員會委員として大東京の建設

當家は北條時賴に仕へたる日向守長崎次郎左衞門尉平光盛の裔にして從五位下土佐守長崎新次良平重光は今川義元の下に偉功をたて天正五年美濃清水に閑居した。其子長崎隱岐守平重高當地に來り父重光（本誓院殿重譽願虛行善大居士）及母西光院殿願譽不虛行念大姉（石川讃岐守源良信ノ女）の菩題を弔ふ爲めに西光院行善寺を供養し永住の念を定む、それより十三代重固を經て先代長十郎平重高に至つてゐるが玉川村屈指の舊家として

中村六兵衞氏　小石川區水道端一ノ四八

天理教中講義、同小石川支教會長、同東京教務支廳主事、同教友會小石川支會長、同沼津分教會承事、同青年會小石川支會長、同東京府教友會評議員

明治二一年九月生、東京市

當家は江戸時代より代々菓子商を營み桔梗屋を名乘り斯界屈指の老舗であつたが、先代六兵衞氏は深く天理教に歸依し

妻ケイ（明治二六年生、權大教正中臺赤太郎二女、少講義）嗣子直明（大正五年生）弟善明（權少講義）同正雄（宮內省雅樂師）同忠雄（同上）

金萬　喜人氏　芝區三田綱町三ノ一　三井邸內電話高輪三五七

三井（名）用度課長

明治五年二月生、鳥取縣

明治二四年東京商業主計學校卒業

三井合名會社に在つて聲名高き氏は、

取縣士族金萬次敏氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治三十九年家督を相續した。夙に青雲の志を抱いて上京し東京商業主計學校卒業後外交界に入り、各國領事館に轉勤して漸次その敏腕を認められ、副領事に昇進した。後大正三年官を辭して三井合名會社に入り、現時同社用度課長の要職に在つて活躍しつゝある。資性溫厚にして情に脆く、常に鄉黨後進等の爲めに斡旋の勞を辭せず、又公共的に盡したる功績も尠なからず、稀に見る崇高なる人格者として各方面より尊敬されてゐる。

妻たか（明治一六年一〇月生、岡山縣士族吉田安治長女）長男喜春（明治三九年三月生）妹すへ（同一一年八月生、德島縣士族小谷吉雄妻）

荒木　芳造氏　澁谷區猿樂一〇　電話青山二三六九

江東製藥（株）取締役兼支配人

明治三〇年一月生

大正八年慶應義塾大學理財科卒業

都下製藥業界に令名高き氏は、荒木商三郎氏の長男として呱々の聲を揚げた、學業を卒へるや直ちに三井銀行に入り、同行神戸支店、及び丸ノ內支店等に歷勤して、精勵恪勤して漸次その手腕を認められるに至つた。昭和四年三月同行を辭して江東製藥株式會社に轉じ、支配人に就任以來只管同社の發展に意を注ぎ、その顯著なる功績は社內の厚き信望を得、昭和六年五月取締役に選ばれた。現時取締役兼支配人の要職に在つて經營の衝に當り、益々同社の隆盛に盡しつゝあるが同社現在の盛況は氏の奮鬪に負ふ所尠なからず、而も氏の眞の活躍は寧ろ今後に在るべく各方面より期待せられてゐる。

母ため（明治元年生）妻薫（同四〇年生、富山縣人矢木安一女、富山高女卒）長男芳郎（大正一三年生）二男和郎（昭和二年生）

朝倉虎治郎氏　澁谷區猿樂三九　電話青山五八八六

勳八等、東京府會議員、特別都市計畫委員、東京青物市場（株）顧問、東橫乘合自動車（株）監査役、米穀商、東京府多額納稅者

明治四年九月生、愛知縣

實業界に敏腕を揮ふ傍ら府政界に馳驅して聲望隆々たる氏は、杉浦太市氏の二男として愛知縣碧海郡旭村に生れ、後朝倉德次郎氏の養子となつた。朝倉八郎氏の實兄である。夙に米穀商を營み、卓拔の才腕と着實眞摯を旨とする營業方針と相俟つて顧客の信望を高め、業績隆々大いに產を興し現に東京府多額納稅者として普く同業界に知られてゐる。性來公共博愛の念に燃え、東京府政或は澁谷町治の向上に盡したる功績を始めとし、特別都市計畫委員會委員として大東京の建設に臻したる偉大なる貢獻、その他社會公共的美擧は枚擧に遑なく、各方面より尊敬されてゐる。趣味は書畫等である。

妻たき（明治五年生、朝倉德次郎三女）養子誠一郎（同三七年生、朝倉八郎長男、慶大卒）同妻ヒサ（同四五年生、馬島渡四女、府立第一高女卒）孫德道（昭和六年四月生）養女ハナ（明治二九年生、高瀨利兵衞三女、長崎行重に嫁す）養妹りせ（同一一年生、醫師河內全中に嫁す）

朝倉　八郎氏　澁谷區猿樂三七　電話青山二三〇九

地主、米穀商丸朝店主、惠美須米穀問屋組合長

明治一八年一月生、愛知縣
當家は十三代前より當地に住み澁谷町屈指の舊家として知られてゐる。氏は杉浦太市氏の八男として愛知縣碧海郡旭村に生れ、先代朝倉德次郎氏の養子となり明治四十一年その家督を相續した。養父德次郎氏は夙に米穀商を創め信用本位を以て終始一貫し逐年販路を擴張して同業界に名を博したが、氏も亦養父を援けて家業に携はり、家督相續後は一層奮闘努力以て商勢の興隆に努め、着々發展し遂に今日の隆況を呈するに至つた。資性溫厚にして公共心に富み、曩に東京正米聯盟會評議員として又現時惠美須米穀問屋組合長として同業界の發展に貢献し、或は町自治の革新に盡瘁する等、その顯著なる功績は普く認められ推服されてゐる趣味は旅行、書畫等である。
妻すゑ（明治一七年生、朝倉虎治郎養妹）二男永三（同四二年生、慶大經濟學士）三男博之（同四三年生、慶大在學）四男文敬（大正四年生）二女妙子（同六年生、東京女學館在學）

酒井敬太郎氏　本所區東兩國一ノ一二　電話本所四三七二
佃新（蒲鉾商）店主、東京蒲鉾商組合副組合長、本所區會議員、元町々會理事

明治七年一一月生、福井縣
當家は今より百餘年前の文化年間の創業に係り、蒲鉾商界屈指の老舗にして、創始以來高級品の製造と信用本位の取引を以て斯界に名聲を博してゐる。氏は福井縣大野郡村岡村の出身にして、夙に上京して斯業界に入り、明治三十六年實兄より當店の營業を繼承して以來、品質の改良に意を注ぎ販路の擴張に努力し、專心家業の發展を圖りたる爲め、業績年を逐ふて向上し遂に今日の隆況を呈するに至つた。一面社會公共的事業に熱誠を捧げ、或は土地區劃整理委員、兩國橋架橋工事卽成委員長、或は火災保險料率低下委員長等に擧げられ、或は元町々會々計又は副會長として二十年來盡瘁し、更に市有地拂下委員、公益調査委員等に選ばれて多年公共に貢献し、現時も前揭の職に在つて同業界の發展、區町政の刷新等に盡し、士魂商才の人格者として尊崇されてゐる。
妻とく子（五六歳）長男勇太郎（二六歳藥學士、東洋製藥貿易會社技師）二男俊二（二四歳、中央商業卒、家業に從事）

三宮　周六氏　牛込區神樂町一ノ一五　本多方　電話牛込二二三

醫師、瀨川病院勤務
明治二五年生、東京府
東京慈惠會醫科大學卒業
溫厚なる性格と敏腕と相俟つて都市刀圭界に名聲嘖々たる氏は、工學界の權威として令名を馳せたる樞密顧問官、東京帝國大學名譽教授、工學博士、男爵古市公威氏の六男として呱々の聲を揚げ、後三宮糸女史の入夫となり其の姓を冒した嚴父に似て幼少の頃より頭腦衆に勝れ、長じて東京慈惠會醫科大學に學び、卒業後更に研鑽を重ね、都下醫界に活躍すること既に久しく、現時小兒科病院として代表的の稱ある瀨川病院に勤務中であるが、其の懇切にして營利に超然たる診療は夙に各方面に好評を博してゐる。加ふるに資性溫良にして仁義に厚く、研究心に富み、現時に於ても尙ほ熱心に研鑽に勵み、大いに前途を囑望されてゐる。

三上半之助氏　赤坂區仲之町二九　電話青山八三一三
神道天善教大教正、同教總務、同教安善講信仰所主
明治三一年一二月生、千葉縣
神道天善教界の功勞者として聲望高き氏は千葉縣夷隅郡勝浦町三上惣次郎氏の二男として同地に呱々の聲を揚げた。夙に建築請負業界に投じたが、天善教に依つて大病を療して以來篤く本教を信仰するに至り、二十五歳の時同教々師となり爾來同教の創始者たる現會長椎名顯一氏を援けて布教に專念し、本會が當局の認可を受くる爲めには大いに盡力し普く信徒の信望を博した。本教の今日あるは實に氏の盡瘁努力に負ふ所甚大である。多に至つたが、研究の餘暇趣味として漫畫に筆を執り、當時所謂「ポンチ繪」として萬朝報の募集に應じ、その都度入選して遂にその非凡なる才能を認められるに至り、明治四十一年萬朝報社に入社し、ポンチ繪の選者として益々天才振りを發揮しその輕妙洒脫の筆致は、當時隆盛を極めたる相撲のスケッチを始めとし、或督相續後は由緒ある家名の發揚に努め、家產の振興に意を注ぎ現時東京府多額納稅者たる地步を保つてゐるが、性來社會公共に奉ずるの念厚く、或は自治の革新向上に、或は罹災民の救助に、或は貧困者の保護救濟に、その他各種慈善事業、社會公共的有意義なる施設等に家財を散ずると共に、精神的援助を與へたる美擧

は町自治の革新に盡瘁する等その黙々たる功績は普く認められ推服されてゐる趣味は旅行、書畫等である。

妻すゑ（明治一七年生、朝倉虎治郎養妹）二男永三（同四二年生、慶大經濟學士）三男博之（同四三年生、慶大在學）四男文敬（大正四年生）二女妙子（同六年生、東京女學館在學）

酒井敬太郎氏　本所區東兩國一ノ一二　電話本所四三七二

佃新（蒲鉾商）店主、東京蒲鉾商組合副組合長、本所區會議員、元町々會理事

市有地拂下委員、公益調査委員等に選ばれて多年公共に貢献し、現時も前掲の職に在つて同業界の發展、區町政の刷新等に盡し、士魂商才の人格者として尊崇されてゐる。

妻とく子（五六歳）長男勇太郎（二六歳藥學士、東洋製藥貿易會社技師）二男俊二（二四歳、中央商業卒、家業に從事）

三宮　周六氏　牛込區神樂町一ノ一五　本多方　電話牛込二二三

るに資性溫良にして仁義に厚く、研究心に富み、現時に於ても尚ほ熱心に研鑽に勵み、大いに前途を囑望されてゐる。

三上半之助氏　赤坂區仲之町二九　電話青山八三一三

神道天善教大教正、同教總務、同教安善講信仰所主

明治三一年一二月生、千葉縣

神道天善教界の功勞者として聲望高き氏は千葉縣夷隅郡勝浦町三上惣次郎氏の二男として同地に呱々の聲を揚げた。夙に建築請負業界に投じたが、天善教に依つて大病を療して以來篤く本教を信仰するに至り、二十五歳の時同教々師となり爾來同教の創始者たる現會長椎名顯一氏を援けて布教に專念し、本會が當局の認可を受くる爲めには大いに盡力し普く信徒の信望を博した。本教の今日あるは實に氏の盡瘁努力に負ふ所甚大である。多年の功績に依つて昭和六年十二月大教正の顯位に擧げられたが、之より先き大正十四年三月現在の地に天善教安善講信仰所を設立し、現時その所主たると同時に本教總務を兼ね益々斯教の普及と國民の思想善導に努力しつゝある現時同所は五名の役員が一致協力して氏を翼け、はつ子夫人も亦大講義として夫君と共に教化に專念してゐる。

清水　勘一氏　小石川區音羽町六ノ二　六

漫畫家

明治一六年生、長野縣

「對岳坊」の雅號を以て普く江湖に名聲嘖々たる氏は、長野縣飯田の出身である幼少の頃より繪畫に趣味を有すると共に天分豐富にして斯道を以て起つべく勃々たる雄心を抱いて上京し、藤島氏に師事した。かくて專心油繪の研究に沒頭するに至つたが、研究の餘暇趣味として漫畫に筆を執り、當時所謂「ポンチ繪」として萬朝報の募集に應じ、その都度入選して遂にその非凡なる才能を認められるに至り、明治四十一年萬朝報社に入社し、ポンチ繪の選者として益々天才振りを發揮しその輕妙洒脫の筆致は、當時隆盛を極めたる相撲のスケッチを始めとし、或は議會スケッチその他凡ゆる方面に卓出して好評を博した。大正十二年大震災後萬朝報社を去つて以來、主として各雜誌に筆を執つてゐるが、多年の研究を積んで老練枯淡而もユーモア溢るゝ氏獨特の技は、漫畫界に斷然頭角を顯はし、名實共に斯界の元老として又斯界の功勞者として推賞されてゐる。趣味はスポーツ等

妻かをる、長男浩、二男克、三男了、長女安子

廣瀨清兵衞氏　赤坂區青山高樹町一五　電話青山二、五二〇

東京府多額納稅者

明治二年六月生、東京府

溫厚の君士人として名望高き氏は、先代清兵衞氏の長男にして京橋區に呱々の聲を揚げた。幼名を清吉と呼んだが、明治二十五年九月家督を相續すると同時に當家累代の名たる清兵衞を襲名した。家督相續後は由緒ある家名の發揚に努め、家產の振興に意を注ぎ現時東京府多額納稅者たる地步を保つてゐるが、性來社會公共に奉ずるの念厚く、或は自治の革新向上に、或は罹災民の救助に、或は貧困者の保護救濟に、その他各種慈善事業、社會公共的有意義なる施設等に家財を散ずると共に、精神的援助を與へたる美擧は殆んど枚擧に遑なく、典型的富豪として各方面より尊崇されてゐる。趣味は謠曲、書畫等にして共に堪能である。

妻きよ（明治四年生、埼玉縣人增田錄三郎長女）長男信太郎（同三八年生）四女きく（同三五年生、東京府人金田傳次郎妻）五女載子（大正三年生、山脇高女在學）

須藤　理助氏　豐島區池袋二ノ八五三　電話大塚二、三七七

西巢鴨町會議長、同青年團第十三分團長元中華民國大總統府顧問、同陸軍中將

明治九年三月生、栃木縣

慨世憂國の志士として驍名洽き氏は、史上に不朽の名を垂れ今猶ほ人口に膾炙する那須與一宗隆の末裔にして、栃木縣下都賀郡大宮村字大宮に呱々の聲を揚げた。性來氣宇濶達にして盡忠報國の意氣昂く、夙に十六歳の若冠を以て第一師團

司令部附として渡支し、日支の風雲急なる明治二十六、七年當時軍事探偵として大活躍を演じ、日清戰役終了後一旦歸朝したが、再び支那に於ける國家的覇志を達する一手段として明治三十一年東京濟生學舍醫學專門學校に學び、醫術開業試驗に合格後更に東京顯微鏡院講習科を卒業し、同三十六年麻布區に開業した。翌年陸軍三等軍醫に任ぜられ正八位に叙せられ、同三十八年奉天戰役に參加し、同三十九年日露戰爭の功に依り勳六等單光旭日章を下賜された。爾來累進して二等軍醫に任ぜられ從七位に叙せられ、湯ヶ原轉地療養所長を勤めたが、明治四十一年同志五名と共に軍籍を脫して支那廣西省に赴き「除東山」の支那人名を以て同省講武堂教官となり、更に同省軍醫學校教官、軍醫長、巡警道醫官、監獄署顧問等に歷任し、中華民國元年には廣西都督府軍醫長となり、更に南京陸軍病院長、陸軍々醫總監等を經て中華民國陸軍中將に任ぜられ、大正六年大總統府顧問に擧げられ、同國勳二等文虎章を授けられたその後尙ほ在留して或は南京日本居留民會長、或は聯合軍司令部高等顧問等として活躍し、昭和二年歸朝した。歸朝後も屢々渡支して對支問題の解決に當り、終始一貫至誠奉公を主義とし、建國の大精神に鑑みて愛國の念を鼓吹し、國威の發揚に努力し來つた。又昭和二年歸朝の後は現住地に在つて町治の革新、町勢の發展に盡瘁する所多く、昭和五年十二月同町會議員に當選し、同六年一月町會議長に推され、現時前揭の公職に在つて自治界に盡瘁すると共に、依然盡忠報國の大精神に立脚して對支諸問題等に臨み、國家公共に貢獻しつゝある。

杉江　春象氏　赤坂區青山北町六ノ二九
電話青山五、五八八
硬筆書方調査會主宰
明治二七年二月生、滋賀縣
大正三年滋賀縣立師範學校卒業

硬筆書方普及の功勞者として名聲嘖々たる氏は、滋賀縣人杉江善右衞門氏の三男として同縣東淺井郡下草村に生れた。夙に教育界に志し、鄕里の師範學校卒業後滋賀女子師範學校、山口縣立師範學校等に教鞭を執り、大正九年女子學習院に轉じ同院主務として教育界に令名を馳せた。硬筆書方に就ては多年研究を積み造詣頗る深く、畏くも皇后陛下が女子學習院へ行啓の砌、硬筆及毛筆を併せ教授すべき旨御沙汰あらせられたるに肝銘し、大正十三年女子學習院辭任後その御意を體し廣く全國的に硬筆書方を普及發達せしむべく決意し、昭和二年硬筆書方調査會を創立した。以來專ら初志の貫徹に努力し、萬難を排して硬筆の奬勵普及に盡瘁したる効果空しからず、今や全國的に認められるに至つたが、氏は畢生を之に捧ぐる意氣を以て益々その普及に努力しつゝある。

貫井富五郎氏　中野區小淀三二
電話四谷一二〇六
神戸海上運送火災保險(株)東京西部支部長
明治一六年七月生、東京府

當世稀に見る人格者として崇敬されてゐる氏は貫井銀右衞門氏の三男として府下北多摩郡久留米村に呱々の聲を揚げた明治四十二年神戸海上運送火災保險株式會社に入社し、爾來精勵恪勤只管會社の發展に努め、その職務に對する熱誠と高潔なる人格は次第に社內に認められ、年と共に地位進み東京西部支部長に擧げられ以て現在に及んでゐる。氏は人格の修養を以て人生の第一義と觀じ、忍耐の德と誠意の道に缺くる所なければ、一身一家は勿論一國のことを處する場合と雖も圓滿に解決すべし」との見地に立ち、自己の練磨修養に勵むること多年、其高潔にして圓滿なる人格は實に澆季稀に見る所として推服されてゐる。又佛教を信仰し、遠州氣賀町金地院の細田覺治氏に心醉してゐる。

妻ふき(明治二三年生)　長男正一(大正二年生、明治大學在學)　二男富男(同九年生)三男保久(同一三年)長女靜(明治四四年生、武田裁縫女學校卒、松屋社員伊藤一枝妻)二女榮(昭和二年生)

渡部　審也氏　世田ヶ谷區代田一ノ六三五
畫家

に崇敬されてゐる。又煙村と號し、書道に趣味深く頗る堪能である。

妻ひな(八五歲)　嗣子誠一(名教中學在學)

に貢獻する所甚大であつた。尙ほ此の間約三十年前太平洋洋畫會の創立に參劃し爾來その會員として今日に及び、今や名實共に畫壇の元老として推賞されてゐる趣味は骨董及陶器の蒐集、謠曲、圍碁等

妻貞(明治一七年生)長男弘一(二九歲)二男哲也(二六歲)長女和子(二四歲)二女元子(二一歲)三女景子(一〇歲)

省講武堂教官となり、更に同省軍醫學校教官、軍醫長、巡警道醫官、監獄署顧問等に歷任し、中華民國元年には廣西都督府軍醫長となり、更に南京陸軍病院長、陸軍々醫總監等を經て中華民國陸軍中將に任ぜられ、大正六年大總統府顧問に擧げられ、同國勳二等文虎章を授けられたその後尙ほ在留して或は南京日本居留民會長、或は聯合軍司令部高等顧問等として活躍し、昭和二年歸朝した。歸朝後も屢々渡支して對支問題の解決に當り、終始一貫至誠奉公を主義とし、建國の大精

たる氏は、滋賀縣人杉江善右衞門氏の三男として同縣東淺井郡下草村に生れた。夙に教育界に志し、鄕里の師範學校卒業後滋賀女子師範學校、山口縣立師範學校等に教鞭を執り、大正九年女子學習院に轉じ同院主務として教育界に令名を馳せた。硬筆書方に就ては多年研究を積み造詣頗る深く、畏くも皇后陛下が女子學習院へ行啓の砌、硬筆及毛筆を併せ教授すべき旨御沙汰あらせられたるに肝銘し、大正十三年女子學習院辭任後その御意を體し廣く全國的に硬筆書方を普及發達せ

明治四十二年神戸海上運送火災保險株式會社に入社し、爾來精勵恪勤只管會社の發展に努め、その職務に對する熱誠と高潔なる人格は次第に社內に認められ、年と共に地位進み東京西部支部長に擧げられ以て現在に及んでゐる。氏は人格の修養を以て人生の第一義と觀じ、「忍耐の德と誠意の道に缺くる所なければ、一身一家は勿論一國のことを處する場合と雖も圓滿に解決すべし」との見地に立ち、自己の練磨修養に勵むること多年、其高潔にして圓滿なる人格は實に澆季稀に見る

所として推服されてゐる。又佛敎を信仰し、遠州氣賀町金地院の細田覺治氏に心醉してゐる。

妻ふき(明治一三年生)長男正一(大正二年生、明治大學在學)二男富男(同九年生)三男保久(同一三年)長女靜(明治四四年生、武田裁縫女學校卒、松屋社員伊藤一枝妻)二女榮(昭和二年生)

大橋鴻三郎氏　赤坂區青山南町三ノ五六、電話青山六五九

權大敎正神習敎本祠試驗委員伊藤屋店主

弘化四年四月生、千葉縣

靈界に畢生を捧げ高潔なる人格者として信望厚き氏は、千葉縣人大橋喜之氏の三男として同縣千葉郡生實陣屋に呱々の聲を揚げた。幼少の頃より信仰心篤く、十三、四歲の頃より神習敎に關係したが長じて敎育界に入り芝區內各小學校長等に歷任し初等敎育の普及發達に盡瘁する事實に三十年に及んだ。明治三十年權大敎正に任ぜられ、爾來專ら布敎に從事し敎會を設立してその會長となり、神習敎發展に努力し敎化に盡したる功績は甚大なるものがある。又明治四十二年青山齊場を設置し青山墓地埋葬者に便したる功勞は普く知る所である。現時老軀鞭鑠として益々敎化に努力し、信徒に神の如く

に崇敬されてゐる。又煙村と號し、書道に趣味深く頗る堪能である。

妻ひな(八五歲)嗣子誠一(名敎中學在學)

渡部　審也氏　世田ケ谷區代田一ノ六三五

畫家

明治八年一二月生、岐阜縣

挿畫界の權威にして又私學派の重鎭たる氏は、大垣市に生れ、幼少の頃より繪畫を好み、明治二十三年畫家として起つべく雄志を抱いて上京した。始め實兄の洋畫家渡部金秋氏に就て修業し、明治二十四年本邦最初の洋畫研究機關たる明治美術會敎場が創立されるやその第一期生として入學し、明治洋畫界の巨匠淺井忠氏に師事すること多年、技年と共に上達し其の後繼者として認められるに至つた明治三十年中央新聞に入社し、本邦嚆矢の洋風挿畫を同紙上に發表して好評を博し同三十四年時事新報社に轉ずるや巧妙老練なるスケッチを裁せて寫眞版のなかりし當時の新聞界に盛んに活躍した。時事新報社に在ること十三年餘、後文部省囑託として敎科書挿畫、掛畫等の大革新をなし、內地は勿論ハワイ、臺灣土人用等の各種敎科書の挿畫に筆を執り、斯界

に貢獻する所甚大であつた。尙ほ此の間約三十年前太平洋洋畫會の創立に參劃し爾來その會員として今日に及び、今や名實共に畫壇の元老として推賞されてゐる趣味は骨董及陶器の蒐集、謠曲、圍碁等

妻貞(明治一七年生)長男弘一(二九歲)二男哲也(二六歲)長女和子(二四歲)二女元子(二一歲)三女景子(一〇歲)

川島　一郎氏　麻布區狸穴町四　電話赤坂二三〇

三井銀行勤務

明治三一年八月生、東京府

大正一〇年慶應義塾大學理財科卒業

本邦金融界の覇王たる三井銀行に勤務し、洋々たる前途を有する氏は、金モール商として聲名を馳せたる先代中野要藏氏の二男にして、株式會社中野商店代表取締役たる當主中野要藏氏の實弟であるが、川島商店主川島齊兵衞氏の養子となりその姓を冒した。慶應義塾幼稚舍同普通部を輕て更に大學部に進み、優秀の成績を以て同校を卒業するや直ちに三井銀行に入り、現に同校本店に勤務中である資性溫厚にして志操堅固、加ふるに理財の學に長じ、職務に忠實なる理想的銀行員として行內の信望厚く、尠なからず將來の活躍を囑望されてゐる。趣味は旅行

寫眞等。
妻つね（養父齊兵衛長女）長男弘（昭和三年生）

田島　武雄氏　麻布區市兵衛町二ノ四四

經濟學士、不動貯金銀行勤務
明治三九年七月生、東京市
昭和六年慶應義塾大學經濟學部卒業
先考田島晴雄氏は大學教授として學界に名聲を馳せ、後實業界に敏腕を揮ひ大いに產を興した。氏はその四男として市内芝區に呱々の聲を揚げた。幼少の頃より頭腦頗る明晰にして、開成中學を經て慶應義塾大學を卒業する迄、終始優秀の成績を以て一貫した。學門を去るや直ちに不動貯金銀行に入り、現時同行日本橋支店に勤務中であるが、學識豐富にして特に經濟學に曉通し、職務に對しては熱心忠實にして責任觀念强く、加ふるに性格着實眞摯にして人格高潔、凡ゆる方面より觀て新時代の活躍に適せる人材として上長の新任厚く、各方面より大いに前途の雄飛を期待されてゐる。趣味は音樂ゴルフ等。
兄晴一郎（慶大卒）弟晴貞（東京帝大在學）同七郎（商船學校在學）

山形　晋氏　小石川區戸崎町三　電話小石川三三一三

鹽水港製糖（株）販賣係長
明治三一年一二月生、千葉縣
氏は千葉縣夷隅郡大多喜町山形喜代二氏の二男として同町に呱々の聲を揚げた。夙に大多喜中學に學び、卒業後更に外人に師事して語學を修めた。大正八年一年志願兵として佐倉第五十七聯隊に入營し退營後同十年鹽水港製糖會社に入社した。爾來着實黽勉只管その職務に勤めて漸次社内の信任を高め、臺灣本社に勤務すること四ケ年にして大正十四年東京支店に轉任を命ぜられ、販賣部に在りて敏腕を揮ふこと數年、その努力を認められ販賣係長に拔擢された。以來その要職に在つて益々同社の發展に意を注ぎ、以て今日に及んでゐる。資性溫厚篤實にして才腕兼備、加ふるに旣に多年の經驗を有し、大いに前途を期待されてゐる。趣味はゴルフ等。
妻美津子、長男純男（昭和二年生）

櫻井　金作氏　豐島區池袋一ノ六七　電話　大塚四七三

鹿島組（株）取締役
慶應二年生、靜岡縣
多年土木請負業界に活躍し鐵道建設工事に於ては一見識を有し、溫雅にして敏腕と崇高なる人格と相俟つて聲望隆々たる氏は、靜岡縣人石切山利右衛門の二男として同縣下に呱々の聲を揚げ、長じて先代櫻井又五郎氏の養子となり、大正四年その家督を相續した。夙に教育に志し各小學校に教鞭を執つて初等教育の普及に努力したが、後實業界に轉じ、運送業に從事し、續いて鄕里靜岡縣の特產物たる茶の輸出に携はり、更に明治二十六年鹿島組に入つて土木建築事業界に偉才を放つた。爾來專らその發展に努め縱橫の才腕を揮つて健鬪し、幾何もなく參事に擧げられ理事に進み、現時重役として益々活躍しつゝある。資性溫厚、廣く和漢の學に通じ又衛生保健に關しては卓見あり、氏獨特の長壽法に據り、壯者を凌ぐ健康者である。趣味は讀書、歷史の研究書畫骨董等である。
妻なを、男金重（東北帝大卒、藥學士）同敏夫（山形高校在學）長女かふ（京華高女卒、千葉縣人醫學士高橋七郎妻）二女ひで（東洋高女卒、長野縣人一柳省吾妻）三女あや（山脇高女卒）

伊藤徹太郎氏　深川區木場町二ノ一二　電話本所三二〇八

伊藤製材所主、（事務所）同一ノ一一
北洋會理事長　電話本所二二〇七
明治一九年一〇月生、靜岡縣
都下製材業界の重鎭として信望隆々たる氏は、靜岡縣濱名郡赤佐村伊藤七平治氏の次男に生れた。當家は代々同所に於

沖　光次郎氏　品川區大井金子六二四〇　電話　大森一六三三

鹽水港製糖（株）參事、鹽糖製品販賣（株）取締役
明治二九年一二月生、廣島縣
大正六年長崎高等商業學校卒業
當家は代々幾野藩に仕へたる名門にして

和四年生）長女康（同五年生）

緒方知三郎氏　本鄕區千駄木町五〇　電話小石川二四六七

從四位、勳三等、醫學博士、東京帝國大學教授
明治一六年一月生、東京市

に不動貯金銀行に入り、現時同行日本橋支店に勤務中であるが、學識豐富にして特に經濟學に曉通し、職務に對しては熱心忠實にして責任觀念强く、加ふるに性格着實眞摯にして人格高潔、凡ゆる方面より觀て新時代の活躍に適せる人材として上長の新任厚く、各方面より大いに前途の雄飛を期待されてゐる。趣味は音樂ゴルフ等。

兄晴一郎(慶大卒)弟晴貞(東京帝大在學)同七郎(商船學校在學)

伊藤徹太郎氏　深川區木場町二ノ一二　電話本所三二〇八(事務所)同一ノ一一　電話本所二二〇七

伊藤製材所主、北洋會理事長

明治一九年一〇月生、靜岡縣

都下製材業界の重鎭として信望隆々たる氏は、靜岡縣濱名郡赤佐村伊藤七平治氏の次男に生れた。當家は代々同所に於て酒造業を營み、氏も亦濱松中學校を修業退學後暫らく家業に携はつてゐたが、二十二歳の時帝都實業界に雄飛すべく單身上京し、直ちに大倉製材所に入つた。爾來五ケ年間專ら職務に精勵して實地經驗を積みたる後、大正元年獨立して伊藤製材所を設立し製材品販品を開始し、奮鬪努力次第に販路を擴張し顧客の信用を高め、着々業礎を築いた。大正十二年大震災の直後、鶴歩町より現地に移轉して以來業績益々興隆し、遂に今日の活況を呈するに至つた。資性溫厚篤實にして公共心に富み、北洋會理事長として同業界の親睦發展に盡し、或は木場一丁目及二丁目各町會評議員として自治に貢獻する等功績尠なからず、「苦樂悲喜に執着せず洒々落々の生を送る事」を處世の要諦として朗かな生活を營んでゐる。趣味は義太夫等で、とめ子夫人との間に一男三女がある。

沖　光次郎氏　品川區大井金子六三四〇　電話大森一六三三

鹽水港製糖(株)參事、鹽糖製品販賣(株)取締役

明治二九年一二月生、廣島縣

大正六年長崎高等商業學校卒業

當家は代々淺野藩に仕へたる名門にして、氏は故沖貞吉氏の四男として、廣島市榎町に生れた。夙に實業界に志し、縣立廣島商業學校に學び、大正三年同校卒業後更に長崎高等商業學校に進み、學業を卒へると同時に鹽水港製糖に入社して同社の臺灣事業地に赴任した。爾來只管職務に勵んで次第に重用され、大正十年東京事務所に轉じ、昭和三年二月參事に昇進し經理部長の要職に拔擢された。又同年三月鹽糖製品販賣株式會社の設立と同時にその取締役に擧げられ、以て今日に及んでゐる。資性溫厚にして身を持する事謹嚴、「自己業績の自己內省」「自己の事は自己に於て決濟する事」等を處世のモットーとして反省修養に努め、高潔なる人格者として尊敬されてゐる。趣味はスポーツ就中ゴルフ、觀劇、書畫骨董、讀書等である。

妻佳壽子(明治四〇年生、沼津市高梨鎌太郎二女、沼津高女卒)長男裕之(昭和四年生)長女康(同五年生)

緒方知三郎氏　本鄉區千駄木町五〇　電話小石川二四六七

從四位、勳三等、醫學博士、東京帝國大學教授

明治一六年一月生、東京市

明治四一年東京帝國大學醫科卒業

病理學の泰斗として名高き氏は、大阪府士族緒方銈次郎氏の實弟に生れた。夙に醫學界に志し、優秀の成績を以て大學卒業後明治四十三年獨逸に遊學し、約四ケ年間同地に在つて只管研鑽に勵み大正二年歸朝した。爾來母校に教鞭を執り以て今日に及んでゐるが、此の間更に研究を積んで病理學の蘊奧を窮め、大正四年醫學博士の學位を授けられ、又大阪朝日新聞社東宮殿下御成婚記念賞を授與されて學界の功勞者たる名譽を博し、今や研究益々進み名實共に斯界の權威として謳歌されてゐる。趣味としてスポーツ、奇術等を好み現に同大學陸上運動部長として體育の奬勵、スポーツ淨化等に盡瘁しつゝある。宗旨は禪宗。

妻幸子(明治二二年生、法學博士岡村輝彥妹、學習院女學部卒業)長男秀雄(同四三年生、帝大文科在學)

に及んでゐる。資性溫厚篤實にして才腕兼備、加ふるに既に多年の經驗を有し、大いに前途を期待されてゐる。趣味はゴルフ等。

妻美津子、長男純男(昭和二年生)

櫻井　金作氏　豐島區池袋一ノ六二七　電話大塚四七三

鹿島組(株)取締役

慶應二年生、靜岡縣

多年土木請負業界に活躍し鐵道建設工氏獨特の長壽法に據り、非常に健康者である。趣味は讀書、歷史の研究書畫骨董等である。

妻なを、男金重(東北帝大卒、藥學士)同敏夫(山形高校在學)長女かふ(京華高女卒、千葉縣人醫學士高橋七郎妻)二女ひで(東洋高女卒、長野縣人一柳省吾妻)三女あや(山脇高女卒)

高橋敏太郎氏　澁谷區豐分一　電話青山三四七四

社會事業家
明治一三年二月生、滋賀縣
明治三九年和佛法律學校卒業

社會奉仕に邁進し崇高なる人格者として名高き氏は、滋賀縣人稻本嘉平次氏の次男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治二十一年高橋角太郎氏の養子となり同家を嗣いだ。和佛法律學校卒業の翌年三井物産に入社し、同社桑港支店、倫敦支店東京本店等に歷勤して漸次其手腕を認められ、上海支店次長に拔擢された。上海支店に於ては克く支店長を翼けて業績向上に貢献少なからず、後新嘉坡支店長に推されて益々敏腕を發揮し只管同社の發展に努力した。昭和四年滿五十歲を期として同社を辭して以來、深く感ずる所あつて社會事業に身を挺し、社會公共の福祉增進に餘生を献ぐる決心を以て凡ゆる方面に活躍以て今日に及んでゐる。性來盡忠報國の觀念に篤く、紊亂腐敗の世相を慨し、社會改革に關する深き造詣と犧牲的精神とは夙に洽く認められ推服されてゐる。家庭はトキ子夫人と琴瑟相和し頗る圓滿である。

小林武次郎氏　麻布區本村町二一三　電話高輪七、一三四

東京株式取引所取引員金半商店(株)社長
明治二七年八月生、東京市
大正九年慶應義塾理財科卒業

氏は東京市淺草區田町の株式仲買人として名高き小林市太郎氏の二男として生れ、長じて慶應義塾理財科に學び、其在學中大正八年支那に渡り彼地の實業界を視察して歸朝し、翌大正九年慶大を卒業して直ちに、先代以來の仲買業を繼ぎ家業をして益々盛大に趣かしめた。大正十二年株式會社金半商店取締役社長となり、又小林一家の財團組織に成る協林合資會社無限責任社員となつた。次いで東京株式取引所一般、短期、國債、實物各取引員等の認許を得て、東京株式取引所組合委員に推され、日本橋區兜町に堂々たる店舗を構へて卓越せる商才を發揮し斯界の新人として將來の大飛躍を期待されてゐる。

氏は又學生時代より角力を好み都下學生角力の選手として夙に知られ、又柔道は講道館三段の免許を有し、身長五尺六寸、體重二十數貫の偉丈夫である。

妻てつ子（明治四〇年生、東京市本田重市郎長女）長男瑩（大正一四年生）長女タツ子（大正一一年生）二女いと子（大正一二年生）二男素（大正一五年生）

佐藤　元重氏　赤坂區青山高樹町八　電話青山二、八五四

（出版社）　神田區錦町基督教會館　電話神田三、五一四

基督教出版社々長、日曜世界社々長

氏は夙に日本メソヂスト教會に勤務し事務主任としてその發展に貢獻する所多く、基督教界に名聲を博した。後之を辭して基督教出版社を起し、基督教に關する各種の書籍を始め「教會日誌」「教會員原簿用紙」「洗禮志願書用紙」「入會志願書用紙」等を廣く提供して斯界に便し、或は大阪市天王寺區悲田院二八に日曜世界社を經營する等陰に陽に基督教の發達普及に努力し、教化に尠なからざる功績を顯はし、以て今日に及んでゐる。資性溫厚篤實にして人格頗る高く、常に營利的觀念に超然として濟世救民をモットーとし、社會公共的に盡瘁の念厚く、基督教界に於ては勿論、各方面より尊敬され將來の活躍を期待されてゐる。

本山　白雲氏　世田谷區新町二ノ一三五　電話世田谷三二三九

彫塑家
明治四年九月生、高知縣
明治二九年東京美術學校木彫科卒業

本邦彫塑界の權威たる氏は、高知縣宿毛町の本山省吾氏の二男にして、男爵岩村通俊氏の甥に當り、本名は辰吉と呼ぶ幼時より苦學力行し十七歲の時鄕里小學校の教師となつたが、幾許もなく之を辭し十八歲の時東海道を徒走上京し、彫塑界の元老高村光雲氏の門弟となり、更に二十歲の時像を製作中である。

妻多可子（明治一二年生）長男一郎（二八歲、明大卒）二男近思（二一歲）長女志可子（二六歲、跡見卒、教育家岩本春一妻）

川田喜俊二氏　麴町區上二番町一　電話九段一、二二五

時代的新人として前途を囑望されてゐる。

妻櫻子（二二歲、日本銀行大阪支店長阿部泰二長女、聖心女學院卒）

河内いせ女史　京橋區銀座西七ノ五ノ二　電話銀座三六二一

[illegible]

として同社を辭して以來、深く感ずる所あつて社會事業に身を挺し、社會公共の福祉增進に餘生を献ぐる決心を以て凡ゆる方面に活躍以て今日に及んでゐる。性來盡忠報國の觀念に篤く、紊亂腐敗の世相を慨し、社會改革に關する深き造詣と犧牲的精神とは夙に洽く認められ推服されてゐる。家庭はトキ子夫人と琴瑟相和し頗る圓滿である。

組合委員に推され、日本橋區兜町に堂々たる店舗を構へて卓越せる商才を發揮し斯界の新人として將來の大飛躍を期待されてゐる。

氏は又學生時代より角力を好み都下學生角力の選手として夙に知られ、又柔道は講道館三段の免許を有し、身長五尺六寸、體重二十數貫の偉丈夫である。

妻てつ子（明治四〇年生、東京市本田重市郎長女）長男瑩（大正一四年生）長女タツ子（大正一一年生）二女いと子

溫厚篤實にして人格頗る高く、常に營利的觀念に超然として濟世救民をモットーとし、社會公共的に盡瘁の念厚く、基督教界に於ては勿論、各方面より尊敬され將來の活躍を期待されてゐる。

本山　白雲氏

世田谷區新町三ノ一三五
電話世田谷三二三九

彫塑家
明治四年九月生、高知縣
明治二九年東京美術學校木彫科卒業

本邦彫塑界の權威たる氏は、高知縣宿毛町の本山省吾氏の二男にして、男爵岩村通俊氏の甥に當り、本名は辰吉と呼ぶ幼時より苦學力行し十七歳の時鄕里小學校の教師となつたが、幾許もなく之を辭し十八歳の時東海道を徒走上京し、彫塑界の元老高村光雲氏の門弟となり、更に二十歳の時美術學校に入學した。天才は名人の薫陶裡に遺憾なく發揮され、在學中恩師光雲氏が西鄕隆盛翁の銅像製作の命を受けるや、氏はその助手に選ばれて早くもその非凡の技を認められ、卒業後直ちに母校に招聘された。爾來後進を指導の傍ら益々研究を積んで斯道の蘊奥を窮めるに至つた。現在迄に氏の製作品は其數幾百なるを知らず全國各地に氏の偉大なる藝術を顯はしてゐるが、就中廣く江湖に知られてゐる作品は「品川子爵像」「川路大警視像」「坂本龍馬像」「後藤象次郎伯像」「澁澤榮一子像」「東鄕平八郎伯胸像」鄕里宿毛町産土神天滿宮の御神體等々の名作にして、尙ほ現時維新の元勳其他の諸

本山白雲氏

像を製作中である。

妻多可子（明治一二年生）長男一郎（二八歳、明大卒）二男近思（二一歳）長女志可子（二六歳、跡見卒、教育家岩本春一妻）

川喜田俊二氏

麹町區上二番町一
電話九段一、二一五

經濟學士、菱川（資）有限社員、明治生命保險（株）社員、三重縣
明治三九年一二月生、三重縣
昭和六年法政大學經濟學部卒業

當家の祖は豐臣家に仕へたが、大阪落城後伊勢國に遁れて商人となり、爾來代々久太夫を襲名して商業に從事し、三重縣下屈指の豪商として知られてゐる。當主久太夫氏は三重縣多額納稅者にして、川喜田商店、相互商事兩株式會社々長たる外三重共同貯蓄銀行、百五銀行各頭取、三重農工銀行取締役、明治生命保險監査役、菱川合資無限責任社員等の要職を兼ねて財界に雄飛すると多年に及び、斯界に名聲を博してゐる。氏はその二男に生れ、麻布中學校を經て法政大學に進み、經濟學を專攻し優秀の成績を以て同大學卒業後直に明治生命保險會社に入り精勵恪勤以て今日に及んでゐる。音樂、スポーツ等に趣味を有し、溫厚にして新時代的新人として前途を囑望されてゐる。

妻櫻子（二二歳、日本銀行大阪支店長阿部泰二長女、聖心女學院卒）

河内いせ女史

京橋區銀座西七ノ五ノ二
電話銀座三六二

藝妓置屋「河辰中」女將、新橋藝妓組合理事、三重縣人會幹事
明治一五年一月生、三重縣

都下花柳界に名聲嘖々たる女史は、三重縣桑名郡矢田川原の出身にして、桑名に於てその名隱れなき阪東の角丸の妹分である。十六歳の妙齡を以て艶麗華の如き優姿を帝都に顯はし、二十三歳迄新橋華街に勤め艶名を謳はれたが、後藝妓置屋を創め、家業の興隆に專心以て今日に及んでゐる。現時一流の名妓十數名を擁して隆況を呈し、女史は自らその薫育に當る傍ら、新橋藝妓組合理事として同業者の發展に盡し、由緒ある新橋藝妓の品位向上に努め、或は鄕里三重縣人會幹事として後進の拔導に盡瘁する等盛んに活躍しつゝある。資性溫順貞淑にして一面頗る義俠心に富み情誼に厚く、同業者間は勿論、各方面に信望を博してゐる。

河合鑛氏　小石川區音羽町九ノ一三　電話牛込四、五四三

江戸川自動車商會總支配人、大正自動車(株)專務、ライオンガレーヂ經營者

明治三二年六月生、東京市

帝國自動車學校本科卒業

帝都自動車業界に聲望隆々たる氏は、河合清次郎氏の長男として市内芝區に生誕した。當家は代々江戸に住み、德川幕府の御用を勤め疊表の納入を業としてゐた。氏は夙に東京工科學校、三田英數學舍等に學び、後廣島輜重兵第五大隊に入營し、除隊後更に帝國自動車學校に學んだ。同校卒業後目白自動車商會に勤めたが幾何もなく之を辭し、大正十二年十二月市外長崎町に獨力を以て双葉自動車商會を創設し、翌十三年四月匿名組合の江戸川自動車商會を興し、更に同十四年双葉自動車商會を廢して同所にライオンガレーヂを開設し、又江戸川自動車商會の姉妹會社たる大正自動車株式會社の專務に選ばれた。昭和七年四月江戸川自動車及び大正自動車の從業員爭議が勃發したが、氏は克く之に善處して圓滿解決を遂げ、今や業勢隆々として榮え、氏の敏腕は普く同業界に稱へられてゐる。趣味は狩獵、水泳、寫眞等である。

妻みき子、長女慶子

垣内松三氏　淀橋區百人町三ノ二八五　電話四谷一三六二

正五位、文學士、東京高等師範學校教授

明治一一年一月生、岐阜縣

明治三六年東京帝大文科國文科卒業

國文學の造詣深く教育界に聲望高き氏は、岐阜縣人代情茂助氏の實弟にして同縣大野郡高山町に呱々の聲を揚げ、後垣内雲峰氏の養子となり大正八年その家督を相續した。夙に第四高等學校を經て東京帝大に學び、卒業後更に大學院に進んで專ら國文學を研究し、後母校講師となり、次で第六臨時教員養成所教授兼東京女子高等師範學校教授に任ぜられ、更に明治四十三年東京高等師範學校教授に任ぜられた。爾來二十餘年に亘り同校に在つて只管後進の指導養成に努める傍ら研究を積み、又此の間大正九年歐州に航し各地を歷遊視察する等、多年教育界に盡したる功績は甚大にして、その崇高なる人格と相俟つて信望を博してゐる。趣味は讀書、旅行、茶の湯等である。

妻信世（明治二〇年生、和歌山縣人日疋信亮二女、女子學院卒）長女愛子（同四三年生、女子學院卒）二女節（大正四年生、日本女子大學在學）三女道子（同一二年生）

内藤信利氏　中野區高根一一二　電話中野三、二四四

正五位、勳五等、子爵、海軍主計少佐、水路部勤務

明治二五年一月生

海軍經理學校卒業

當家は藤原鎌足の後裔信成の後孫である。信成は德川家に仕へて偉功を樹て越後國村上藩主に封ぜられ、爾來連綿として明治維新に及んだ。維新後信成十二代の孫たる先代信任氏は明治十七年子爵を授けられた。氏は前田利聲氏の男にして伯爵前田利男氏の叔父に當り、先代信任氏の養子となり、後その家督を相續し襲爵仰付けられ、前名春原を現名に改めた。夙に海軍經理學校に學び、卒業後累進して主計少佐に任ぜられ、現時水路部に勤務中であるが、頭腦明晰にして特に數理に長け、資性溫厚にして至誠奉公の念厚く、省内の人望を聚め、將來の雄飛を期待されてゐる。

妻彌榮子（明治三二年生、養父信任長女、女子學習院卒）男信篤（大正一四年生）

野村淺吉氏　淀橋區西大久保三ノ二六　電話四谷一八九五

在鄕陸軍歩兵中尉、三井物産(株)會計課勤務

明治一六年一月生、埼玉縣

明治三四年横濱商業學校卒業

多年三井物産に在つて活躍し信望隆々たる氏は、埼玉縣北葛飾郡彦成村の出身にして、舊姓は堀切であつたが、後野村泰亨氏の死跡を繼承し野村姓に改めた。大正九年東京帝大工科機械科卒業

本邦紡績業界の覇者たる富士瓦斯紡績會社に在つて敏腕の聞え高き氏は、大阪府人坂上宗兵衞氏の息として同府に呱々の聲を揚げた。幼少の頃より頭腦頗る明晰にして、拔群の成績を以て學生時代を一貫し、秀才の譽れを博した。大正九年共に伸び、師に認められて裏千家老分として遇せられるに至り、同幽齋宗長と號し的傳教授の免許を受けた。爾來一般に教授し、子弟の養成に勵むと共に由緒深き裏千家の流派普及に努め、傍ら益々研究を積んで技倆の洗練に意を注ぎ、今や斯界一流の大家として名聲を博してゐる

會を創設し、翌十三年四月匿名組合の江戸川自動車商會を興し、更に同十四年双葉自動車商會を廢して同所にライオンガレーヂを開設し、又江戸川自動車商會の姉妹會社たる大正自動車株式會社の專務に選ばれた。昭和七年四月江戸川自動車及び大正自動車の從業員爭議が勃發したが、氏は克く之に善處して圓滿解決を遂げ、今や業勢隆々として榮え、氏の敏腕は普く同業界に稱へられてゐる。趣味は狩獵、水泳、寫眞等である。

妻みき子、長女慶子

つて只管後進の指導養成に努める傍ら研究を積み、又此の間大正九年歐州に航し各地を歷遊視察する等、多年教育界に盡したる功績は甚大にして、その崇高なる人格と相俟つて信望を博してゐる。趣味は讀書、旅行、茶の湯等である。

妻信世（明治二〇年生、和歌山縣人日足信亮二女、女子學院卒）二女節（大正四年生、女子學院卒）長女愛子（同四三年生、日本女子大學在學）三女道子（同一二年生）

て主計少佐に任せられ現時大蹈帝國務中であるが、頭腦明晰にして特に數理に長け、資性溫厚にして至誠奉公の念厚く、省內の人望を聚め、將來の雄飛を期待されてゐる。

妻彌榮子（明治三二年生、養父信任長女、女子學習院卒）男信篤（大正一四年生）

野村　淺吉氏　淀橋區西大久保三ノ二六　電話四谷一八九五

在鄉陸軍步兵中尉、三井物產（株）會計課勤務

明治一六年一月生、埼玉縣

明治三四年橫濱商業學校卒業

多年三井物產に在つて活躍し信望隆々たる氏は、埼玉縣北葛飾郡彥成村の出身にして、舊姓は堀切であつたが、後野村泰亨氏の死跡を繼承し野村姓に改めた。夙に實業界に志し橫濱商業學校卒業後直ちに三井物產に入社し、本社に勤務すること二十餘年に及び、大正十四年七月京城支店に轉じて勘定掛主任兼支店長代理の要職に擧げられ、大いに敏腕を揮ふこと數年、昭和七年一月再び本社詰となり現時會計課に活躍しつゝある。此の間一年志願兵として近衞步兵第三聯隊に入營後幾何もなく日露戰役に出征し、乃木軍の旅順包圍戰に參加して大腿部に名譽の重傷を負ひ、勇名を馳せて凱旋した。俠氣凛々たる反面に於て頗る情に脆く、溫厚なる人格者として推服されてゐる。

妻スエ子（四九歲）長女綾子（一五歲）二女彌惠子（一四歲）

坂上恒次郎氏　芝區二本榎西町二、

工學士、富士瓦斯紡績（株）綿糸布作業課長

明治二八年一〇月生、大阪府

大正九年東京帝大工科機械科卒業

本邦紡績業界の覇者たる富士瓦斯紡績會社に在つて敏腕の聞え高き氏は、大阪府人坂上宗兵衞氏の息として同府に呱々の聲を揚げた。幼少の頃より頭腦頗る明晰にして、拔群の成績を以て學生時代を一貫し、秀才の譽れを博した。大正九年大學卒業後直ちに富士瓦斯紡績會社に入社し技師となり、同十二年滿洲紡績會社技師長に轉じたが、昭和三年三月再び富士瓦斯紡績に復し、現時前揭の要職に在つて活躍しつゝある。學識豐富加ふるに多年の經驗を積んで技術に長じ、同社の業績向上に貢獻する所尠なからず、溫厚にして高潔なる人格と相俟つて信望を博し、大いに前途を囑望されてゐる。

伊藤純太郎氏　麹町區永田町二ノ一

裏千家茶道宗匠

明治一二年六月生、三重縣

茶道界の重鎭たる氏は、三重縣の人伊藤尙藏氏の長男として津市に呱々の聲を揚げ、明治四十二年家督を相續した。幼少の頃より藝術的才能に秀で、茶道に趣味深く、宗家千宗室氏に師事して斯道を學ぶこと多年に及び、その豐富なる天分は不斷の努力と名手の董陶に依つて年と共に伸び、師に認められて裏千家老分として遇せられるに至り、同幽齋宗長と號し的傳教授の免許を受けた。爾來一般に教授し、子弟の養成に勵むと共に由緖深き裏千家の流派普及に努め、傍ら益々研究を積んで技倆の洗練に意を注ぎ、今や斯界一流の大家として名聲を博してゐる資性敦厚素朴にして高潔なる人格者として夙に各方面より尊敬され、教へを乞ふ者日に激增して隆況を呈してゐる。趣味は書畫骨董等。

妻ナミ子（雅號宗美、明治二四年生、東京府人田中敏明姉）長男大介（同四二年生）

伊藤　定女史　麻布區市兵衞町二ノ七（營業所）同仲ノ町一九　電話赤坂一、六六四

いとう美粧園主

明治一九年九月生、三重縣

都下美粧界に確乎たる地步を占め名聲嘖々たる女史は、三重縣桑名の出身である。幼少の頃父が事業に失敗したる爲め奮然蹶起し、自ら職業婦人として大いに家運を挽回すべく雄圖を抱いて上京した機を見るに敏なる女史は、美容術の將來頗る有望なるに着眼し、美容術師として起つべく苦心努力以て斯術の研究に沒頭

し、技熟するに及んで明治三十七年日露の戰端開始當時雄々しく獨立開業した。果然美容美粧は年と共に普及し遂に今日の隆況を呈するに至つたが、此の間女史は何等の宣傳をも試みず、技倆本位、實力第一主義を以て終始一貫し、次第に其の卓拔の技を認められて繁榮するに至つた。昭和元年現地に移轉擴張以來名聲益々高く、美容、着付共に實力に於て斯界に斷然群を拔き、特に結婚の着付等には斯界無比の定評を博し、上流家庭の信用厚く益々隆盛以て今日に及んでゐる。資性溫順質素、不言實行の人として夙に顧客間に好評がある。

野崎　耕一氏　荒川區日暮里八ノ一西

神奈川電氣(株)販賣部長、大島拓殖電氣(株)常務

明治二七年一一月生、岡山縣

大正八年早稻田大學理工科卒業

當家は史上に赫々たる勇名を馳せ今尚ほ人口に膾炙せる佐々木高綱の後裔にして、氏は故野崎太郎治氏の長男として岡山縣吉備郡新本村に呱々の聲を揚げた。夙に笈を京都に負ひ商工中學校を優秀の成績を以て卒業後更に早稻田大學に進み孜々研學に勵んだ。學成るや直ちに遞信省に奉職し電氣試驗所に於て實地經驗を積む傍ら益々研究を重ね、省內の信望を得てその前途を囑望されるに至つた。後神奈川電氣株式會社に轉じ精勵恪勤すること既に十餘年、その練達の技術と經營の才は相俟つて年と共に社內に重んぜられ、現時販賣部長の要職に在る傍ら、前揭の任を兼ねて活躍しつゝある。資性溫厚篤實にして公共奉仕の念厚く、稀に見る人格者として社內外の信望を博してゐる。趣味として觀世流謠曲を好み、家庭は凉子夫人と琴瑟相和し頗る圓滿である。

安宅　彌吉氏　大阪市東區今橋五ノ一四　電話本局一五〇九

大阪商工會議所副會頭、安宅商會(株)社長、大阪毛織(株)監査役

明治六年四月生、石川縣

明治廿八年東京高等商業學校卒業

氏は石川縣人安宅又吉氏の弟として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治二十五年分れて一家を創めた。夙に東京高等商業學校に學び、優秀の成績を以て同校を卒業するや、貿易界に志し、直ちに貿易商日下部商店に入つた。爾來次第にその敏腕を認められ、香港支店支配人となり、雜貨の貿易を營んだ。同三十七年安宅商會を創立するに當り、日下部商店を辭した爾來心血を濺ぎ同社の發展に努力奮鬪、次第に各方面に信用を博し、遂に今日の隆況を見るに至り、前揭各社に要職を兼ね、信望を博してゐる。大正十五年外國勳章を、昭和四年二月曾て授與せし紺綬褒章に付す飾版を下賜された。

妻奈良江（明治九年生、石川縣人久永常助長女）長男英一（同三四年生）同妻道子（同三五年生、大阪府吉田長敬二女）同長女美江（大正一五年生）同二女弘子（昭和四年生）女登美子（明治四二年生）二男重雄（同四四年生）

荒木　武行氏　小石川區小日向臺町二ノ一六　電話小石川一〇七四

（事務局）京橋區銀座六、交詢社ビル　電話銀座四、七二九

日本新聞聯盟事務管掌

明治二九年八月生、福島縣

會津中學校卒業

操觚界に名聲高き氏は、故荒木與三郎氏の長男として福島縣耶麻郡駒形村常世に呱々の聲を揚げた。中學卒業後直ちに福島民友新聞社に入社して操觚界に第一歩を踏み、爾來東京日々、時事、中外商業等各社に轉勤して敏腕を揮ひ、昭和五年日本新聞聯盟の創設と同時にその事務管掌に就任以て今日に及んでゐる。資性俊敏濶達にして義俠心强く特に愛鄉心に富み、曩に獨力を以て會津タイムス社を經營し鄉黨の指導、鄉里の啓發に努めたが、更に昭和七年會津農民學校を設立し農民の啓蒙運動の一として貧農子弟の養成に意を注ぎ、毎年三期間講習の制を定め旣にその第一期卒業生約六十名を出し

[illegible]

功五級の榮位に在り、普く縣下に信望を博してゐる。氏はその次男にして、東京農大出身の松浦彌太郎氏の實弟に當り、東京帝大出身東京日日新聞社員松浦年三郎氏の實兄である。幼少の頃より兩兄弟と共に秀才の譽れ高く、第一高等學校を經て東京帝國大學に學び、優秀の成績を以て卒業後直ちに三菱商事會社に入社し

[illegible]

に移つて後も、着實眞摯只管同店の發展に邁進し、現に支配人の要職に在つて益々活躍しつゝある。神道を信仰し、趣味として讀書を好む。

妻ジヤウ（明治一五年生、濱島鐵太郎三女）長男仁（同三五年生、松坂屋上野支店勤務）二男武（同三七年生）三男正（同三九年生）四男通明（同四三

神奈川電氣(株)販賣部長、大島拓殖電氣(株)常務
明治二七年一一月生、岡山縣
大正八年早稲田大學理工科卒業
當家は史上に赫々たる勇名を馳せ今尚ほ人口に膾炙せる佐々木高綱の後裔にして、氏は故野崎太郎治氏の長男として岡山縣吉備郡新本村に呱々の聲を揚げた。夙に笈を京都に負ひ商工中學校を優秀の成績を以て卒業後更に早稲田大學に進み孜々研學に勵んだ。學成るや直ちに遞信

長、大阪毛織(株)監査役
明治六年四月生、石川縣
明治廿八年東京高等商業學校卒業
氏は石川縣人安宅又吉氏の弟として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治二十五年分れて一家を創めた。夙に東京高等商業學校に學び、優秀の成績を以て同校を卒業するや、貿易界に志し、直ちに貿易商日下部商店に入つた。爾來次第にその敏腕を認められ、香港支店支配人となり、雜貨の貿易を營んだ。同三十七年安宅商會

社ビル　電話銀座四、七二九
日本新聞聯盟事務管掌
明治二九年八月生、福島縣
會津中學校卒業
操觚界に名聲高き氏は、故荒木與三郎氏の長男として福島縣耶麻郡駒形村常世に呱々の聲を揚げた。中學卒業後直ちに福島民友新聞社に入社して操觚界に第一歩を踏み、爾來東京日々、時事、中外商業等各社に轉勤して敏腕を揮ひ、昭和五年日本新聞聯盟の創設と同時にその事務

管掌に就任以て今日に及んでゐる。資性俊敏濶達にして義俠心強く特に愛鄉心に富み、曩に獨力を以て會津タイムス社を經營し鄉黨の指導、鄉里の啓發に努めたが、更に昭和七年會津農民學校を設立し農民の啓蒙運動の一として貧農子弟の養成に意を注ぎ、毎年三期間講習の制を定め既にその第一期卒業生約六十名を出したが、益々今後の發展を策し、鄉黨の尊敬の的となつてゐる。趣味として觀劇、讀書等を最も好み、著書には「横田千之助論」「床次竹二郎論」「野間清治論」及び近著「新政治家列傳」等がある。家庭はフデ子夫人と琴瑟相和し和氣靄々たるものがある。

松浦攻次郎氏　瀧野川區西ケ原五六六
電話小石川一、一九九
法學士、三菱商事(株)社員
明治四〇年二月生、福島縣
昭和四年東京帝大法科政治科卒業
松浦家は福島縣下屈指の舊家にして、元祿年間淺川村より現在の山白石村に移住して庄屋を勤め、爾來代々農業に從事する傍ら酒造業を兼營し來つたが、數年前之を廢した。當主松浦勇氏は黑谷川水電株式會社々長として財界に令名高く、現に同縣多額納稅者にして從七位勳六等

功五級の榮位に在り、普く縣下に信望を博してゐる。氏はその次男にして、東京農大出身の松浦彌太郎氏の實弟に當り、東京帝大出身東京日日新聞社員松浦年三郎氏の實兄である。幼少の頃より兩兄弟と共に秀才の譽れ高く、第一高等學校を經て東京帝國大學に學び、優秀の成績を以て卒業後直ちに三菱商事會社に入社し以來只管職務に精勵以て今日に及んでゐるが、資性頗る濶達にして滿々たる覇氣を藏し、而も溫厚の君士人として夙に社内の信望厚く、大いに將來の飛躍を待望されてゐる。趣味としてスポーツ、讀書等を愛好し、特に學生時代には野球の名選手として謳はれ、現時も野球には最も深き趣味を有してゐる。

内海貫一郎氏　小石川區表町一〇九
電話小石川一〇七三
吉村右一商店支配人
明治九年一二月生、三重縣
氏は三重縣内海眞質氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後その家督を相續した。夙に實業界に入り、努力奮鬪主義を以て一貫し漸次その地歩を開拓し、大正八年竹口文太郎商店に入るや克く店主を援けて業勢の興隆に努力し、厚く店主の信任を得た。同十一年吉村右一商店

に移つて後も、着實眞摯只管同店の發展に邁進し、現に支配人の要職に在つて益々活躍しつゝある。神道を信仰し、趣味として讀書を好む。
妻ジヤウ（明治一五年生、濱島鐵太郎三女）長男仁（同三五年生、松坂屋上野支店勤務）二男武（同三七年生）三男正（同三九年生）四男通明（同四三年生）五男修（大正元年生）六男清（大正三年生）七男忠（同六年生）

島津　久厚氏　牛込區市ケ谷加賀町一ノ二、電話　牛込一〇三五
男爵
大正七年一〇月生、宮崎縣
當家は島津家第十六世修理太夫義久の後裔にして、代々日向都城に於て三萬九千六百餘石を領し、島津本家の國老を勤めたる名門である。先々代久寛氏は父久靜氏と共に維新の際國事に奔走して偉功を樹て、先代久家氏は北卿家より入つて當家を繼ぎ、明治二十四年男爵を授けられた。夙に軍界に入り累進して陸軍中佐に任ぜられ、日露戰役に出征して赫々たる武勳を現はし功五級を賜はつた。氏はその長男にして大正十一年家督を嗣ぎ、襲爵仰付けられた。現時尚ほ修學中であるが、溫厚にして才智に富み大いに前途を囑望されてゐる。

母恭子(明治一八年生)姉淑子(同四〇年生)
姉圭子(同四四年生)姉瑛子(大正四年生)

神保　朝悟氏　大阪市浪速區惠美須町三ノ一〇七、電話二六五三

憶想寺住職、梅溪裁縫女學校長
明治元年生、大阪府

氏は淸堂と號し、教育家として又宗教家として夙に名聲を博してゐる。大阪府に呱々の聲を揚げ、幼小の頃より頭腦頗る明晰にして秀才の譽れ高く、長じて第三高等學校に學ぶや天稟の才は益々發揮された。同校卒業後直ちに教育界に投じ相愛高等女學校、大谷高等女學校、成器商業學校等の教諭に歷任し、後進の指導に勵むこと多年に亘り、關西に於ける中等教育界に普く認められるに至つた。その後之を辭して憶想寺住職となり、傍ら梅溪裁縫女學校、神保文庫、日曜學校等を經營し、布教育英に從事以て今日に及んでゐる。學識豐富にして德高く、名利に超然として社會公共に盡瘁し、各方面に頗る信望がある。

今村　次郎氏　淺草區須賀町二〇　電話淺草三五一一

速記大家
明治元年一一月生

日本速記は發祥されてより本年を以て滿五十年に達するが創始發明者は田鎖綱紀氏にして、その高弟に酒井昇造氏あり我今村次郎氏は十八歲にして酒井昇造の門に入り速記術を習得し、爾來四十有餘年斯界の爲めに盡瘁せり。

氏の名聲が田鎖、酒井兩氏を犯して速記家と云へば直ちに今村氏を思ふ程江湖に轟きしその原因は時運益々其需要を增加せし爲にもよるが、氏の人格と文才は相俟つて明治より大正にかけて通俗文藝界の速記を獨占せしが一大基因を爲してゐる。

長男信雄氏は明治廿七年生れにして漢學の素養深く十七歲より父君に就いて速記術を習得父君を輔けて速記界に雄飛し旣に斯界の一人者として定評あり殊に說話講演を事實共ま、一字も誤らず、贅語操言を省き、創作的添削を加へて速記する等すぐれたる手腕を發揮してゐる。現に落語研究會を主宰し、斯く父子揃つた東都速記界の否日本速記界の雄を持つ事は東都史家の誇りとする處である。

夫人竹雨女史は弄月園と號し華道編に再錄せし如く東古流華道をよくし全國總會頭の榮職にあり、信雄氏夫人きよ子女史は明治三十六年生れ東洋家政女學校出身の才媛にして岳母竹雨女史に就いて華道を習ひ春草園淸雨と號し、夫君との間に誠一氏あり。

木島辰五郎氏　日本橋區新乘物町四　電話浪花二、二六二

龜屋(糸商)店主

當店は德川時代より袋物糸商として著名の老舗「龜屋」の支店にして、明治二十三年の創業以來逐年發展し都下業界に普く知られてゐる。その店主たる氏は士魂商才の典型的人物として夙に斯界に異彩を放ち業界に敏腕を揮ふこと多年に亘り、同業組合幹事として功績顯著なるものがある

業界活躍の餘暇を以て或は松村介石氏に師事し「道の會」會員として修養に努め、或は屋根裏に書齊樣の座禪堂を設けて每朝禪三昧に入り、又最近に於ては全國的に「針供養」が普及されつゝあるに拘らず、幾億の蠶が犧牲となり、糸となり衣服となつて吾々人類は日夜其恩典に浴しながら「糸供養」の行はれざるを遺憾とし、五月二十一日鎌倉淺草寺に

服部彌二郎氏　京橋區築地三ノ九　電話京橋一八七八

醫學博士、服部內科醫院長
東京帝國大學醫科卒業

帝都に於ける杏林界の權威として名聲隆々たる氏は、三重縣の出身である。幼少の頃より頭腦頗る透徹にして秀才の譽れを博し、長ずるに及んで醫界雄飛を志

として信望高き氏は、石田織右衞門氏の長男として山梨縣下に呱々の聲を揚げた夙に醫界に志し、日本醫科大學に於て專心修業後更に研究を積み、大正六年より同八年迄神奈川縣に奉職したが、後羽田町に移り、現地に開業した。資性

等教育界に奇。記念のために三[illegible]の後之を辭して憶想寺住職となり、傍ら梅溪裁縫女學校、神保文庫、日曜學校等を經營し、布教育英に從事以て今日に及んでゐる。學識豐富にして德高く、名利に超然として社會公共に盡瘁し、各方面に頗る信望がある。

今村　次郎氏　淺草區須賀町二〇　電話淺草三五一一

速記大家

明治元年一一月生

日本速記は發祥されてより本年を以て滿五十年に達するが創始發明者は田鎖綱

長男信雄氏は明治廿七年生れにして漢學の素養深く十七歳より父君に就いて速記術を習得父君を輔けて速記界に雄飛し既に斯界の一人者として定評あり殊に說話講演を事實共ま丶一字も誤らず、贅語操言を省き、創作的添削を加へて速記する等すぐ

名の老舗「龜屋」の支店にして、明治二十三年の創業以來逐年發展し都下業界に普く知られてゐる。その店主たる氏は士魂商才の典型的人物として夙に斯界に異彩を放ち業界に敏腕を揮ふこと多年に亘り、同業組合幹事として功績顯著なるものがある

業界活躍の餘暇を以て或は松村介石氏に師事し「道の會」會員として修養に努め、或は屋根裏に書齊樣の座禪堂を設けて每朝禪三昧に入り、又最近に於ては全國的に「針供養」が普及されつ丶あるに拘らず、幾億の蠶が犧牲となり、糸となり衣服となつて吾々人類は日夜其恩典に浴しながら「糸供養」の行はれざるを遺憾とし、五月二十一日獨力を以て淺草寺に於て大々的「糸供養」を營み、自ら考案せる「カード糸卷」を始め記念品三萬餘點を一般に配布し、同業者は勿論各方面に好評を博した。趣味として登山を好み、登山家としても亦知られてゐる。因みに店頭の大龜の看板は、伊勢音頭にて著名の伊勢古市の油屋所藏の神代杉一枚板荒削彫刻の逸品にして、八百年前の名工の作と傳へられてゐる。

妻千代子、弟柳川昇（東京帝國大學助教授）

石田小太郎氏　蒲田區羽田一ノ一〇六　電話羽田一四

石田外科病院長、東京府會議員、羽田町會議員

明治七年一二月生、山梨縣

大正三年日本醫科大學卒業

都下刀圭界に名聲を馳せ又自治功勞者

として信望高き氏は、石田織右衛門氏の長男として山梨縣下に呱々の聲を揚げた夙に醫界に志し、日本醫科大學に於て專心修業後更に研究を積み、大正六年より同八年迄神奈川縣に奉職したが、後羽田町に移り、現地に開業した。資性溫厚篤實にして營利的觀念に淡く誠意を以て患者に對し治療に當り、而も獨特の手腕を有する爲次第に好評を博し、遠近に普く其の名聲を認められるに至つた。一方常に社會公共的奉仕に意を注ぎ、特に町內の發展には第一線に立つて活躍し、大正十四年町會議員に選ばれ、同十五年羽田町長に就任して益々同町の興隆に努め、昭和三年東京府會議員立候補と同時に之を辭し、同七年府會議員に當選し、町會議員をも兼ねて大東京の發展に彌々盡瘁しつ丶ある。宗旨は日蓮宗、趣味は旅行等。

妻せん（明治一八年生、東京府人小野彦兵衛二女、高女卒）養女政代（一八歳、縣立山梨高女卒）

服部彌二郎氏　京橋區築地三ノ九　電話京橋一八七八

醫學博士、服部內科醫院長

東京帝國大學醫科卒業

帝都に於ける杏林界の權威として名聲隆々たる氏は、三重縣の出身である。幼少の頃より頭腦頗る透徹にして秀才の譽れを博し、長ずるに及んで醫界雄飛を志し東京帝國大學に於て只管研學に勵み、優秀の成績を以て卒業した。卒業後も依然學究的態度を改めず、或は內外各大家に師事し、或は東西古今の文獻を漁つて研究を積み、學理實地共に確乎たる自信を得たる後現在の地に開業した。爾來懇切をモットーとして一般の診療に從事すること多年、今や打診の妙諦を窮め、その崇高なる人格と相俟つて患家に絕大の信用を博し、又その周到なる研究と深き造詣は普く我が醫學界に認められるに至つた。資性溫厚にして公共心に富み、慈善救濟事業等に進んで携はり、各方面より尊敬されてゐる。

橋口　兼清氏　中野區文園町一七

北海道紫明園主、同德舜瞥橋口農場・同幸內橋口農場・同定山溪橋口農場各場主

大日本農會理事、東京農業大學評議員長

明治一八年九月生、北海道

當家は代々島津藩に仕へ奉行を勤めたる名門にして、祖父兼三氏は維新の際國事に奔走して偉功を樹て、維新後元老院議官に擧げられた。父文藏氏は札幌農學校長として名聲を馳せ、又馬越恭平氏等と共に內地麥酒の改善を企て大日本麥酒株式會社を創立し、斯界に貢獻する所甚大であつた。氏は其長男にして伯爵樺山愛輔氏の再從弟に當り、明治三十六年家督を相續した。明治四十二年東京農大卒業後大日本麥酒株式會社技師として多年敏腕を揮つたが後之を辭して專ら北海道の開發に意を注ぎ、前揭各農場を經營して今日に及んでゐる。神道を信仰し、趣味は日本歷史、新聞研究等である。

母千賀(萬延元年生)妻コト(明治三二年生、鹿兒島縣士族平田直一長女、鹿兒島第二高女卒)長女紀子(大正一〇年生)二女攝子(同一一年生)三女敦子(同一三年生)弟孝(明治二〇年生、日本大學卒)同妻ツル(同三四年生)弟三郎(同二五年生)

大岡　忠綱氏　麻布區宮村町七一　電話赤坂一四四〇

從四位、子爵、法學士、陸軍三等主計、朝鮮銀行勤務

明治二七年三月生、東京市

大正八年京都帝大法科政治科卒業

當家は大岡忠右衞門尉忠勝の後裔である。忠勝三世の孫大岡越前守忠相は今尙ほ人口膾炙せる名奉行にして、寬延元年奉行在職中功績に依つて增封を受け、一萬石を領し大名に列した。爾來代々三州西大平藩主として明治維新に及び、忠相五代の孫に當る先代大岡忠敬氏は明治十七年子爵を授けられた。氏はその長男として東京市に生れ、明治三十七年家督を相續し襲爵仰付けられた。大學卒業後一年志願兵として入營し三等主計に任ぜられ、除隊後大正十年朝鮮銀行に入り、東京支店に勤務し累進して現時同支店爲替係主任として活躍しつゝある。

妻靜(明治三二年生、貴族院議員伊藤長次郎長女、京都府立第一高女卒)長男忠輔(大正一三年生)長女和子(同一〇年生)弟忠俊(明治三六年生、慶大卒)同忠德(同三二年生、工學士、經濟學士、大阪府人砂川雄峻養子)

川上　高帆氏　芝區三田豐岡町二　電話高輪三九二一

淺野セメント(株)參與、土佐セメント(株)常務、武藏野鐵道(株)取締役

明治二二年三月生、東京府

セメント業界に信望隆々たる氏は、東京府人川上泉氏の長男に生れ、明治四十年家督を相續した。東京高等工業學校卒業後直ちに日本製鋼所に入社したが、大正二年淺野セメント株式會社に轉じ、同社北海道支店工務課長、臺灣支店工場長等に歷任し、更に大正十一年深川工場長となり、練達の技を遺憾なく發揮して同社製品の品質向上と生產能率の增進に貢獻する所甚大であつた。後同社東京支店長に拔擢されるや經營にも亦非凡の才腕を發揮し、次第に社內の信望を高め今や同社參與の要職に在る外土佐セメント株式會社の重役をも兼ねて斯業界に重きをなし、更に武藏野鐵道株式會社重役として交通界にも一歩を踏み、都下實業界に令名嘖々たるものがある。

妻貞子(明治三一年生、東京府人川島龜之助長女、札幌高女卒)長男淨(大正六年生)二男汪(同七年生)

吉澤　直江氏　目黑區下目黑三ノ六七七

日本聖公會老、神學博士、日本聖公會教務院長、同會南東京地方部常置委員長、在日本エス・ピー・ヂー宣教々師社團理事、日本聖公會南東京地方部監督秘書

文久三年一二月生、神奈川縣

基督教界の長老たる氏は、神奈川縣人吉澤源三氏の三男として同縣愛甲郡玉川村に生れた。明治十三年より約二ケ年間同縣大山阿夫利神社生徒寮に於て皇漢學を修め、又同十九年より二ケ年半英國大使館附宣教師エ・シ・ショウ氏に就いて神學を修め、同二十二年日本聖公會執事に擧げられた。爾來專ら同會に屬して活躍し、同二十五年長老に拔擢せられ、現し四段の名手であつた。氏は夙に實業に志し、大倉商業學校卒業後直ちに金子工場に入り、專心同工場の發展に努力し次第に信用を得るに至つた。大正六年同工場が合資會社組織となるや、氏はその業務執行社員に擧げられ、同社經營の衝に當つて益々敏腕を發揮し、貢獻する所甚大なるものがあつた。同七年越中屋商店を創始して自ら代表社員となり、現時前學卒業後、更に同大學皮膚科教室に在つて研究を積むこと數年、更に大正九年歸京し慶應義塾大學醫學部皮膚科教室に於て、諸博士の指導を受けつゝ只管研鑽しその深き造詣と熱心なる研究的態度は夙に斯道大家に認められ、大正十五年醫學博士の學位を授與された。其の後現在の地に開業し、多年心血を濺いで研究を重ねたる皮膚科を專門として一般の診療に

母千賀(萬延元年生)妻コト（明治三二年生、鹿兒島縣士族平田直一長女、鹿兒島第二高女卒)長女紀子(大正一〇年生)二女攝子(同一一年生)三女敦子(同一三年生)弟孝(明治二〇年生、日本大學卒)同妻ツル(同三四年生)弟三郎(同二五年生)

大岡　忠綱氏　麻布區宮村町七一　電話赤坂一四四〇
從四位、子爵、法學士、陸軍三等主計、朝鮮銀行勤務

妻靜（明治三二年生、貴族院議員伊藤長次郎長女、京都府立第一高女卒）長男忠輔(大正一三年生)長女和子（同一〇年生)弟忠俊(明治三六年生、慶大卒同忠德（同三二年生、工學士、經濟學士、大阪府人砂川雄峻養子)

川上　高帆氏　芝區三田豐岡町二　電話高輪三九二一
淺野セメント（株）參與、土佐セメント(株)常務、武藏野鐵道(株)取締役
明治二二年三月生、東京府

令名嘖々たるものがある。
妻貞子（明治三一年生、東京府人川島龜之助長女、札幌高女卒)長男淨(大正六年生)二男汪(同七年生)

吉澤　直江氏　目黑區下目黑三ノ六五七
日本聖公會老、神學博士、日本聖公會教務院長、同會南東京地方部常置委員長、在日本エス・ピー・ヂー宣教々師社團理事、日本聖公會南東京地方部監督秘書
文久三年一二月生、神奈川縣

基督教界の長老たる氏は、神奈川縣人吉澤源三氏の三男として同縣愛甲郡玉川村に生れた。明治十三年より約二ケ年間同縣大山阿夫利神社生徒寮に於て皇漢學を修め、又同十九年より二ケ年半英國大使館附宣教師エ・シ・ショウ氏に就いて神學を修め、同二十二年日本聖公會執事に擧げられた。爾來專ら同會に屬して活躍し、同二十五年長老に拔擢せられ、現時前記の要職を兼ねて宗教界に重きをなしてゐる。
二男道之助（明治二九年生、立教大學卒、銀行員)同妻幸子(同三六年生、橋爪米重長女、女子大學英文科卒）三男秀夫（同三一年生、立教大學卒、生命保險會社員）同妻治子(京城高女卒)長女たま(同二二年生、坪井正太郎妻)二女チヨ(同二三年生、石川周妻)三女操子(同二七年生、榊原玄龍妻)

鶴森　龜藏氏　本郷區春木町二ノ三九　電話小石川二、九六八
金子工場(資)業務執行社員、越中屋(資)代表社員、日本信號(株)監査役
明治二二年八月生、東京府
堅實眞摯なる實業家として信望高き氏は、先代鶴森信太郎氏の長男に生れ、明治三十年家督を相續した。父は將棋に達し四段の名手であつた。氏は夙に實業に志し、大倉商業學校卒業後直ちに金子工場に入り、專心同工場の發展に努力し次第に信用を得るに至つた。大正六年同工場が合資會社組織となるや、氏はその業務執行社員に擧げられ、同社經營の衝に當つて益々敏腕を發揮し、貢献する所甚大なるものがあつた。同七年越中屋商店を創始して自ら代表社員となり、現時前掲の任に在つて活躍しつゝある。
妻シヅ（明治二三年生、東京府人福井平七長女）長男錦鳳(大正四年生)二男輝邦(同七年生)三男靜藏(昭和二年生)二女玉惠(大正二年生)三女輌繪（同九年生）四女菊江(同一一年生)六女和惠同一五年生)

信田章太郎氏　日本橋區濱町二ノ一一　電話浪花一、八七四
醫學博士、信田醫院々長
明治二一年七月生、東京市
大正五年九州帝國大學醫科卒業
帝都醫界に嘖々たる名聲を馳せ、皮膚科の權威として活躍しつゝある氏は、信田英三郎氏の長男として東京市日本橋區に呱々の聲を揚げ、大正七年家督を相續した。夙に醫界に志し、九州帝大に入つて孜々研學に勵み優秀の成績を以て同大學卒業後、更に同大學皮膚科教室に在つて研究を積むこと數年、更に大正九年歸京し慶應義塾大學醫學部皮膚科教室に於て、諸博士の指導を受けつゝ只管研鑽しその深き造詣と熱心なる研究的態度は夙に斯道大家に認められ、大正十五年醫學博士の學位を授與された。其の後現在の地に開業し、多年心血を濺いで研究を重ねたる皮膚科を專門として一般の診療に從事するや、忽ち江湖の信望を博し逐年發展以て今日の隆況を呈するに至つた。資性亦溫厚篤實にして稀に見る人格者として推服されてゐる。
妻玉子（明治三四年生、東京府人森田茂妹、京華高女卒）

天野　源七氏　自）小石川區原町一六　（宅）電話小石川一、四八三
店舗　日本橋區横山町一ノ一六　電話浪花八六三・五〇六四
近江屋(小間物化粧品商)店主
明治三九年一月生、東京市
近江屋は文化年間の創業以來連綿として今日に傳はれる老舗として同業界に重きをなし、特にヘチマコロン本舗として江湖に名聲を博してゐる。その當主たる氏は先代源七氏の孫に生れ、大正元年八

月家督を相續した。幼時より頭腦明晰を以て知られ大いに將來を囑望され、由緒深き同店の店主となるや、その重責に鑑みて輕擧を謹み、專心業務に精勵し家名の發揚を念じ、多年の信用を失墜せざるは勿論、進んで業績の向上に努めたる効果空しからず、業績年と共に振ひ信用益々高く、以て今日の聲價を博するに至つた。年少氣鋭にして高遠の理想を持し前途の一大飛躍を期待されてゐる。

母ゆき(明治一三年生)養姉安(同三六年生)同夫陸郎(同二九年生)

明智　瀧朗氏　麻布區三軒家町四三　電話高輪七、四七八

三菱倉庫(株)參事營業部長

明治一八年四月生、東京市

明治四〇年慶應義塾大學理財科卒業

當家は史上に名高き明智日向守光秀の子乙壽丸の後裔にして、始め母方の姓を名乘り土岐と稱したが、笛方として津輕家に仕へるに及んで明田姓に改め、更に氏の祖父潔氏の時明智姓に復した。氏は山階德次郎氏の二男として日本橋區に生れ、明治二十年潔氏の養子となりその家督を相續した。夙に商工中學校を經て慶應義塾に學び、卒業後直ちに三菱倉庫株式會社に入社し、神戸支店に轉じて副長に擧げられ、更に大正十三年支配人に進み、現時同社參事に列し營業部長の要職に在つて活躍してゐる。此の間支那に漫遊し支那通を以て知られ、趣味として文學、スポーツ等を好み、鼻祖光秀を題材とせる戲曲「光秀」の好著を始め曩に光秀に關する講演を中央放送局より放送し光秀の研究者としても知られてゐる。

妻テル(明治二〇年生、東京府人伊藤ミネ長女、東京高女卒)長男毅(大正二年生)長女須磨子(明治四二年生)

坂口　勇氏　本郷區眞砂町一五　電話小石川一二四三

京橋區銀座西五ノ五　電話銀座二、〇八二

分院

醫學博士、坂口病院々長

明治一三年二月生、愛知縣

明治三九年東京帝國大學醫科卒業

皮膚科及泌尿科の泰斗として都下刀圭界に名聲嘖々たる氏は、愛知縣人林源造氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げ後坂口五郎氏の養子となり大正八年その家督を相續した。大學卒業後間もなく坂口病院を開設し、一般の診療に從事すると共にその餘暇を以て絶へず研究を積み又歐米に留學し各地の大家に就いて皮膚科及泌尿科に關する學理及實地經驗を究め、歸朝後大正七年醫學博士の學位を授與された。その專攻する所は深く廣く、患者に對しては營利觀念を離れ懇切叮嚀をモットーとして診療に當るため、次第に一般の信用を高め、診療を乞ふ者日を逐ふて激增し、本院の外銀座街頭に分院を設けて業績隆々今や名實共に斯界屈指の國手として推服されてゐる。

宮川　竹馬氏　淀橋區下落合一ノ三六七　電話　大塚三八六八

東邦電力・東邦證券保有各(株)常務、中部電力・昌榮土地・王子環狀乘合自動車各(株)取締役、王子電氣軌道・妻木電燈各(株)監査役

明治二〇年四月生、高知縣

多年電氣事業界に活躍し練達の技と經營の才相俟つて斯界に名聲嘖々たる氏は高知縣人宮川圓次郎氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正二年分て一家を樹てた。東京高等工業學校卒業後博多電燈株式會社に入り、後九州電鐵株式會社に轉じ、精勵恪勤して次第に社内の信任を得技術課長として同社の業績向上に貢獻する所甚大であつた。大正十一年東邦電力株式會社に轉じ、理事兼査業部長として敏腕を揮ひ、現時同社及其の傍系會社の重役たる外前掲の要職を兼ねて潤歩しつゝある。信教は神道。

妻かち(明治二八年生、岐阜縣人加藤正誼三女、宮城縣立第一高女卒)長男精一(大正九年生)二男福雄(同一二年生)長女タカ子(同三年生)二女文子(同五年生)三女エツ子(同七年生)

内村　兵藏氏　赤坂區青山南町五ノ四五　電話青山七〇〇五

妻ヨシ(明治六年生、福島縣千葉右門太長女)長男康邦(同四三年生)養子三郎(同二八年生)

清水　茂松氏　芝區田村町七一　電話芝二一二四

醫學博士、清水小兒科院々長

明治一六年五月生、石川縣

明治四三年東京帝國大學醫科卒業

妻綸子(明治二七年生、石川縣人上田計二二女、同縣立第一高女卒)長男光郎(大正五年生)二男健(同一一年生)長女道子(同三年生)二女文子(同一三年生)

柴田　愛藏氏　埼玉縣浦和町五三一　電話浦和一四七

武州貯蓄銀行(株)常務、武州銀行(株)取

三菱倉庫(株)參事營業部長　電話銀座二、〇八二
明治一八年四月生、東京市
明治四〇年慶應義塾大學理財科卒業
當家は史上に名高き明智日向守光秀の子乙壽丸の後裔にして、始め母方の姓を名乘り土岐と稱したが、笛方として津輕家に仕へるに及んで明田姓に改め、更に氏の祖父潔氏の時明智姓に復した。氏は山階德次郎氏の二男として日本橋區に生れ、明治二十年潔氏の養子となりその家督を相續した。夙に商工中學校を經て慶應義塾に學び、卒業後直ちに三菱倉庫株式會社に入社し、神戸支店に轉じて副長

醫學博士、坂口病院々長
明治一三年二月生、愛知縣
明治三九年東京帝國大學醫科卒業
皮膚科及泌尿科の泰斗として都下刀圭界に名聲嘖々たる氏は、愛知縣人林源造氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げ後坂口五郎氏の養子となり大正八年その家督を相續した。大學卒業後間もなく坂口病院を開設し、一般の診療に從事すると共にその餘暇を以て絕へず研究を積み又歐米に留學し各地の大家に就いて皮膚科及泌尿科に關する學理及實地經驗を究

明治二〇年四月生、高知縣
多年電氣事業界に活躍し練達の技と經營の才相俟つて斯界に名聲嘖々たる氏は高知縣人宮川圓次郎氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正二年分て一家を樹てた。東京高等工業學校卒業後博多電燈株式會社に入り、後九州電鐵株式會社に轉じ、精勵恪勤して次第に社内の信任を得技術課長として同社の業績向上に貢獻する所甚大であつた。大正十一年東邦電力株式會社に轉じ、理事兼查業部長として敏腕を揮ひ、現時同社及其の傍系會社の重役たる外前掲の要職を兼ねて淵

歩しつゝある。信教は神道。
妻かち（明治二八年生、岐阜縣人加藤正諠三女、宮城縣立第一高女卒）長男精一（大正九年生）二男福雄（同一二年生）長女タカ子（同三年生）二女文子（同五年生）三女エツ子（同七年生）

内村　兵藏氏　赤坂區青山南町五ノ四五　電話青山七〇〇五
在鄕陸軍獸醫監、麻布獸醫畜產學校長
明治二年二月生、福島縣
明治二五年東京帝大農科獸醫科卒業
氏は福島縣内村嘉内氏の五男に生れ、明治三十年分れて一家を創めた。夙に大學卒業後同二十七年陸軍に入り、三等獸醫に任ぜられ、爾來陸軍々醫學校教官、陸軍獸醫學校、同士官學校各教官、第一師團獸醫部長、同師團司令部附、陸軍省軍務局課員等に歷任し、此の間日清、日露兩役、西比利亞事變等に出征して偉功を樹て、又明治三十四年獸醫學研究の爲め歐米に派遣された。後陸軍獸醫監に任ぜられ、大正十五年豫備役に編入された。同十一年麻布獸醫畜產學校長に就任以來後進の教導に專念以て今日に及んでゐる信教は基督教、趣味は乘馬、菊栽培等である。

妻ヨシ（明治六年生、福島縣千葉右門太長女）長男康邦（同四三年生）養子三郎（同二八年生）

清水　茂松氏　芝區田村町七一　電話芝二一二四
醫學博士、清水小兒科院々長
明治一六年五月生、石川縣
明治四三年東京帝國大學醫科卒業
都下小兒科醫界の權威として名聲嘖々たる氏は、清水衞氏の長男として金澤市桝形に呱々の聲を揚げた。家は代々醫を業とし前田藩家老村井家の典醫を勤めた名門にして、氏も亦家業を繼ぐべく第四高等學校を經て東京帝國大學に學び、卒業後同大學小兒科教室及藥物學教室に助手として研究を積んだ。大正六年横濱大西病院小兒科部長に聘せられ、同年順天堂病院小兒科部長に轉じ、傍ら東京醫學專門學校教授に就任し、同七年醫學博士の學位を授けられた。現地に開業後も依然として研究を積み、大正十二年歐洲に留學し、伯林大學、維也大學を始めとし獨、佛、瑞西等各國の病院を歷訪し、專ら小兒科に關する研究調査を遂げ同十三年歸朝した。爾來益々斯界に活躍以て今日に及んでゐる。著書には「最近小兒科診療學」等がある。

妻綸子（明治二七年生、石川縣人上田計二二女、同縣立第一高女卒）長男光郎（大正五年生）二男健（同一一年生）長女道子（同三年生）二女文子（同一三年生）

柴田　愛藏氏　埼玉縣浦和町五三一　電話浦和一四七
武州貯蓄銀行（株）常務、武州銀行（株）取締役
明治八年八月生、京都府
明治四〇年早稻田大學商科卒業
敏腕達識と崇高なる人格と相俟つて聲望隆々たる氏は、京都府人柴田文治郎氏の長男として呱々の聲を揚げ、明治四十五年家督を相續した。夙に財界に志し、早稻田大學卒業後東京貯蓄銀行に入り、後東洋生命保險株式會社に轉じ、同社廣島支店長に擧げられ、更に名古屋支店長を經て本社會計課長に昇進し、敏腕を揮つて同社の發展に貢獻し、社内の信望を獲た。武州銀行の創立に際し之に參劃して功績尠なからず、設立後入社して重役となり、現時尙ほ同行に在る傍ら武州貯蓄銀行重役をも兼ねて同地財界に重きをなしてゐる。
妻加代（明治二四年生、京都府人松村喜二郎二女、宮津高女卒）二女文子（大正五年生）三女篤子（同七年生）四女幸

子(同一二年生)五女孝子(昭和二年生)

平田重次郎氏　板橋區板橋一ノ二四九　電話　板橋一七三

質商
明治二二年二月生、東京府
京北中學校卒業

當家は遠く舊幕時代より當所に住み、板橋町内屈指の舊家として知られてゐる氏は先代重次郎氏の二男として現地に呱々の聲を揚げ、幼名を源三郎と呼んだが大正七年家督を相續すると同時に當家累代の名たる重次郎を襲名した。幼少の頃より頭腦明晰にして覇氣に富み、京北中學校を優秀の成績を以て卒業後直ちに家業に携はり、町内の金融圓滑に資し、健闘以て今日に及んでゐる。父祖以來町内の發展に貢献する所尠なからず、町内の恩人として普く知られてゐるが、氏も亦夙に町内の和平向上に意を注ぎ、町會議員、町助役等として功績顯著なるものがあり、又政友會系の重鎭として知られてゐる。

母てつ(嘉永五年生)妻治子(明治三一年生、外山新平長女、千代田高女卒)
長男彰吾(昭和二年生)二男亘廣、長女愛子(大正一三年生)

中山龍次氏　荏原區小山五一四ノ二　電話　荏原二七一九

從三位、勳二等、日本放送協會關東支部常務理事、明治生命保險(株)廣島支店副支店長
明治七年一月生、新潟縣
明治二五年東京郵便電信學校卒業

氏は新潟縣中山清吉氏の長男として同縣中魚沼郡十日町に呱々の聲を揚げ、明治三十三年家督を嗣いだ。夙に東京郵便電信學校に學び、卒業後直ちに遞信省に入り技手に任ぜられ、同二十九年歐米に派遣され、同三十年歸朝後東京郵便電信學校教授兼通信技師に任ぜられ、更に遞信技師に昇進した。同三十六年獨英兩國に出張し電話事業を調査し、後同四十五年倫敦の第三回國際無線電信會議に列席し、大正二年中華民國交通部顧問に聘せられた。後之を辭して歸朝し、昭和三年日本放送協會に入り、同五年放送事業視察の爲め歐米に出張し、歸來現職に在つて活躍以て今日に及ぶ。趣味は圍碁、ゴルフ等にして程ケ谷ゴルフ倶樂部及びロータリー倶樂部各會員である。

妻ツネ(明治一〇年生、福井縣士族木澤愛五郎長女)二男次郎(同三三年生)長女靜子(同四〇年生、双葉高女卒、法學士津田鐵外喜妻)

佐久間俊一氏　淀橋區戸塚町三ノ八二六

大教正、御嶽教、現神教會々長
明治一七年二月生、東京市

現神教は天皇を現大神として尊奉し信徒は神の子たることを自覺して神界の現在を體驗し、以て自ら修身すると共に更に進んで世人を教導淳化し、現神の世界を建設する事を立教の大道としてゐる。即ち神人歸一の實を擧げて世道人心の淨化を圖ることを主眼とするものにして、その創唱者たる氏は青年時代廢人同樣となりたる爲め奮然蹶起し、寢食を忘れて實在の神を窮めることに腐心したる結果凡ゆる神は天皇に在り敬神の極致は尊皇に歸着することを體驗した。茲に於て十數年前より敬神教を創め、東京府より社會事業團體たる許可を受けて種々の催しを擧行し且つ宗教的研究を積み、尊皇の念を喚起して思想を善導し、衆心を天皇の御前に歸一して現大神の下に現神光宅の世界を實現する大抱負を以て現神光宅會を組織する等、專ら光輝ある國體を發揚し國家民人の福祉を增進することに努力以て今日に及んでゐる。其の努力空しからず、今や信徒五百餘名に達し、氏は益々尊皇心の鼓吹に努めてゐる。

西村辰五郎氏　横濱市鶴見區鶴見町一四二、電話鶴見三二八

學習社、東雲堂各(株)專務、東京書籍商組合評議員、東京出版協會協議員
明治二五年四月生、東京市

出版業界に聲望嘖々たる氏は、本所區東兩國に呱々の聲を揚げた。舊姓は江原通稱を陽吉と稱し、小學校卒業後日本橋の書肆東雲堂に業務見習として入店し

吉太郎長女)

加藤直法氏　芝區車町三五　電話高輪五三〇三

東神倉庫(株)常務、大正運輸、新港相互館各(株)取締役、共進組(株)相談役
明治七年九月生、埼玉縣
明治二九年慶應義塾大學卒業

長女芳江(明治三六年、夕陽丘高女卒法學士辯護士パリスター伊藤重次妻)

吉田金次郎氏　芝區白金三光町四三　電話高輪五、九七二

中央屠場(株)社長、地家主
安政三年九月生、東京市

溫厚篤實なる人格者として信望隆々た

業に携はり、町内の金融圓滑に資し、健闘以て今日に及んでゐる。父祖以來町内の發展に貢献する所尠なからず、町内の恩人として普く知られてゐるが、氏も亦夙に町内の和平向上に意を注ぎ、町會議員、町助役等として功績顯著なるものがあり、又政友會系の重鎭として知られてゐる。

母てつ（嘉永五年生）妻治子（明治三一年生、外山新平長女、千代田高女卒）長男彰吾（昭和二年生）二男亘廣、長女愛子（大正一三年生）

西村辰五郎氏　横濱市鶴見區鶴見町一四二、電話鶴見三二八

學習社、東雲堂各（株）專務、東京書籍商組合評議員、東京出版協會協議員

明治二五年四月生、東京市

出版業界に聲望嘖々たる氏は、本所區東兩國に呱々の聲を揚げた。舊姓は江原通稱を陽吉と稱し、小學校卒業後日本橋の書肆東雲堂に業務見習ひとして入店し後西村家の養子となり其の家督を相續すると共に養父の業を繼いだ。幼少の頃より文藝を好み又天才豐富にして、始め田山花袋氏に師事し小說に筆を執つたが、長ずるに及んで短歌に專心し又詩、評論等に鬼才を示した。家業を繼ぐに及んでは文藝書及小學校參考書の發行に意を注ぎ着々として業績を擧げ同業界に重んぜられるに至つた。のみならず小學校參考書の發行元として名聲隆々たる學習社の主腦部に在つて、小學校參考書の實質向上に努め、義務教育の發達に貢献し、或は東京書籍商組合評議員、或は東京出版協會協議員等として同業界の爲めに盡したる功績は甚大にして、斯界の功勞者として尊敬されてゐる。趣味として今尙ほ文し藝を好み、特に短歌に長じ、現に日本歌人協會員である。

妻園子（明治三二年生、東京府人木田吉太郎長女）

加藤直法氏　芝區車町三五　電話高輪五三〇三

東神倉庫（株）常務、大正運輸、新港相互館各（株）取締役、共進組（株）相談役

明治七年九月生、埼玉縣

明治二九年慶應義塾大學卒業

三井系實業家として確乎たる地歩を占め名聲嘖々たる氏は、埼玉縣人加藤清助氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ明治三十六年家督を相續した。加藤政之助氏は氏の叔父に當る。夙に慶應義塾に學び、卒業後直ちに三井銀行に入り、後三井系の東神倉庫株式會社に轉じた。爾來累進して門司支店長、大阪支店長等に歷任し、大正十一年神戸支店長に轉じ大いに敏腕を揮つて同社の發展に努力する傍ら、神戸商工會議所特別議員を兼ねて同地財界に名聲を馳せた。後常務取締役に擧げられ、現時その任に在ると共に前揭諸社の重役を兼ねて活躍しつゝある。

妻やす（明治一五年生、埼玉縣人石田正三女）長男靖天（同三九年生、慶大經濟學部卒）三男道夫（同四四年生）四男歳夫（大正三年生）五男幹夫（同五年生）六男嗣夫（同六年生）七男鐵夫（同一一年生）二女元子（同九年生）長女芳江（明治三六年、夕陽丘高女卒法學士辯護士パリスター伊藤重次妻）

吉田金次郎氏　芝區白金三光町四三　電話高輪五、九七二

中央屠場（株）社長、地家主

安政三年九月生、東京市

溫厚篤實なる人格者として信望隆々たる氏は、先代吉田德次郎氏の長男に生れ後家督を相續した。先代以來地主及家主として知られてゐたが、氏は家督相續後益々家運の隆盛に努め、又明治四十年三月自ら發起人となり知人と協力して中央屠場株式會社を創立した。創立當初に於ては微々たるものであつたが、氏の賢實なる營業方針に依つて着々業績向上し、加ふるに競爭者少き爲め常に有利なる地位を占め逐年發展以て今日の隆盛を見るに至つた。

妻ツヤ（文久三年生、東京府人角田金三郎長女）養子定治（明治一一年生、埼玉縣人岩田七兵衞弟）同妻ヨシノ（同一九年生、德島縣人近藤茂平姉）孫錦太郎（同三九年生）同茂（大正元年生）同貞三（同六年生）二女のぶ（明治二一年生、分家す）三女とき（同二八年生、千葉縣人脇田友次郎妻）弟鎌太郎（同五年生、高橋由八養子）同喜三郎（同

九年生、東京府人吉田きんの死跡を相續す）

田村　西男氏　神田區臺所町一四

劇作家、東京毎夕新聞社編輯局長兼家庭學藝部長

明治一三年二月生、東京市

明治三二年東京法學院卒業

文名嘖々たる氏は本名を喜三郎と呼び先代喜三郎氏の長男として下谷區黑門町に呱々の聲を揚げた。千代田小學校卒業後一時家業のメリヤス販賣に從事したが後中央大學の前身たる東京法學院に學び卒業後小說家を志し尾崎紅葉の門下生として研鑽大いに務めた。其の後東京毎夕新聞社に入り、二六新報社に轉じ更に中央新聞社に轉じて社會部長に就任し敏腕を揮つたが、後之を辭し昭和六年十一月再び東京毎夕新聞社に入り現時前揭の要職に在つて活躍の傍ら、その麗筆を揮つて創作に、將た脚本に老練の技倆を閃かせてゐる。著書には「藝者」「藝者夜話」其他著名のもの多く、脚本には「椀久」「實說伊勢音頭」「法界坊」「長崎夜話」「木曾川治水記」「火災報知機」「厄年」「直助權兵衞」「檻を破つた虎」「エレベーター」等の名作がある。

長男榮造（明治四一年生）長女秋子（同三八年生、神田高女卒、友田恭助に嫁す）

仲小路了圓女史　京橋區銀座西六ノ一ノ四、一照圓鑑定所　電話銀座一、四三八

一照園々主

特異の靈能を有し的確なる豫言者として令名ある女史は、京都府の名門に呱々の聲を揚げた。幼少の頃深き事情の爲め他家に預けられて不遇の數年を送り、更に明治三十九年晩秋滿洲に送られ辛酸具さに嘗めたが、偶然某老婦人に救はれてロシヤのオデツサの舊都に至り、一修道院に預けの身となつた。然るに該修道院主たる老尼僧は女史の先天的靈能を觀破して修靈法を授け女史も亦一意專心修業を積み、幾多の豫言法秘義を得て大正十二年歸朝した。同年秋神戸に一照園を開き、百折不撓の願を胸裡に秘め、運命開拓轉禍爲福の指針たらしむる決心を固め、一身を捧げて各地に實驗會を開催し、或は各種の問題に對し顧問として快刀亂麻を斷つが如き鮮かなる指導を行ひ、今や從來の無能なる運命鑑定家乃至豫言者と全然その選を異にする一大權威として各方面に認められるに至つた。女史の鑑定法はその先天的靈能とカード豫言法とに依つて鑑定する女史獨特の方法にして、結婚問題家庭の不和、取引上の惱み、病氣、家相、相場其他如何なる難問題をも立ち所に解決し得るを以て眞に運命の指導者として尊崇されてゐる。

仲小路了圓女史

山野邊義智氏　豐島區日出町一ノ二七

近藤利兵衞商店（株）常務兼庶務部長、日本麻綿紡績（株）取締役

明治二二年九月生、水戸市

中央大學經濟科卒業

當家は代々水戸德川家に仕へ家老職を勤めたる名門にして、先々代義觀氏は常陸助川城主に封ぜられ海防總督に擧げられ、水戸藩に於ける勤王黨の首領として活躍し大いに名聲を博した。氏はその息義禮氏の長男にして、中央大學卒業後直ちに內務省に奉職し、更に遞信省、濟生會等に轉勤したが後蜂葡萄酒本舗たる近藤利兵衞商店に轉じた。爾來一意專心職務に精勵し、克く店主を翼けて同店の發展に努力したる効果空しからず、次第にその熱心と敏腕を認められて重用され、現時常務取締役兼庶務部長の要職に在つて益々雄飛し、傍ら日本麻綿紡績株式會社の重役を兼ねて活躍しつゝある。溫厚の君子人にして而も稜々たる俠氣漲り、手腕力量兼備の器として大いに前途を囑望されてゐる。趣味は文學、史學等である。

信任殊の外厚く、同店の中堅として活動の餘暇を以て慶應義塾の夜學に通ひ、學に業に餘念なき奮鬪を續けた。明治四十五年四月三日の佳節を占して獨立開業するや、從來の洋家具商の通弊を打破し、正直と早起を店是とし、一切釘を使用せざる純指物式洋家具類の製作に意を注ぎ次第に顧客の信用を得て今日に見の聲を揚げた。明治二十一年十一歳の若冠を以て上京し京橋區築地の家具商杉田幸五郎商店に入店した。爾來一意專心業務を見習ひ同店の發展に努力すること實に二十五ケ年に及び、厚く店主の信任を得た。後明治四十五年機を得て獨立し、現在の地に開店以て今日に及んでゐる。

して研鑽大いに務めた。其の後東京毎夕新聞社に入り、二六新報社に轉じ更に中央新聞社に轉じて社會部長に就任し敏腕を揮つたが、後之を辭し昭和六年十一月再び東京毎夕新聞社に入り現時前掲の要職に在つて活躍の傍ら、その麗筆を揮つて創作に、將た脚本に老練の技倆を閃かせてゐる。著書には「藝者」「藝者夜話」其他著名のもの多く、脚本には「椀久」「實說伊勢音頭」「法界坊」「長崎夜話」「木曾川治水記」「火災報知機」「厄年」「直助權兵衞」「檻を破つた虎」「エレベーター」等の名作がある。

更に明治三十九年晩秋滿洲に送られ辛酸具さに嘗めたが、偶然某老婦人に救はれてロシヤのオデツサの舊都に至り、一修道院に預けの身となつた。然るに該修道院主たる老尼僧は女史の先天的靈能を觀破して修靈法を授け女史も亦一意專心修業を積み、幾多の豫言法秘義を得て大正十二年歸朝した。同年秋神戸に一照園を開き、百折不撓の願を胸裡に秘め、運命開拓轉禍爲福の指針たらしむる決心を固め、一身を捧げて各地に實驗會を開催し、或は各種の問題に對し顧

明治二二年九月生　水戸市中央大學經濟科卒業

當家は代々水戸德川家に仕へ家老職を勤めたる名門にして、先々代義觀氏は常陸助川城主に封ぜられ海防總督に擧げられ、水戸藩に於ける勤王黨の首領として活躍し大いに名聲を博した。氏はその息義禮氏の長男にして、中央大學卒業後直ちに內務省に奉職し、更に遞信省、濟生會等に轉勤したが後蜂葡萄酒本舗たる近藤利兵衞商店に轉じた。爾來一意專心職務に精勵し、克く店主を翼けて同店の發展に努力したる効果空しからず、次第に

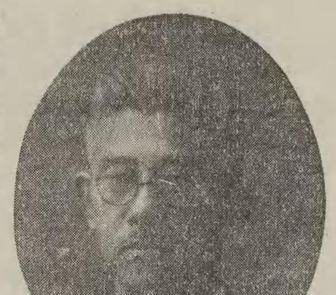
その熱心と敏腕を認められて重用され、現時常務取締役兼庶務部長の要職に在つて益々雄飛し、傍ら日本麻綿紡績株式會社の重役を兼ねて活躍しつゝある。溫厚の君子人にして而も稜々たる俠氣漲り、手腕力量兼備の器として大いに前途を囑望されてゐる。趣味は文學、史學等である。

福田善五郎氏　澁谷區代々木西原一〇〇六（營業所）芝區新櫻田町　電話銀座二、九三八

洋家具商、福澤商店主、洋家具同業組合副組合長

明治一六年一〇月生、宮城縣

都下洋家具商界に名聲洽き氏は、宮城縣牡鹿郡菊地善松氏の五男として同地に呱々の聲を揚げ、明治四十二年福田永齊氏の養子となり、その家督を相續した。夙に洋家具商小澤愼太郎商店に入り、恪勤する事十一ケ年に及び、此の間缺勤僅かに二日の勵精振りに店主の信任殊の外厚く、同店の中堅として活動の餘暇を以て慶應義塾の夜學に通ひ、學に業に餘念なき奮鬪を續けた。明治四十五年四月三日の佳節を占して獨立開業するや、從來の洋家具商の通弊を打破し、正直と早起を店是とし、一切釘を使用せざる純指物式洋家具類の製作に意を注ぎ次第に顧客の信用を得て今日の隆盛を見るに至つた。又此の間大正九年同志と共に同業組合を組織し、同十四年年組合公認と同時に副組合長に擧げられ、以來今日に至るまで引續きその任に在つて同業界の刷新向上に努力し、同業者間に信望を博してゐる。趣味は刀劍、甲冑、園藝等である。



福田善五郎氏

妻玉子（明治二一年生、三重縣士族故海軍大佐新井庸虎長女、跡見女學校卒業）長男舒光（同四五年生、府立一中卒）

小林　福三氏　芝區愛宕町三ノ五七　電話（長）芝三、二一五

小林福三商店主（西洋家具室內裝飾木部造作建具請負業）

明治一〇年三月生、埼玉縣

高潔なる人格と非凡の手腕と相俟つて都下同業界に名聲嘖々たる氏は、川越市の小林源三郎氏の長男として同地に呱々の聲を揚げた。明治二十一年十一歲の若冠を以て上京し京橋區築地の家具商杉田幸五郎商店に入店した。爾來一意專心業務を見習ひ同店の發展に努力すること實に二十五ケ年に及び、厚く店主の信任を得た。後明治四十五年機を得て獨立し、現在の地に開店以て今日に及んでゐる。此の間信用本位を標榜して家業の發展に努力すると共に國產家具の海外紹介に意を注ぎ、前後三回米國に航し、セントルイ、サンフランシスコ、フヰラデルフヰアの各萬國博覽會に日本政府陳列場の建設を請負ひ、優秀家具類の眞價發揚に貢献する所甚大であつた。又渡米の都度ワシントン、ニューヨーク、ボストン、シカゴ等の大都市に於て西洋家具或は洋式室內裝飾等に關する調査研究を積み、以て本邦斯界の進步に寄與した。その努力熱心加ふるに經營の才腕は相俟つて同店の信用日に高く、現時益々隆況を呈してゐる。

妻よ禰（明治一七年生、埼玉縣人鎌田角次郎二女）養子共策（同三六年生、東京府人皆川駒藏六男）長女勝子（同三八年生、兵庫縣人足立建治妻）

近藤利兵衞氏　麴町區下二番町四七　電話九段一、九五〇

近藤利兵衞商店（株）社長、國華徵兵保險

(株)監査役、東京府多額納税者
明治一九年三月生、東京市
慶應義塾大學理財科卒業

當家は代々野州佐野町に住み農を營んでゐたが先々代利兵衞氏の時江戸に上り日本橋に酒舗を創めた。先代利兵衞氏亦家業を繼ぎ自製の花魁酒を發賣し名を揚げ、續いて神谷傳兵衞氏と協力し蜂印香竇葡萄酒を釀造販賣するに及んで一躍名聲を博し大いに產を興し釀造業界に確乎たる地歩を占めるに至つた。氏は福島縣人白井遠平氏の六男にして、白井傳三氏大森鎭平氏等の實弟である。長じて先代利兵衞氏の養子となり、大正八年家督を相續すると同時に前名六郎を改め利兵衞を襲名した。夙に慶應義塾大學理財科に學び、卒業後更に歐米に留學し研鑽に勵み歸朝後は先代の遺業を繼承して洋酒業に從事し、精勵奮鬪益々業績を向上し、蜂葡萄酒の發賣元として同業界に雄飛すること既に多年に及び、傍ら國華徵兵保險會社に關係して義俠心に富み、各方面に信望隆々たるものがある。

安部　贊平氏　武藏野町吉祥寺四〇
電話吉祥寺三二一
(事務所)　銀座四、山口銀行ビル
電話京橋二、五六四

東洋リノリユーム(株)東京出張所長
明治一九年五月生
大正元年明治學院卒業

本邦に於けるリノリユーム製造業界の覇者たる東洋リノリユーム株式會社に在つて敏腕の譽れ高き氏は先代安部狽次郎氏の長男として呱々の聲を揚げた。學業を卒るや直ちに實業界に投じ、大阪市内に安部商店を開いて雜貨輸出を營み、着々業績の向上に邁進して財界に於ける地歩を開拓した。後大正十一年東洋リノリユーム株式會社に入社し、孜々として同社の發展に努力し、次第にその敏腕を認められて東京出張所長の要職に擧げられ現時その任に在つて益々同社の發展に活躍してゐる。趣味はスポーツ等。

妻富子(明治二七年生、靜岡縣人杉山金一郎妹、横濱英和高女卒)長男俊一(同四四年生)二男信雄(大正六年生)三男英雄(同一二年生)長女まさ子(明治四三年生)二女みゑ子(大正四年生)三女やす子(同八年生)

營業所　(自宅)杉並區阿佐ケ谷七九一
堺　司郎氏　本店　新宿角筈一
電話四谷五六二
支店　芝區烏森四
電話銀座一一五五

瀧口組支配人、カフエーミハト經營者

土木請負業界に活躍する傍らカフエーを經營し聲望隆々たる氏は、三重縣木本町の出身である。夙に大阪に出で食堂を經營したが事意の如くならず、奮鬪努力も遂に空しく失敗に歸した。然れども初志を貫徹せざれば止まざる意氣に燃ゆる氏は、此の失敗に懲りず帝都に移つてカフエーを創始し、夫婦共稼ぎの辛酸具さに嘗めて次第にその地歩を固め遂に今日の榮冠を贏得た。將來大東京の中心を以て目せられる新宿街に於て、カフエーミハトは斷然異彩を放てるのみならず、帝都一流のカフエーとして數へられ、更に最近芝區烏森に支店を設け、本支店相俟つて隆昌を極めてゐる。一方土木請負業界に於ては、帝都同業界にその名普き瀧口組に在つて敏腕を揮ふこと多年、今や支配人たる要職に在つて益々發展に努力し、業界に名聲を博してゐる。資性溫厚篤實、業界稀に見る謙讓なる人格者として尊敬されてゐる。外子夫人は亦克く氏を援けて內助の譽れ高く、琴瑟相和して家庭は頗る圓滿である。

鹽濱　和夫氏　芝區二本榎一ノ三五
電話高輪一、一二八
地主、日本勸業銀行員
明治四〇年一〇月生、東京市

昭和三年高千穗高商卒業

當家は代々島根縣能義郡母里町に住み松平家母里藩に仕へたる名門であつたが祖父の時維新の變革に際會し、明治十四年一家を擧げて上京し現在の地に居を構へた。祖母十代子は島根縣松江藩士石原左右治の三女にして、その二女たる氏の母琴女史は芳之助氏を養嗣子として迎へ後村井兄弟商會に入り、轉じて上海英米煙草會社に勤務し、明治四十二年寶田石油株式會社に入社した。是れ氏が石油業界に活躍する第一歩であつた。爾來熱誠忠實只管職務に精勵し同社の發展に努力し、その敏腕は次第に認められ幾何ならずして同社支配人に擧げられた。その後大正十年に至り、同社が日本石油株式會

その後明治三十四年歐洲に遊ぶこと數年、佛、英、伊等の諸國に於て專ら洋畫を研究し、刻苦勵精遂に斯道の蘊奧を窮めるに至つた。歸朝後明治四十年の文展に入選して以來文展及帝展に每回入選して名聲年と共に揚り、大正八年帝國美術院會員に推薦され、又巴里に於て開催されたる萬國大博覽會に出品してコンショ

を繼名した。夙に慶應義塾大學理財科に學び、卒業後更に歐米に留學し研鑽に勵み歸朝後は先代の遺業を繼承して洋酒業に從事し、精勵奮鬪益々業績を向上し、蜂葡萄酒の發賣元として同業界に雄飛すること既に多年に及び、傍ら國華徴兵保險會社に關係して敏腕を揮ひつゝある。資性溫厚にして義俠心に富み、各方面に信望隆々たるものがある。

安部　贊平氏　武藏野町吉祥寺四〇
電話吉祥寺　三二一
（事務所）銀座四、山口銀行ビル
電話京橋二、五六四

妻富子（明治二七年生、靜岡縣人杉山金一郎妹、横濱英和高女卒）長男俊一（同四四年生）二男信雄（大正六年生）三男英雄（同一二年生）長女まさ子（明治四三年生）二女みゑ子（大正四年生）三女やす子（同八年生）

堺　司郎氏　（自宅）杉並區阿佐ヶ谷七九一
營業所　本店　新宿角筈一
電話四谷五六二
支店　芝區烏森四
電話銀座一一五五

界に於ては、帝都同業界にその名普き瀧口組に在つて敏腕を揮ふこと多年、今や支配人たる要職に在つて益々發展に努力し、業界に名聲を博してゐる。資性溫厚篤實、業界稀に見る謙讓なる人格者として尊敬されてゐる。外子夫人は亦克く氏を援けて內助の譽れ高く、琴瑟相和して家庭は頗る圓滿である。

鹽濱　和夫氏　芝區二本榎一ノ三五
電話高輪一、一二八
地主、日本勸業銀行員
明治四〇年一〇月生、東京市

昭和三年高千穗高商卒業
當家は代々島根縣能義郡母里町に住み松平家母里藩に仕へたる名門であつたが祖父の時維新の變革に際會し、明治十四年一家を擧げて上京し現在の地に居を構へた。祖母十代子は島根縣松江藩士石原左右治の三女にして、その二女たる氏の母琴女史は芳之助氏を養嗣子として迎へ長男として和夫氏を設けたが明治四十三年協議上離婚した。かくて氏は幼時より母の手に育てられたが、性來俊敏溫和にして、優秀の成績を以て學業を終へるや直ちに日本勸業銀行に入り、爾來只管職務に精勵以て今日に及んで居る。頭腦明晰にして數理に長け加ふるに溫厚にして行內に好評を博し、今や數年の經驗を積んで行務にも熟練し、上役の信任も亦次第に加はり、同行內の新進として大いに前途の飛躍を期待されてゐる。

渡　邊　介氏　品川區西大崎二ノ三八
電話　高輪二四五四
日本石油（株）取締役
明治六年五月生、姫路市
明治二十五年神戶高商卒業
溫厚篤實稀に見る人格者として信望隆々たる氏は、兵庫縣人渡部泉氏の長男として姫路市に呱々の聲を揚げた。夙に實業界雄飛を志して神戶高商に學び、卒業後村井兄弟商會に入り、轉じて上海英米煙草會社に勤務し、明治四十二年寶田石油株式會社に入社した。是れ氏が石油業界に活躍する第一歩であつた。爾來熱誠忠實只管職務に精勵し同社の發展に努力し、その敏腕は次第に認められ幾何ならずして同社支配人に擧げられた。その後大正十年に至り、同社が日本石油株式會社に合併されるや、氏も亦同社に移り經理部副長の要職に補せられ、更に會計課長に累進し、昭和七年遂に取締役に選ばれ、以て今日に及んでゐる。
妻トシ（明治一四年生）長男進（慶應義塾大學卒）三男明

中村　不折氏　下谷區上根岸一二五
電話下谷三、七九八
正五位、帝國美術院會員、東京朝日新聞社客員、洋畫家
慶應二年七月生、長野縣
洋畫壇の權威たる氏は本名を鉾太郎、別號を環山と呼び、長野縣人中村源藏氏の長男として呱々の聲を揚げ、明治四十三年家督を相續した。幼時より藝術に親しみ又天分頗る豐富にして、眞壁雲鄕氏の門下となつて南畫を學び、更に小山正太郎、淺井忠氏等に師事して洋畫を修める事多年、益々技を練り天分は夙に認められ名を爲すに至つた。
その後明治三十四年歐洲に遊ぶこと數年、佛、英、伊等の諸國に於て專ら洋畫を研究し、刻苦勵精遂に斯道の蘊奧を窮めるに至つた。歸朝後明治四十年の文展に入選して以來文展及帝展に每回入選して名聲年と共に揚り、大正八年帝國美術院會員に推薦され、又巴里に於て開催されたる萬國大博覽會に出品してコンションオノラーブル賞を授與される等光榮に浴すること一再ならず、今やその入神の技を謳はれ、又斯界の功勞者として尊敬されてゐる。
氏は亦能書の譽れ高く既に一家を成すの技に達し尙書に關する蒐集品は頗る多く、南畫及金石文も亦堂に入り、餘力を之に注ぎ斯界に於ける權威と稱されてゐる。現時前揭の任に在つて益々藝術に精進しつゝある。
妻いと（明治六年一月生、埼玉縣人堀場秀雄姉）男丙午郎（明治三九年一月生）男摠文（明治四〇年九月生）女ミネヲ（明治三三年一〇月生）

高藤太一郎氏　牛込區新小川町二ノ一〇
第二東京市立中學校長
明治九年七月生、盛岡市、
明治三四年東京高等師範學校卒業
都下教育界に信望高き氏は、岩手縣盛

業後上京して東京高等師範學校に入り、同校卒業後熊本中學校教諭に任ぜられ、爾來熊本、高知、水戸、茨城の各師範學校教諭に歷任して三重師範學校長となり更に和歌山師範學校長に轉じ、師範教育に盡瘁すること二十餘年に及んで功績顯著なるものがあつた。大正十三年第二東京市立中學校長に聘せられて以來、多年の經驗と豐富なる學識、加ふるに不斷の努力研究を以て校風の刷新に心血を濺ぎたる結果、今や同校は都下屈指の優秀校として數へられるに至つた。昭和六年教育視察の爲め東京市より歐米各國に派遣され、翌七年四月歸朝したが、巡遊中當校生徒の爲め私費を投じて各種有益圖書を購ひ歸りたるが如きは、氏の性格の一端を語る美談として傳へられてゐる。溫厚篤實誠に教育者に相應はしき人格者として各方面の尊敬を受けてゐる。

竹本素女女史　芝區西久保巴町四一　電話芝二、五七七

義太夫師匠

明治一八年八月生、大阪市

女義界の重鎭として名聲嘖々たる女史は、本名を正井ノブと謂ひ正井正吉氏の女として大阪市に呱々の聲を揚げた。幼時より義太夫を好み十一歳の時斯界に投じ十三歳の時鶴澤錦糸の門に入り、十七歳の時始めて「白石噺」を語つて好評を博した。其後豐澤小團次、鶴澤友松、豐澤團平等の諸名手に就いて益々稽古を勵み更に二十六歳の時名人竹本越路の門下となつて修業に心血を濺ぎ、二十八歳の時竹本素女の名を許された。

三十歳の時上京し、後有樂座の專屬となつたが約一ケ年にして同座を辭し、松竹專屬となつた。大正十二年の震災後松竹を辭して以來興行に出演せず、門弟の教養に當つてゐる。此の間ラヂオ放送に出演すること三十餘回に及び、その入神の妙技は普く江湖に認められてゐる。得意のものは「合邦」を隨一とし、「堀川」「壺坂」「太功記」等夙に定評がある。信仰は佛教、趣味は義太夫である。

大塔　日城氏　淀橋區柏木一ノ九一

大塔流筑前琵琶宗家、大塔會々長、ドクトル

明治五年一〇月生、福岡縣

琵琶界の耆宿として聲望隆々たる氏は舊小笠原藩士伊藤景裕氏の二男として福岡縣小倉市に生れた。本名を武吉と謂ふ。伊藤家は藤原鎌足の後裔にして代々小笠原家の家老職を勤め、景裕氏は維新後官界に投じて寺社局長の顯職に進んだが、晩年は風流韻事に過した。氏は資性豪放濶達にして武を好み幼時より柔劍道、馬術、弓術等を學び、長じて加賀藩の名門蛭川家を再興した。初め醫界に志し明治三十四年醫師となつたが、更に米國に航して研究を積み、ドクトルの稱號を得て歸朝後福岡に開業し、明治三十八年上京して巢鴨に醫院を開き、同四十年頃より松方公爵家の顧問醫となつた。大正十二年松方家を辭し續いて昭和三年刀圭界を遠ざかるや、由緒深き大塔流琵琶振興の爲め敢然奮起した。爾來精神作興の理想に高踏して琵琶の普及に努め以て今日に及んでゐる。日蓮の崇拜者にして日蓮主義の鼓吹に健鬪し、趣味として書道に親しみ孤城が雅號がある。夫人は亦華道に堪能にして子弟の教養に當つてゐる。

加藤　清一氏　品川區北品川三ノ一九四　電話　高輪三〇八

丹毒療院長、醫師

明治九年四月生、山口縣

氏は山口縣加藤理一氏の實弟にして、同縣熊毛郡阿月生に呱々の聲を揚げ、後分れて一家を創立した。夙に醫界に志し濟生學舍に學び、卒業後明治三十五年醫明治三六年日本大學卒業

氏は東京府關仲四郎氏の二男に生れ、後先代關九兵衞氏の養子となり、明治四十四年その家督を相續した。之より先き日本大學を卒業後直ちに一年志願兵として入營し、日露戰役に出征して少尉に任ぜられ、更に大正三年日獨戰役に參加し中尉に進級した。夙に實業界を營み、現に

務官を經て內務省書記官に進み、更に同省參事官に昇任した。明治四十四年歐米に派遣され、歸朝後廣島縣內務部長となり、福岡、神奈川各縣內務部長を經て三重縣知事に拔擢され、次で山梨縣知事に轉じ、更に朝鮮總督府學務局長兼中樞院書記官長、秋田縣知事等を歷任して鹿兒

を賜ひ歸りたるか如きは氏の性格の一端を語る美談として傳へられてゐる。溫厚篤實誠に教育者に相應はしき人格者として各方面の尊敬を受けてゐる。

竹本素女女史　芝區西久保巴町四一　電話芝二、五七七

義太夫師匠

明治一八年八月生、大阪市

女義界の重鎭として名聲嘖々たる女史は、本名を正井ノブと謂ひ正井正吉氏の女として大阪市に呱々の聲を揚げた。幼時より義太夫を好み十一歳の時斯界に投じ十三歳の時鶴澤錦糸の門に入り、十七歳に當つてゐる。此の間ラヂオ放送に出演すること三十餘回に及び、その入神の妙技は普く江湖に認められてゐる。得意のものは「合邦」を隨一とし、「堀川」「壺坂」「太功記」等夙に定評がある。信仰は佛教、趣味は義太夫である。

大塔　日城氏　淀橋區柏木一ノ九一

大塔流筑前琵琶宗家、大塔會々長、ドクトル

明治五年一〇月生、福岡縣

琵琶界の耆宿として聲望隆々たる氏は淀橋區に當つてゐる。門弟の養成に當つてゐる。此の間ラヂオ放送に出演すること三十餘回に及び、その入神の妙技は普く江湖に認められてゐる。得意のものは「合邦」を隨一とし、「堀川」「壺坂」「太功記」等夙に定評がある。信仰は佛教、趣味は義太夫である。

加藤　清一氏　品川區北品川三ノ一九四　電話　高輪三〇八

丹毒療院長、醫師

明治九年四月生、山口縣

氏は山口縣加藤理一氏の實弟にして、同縣熊毛郡阿月生に呱々の聲を揚げ、後分れて一家を創立した。夙に醫界に志し濟生學舍に學び、卒業後明治三十五年醫術開業試驗に合格した。後東京帝國大學醫局助手として勤務の傍ら更に研究を積み、續いて淺草精研堂に入つたが、同三十六年獨立して品川區に丹毒醫院を開設した。爾來同醫院の經營に專念し、自ら診療に從事し、丹毒療法界に於ける第一人者として名聲を博して今日の隆況を呈するに至つた。趣味として義太夫に堪能である。

妻トシ（明治一二年生）長男一雄（同三五年生）二男俊也（同三六年生）三男祐三（同三七年生）四男四郎（同四一年生）五男五郎（同四三年生）三女喜代子（大正五年生）四女正子（同六年生）六女一子（同九年生）

關　仲次郎氏　京橋區靈岸島二ノ六　電話　京橋一五四五

從七位、勳六等、在鄉陸軍歩兵中尉、京橋區會議員、小谷屋（質商）店主

明治一二年三月生、東京府

明治三六年日本大學卒業

氏は東京府關仲四郎氏の二男に生れ、後先代關九兵衞氏の養子となり、明治四十四年その家督を相續した。之より先き日本大學を卒業後直ちに一年志願兵として入營し、日露戰役に出征して少尉に任ぜられ、更に大正三年日獨戰役に參加し中尉に陞進した。夙に質商を營み、現にその經營に當ると共に京橋區會議員その他の公職に就いて活躍し、信望を博してゐる。淨土宗を信仰し、趣味は謠曲、仕舞等である。

養母數壽（慶應元年生）妻小松（明治二二年生、養父九兵衞長女）長男仲壽（大正四年生）二男仲正（大正一二年生）長女鈴江（明治四三年生）三女松惠（同四五年生）四女喜久江（大正五年生）五女照子（同八年生）

長野　幹氏　澁谷區原宿二ノ一七　電話青山六八六〇

從三位、勳二等、法學士、元鹿兒島縣知事

明治一〇年一月生、福井縣

明治三六年東京帝大英法科卒業

氏は福井縣士族大木豐志氏の叔父に當り、長野蕃氏の養子となり明治三十一年その家督を相續した。學生時代秀才の譽れ高く、大學卒業の年高文試驗に合格して官界に入り、石川、富山、佐賀各縣事務官を經て內務省書記官に進み、更に同省參事官に昇任した。明治四十四年歐米に派遣され、歸朝後廣島縣內務部長となり、福岡、神奈川各縣內務部長を經て三重縣知事に拔擢され、次で山梨縣知事に轉じ、更に朝鮮總督府學務局長兼中樞院書記官長、秋田縣知事等を歷任して鹿兒島縣知事に任ぜられたが、昭和二年三月辭任して以來閑地に在つて悠々自適してゐる。

妻小蝶（明治一二年生、福井縣士族松田正尙三女）長男達（同四三年生、東京帝大在學）二男泰（同四四年生、第七高校在學）長女芳子（大正三年生、府立第三高女卒

浦壁　長富氏　芝區白金三光町四五三　電話高輪九六六

日本共立火災保險（株）經理課主事兼庶務課長

慶應三年七月生、山形縣

明治三二年外國語學校別科卒業

多年保險界に活躍して信望高き氏は、山形縣士族興津長松氏の息として同縣鶴岡市に呱々の聲を揚げ、後浦壁正二氏の養子となりその家督を相續した。教育界に志し東京師範學校に學んだが、同校卒業後更に外國語學校に進み、その別科を卒へるや明治火災保險會社に入社した。爲め敢然奮起した。爾來精神作興の理想に高踏して琵琶の普及に努め以て今日に及んでゐる。日蓮の崇拜者にして日蓮主義の鼓吹に健鬪し、趣味として書道に親しみ孤城が雅號がある。夫人は亦華道に堪能にして子弟の教養に當つてゐる。

その後大正五年同社を辭して大成火災保險會社に入社し、取締役兼支配人の要職に在つて敏腕を揮ひ、同社の發展に貢献する所甚大であつた。後日本共立火災保險會社の創立されるや同社に轉じ、現時前掲の任に在つて活躍しつゝある。資性溫厚人格高潔にして才腕兼ね備はり、多年の經驗を積んで保險界の實情に精通し社内に重きを爲してゐる。眞宗を信仰し梅若流謠曲に堪能である。

妻清子（明治一三年生、養父正二長女）

栗田　好雄氏　世田谷區奥澤二ノ五〇九　電話田園調布六五九

（事務所）日本橋區通二ノ一加島ビル、電話日本橋三四六

正八位、辯護士、法學士、在鄕陸軍歩兵少尉

明治二三年八月生、茨城縣

大正五年東京帝國大學獨法科卒業

實業界に活躍すること多年に及び最近法曹界に轉じたる氏は、茨城縣出身の偉材として夙に名聲を博してゐる。明治四十二年宇都宮中學校卒業後直ちに第一高等學校に入學し、同四十五年同校を卒業して東京帝國大學に進み、獨法を專攻し優秀の成績を以て大學を卒へるや直ちに一年志願兵として近衞歩兵第三聯隊に入營し、歩兵少尉に累進した。大正七年三月旭硝子株式會社に入社し、爾來只管職務に勵精して同社の發展に貢献したが、昭和七年二月之を辭し、同年五月東京辯護士會に入會して直ちに開業した。民事を專門とし開業日尙ほ淺きに拘らず依賴者續出して盛況を呈し、大いにその前途を期待されてゐる。

妻操（明治三一年生、神道實行教管長文學士柴田孫太郎長女、お茶ノ水高女卒）長女美代子（大正八年生）長男信雄（同一五年生）其外四女

高橋庄之助氏　深川區龜住町七　電話本所一九五八(2)

東京府會議員、同市會議員、岡由商店(株)取締役、東京材木市場(株)相談役、大日本林業(株)監査役

明治一三年三月生、東京府

氏は東京府高橋德太郎氏の實弟にして大正十五年分れて一家を創立した。夙に實業界に投じ、敏腕を揮ふこと多年に及び、着々その地歩を開拓し、日本木工會社、大和海運會社等の重役として業界に確乎たる地歩を占むるに至つた。一方衆望を負ふて東京府會議員に選ばれ、更に東京市會議員として自治界に貢献する所多く、現にその任に在ると共に前掲各社の重役を兼ねて財界に潤歩しつゝある。

妻きく（明治一六年生、東京府山口吉太郎妹）長男新太郎（同四三年生）三男正之助（大正元年生）四男德三郎（同四年生）五男龜之助（同五年生）三女捨子（同九年生）長女さだ（明治四〇年生、宮城縣菅原忠治郎妻）

山崎　秀雄氏　大森區馬込東二ノ一〇六三　電話大森一八七三

第一工業製藥(株)東京營業所長

明治三〇年一月生、山形縣

大正三年山形縣立工業學校卒業

マルセル石鹼製造元として名聲嘖たる第一工業製藥株式會社に在つて敏腕の聞え高き氏は山形縣士族山崎藤次郎氏の長男として同縣米澤市に呱々の聲を揚げた同縣立工業學校に入り染織を攻究し、優秀の成績を以て同校を卒業するや直ちに第一工業製藥會社に入社した。當時同社は合名組織にして、現在の同社に比すれば未だ微々たるものであつたが、歐洲大戰の影響を受けて業績逐年向上し、大正七年株式組織に變更すると共に規模を擴張し内容の充實を圖り、遂に現在の隆況を呈するに至つた。此の間氏は熱誠努力以て只管同社の發展に心血を濺ぎ、十年一日の如く恪勤して次第に重用せられ、昭和二年同社東京營業所長の要職に拔擢せられた。爾來今日に至るまで其の任に在り、益々同社の爲め健闘しつゝある。資性溫厚而も俊敏濶達にして將來の飛躍を期待されてゐる。

外山　國彥氏　牛込區若宮町三二

正七位、日本聯合青年團、豐島師範學校市立忍岡高等女學校各囑託、音樂家

明治一八年一月生、高知縣

大正三年東京帝大理科動物科卒業

て又樂界の功勞者として夙に信望を博してゐる。

鷹司　信輔氏　目黑區上目黑三ノ一七三　電話青山三二四〇

從三位、勳四等、理學士、公爵、貴族院議員

明治二二年四月生、東京府

大正三年東京帝大理科動物科卒業

青柳　貞吉氏　豐島區池袋一ノ六三五　電話大塚一、七二四

從四位、勳四等、法學士、公證人

明治五年八月生、秋田縣

明治三四年東京帝大法科卒業

往年名判官として驍名を謳はれ、現時公證人として活躍しつゝある氏は、秋田

正八位　陸軍法學士　法學士　在郷陸軍歩兵
少尉
明治二三年八月生、茨城縣
大正五年東京帝國大學獨法科卒業
實業界に活躍すること多年に及び最近法曹界に轉じたる氏は、茨城縣出身の偉材として夙に名聲を博してゐる。明治四十二年宇都宮中學校卒業後直ちに第一高等學校に入學し、同四十五年同校を卒業して東京帝國大學に進み、獨法を專攻し優秀の成績を以て大學を卒へるや直ちに一年志願兵として近衞歩兵第三聯隊に入營し、歩兵少尉に累進した。大正七年三

資性溫厚而も俊敏濶達にして將來の飛躍を期待されてゐる。

外山　國彥氏　牛込區若宮町三二

正七位、日本聯合青年團、豐島師範學校市立忍岡高等女學校各囑託、音樂家
明治一八年一月生、高知縣
明治三八年東京音樂學校卒業

氏は高知縣外山賴寛氏の長男にして同縣高岡郡佐川町西町に呱々の聲を揚げた幼小の頃より音樂を好み、長じて東京音樂學校本科聲樂部に學ぶや其の天賦の才は遺憾なく發揮され、ハイ・バリトン歌手として前途を囑望されるに至つた。卒業後直ちに母校助手として勤務の傍ら研究を積み、後廣島師範學校教諭となり同校及び廣島地方幼年學校に教鞭を執り、後宇都宮高女教諭に轉じた。その後東京に移り綠小學校その他市內小學校に歷勤後東京市視學に任ぜられ、大正十二年之を辭して永田町小學校及び第一東京市立中學校に教鞭を執り、昭和三年第一東京市立高女教諭に轉任し、後同校教頭に拔擢された。同八年五月辭任後前揭の任に在り、又先に慶應義塾大學內のワグネル・ソサイエテーのコンダクター及び東京高工講師等をも勤め、バリトンの名手として又樂界の功勞者として夙に信望を博してゐる。

鷹司　信輔氏　目黑區上目黑三ノ一七三　電話　青山三二四〇

從三位、勳四等、理學士、公爵、貴族院議員
明治二二年四月生、東京府
大正三年東京帝大理科動物科卒業

關白太政大臣藤原兼平は、京都鷹司に住み、鷹司を姓とした。是れ當家の祖にして、代々三公の位に上り、所謂五攝家の一つとして宮廷に重きを爲し、以て維新後に及んだ。先代凞通氏は明治十七年公爵を授けられ、後陸車少將に昇進し又侍從長・內大臣府御用掛等に任ぜられ功績顯著であつた。氏はその長男にして、大正七年家督を嗣ぎ、襲爵仰付けられた夙に東京帝國大學に學び、卒業後皇子傅育官等に任ぜられ、現時貴族院議員として信望を博してゐる。宗旨は禪宗、趣味は小鳥の飼育及研究等。

母順子（明治四年生、公爵德大寺公弘妹）妻綏子（同三〇年生、公爵德川家達二女）長男平通（大正一二年生）長女幸子（同一一年生）二女章子（同一三年生）三女量子（同一五年生）四女庸子（昭和三年生）弟信凞（明治二五年生、分家して男爵を授けらる）弟信淳（同二六年生、男爵公園治忠養嗣子）

明治一三年三月生、東京府

氏は東京府高橋德太郎氏の實弟にして大正十五年分れて一家を創立した。夙に實業界に投じ、敏腕を揮ふこと多年に及び、着々その地歩を開拓し、日本木工會社、大和海運會社等の重役として業界に確乎たる地歩を占むるに至つた。一方衆望を負ふて東京府會議員に選ばれ、更に東京市會議員として自治界に貢獻する所多く、現にその任に在ると共に前揭各社の重役を兼ねて財界に濶歩しつゝある。

妻きく（明治一六年生、東京府山口吉郎の次女）

第一工業製藥會社に入社した。當時同社は合名組織にして、現在の同社に比すれば未だ微々たるものであつたが、歐洲大戰の影響を受けて業績逐年向上し、大正七年株式組織に變更すると共に規模を擴張し內容の充實を圖り、遂に現在の隆況を呈するに至つた。此の間氏は熱誠努力以て只管同社の發展に心血を濺ぎ、十年一日の如く恪勤して次第に重用せられ、昭和二年同社東京營業所長の要職に拔擢せられた。爾來今日に至るまで其の任に在り、益々同社の爲め健闘しつゝある。

青柳　貞吉氏　豐島區池袋一ノ六三五　電話大塚一、七二四

從四位、勳四等、法學士、公證人
明治五年八月生、秋田縣
明治三四年東京帝大法科卒業

往年名判官として驍名を謳はれ、現時公證人として活躍しつゝある氏は、秋田縣人青柳忠一氏の長男として秋田市龜ノ町に生れた。幼時上京し番町小學校獨逸協會中學、第一高等學校を經て大學を了へるまで終始優秀の成績を以て一貫し秀才の譽れを博した。明治三十六年判事に任ぜられて以來、橫濱、新潟各區裁判所新潟、浦和各地方裁判所、浦和、松本各區裁判所、東京控訴院等の判事に歷任して前橋地方裁判所部長に進み、更に濱松區裁判所判事兼靜岡地方裁判所濱松支部長に轉じ、大正十五年弘前區裁判所判事兼青森地方裁判所弘前支部長に任ぜられたが、後官を辭し青柳公證役場を開設し以て今日に及んでゐる。

妻ミチ（明治一八年生）　長女夏（同三九年生、日本女子大學卒）養女千枝子（大正七年生、青山女學院在學）

佐藤　幸吉氏　品川區大井關原二三九　電話　高輪一三二七

佐藤製藥（名）代表社員
明治二四年一月二生、靜岡縣

明治四五年東京藥學專門學校卒業

製藥業界に雄飛し名聲嘖々たる氏は、靜岡縣志田郡藤枝町屈指の老舗吳服問屋佐藤清左衞門氏の四男として同地に呱々の聲を揚げた。夙に製藥事業の有望なるに着眼し、鄉里の中學卒業後東京藥學專門學校に入つて孜々研學し、同校を卒へるや內務省衞生試驗所を始め二、三商店の藥局に勤務して實地修業を積んだ。かくて確乎たる自信を得たる後、大正三年本鄉區西須賀町に佐藤製藥所を創設したが豫期以上の好成績を收めて工場狹隘を告ぐるに至りし爲め、小石川區駕籠町に移轉し、更に昭和四年八月現地に再移轉し其規模を擴張し設備を整へると共に、組織を變更して合名會社となし、爾來益々發展以て今日の隆況を呈するに至つた現在工場敷地約六百坪、從業員六十餘名に達し、製品は日本藥局方製劑の錠劑、丸劑、膠囊劑等を始めとし、軟膏類、越幾斯散類、散劑、液劑、注射藥類等の特殊製劑、及び坐藥、膣球類、賣藥類等の局外諸製劑並に新發賣の「ガレヌス」製劑等の各般に亘り、販路は全國各地に亘つて頗る廣汎である。

妻やゑ（靜岡縣人、河合安治郎二女）
二男進（大正一四年生）

大山たま女史　赤坂區青山北町三ノ二〇、電話青山二三九四

音樂家

明治一〇年一月生、橫濱市
明治四三年東京音樂學校卒業

女史は先天的に樂才に富み、明治三十二年英國に留學しミセス・パトンに師事してタネキソフアー音樂を學び、歸朝後更に東京音樂學校に入り聲樂科及び器樂科を卒業した。此間同三十三年より同三十六年迄青山學院に教鞭を執り、同三十九年より大正元年迄女子英學塾に、其他東京女學館、日本女子大學等に長く教鞭を執つたが、昭和八年以來之を辭して專ら上流家庭の音樂教師として活躍しつゝある。英、獨及び佛語等に堪能にして國際的に交遊頗る廣く、來訪外人の爲めに盡瘁する所多く、印度のタゴール、滿洲國の張欽白氏等の來朝に際しては斡旋大いに努めた。就中タゴール第一回來朝の際、その船中作を作曲して一般に擴めたるは普く知る所である。基督教を信仰し趣味として觀劇を好む。

息竹內良一（同妻岡田嘉子）は共に映畫界に名聲高く、愛孃竹內京子は劇界の明星として知られてゐる。

岩崎ナヲ女史　麹町區平河町二ノ一一　電話九段三一九

勳七等、東京府聯合產婆會副會長、麹町產婆會長

明治元年九月生、新潟縣

女史は新潟縣中蒲原郡村松町に呱々の聲を揚げ、後岩崎祐五郎氏に嫁した。夙に助產婦を志し、明治二十四年東京帝國大學に於て學理及び實地經驗を積み、爾來斯界に活躍以て今日に及んでゐる。此の間明治三十三年十二月、聖上陛下御降誕の際宮內省御用掛を仰付けられたる外秩父宮、高松宮、澄宮の三殿下の御誕生の際及び竹田、北白川、梨本、閑院、賀陽、山階、李王各宮家の御用を仰付けられた。著書には「安產のしるべ」「助產婦に必要なる姙娠十ケ月の心得」等があり夙に斯界の權威として知られてゐる。

長男太郎（明治二〇年生、現戶主、東京音樂學校卒）二男清海（同二六年生陸軍少佐）同妻ヨシ子（同三六年生）孫富士子（大正一二年生、清海長女）孫智慧子（昭和四年生、同二女）甥清正（陸軍步兵大尉）

定金右源二氏　杉並區天沼二ノ四六八

早稻田大學教授、同第二高等學院教頭

明治二〇年一二月生、岡山縣
明治四五年早稻田大學文科史學科卒業

氏は岡山縣兒島郡興除村內尾に呱々の聲を揚げた。早稻田大學卒業後直ちに育英界に入り、大正四年同大學文科史學科

氏は岐阜縣人松永總次郎氏の弟にして愛知縣下に生れ、夙に西本組に入つて土木建築請負業を見習ひ、その敏腕を認められて養子に懇望され、明治二十六年先代せきの入夫となり後その家督を嗣いだ西本組は三代前の創業に係り、氏が之を統率するに及んで主として鐵道建設工事を請負ひ、鐵道省指定請負人として幾多

西本　竹吉氏　和歌山市芝ノ丁八

和歌山商工會議所常議員、幸福無盡、宮崎電氣鐵道、南海遊園、和歌山鐵道、箸藏登山鐵道、和歌山モータース、明光土地各(株)取締役、西本組副組長
明治一九年四月生、和歌山縣
明治四三年早稻田大學商科卒業

々發展して今日の隆盛を呈するに至つた。現在工場敷地約六百坪、從業員六十餘名に達し、製品は日本藥局方製劑の錠劑、丸劑、膠囊劑等を始めとし、軟膏類、越幾斯散類、散劑、液劑、注射藥類等の特殊製劑、及び坐藥、腟球類、賣藥類等の局外諸製劑並に新發賣の「ガレヌス」製劑等の各般に亘り、販路は全國各地に亘つて頗る廣汎である。

妻やゑ（靜岡縣人、河合安治郎二女）
二男進（大正一四年生）

定金右源二氏　杉並區天沼二ノ四六八

早稲田大學教授、同第二高等學院教頭
明治二〇年一二月生、岡山縣

明治四五年早稲田大學文科史學科卒業

氏は岡山縣兒島郡興除村內尾に呱々の聲を揚げた。早稲田大學卒業後直ちに育英界に入り、大正四年同大學文科史學科講師となり、同六年同大學豫科講師を兼任し、更に同九年學制改革に伴ひ高等學院の創立されると同時に主事に擧げられ同十年教授に任ぜられた。爾來同學院に教鞭を執つて後進の指導に努力以て今日に及び、此の間昭和五年十一月學事視察の爲め歐米に出張を命ぜられ、同六年十二月歸朝後直ちに同大學文學部史學科教授兼任となつた。史學に關する造詣頗る深く、幾多の著書を公刊して名聲を博し又熱心なる教育家として夙に信望がある

西本健次郎氏　和歌山市小野町四五五
東京市麹町區下六番町三〇、電話九段三二一九

貴族院議員、和歌山縣多額納稅者、和歌山商工會議所顧問、和歌山銀行、松太綿布、湯崎土地各（株）取締役、合同電氣（株）顧問、土木協會理事、土木建築請負業西本組々長
慶應二年八月生、愛知縣

氏は岐阜縣人松永總次郎氏の弟にして愛知縣下に生れ、夙に西本組に入つて土木建築請負業を見習ひ、その敏腕を認められて養子に懇望され、明治二十六年先代せきの入夫となり後その家督を嗣いだ西本組は三代前の創業に係り、氏が之を統率するに及んで主として鐵道建設工事を請負ひ、鐵道省指定請負人として幾多の大工事を完成し名聲を博した。後財界及び政界に益々驥足を伸べ、現時前掲の各職を兼ねてゐる。資性剛直、眞宗を信仰し、美術等に趣味がある。

妻せき（明治四年生、大阪府西本用助十一女）長男健三（同三三年生、明大法科卒、西本組會計員）同妻靜子（同三三年生、和歌山縣橋本忠次郎二女）同長男啖一郎（昭和四年生）同二男順一郎（同六年生）二男用三（明治三三年生、早大商科卒）同妻文子（同四〇年生、和歌山縣本多楠之助四女）同長男博士（昭和四年生）三男龍三（明治三八年生、早大商科卒）六男正三（大正元年生）長女みすの（明治二八年生西本竹吉妻）二女けい子（同三〇年生千田修三妻）三女りん（同三五年生、稲垣善次郎妻）五男敏雄（同四二年生小川豐吉養子）

に長く教鞭を執つたが、昭和八年以來之を辭して專ら上流家庭の音樂教師として活躍しつゝある。英、獨及び佛語等に堪能にして國際的に交遊頗る廣く、來訪外人の爲めに盡瘁する所多く、印度のタゴール、滿洲國の張欽白氏等の來朝に際しては斡旋大いに努めた。就中タゴール第一回來朝の際、その船中作を作曲して一般に擴めたるは普く知る所である。基督教を信仰し趣味として觀劇を好む。

息竹內良一（同妻岡田嘉子）は共に映

西本　竹吉氏　和歌山市芝ノ丁八

和歌山商工會議所常議員、幸福無盡、宮崎電氣鐵道、南海遊園、和歌山鐵道、箸藏登山鐵道、和歌山モータース、明光土地各（株）取締役、西本組副組長
明治一九年四月生、和歌山縣
明治四三年早稲田大學商科卒業

氏は和歌山縣那須卯之吉氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正四年西本健次郎氏長女みすのの養子となり、分家した。早稲田大學卒業後、西本組々長代理として土木建築請負業界に活躍すること多年、養父と共に同組の發展に努力し、現在に於ては同組を統轄すると共に前掲各社の重役を兼ねて各方面に飛躍しつゝある。資性溫厚、斯業界稀れに見る人格者にして才腕兼備はり、將來我が土木建築業界に覇を稱ふべき偉材として囑望されてゐる。

妻みすの（明治二八年生、西本健次郎長女、和歌山高女卒）長女京子（大正六年生）二女美津子（同一一年生）三女邦子（昭和二年生）

松浦　豐吉氏　麻布區山元町五九
電話高輪七七一八

麻布三業組合、麻布待合業組合各組合長
全國二業聯合會支部長、山本町會副會長

都下華街に信望高き氏は、先代甚藏氏の二男として靜岡縣下に呱々の聲を揚げた。明治二十七年步兵第一聯隊に入營し日清戰役に臺灣に出征して偉功を樹て、續いて日露戰役には乃木將軍の率ゐる第三軍に屬し、旅順、奉天、鐵嶺等の激戰に參加して武勳赫々、勳八等功七級金鵄勳章を下賜された。凱旋後實業界に入り大正三年日本活動寫眞株式會社に入社し同社直營の各映畫館主任を歷任し、傍ら大正六年現地に待合末廣を開業した。大正十五年日活を辭して以來專ら待合經營に努力すると共に同業界の發展に盡瘁すること多年、現時前揭の要職を兼ねて益々斯界の爲めに貢献しつゝある。

妻はる（明治六年生、神奈川縣人横澤寅吉妹）長男清三、同妻ふじ、長女智惠子（東京音樂學校卒、ピアニスト、聲樂家松山芳野里に嫁す）

尼子　止氏　小石川區竹早町三四　電話小石川五四四五

教育雜誌月刊「モナス」社々長、中央教育品協會（社法）理事長、帝國華道院（社法）參與兼名譽顧問

明治一三年七月生、大分縣

多年教育界に活躍して信望隆々たる氏は、大分縣別府の出身である。夙に教育家として起ち小學校に教鞭を執ること八ケ年に及び、此の間獨學にて修身及教育の中等教員資格を得、山口縣下の中學校教諭として八ケ年間奉職した。その後教職を去つて「教育學術會」雜誌記者となり、更に大正六年モナス社を創設して月刊教育雜誌モナスを發行し、續いて大正十一年中央教育品協會を創立して理事長に就任し教育の普及發達に努力以て今日に及んでゐる。華道に趣味深く、初め父君に古流を學び、後遠州流、池之坊、梶井宮御流等を修めて各流に通じ、昭和七年帝國華道院の設立に際し參與に擧げられて以來斯道の發展に盡したる功績亦頗る顯著である。夫人も亦華道池之坊を福井心月氏に師事して昭和二年師範に列し、茶道は朗澄軒如月と號し石州流に堪能である。

妻富子（三七歲）長女敏子（三三歲、東京音樂學校卒、第一市立高女ピアノ教師）養子靜（三七歲、中央大學卒、モナス主筆）孫利榮（六歲）同宏（四歲）同正（二歲）

鳩山　一郎氏　小石川區音羽七ノ一〇　電話牛込三四・三〇〇

從三位、勳二等、文部大臣、法學士、辯護士、衆議院議員

明治一六年一月生、東京市

明治四〇年東京帝大法科卒業

未來の首相を以て目せられ聲望海內に洽き氏は、故衆議院議長法學博士鳩山和夫氏の長男に生れ、明治四十四年家督を相續した。實弟秀夫氏と共に幼時より英才を謳はれ、大學卒業後辯護士となつたが後乃父の後を享けて政界に進出し、代議士に當選すること既に六回、政友會に屬して着々地步を進め、或は東京市會議長、臨時大都市制度調査會委員等として大東京の發展に貢献し、昭和二年田中內閣組織されるや內閣書記官長に拔擢され昭和七年齋藤內閣の成立と共に文部大臣として臺閣に列した。資性俊敏英邁にして識見豐富、淸く明るく最も前途ある政治家として天下の期待を維いでゐる。趣味はスポーツ、特にゴルフ等。

母春子（文久元年生、共立女子專門學校長）妻薰（明治二一年生、福岡縣人寺田榮長女）長男威一郎（大正七年生）二女玲子（同元年生）三女節子（同五年生）四女惠子（同一〇年生）五女信子（同一三年生）長女百合子（明治四二年生、佐賀縣人古澤潤一妻）

鳩山　秀夫氏　小石川區小日向臺町三ノ八九　電話牛込八九

正四位、勳三等、法學博士、辯護士、衆議院議員、甲陽土地（株）代表取締役、新高製糖（株）監査役

明治一七年二月生、東京市

明治四二年東京帝大法科卒業

大麓五女）長男道夫（明治四四年生）

伊賀駒吉郎氏　兵庫縣西宮市今津町高潮一〇　電話西宮九五六

樟蔭女子專門學校、甲陽中學校、樟蔭高等女學校各校長

明治二年二月生、香川縣

明治二七年哲學館卒業

氏は香川縣六大郡氏の二男として明治三十七年青雲の志を抱き上京し

大神田軍治氏　芝區白金三光町二五　電話高輪三、〇三四

東京市會議長、同參事會員、衆議院議員

明治一六年七月生、山梨縣

帝都自治會の巨擘として信望隆々たる氏は大神田仙太郎氏の二男として山梨縣北都留郡巖村に呱々の聲を揚げた。明治

寅吉妹）長男清三　同妻ふじ　長女智惠子（東京音樂學校卒、ピアニスト、聲樂家松山芳野里に嫁す）

尼子止氏　小石川區竹早町三四　電話小石川五四四五

教育雜誌月刊「モナス」社々長、中央教育品協會（社法）理事長、帝國華道院（社法）參與兼名譽顧問

明治一三年七月生、大分縣

多年教育界に活躍して信望隆々たる氏は、大分縣別府の出身である。夙に教育家として起ち小學校に教鞭を執ること八等を修めて各流に通じ、昭和七年帝國華道院の設立に際し參與に擧げられて以來斯道の發展に盡したる功績亦頗る顯著である。夫人も亦華道池之坊を福井心月氏に師事して昭和二年師範に列し、茶道は朗澄軒如月と號し石州流に堪能である。

妻富子（三七歳）長女敏子（三三歳、東京音樂學校卒、第一市立高女ピアノ教師）養子靜（三七歳、中央大學卒、モナス主筆）孫利榮（六歳）同宏（四歳）同正（二歳）

閣組織されるや內閣書記官長に拔擢され昭和七年齋藤內閣の成立と共に文部大臣として臺閣に列した。資性俊敏英邁にして識見豐富、淸く明るく最も前途ある政治家として天下の期待を維いでゐる。趣味はスポーツ、特にゴルフ等。

母春子（文久元年生、共立女子專門學校長）妻薫（明治二一年生、福岡縣人寺田榮長女）長男威一郎（大正七年生）二女玲子（同元年生）三女節子（同五年生）四女惠子（同一〇年生）五女信子（同一三年生）長女百合子（明治四二年生、佐賀縣人古澤潤一妻）

鳩山秀夫氏　小石川區小日向臺町三ノ八九　電話牛込八九

正四位、勳三等、法學博士、辯護士、衆議院議員、甲陽土地（株）代表取締役、新高製糖（株）監査役

明治一七年二月生、東京市

明治四一年東京帝大法科卒業

法學界の權威たる氏は、明治政界に雄飛した故法學博士鳩山和夫氏の二男現文部大臣同姓一郎氏の弟として小石川區に生れ明治四十三年分家した。第一高等學校を經て東京帝大に進み、終始首席を占めて秀才の譽れを博し、卒業後母校に教鞭を執り、明治四十四年渡歐し獨佛等に於て研究を積み、歸朝後大正六年法學博士の學位を受けた。その後依然母校教授として民法を講じ、隨一の民法學者として名聲を博したが、大正十五年辭して辯護士を開業し、以て今日に及んでゐる。此の間ジュネーブの國際聯盟會議、ゼノアの經濟會議等に全權隨員として派遣され、又前揭諸社の重役として實業界に驥足を伸べ、更に昭和七年代議士に選ばれて政界に一歩を踏む等、各方面に前途洋々たるものがある。趣味は撞球、スポーツ等。

妻千代子（明治二三年生、故男爵菊地大麓五女）長男道夫（明治四四年生）

伊賀駒吉郎氏　兵庫縣西宮市今津町高潮一〇、電話西宮九五六

樟蔭女子專門學校、甲陽中學校、樟蔭高等女學校各校長

明治二年二月生、香川縣

明治二七年哲學館卒業

氏は香川縣赤木伊八郎氏の二男として同縣高松市に呱々の聲を揚げ、後先代タマの養子となり、同二十三年家督を相續した。夙に教育に志し、哲學館を卒業するや直ちに御影師範學校に奉職し、同校主事を經て、大阪府立夕陽丘高等女學校に轉じ同校長に就任。大正六年甲陽中學校長となり、更に同七年樟蔭高等女學校長となる。大正十一年米國を視察して見聞を廣め、歸朝後昭和元年樟蔭女子專門學校創立さるゝや同校長に就任した。夙に教育界に意を用ひ「心理學原理」「日本教育學」「感情教育學」「女性大鑑」等の有益なる著書がある。宗教眞宗、趣味讀書。

妻リウ（明治四年生、香川縣三好利平長女）三男倫美（明治二九年生）同妻花江（同二九年生、香川縣和泉長太郎二女）四男英雄（明治三六年生）同妻かほる（明治三八年生）二女綾（明治四二年生）長女靜子（明治三〇年生、香川縣和泉松太郎妻）

大神田軍治氏　芝區白金三光町二五　電話高輪三、〇三四

東京市會議長、同參事會員、衆議院議員

明治一六年七月生、山梨縣

帝都自治會の巨擘として信望隆々たる氏は大神田仙太郎氏の二男として山梨縣北都留郡巖村に呱々の聲を揚げた。明治三十七年靑雲の志を抱いて上京し、東京監獄に奉職する傍ら四谷の籍文學舍に入つて孜々學を修めた。その後實業界に轉じ縱橫無碍の才腕を發揮して着々地歩を築き、大正元年より同五年迄日本冷藏汽船株式會社專務取締役として財界に名を馳せた。資性豪放濶達にして利己的觀念に乏しく常に社會公共的盡瘁を以て天職とし、大正十五年以來東京市會議員として大東京の發展に貢獻する所尠なからず現に市會議長として又市參事會員として益々自治行政に努力し、一方昭和七年二月代議士に當選以來國政に參與し信望を博してゐる。宗旨は禪宗、趣味は政治、地方自治行政の研究、圍碁、旅行等頗る廣汎である。

妻茂子（明治二六年生、山梨縣人細田幸一三女）長男軍司（大正三年生）姪喜久代（同五年生、弟將雄長女）甥正（同一〇年生、同長男）姪サチ子（同一一年生、同二女）

若槻禮次郎氏　本郷區上富士前町一三九　電話小石川七、〇〇〇

正三位、勳一等、男爵、貴族院議員、立憲民政黨總裁

慶應二年二月生、島根縣

明治二五年東京帝大佛法科卒業

政界の巨人として尊崇の的となれる氏は、島根縣士族南村仙三郎氏の二男に生れ、若槻敬氏の養子となり明治三十四年家督を相續した。學門を去るや直ちに官界に入り、愛媛縣收稅長、大藏書記官、同參事官、同主稅局長、同次官兼行政裁判所評定官、釀造試驗所長兼臨時國債整理局長等を歷任したる後、大正元年桂內閣の時大臣に列し、以來大藏大臣、內務大臣等として活躍し遂に大正十五年首相の印綬を帶び、昭和二年野に下つたが同六年再び內閣を組織した。又曩に貴族院議員に勅任され、昭和五年海軍々縮會議に帝國全權として派遣されその功に依つて男爵を授けられた。昭和六年以來民政黨總裁として益々政界に重きをなしてゐる。

養母ナミ（嘉永六年生、島根縣士族横田善之丞姉）妻トク（明治五年生、養父長女）長男有格（同三〇年生、經濟學士、日本銀行勤務）同妻ミネ（兒玉要助三女）孫寛義（大正一四年生）同信成（昭和二年生）長女繁子（明治二五年生、島根縣人田原和男に嫁す）

横山雄偉氏　大森區新井宿二丁目　電話大森三九〇

紛々たる毀譽褒貶を齒牙にも懸けず、成敗に超然として常に國家社會的大事業に邁進し、乾坤一擲の壯擧を以て天職と觀ずる氏は、將に政界裏面に於ける一大惑星であり謎の人傑である。氏は頭山滿翁門下の偉材にして夙に玄洋社の壯士を率ゐて中央政界に進出し、曾つて尾崎行雄氏の秘書として劃策大いに力めたが、後政友會に加擔し、多年同會に於ける院外團の牛耳を執り來つた。政友會全盛の裏面に於ける氏の功績は沒す可らざるものとして普く識者の認めたる事件は殆んが天下の耳目を聳てしめたる事件は殆んど枚擧に遑がないが、往年東京大角力の力士が三河島に籠城して一大紛擾を起したる所謂三河島事件に際し、當時の警視總監赤池濃氏と共に調停の勞を執り、圓滿解決せしめたのも氏であり、又昨秋支那雲南督軍唐繼堯の遺子紹驤が雲南獨立の猛運動を起し我が國に亡命したる際、その志を壯として莫大の軍資金と兵器類を供給したのも亦氏であつた。其の他床次、犬養、頭山の諸氏を南京に於て蔣介石と握手せしめたる手腕、田中政友會總裁に軍資を提供して政界活躍を意の如くならしめたる功績、近くは天下に一大衝動を與へたる彼の明治銀行澁谷支店に於ける小切手百萬圓事件等々何れも氏の怪腕を有辯に物語るものである。今後氏の深謀遠慮は何れの方面に現はれるか、各方面より多大の期待を懸けられてゐる。

中島久萬吉氏　牛込區藥王寺町四三　電話牛込四六五

從三位、勳三等、男爵、商工大臣、貴族院議員、池上電氣鐵道、東京灣汽船、川崎信託各(株)社長、東洋製鐵(株)專務、古河銀行、古河電氣工業、日本無線電信日華生命保險、大北火災海上運送各(株)取締役、川崎第百銀行(株)監査役、國際通運(株)相談役

明治六年七月生、高知縣

明治三〇年東京高等商業學校卒業

先代中島信行氏は維新の際國事に奔走して偉功を樹て、維新後外國權判事、神奈川縣知事、元老院議官等として活躍し更にその後板垣伯等と共に自由黨を樹立して政界に馳驅し、明治二十三年國會開設に當つて衆議院議長に選ばれ、同二十九年多年の勳功に依つて男爵に列せられた。氏はその長男にして明治三十三年家督相續と同時に襲爵仰付けられた。その翌年桂內閣の成立に當つて首相秘書官に拔擢されたが、後實業界に轉じ着々擡頭して今日の成功を見るに至つた。此間歐米及南洋等に航して我が實業界の發展に資し、或は東京商工會議所議員、貴族院議員等として財界政界に貢獻する所尠なからず、昭和七年齋藤內閣成るや商工大臣に親任せられ、以て現在に及んでゐる。

妻八千子（明治一七年生、子爵岩倉具明妹）長男精一（同三七年生、從五位）

士を開業し、更にその後二六新報社長として操觚界に名を揚げ、後衆議院議員に選ばれた。爾來代議士に當選すること六回、年と共に政界に認められ國勢調査評議員會評議員、帝都復興院評議員、臨時國語調査會委員、帝都市計畫委員等として敏腕を揮ふこと多年に及び、又曩に遞信政務次官に拔擢され、昭和七年六月歐し約四ケ年間獨英兩國に於て教育學、史學等を研究し、歸朝後母校教授となり又韓國政府學政參與官に招聘され、教育界に活躍した。その後政界に轉じ、明治四十一年以來引續き鄕里の選良として議政壇上に雄飛し、此の間大藏省勅任參事官、內閣書記官長、農商務次官、農林政務次官等を經て昭和七年四月內閣

び内閣を組織した。又曩に貴族院議員に勅任され、昭和五年海軍々縮會議に帝國全權として派遣されその功に依つて男爵を授けられた。昭和六年以來民政黨總裁として益々政界に重きをなしてゐる。

養母ナミ（嘉永六年生、島根縣士族横田善之丞姉）妻トク（明治五年生、養父長女）長男有格（同三〇年生、經濟學士、日本銀行勤務）同妻ミネ（兒玉要助三女）孫寛義（大正一四年生）同信成（昭和二年生）長女繁子（明治二

と校學に遊かないか　往年東京大角力士が三河島に籠城して一大紛擾を起したる所謂三河島事件に際し、當時の警視總監赤池濃氏と共に調停の勞を執り、圓滿解決せしめたのも氏であり、又昨秋支那雲南督軍唐繼堯の遺子紹驤が雲南獨立の猛運動を起し我が國に亡命したる際、その志を壯として莫大の軍資金と兵器類を供給したのも亦氏であつた。其の他床次、犬養、頭山の諸氏を南京に於て蔣介石と握手せしめたる手腕、田中政友會總裁に軍資を提供して政界活躍を意の如く

明治三〇年東京高等商業學校卒業

先代中島信行氏は維新の際國事に奔走して偉功を樹て、維新後外國權判事、神奈川縣知事、元老院議官等として活躍し更にその後板垣伯等と共に自由黨を樹立して政界に馳驅し、明治二十三年國會開設に當つて衆議院議長に選ばれ、同二十九年多年の勳功に依つて男爵に列せられた。氏はその長男にして明治三十三年家督相續と同時に襲爵仰付けられた。その翌年桂内閣の成立に當つて首相秘書官に拔擢されたが、後實業界に轉じ著々擡頭

して今日の成功を見るに至つた。此間歐米及南洋等に航して我が實業界の發展に資し、或は東京商工會議所議員、貴族院議員等として財界政界に貢献する所尠なからず、昭和七年齋藤内閣成るや商工大臣に親任せられ、以て現在に及んでゐる。

妻八千子（明治一七年生、子爵岩倉具明妹）長男精一（同三七年生、從五位）同妻萬龜子（同三九年生、岡田榮二女）二男眞吾（同三八年生）三男和夫（同四三生）四男正雄（大正二年生）五男實（同八年生）六男豐（同一三生）女清子（同五年生）女愛子（同一〇年生）弟多嘉吉（明治八年生、別家）同邦彦（同一〇年生、同上）

秋田　清氏　麹町區内幸町一ノ五　電話銀座三、〇〇〇

正五位、勳三等、衆議院議長、辯護士

明治一四年八月生、德島縣

明治三四年中央大學及日本大學卒業

政界の俊傑として令名嘖々たる氏は、德島縣人秋田英二氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治三十八年分家した。夙に上京して中央大學及び日本大學に法律學を修め兩校を同時に優秀の成績を以て卒業し秀才の譽れを博した。卒業後判檢事試驗に合格し高知地方裁判所判事として活躍したが、後官を辭して辯護士を開業し、更にその後二六新報社長として操觚界に名を揚げ、後衆議院議員に選ばれた。爾來代議士に當選すること六回、年と共に政界に認められ國勢調査評議員會評議員、帝都復興院評議員、臨時國語調査會委員、特別都市計畫委員等として敏腕を揮ふこと多年に及び、又曩に遞信政務次官に拔擢され、昭和七年六月の臨時議會に於て衆議院議長に選ばれた資性俊敏潤達識見卓拔にして大いに前途の飛躍を期待されて居る。

妻かつ（明治二五年生、北海道人河東勝之丞女）長男大助（同三九年生）同妻結子（同四二年生、高知縣人佐山茂樹六女）二女菊子（同四三年生）二男正（大正二年生）三男兼三（同七年生）長女豐子（明治四〇年生、兵庫縣人山田武雄妻）

三土　忠造氏　麻布區廣尾町一六　電話高輪五七〇〇・二一〇〇

從三位、勳一等、鐵道大臣、衆議院議員

明治四年六月生、香川縣

明治三〇年東京高等師範學校卒業

臺閣に列して英名赫々たる氏は、宮脇清吉氏の二男として香川縣大川郡譽水村に生れ、後同縣綾歌郡西庄村三土幸太郎の家名を相續した。夙に教育界に志して東京高等師範學校に學び、卒業後更に渡歐し約四ケ年間獨英兩國に於て教育學、史學等を研究し、歸朝後母校教授となり又韓國政府學政參與官に招聘され、教育界に活躍した。その後政界に轉じ、明治四十一年以來引續き鄕里の選良として議政壇上に雄飛し、此の間大藏省勅任參事官、内閣書記官長、農商務次官、農林政務次官等を經て昭和二年田中内閣に列し文部大臣となり、大藏大臣に轉じ、同内閣の瓦解後野に下つたが昭和七年齋藤内閣の出現に際し鐵道大臣となり現にその任に在る。

妻夏子（明治一九年生、愛媛縣士族法學士、加藤伸市姉）男知芳（同三五年生、理學士、商工省勤務）男統介（同四四年生）長女國子（同四二年生、府立第三高女卒、東京府人鈴木健藏妻）

廣田　順弘氏　横濱市中區本牧町四ノ八七七　電話本局四八〇九

丸十組（資）代表社員

明治二三年三月生

氣宇壯大にして獨立進取の氣風に富める氏は十八歳の若冠を以て北海道後志新報主筆に聘せられ、堂々たる筆陣を張つて名聲頓に高く、後飄然滿蒙歷遊の途に上り、大正二年獨力を以て旭川市に北海道日々新聞を創刊するや、幾年ならずして北海道三大新聞の一に數へられるに至

つた。然るに大正十一年當時の政友會原敬氏に同社の事業一切を讓渡して操觚界を去り、翌年歐米に航して世界戰後の實情を具さに調査研究中、同十二年の關東大震災の報に接して急遽歸朝し、丸十組を創立した。爾來その烱眼と該博なる才識を傾けて同社の經營に當り、現時鑛山事業及土木建築鐵道用材料等の販賣を手廣く營んでゐるが、夙に滿蒙の大富源に着眼し將來滿蒙の天地に一大雄飛をなすべき抱負の下に、着々研究の歩を進めてゐる。氏は凡ゆる方面に通曉し、特に教育、思想等に卓見を有し、現代の誤れる學校教育の弊を痛嘆する等常に國家公共的に盡瘁することを以て天職と觀じ、犧牲奉公の精神に富める士として尊崇されてゐる。

長男基彦（札幌工業卒）長女秀子（東洋英和女學校卒）

鈴木喜三郎氏　麹町區三番町七一　電話九段五一〇

正三位、勳一等、法學博士、衆議院議員立憲政友會總裁、輔成會長

慶應三年一〇月生、神奈川縣

明治二四年東京帝大法科卒業

政友會總裁として政界に睥睨し令名夙に洽き氏は、川島富右衛門氏の三男として神奈川縣下に生れ、明治十五年鈴木慈孝氏の養子となり、後その家督を相續した。大學卒業後司法省に入り、東京地方裁判所及東京控訴院判事として敏腕を揮ひ、明治四十年司法制度調査の爲め歐米に派遣され、滯歐中大審院判事に任ぜられ歸朝後東京地方裁判所長に榮轉し、同四十三年法學博士の學位を獲た。爾來司法省刑事局長、大審院檢事、司法省法務局長、司法次官、檢事總長等を歷任し、大正十三年清浦内閣に司法大臣として入閣し、更に昭和二年田中内閣の内務大臣となり、續いて昭和六年、犬養内閣に列し、昭和七年二月の總選擧に際し貴族院議員を辭し神奈川縣より出馬して衆議院議員となり、犬養氏の歿後政友會總裁に擧げられ以て今日に及んでゐる。

長男國久（明治二九年生、法學士判事）同妻靜代（同三六年生、東京府士族杉山四五郎長女）四男幹雄（同三九年生）五男博高（同四三年生）六男正俊（大正六年生）五女園子（明治四四年生）六女淳子（大正三年生）孫言志（同一三年生、國久長男）長女淑子（明治三二年生、醫學博士、川島幸次郎二男彌三郎妻）二男晧（同三五年生、東京府人小川盛重死跡相續）

新名　直和氏　神奈川縣平塚町三五六　電話　平塚二三〇

從五位、勳五等、市政會館長、東京中央放送局顧問

明治一二年三月生、愛媛縣

明治三七年早稲田大學法科卒業

溫厚篤實なる人格者として信望高き氏は、愛媛縣士族新名義太郎氏の長男として同縣西條町に呱々の聲を揚げ、明治十九年家督を相續した。夙に青雲の志を抱いて上京し早稲田大學に學び、卒業後直ちに遞信省に入り、精勵恪勤次第にその敏腕を認められて累進し、横須賀郵便局長、海軍々用通信監督官、東京中央電話局長等に歷任し、多年の功績に依つて從五位、勳五等に叙せられた。その後東京放送局及び日本放送協會關東支部の常務理事として、創業當初の我がラヂオ界に貢獻し、ラヂオ放送開始の第一聲は實に氏に依つて行はれた。後東京市政會館長に就任傍ら東京中央放送局顧問を兼ね、活躍以て今日に及んでゐる。宗旨は金光教、趣味は和歌、謠曲等である。

母タカ（嘉永五年生）妻悅子（明治二八年生、東京府人奥住謹吾長女、横須賀高女卒）長男敬一（大正三年生）二男達二（同一〇年生）長女信子（同七年生）

臼井　定民氏　砧村喜多見成城八一　電話　砧一〇一

從七位、工學士、住友別子鑛山、吉野川水力電氣各(株)取締役

明治五年一〇月生、岩手縣

明治三三年東京帝大工科土木科卒業

多年實業界に雄飛し卓拔なる技術と崇高なる人格と相俟つて聲望嘖々たる氏は

女勇子（明治四三年生）二女英子（大正五年生、成城高女在學）

池田　宏氏　澁谷區原宿二ノ一七　電話青山一、六四二

正四位、勳三等、法學士、東京市政調査會理事、大阪商科大學講師

明治一四年七月生、靜岡縣

明治三八年京都帝大法科卒業

（明治二五年生、北海道人但馬八木藏二女）長男善長（同四二年生）二男庸德（同四四年生）三男惟德（大正八年生）五男充之（昭和三年生）長女說子（大正三年生）二女達子（同五年生）三女中子（同一五年生）弟錫（明治二三年生）同妻サダコ（同二八年生、宮城縣

牲奉公の精神に富める士として尊崇されてゐる。

長男基彦（札幌工業卒）長女秀子（東洋英和女學校卒）

鈴木喜三郎氏　麹町區三番町七一　電話九段五一〇

正三位、勳一等、法學博士、衆議院議員
立憲政友會總裁、輔成會長
慶應三年一〇月生、神奈川縣
明治二四年東京帝大法科卒業

政友會總裁として政界に睥睨し令名夙に洽き氏は、川島富右衛門氏の三男として神奈川縣下に生れ、明治十五年鈴木慈學けられ以て今日に及んでゐる。

長男國久（明治二九年生、法學士判事）同妻靜代（同三六年生、東京府士族杉山四五郎長女）四男幹雄（同三九年生）五男博高（同四三年生）六男正俊（大正六年生）五女園子（明治四四年生）六女淳子（大正三年生）孫言志（同一三年生、國久長男）長女淑子（明治三二年生、醫學博士、川島幸次郎二男彌三郎妻）二男晧（同三五年生、東京府人小川盛重死跡相續）

放送局及び日本放送協會關東支部の常務理事として、創業當初の我がラヂオ界に貢献し、ラヂオ放送開始の第一聲は實に氏に依つて行はれた。後東京市政會館長に就任傍ら東京中央放送局顧問を兼ね、活躍以て今日に及んでゐる。宗旨は金光教、趣味は和歌、謠曲等である。

母タカ（嘉永五年生）妻悅子（明治二八年生、東京府人奥住謹吾長女、横須賀高女卒）長男敬一（大正三年生）二男達二（同一〇年生）長女信子（同七年生）

臼井　定民氏　砧村喜多見成城八一　電話　砧一〇一

從七位、工學士、住友別子鑛山、吉野川水力電氣各(株)取締役
明治五年一〇月生、岩手縣
明治三三年東京帝大工科土木科卒業

多年實業界に雄飛し卓拔なる技術と崇高なる人格と相俟つて聲望嘖々たる氏は岩手縣士族關定昌氏の二男に生れ、後臼井宗方氏の養子となつた。醫學界の權威たる醫學博士東京帝大教授三田定則氏の實兄である。大學卒業後直ちに內務省に入り、明治三十五年海軍技師となり中尉相當官に進んだが、同三十七年市街鐵道會社に轉じ、續いて東京鐵道會社技師となり更に東京市技師に聘せられ、帝都の交通土木界に貢献し、又此の間小坂銀山技師兼工作課長として敏腕を揮つた。大正二年市役所を辭して住友別子鑛業所に轉じ、累進して昭和二年常務取締役に擧げられた。現時前掲の職に在る傍ら昭和四年以來無報酬にて玉川學園に教鞭を執り、德育を主とする氏獨特の嶄新教授法を施し、教育界に貢献しつゝある。

妻ツル（明治一三年生、岩手縣士族山本綠長女）長男毅（同四〇年生、東北帝大在學）二男誠（同四四年生、同上）三男亨（大正二年生、成城學園在學）長女勇子（明治四三年生）二女英子（大正五年生、成城高女在學）

池田宏氏　澁谷區原宿二ノ一七　電話青山一、六四二

正四位、勳三等、法學士、東京市政調査會理事、大阪商科大學講師
明治一四年七月生、靜岡縣
明治三八年京都帝大法科卒業

敏腕達識夙に政界に盛名を馳せ文都市計畫法の大家として聞ゆる氏は、靜岡縣士族池田忠一氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げた。大學卒業後直ちに內務省に入り、各府縣事務官に歷任したる後內務省書記官に進み、大正二年倫敦の國際道路會議に派遣された。歸朝後內務省に於て道路法、都市計畫法等の調査及立案に携はり、後內務監督官、社會局長等に任ぜられ、其の後東京市助役として敏腕を揮ひ、大正十二年大震災の直後社會局長官に拔擢され、同時に帝都復興院理事及び臨時震災救護事務局長の事務取扱等を兼ねて帝都復興事業に偉大なる功績を樹てた。後京都府知事に任ぜられ更に神奈川縣知事に轉じ、地方行政に盡瘁したが、官を辭して以來前掲の職に在つて活躍を續けて居る。

父忠一（嘉永三年生）母すま（文久元年生、靜岡縣士族堀田鑑妹）妻民子（明治二五年生、北海道人但馬八木藏二女）長男善長（同四二年生）二男庸德（同四四年生）三男惟德（大正八年生）五男充之（昭和三年生）長女說子（大正三年生）二女達子（同五年生）三女中子（同一五年生）弟錫（明治二三年生）同妻サダコ（同二八年生、宮城縣人大條賴義二女）弟克（同二六年生）妹錬（同一九年生、靜岡縣人鈴木惣作妻）同フク（同三〇年生、同縣人榛村專一妻）

後藤　東氏　小石川區表町三七　電話小石川七六〇六

勳四等、後藤東商會主
明治八年一月生、岐阜縣

盜難豫防ベルの發明者として名聲嘖々たる氏は、岐阜縣人後藤東氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正十三年家督を相續した。幼時より頭腦頗る透徹に進取の意氣に富み、岐阜縣警察部に奉職するや次第にその敏腕を認められて累進し、同縣萩原警察署長に拔擢されて以來功績益々顯著にして勳四等に叙せられた。大正八年辭任後直ちに矢作水力電氣株式會社に聘せられ、主事兼營業所長として同社の發展に努力すると共に、更に岩村電氣軌道株式會社取締役支配人、惠南自動車株式會社專務取締役等を兼ねて

事業界に敏腕を揮つた。大正十二年九月同社を辭して以來社會的に有意義なる事業を起すべく苦心研究の結果、昭和二年遂に盜難豫防ベルを發明し、之を東ベルと命名すると共に後藤東商會を設立し、爾來その製造發賣元として販路の擴張に努力以て今日に及んでゐる。資性溫厚篤實にして犧牲奉公の精神に富み、各方面に信望隆々たるものがある。

阪谷　芳郎氏　小石川區原町一二六　電話小石川一二〇

正三位、勳一等、男爵、法學博士、貴族院議員、中央統計委員會々長、東京市政調査會々長、專修大學々長、仙石原地所(株)社長、東京灣埋立、沖電氣、橘樹水道、磐城炭礦、淺野セメント、尼ケ崎築港各(株)取締役、澁澤同族(株)監査役、東京地下鐵道、日本航空輸送各(株)相談役

文久三年一月生、廣島縣

明治一七年東京帝大法科政治科卒業

先考阪谷素氏は大鹽中齋、古賀侗庵等の門に學を修め、鄉里備中に興讓館を興して鄉黨を敎導し、後藩主淺野侯に仕へ更に維新後諸官廳に出仕して勳功顯著であつた。氏はその四男にして、首席を以て大學卒業後大藏省に入り、明治三十二年法學博士の學位を受け、同三十九年大藏大臣に任ぜられ又日露戰役の功に依り勳一等に叙せられ男爵を授けられた。同四十五年東京市長となり大正六年聯合國經濟會議に本邦代表として派遣され、又同年以來貴族院議員として現在に及ぶ等財界、政界、學界その他各方面に於ける功績顯著にして、一世の師表と仰がれてゐる。

妻コト（明治三年生、故子爵澁澤榮一二女）長男希一（同二二年生、新滿洲國財政部總務司長）二男俊作（同二五年生、文學士名古屋圖書館長分家す）三女八重子（同二九年生、男爵中村貫之妻）四女千重子（同三一年生、東京府人工學士秋庭義衞妻）五女總子（同三四年生、兵庫縣人伊藤熊三妻）

大瀧　鞍馬氏　小石川區久堅町七

著述家

明治一五年一二月生、長野縣

靈妙卓拔の筆を以て文名夙に普き氏は本名を邦雄と呼び信州豐田村の出身である。幼少の頃より頭腦明晰にして特に文筆に長じ大いにその將來の飛躍を期待せられ長じて靑雲の志を抱いて上京し東京高等商業學校に學んだが、雄心勃々覇氣燃ゆるが如き氏は徒らに遲々として學究の徒たるを屑しとせず、學門を去つて操觚界に投じた。是れ氏が文筆を以て今日の名聲を博する第一歩であつた。烱眼達識にして特に經濟に通曉せる氏は得意の筆を揮つて忽ち斯界の鬼才として認められるに至り、漸次斯界に確乎たる地歩を占め經濟雜誌の權威ダイヤモンド社の編輯長となり、更に中外商業新報經濟部長に聘せられ、報道に、批判に、將た論說に一流の敏腕を發揮して遺憾なく、經濟記者の權威として操觚界は勿論一般より畏敬されるに至つた。大正五年露國に特派されるや、同國に於ける經濟狀態を具さに調査研究し、特に製粉に關して凡ゆる調査を遂げ新智識を齎して歸朝した。製粉に關する氏の文獻が如何に我が製粉業界の刺戟となり、參考となり、その發達を促したるかは夙に斯業界に普く認められてゐるが、氏も亦之に因つて稀に見る製粉通となり、敎へを乞ふ者頗る多數に達し、又氏自から大正八九年の好況當時その造詣を活用して製粉の取引をなし一擧にして巨萬の富を獲得し羨望の的となつた。然れども財物に恬淡にして文筆奉仕を使命と觀ずる氏は、その後再び得意の筆を執つて起ち、講談社發行の各雜誌に靈腕を顯はし、先年博文館發行の朝日誌上に「踊る白骨」を連載し數十萬の讀者の稱讃湧くが如く、爲めに同誌は增刊の好況を呈するに至つた。氏の巧文妙筆推して知るべきである。尙ほ著書には「子爵澁澤榮一」「三菱王國」「安田王國」等の如く、財界を裨益する所甚大にして而も興味津々たる好著を始めとし、氏獨特の烱眼と老練の筆を以つて外交界の裏面を素破拔きたる快著「外交秘話」或は純文藝の「幽鬼微笑」等々政治、外交、

木下源一郎氏　品川區大井伊藤五四四　電話大森一二五〇

日本電報通信社(株)理事兼中央內勤課長

明治二四年一月生、福井縣

大正二年早稻田大學商科卒業

通信界の覇王日本電報通信社に在りて敏腕の聞え高き氏は、福井縣人木下喜之助氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ光永雄喜氏の長男にして幼名を喜一と謂ひ、明治二十四年家督相續と同時に現名に改めた。光永眞三氏は氏の實弟である夙に操觚界に志し、明治二十二年大阪朝日新聞社に入社したが、僅々一ケ年にして政界に轉じた。同二十七年日淸戰爭勃發するや、めざまし新聞及福岡日々新聞兩社の從軍記者として派遣され、朝鮮、